THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

文壇十三名家執筆

ワイルド全集

◎第壹巻小説集◎既刊（ポイント細活字中判紙數七百頁金箔挿りード製箱入定價二圓八十錢送料十八錢）殘本僅少

◎ワイルドの生涯◎ドリアングレイの畫像◎アーサーサヴィル卿の犯罪◎模範金滿家◎カンタウイールの幽靈◎W・H氏の肖像◎秘密のないスフインクス

第貳巻戯曲集

最新刊（總ポイント細活字、中判紙數六百五十頁 定價二圓八十錢・送料十八錢、頗美本）

◎本巻目次及執筆者左の如し

◎サロメ…中村吉藏◎フロオレンスの悲劇…楠山正雄◎理想の夫…本間久雄◎パデュヤ公爵夫人…坪内士行◎ウインダミーヤ夫人の扇…島村民藏

◎第三巻戯曲及童話集　五月發行

中村吉藏著

戯曲 淀屋辰五郎 其他

（四六大判美本定價一圓九十錢・送料十五錢）

巻頭の三幕六場の長篇戯曲は我國のルネッサンス時代たる元祿期に於ける幕末の武士と新興の町人との所謂階級闘爭の犧牲者として、大阪一の金傑淀屋一家の缺所事件を描ける强烈なる近代的色彩と、深酷なる心理解剖を縱にし、近松翁の『淀鯉』以外、別に新天地を開拓せる作者空前の力作也。尚他に四篇の新社會劇を添ふ。皆現代に對する鋭き諷刺と批判を含めるもの、蓋し劇文壇近來の一大收獲たらん。

坪内逍遙博士著

再版

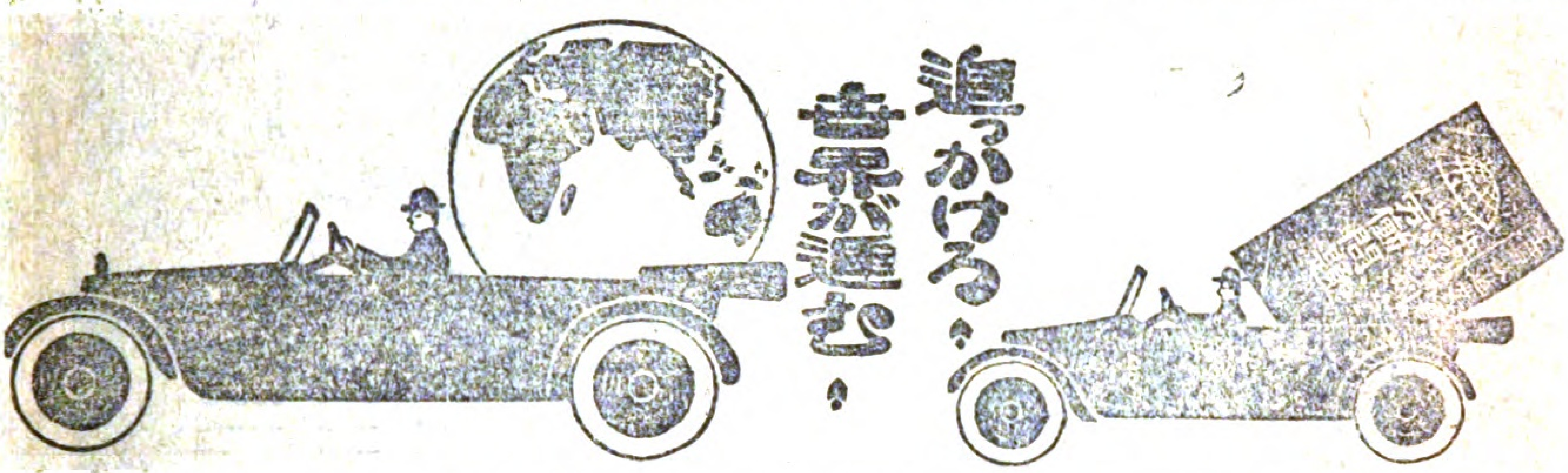
逍遙劇談

（定價一圓九十錢 送料十五錢）

東京市麹町區飯田町一ノ二　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八番　電話番町一七九番

電車シーリーズ

世界改造叢書



既刊十種　以下續々發行　三五判各壹冊　一　正價四拾錢　郵稅二錢

人種問題	大隈侯爵述
戰後の經濟問題	平沼博士述
教育の改造	中島半次郎述
勞働問題	北澤新次郎述
デモクラシー	高橋清吾述
普通選擧	關和知述
勞働問題の曲折	關太郎述
過激派物語	五來素川述
國際聯盟	內ヶ崎作三郎述
婦人問題	宮田脩述

發行所　東京牛込早稻田　振替東京一一二三　早稻田大學出版部

（賣捌）神田東京堂　日本橋至誠堂　京橋北隆館　京橋東海堂　大阪寶文館　名古屋星野　（其他）

新錄滴たる五月號

文章世界

○新進作家論(三)……宮島新三郎
○詩壇の象徴主義を評す……川路柳虹
○文壇と時勢との距離……石坂養平
○武者小路實篤氏の詩……江口渙
○文藝の東京(一)……高須梅溪

貧しき心より……摩耶一男
四月の文壇……水谷勝
不思議な鳥……田山花袋
文壇時感……上司小劍
巴里より……吉江孤雁
詩五篇……河井醉茗
奉天の夜(小品)……伊藤松雄

改正定價 五十錢 郵税二錢

■街の雲雀(詩)…省吾
■吉野の遊(歌)…蝶介
■澪の光(俳句)蝶衣
■土の息吹(俳句)井泉水
■文藝漫畫……一平
■雜記帳……

■二人の髯男……宮地嘉六
陋巷に窮迫せる二人の髯男の寂寥にして悲痛たる孤獨の生活を活寫し、生活、結婚、男女兩性問題に對する作者の深き考案を具體化せる力作

■童貞……中戸川吉二
遊蕩氣分に充てる或海岸町を背景とし新××派の某新進作家をモデルとなして之を容赦なく解剖し最後に男子貞操問題に辛辣なる批評を加へたる短篇也

■投げし水音……竹中八重子
無名の閨秀作家が文壇への出世作にして、その纖細なる筆致と彈力性に富める情緒とは近來稀に見る所也

■釜……加能作次郎
圓熟老巧なる筆致はよく家庭の一些事を渾然たる藝術品と化す悲痛の裡に快きユーモアを湛へ無限の滋味を包藏せる好短篇也

東京市本石町 博文館
振替口座東京二四〇番

文化講座聽講生募集

目的 政治、經濟、社會、勞働、文藝、宗敎等文化の各方面に渉りて理會と解決と指導とを與ふるに在り猶英語會話、英語新聞及び英書講讀科を設け外國語習得に對する時代的要求に應ぜんとす

日時及所 四月十九日より六月二十五日まで土曜日曜を除き毎日午后六時より九時まで本協會館に於て開催、**目下申込の絶好時機なり**

聽講生 男女老幼の區別なく履歷の如何を問はず何人とも聽講生たることを得且自己の聽講せんと欲する學科を自由に選擇することを得

聽講費 一科目につき全期間を通じて金貳圓五拾錢、二科目以上及中途より申込に對しては割引す

特權 聽講生の提出する論文若しくは創作に對して擔任講師の審査を遂げしめ其優秀なるものは本講座の名を以て社會に發表すべく且如上の聽講生に對しては就職の周旋をなすべし

講師
吉野作造　高橋誠一郎　今岡信一郎
大山郁夫　岡田哲藏　會津常治
長谷川如是閑　内ヶ崎作三郎　西脇信雄
北澤新次郎　生田長江　ジョン・デー

詳細は直接本會へ照會せられ度し

東京市芝區三田四國町二番地（芝園橋停留場附近）

主催 **日本自由基督教協會**

電話芝五八五五　振替東京一〇〇〇三

香水の季

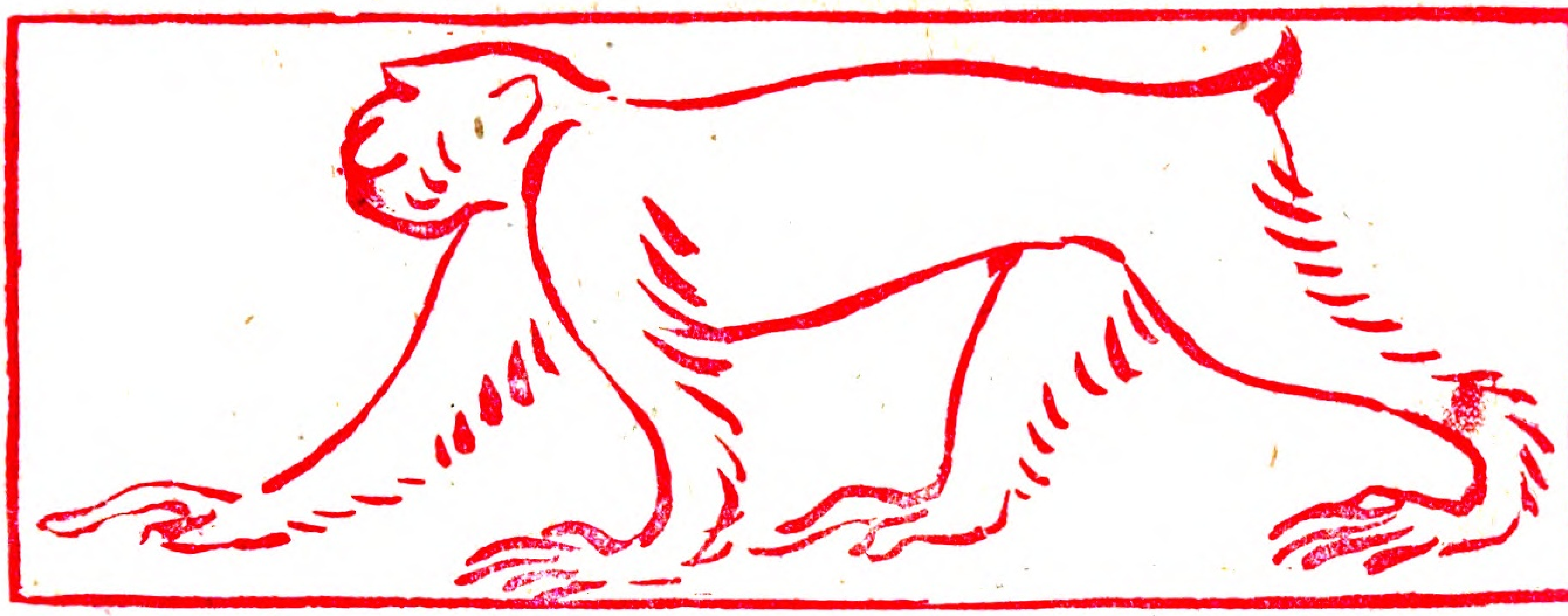
新着の舶來香水

久ぶりでコテーのものとウビガンのものが揃ひました、それに目新しい佛蘭西物と、英吉利、亜米利加ものも來ました、値段は十圓からみなち五十圓位までゞ其瓶の形に憎いほど東洋趣味を加味して來た大膽さを何んと皆樣は御覧になるのでしやう、これに較べると私達の資生堂の香水が未だく贅澤にまでも成り得ないことを殘念に思ひます



いゝものは
やはりいゝ
鷹印帽子は
いつもよい

絶品質主義



中央公論第卅五年五月號目次





"ST. MARY-LE-STRAND"

BY T. M. BELL-SMITH, R. C. A.

泰西傳奇小說叢書（2）

子爵ブラヂロオヌ

ヂユウマ原作
三上於菟吉氏譯

曩に『モントクリスト伯爵』を公にするや、此の種興味豐かなる讀み物に渇せる人々の大歡迎を受け増版既に數回に及びたるが、更に第二編として新たに本書を公にせり。全六卷一萬枚を以て完了すべきヂユウマの大傳奇小說(鐵假面裡の男)の發端にして、編中に現はるゝ人物實に百五十餘名。結構の雄大複雜にして、事實の驚心駭目すべきものたるや論なし。眞にヂユマ一代の大作として世界に知らるゝもの。事實の興味に富みて而も藝術價値高きものを求むる人は、此の書に就かざる可からず。

中版洋布製
紙數六百七十頁
定價金貳圓
郵送料十六錢

◉モントクリスト伯爵

ヂユマ作
谷崎精二氏
三上於菟吉氏譯
（全二冊）

一冊定價金二圓づゝ
送料一冊拾六錢づゝ

チエホフ全集

第三編

戯曲集 櫻の園（外三篇）

楠山正雄譯

短篇作家として世界古今の文壇を獨歩するチエホフは劇作家として亦第一流の人也。こゝに收めたる『櫻の園』及び『ワーニャ叔父さん』は彼が戯曲の中最も代表的のものにして、物質的にも精神的にも破産せる古き地主の生活を描きて重き憂鬱の中に一味淸涼の詩趣を湛えたるものにして、眞に彼が代表作也。添ふるに寶玉の如き一幕物の『白鳥の歌』『熊』等を以てす。戯曲家としてのチエホフの面目は概ね此の一卷の中に見るを得可し。（定價壹圓貳拾錢、送料八錢）

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

總選擧戰に對する國民の無關心

今度程總選擧戰に對して國民の興味の湧かない事はない。而して興味の湧かないのは、啻に一般國民ばかりでなく、當事者たる政黨者流亦然りと云ふに至ては實に驚かさるを得ない。

政府は今度の選擧戰に何れ丈け眞劍になつて居るか。無論盲滅法に昂奮狂奔はして居る樣だが、遺憾な事には其處に國家社會の進運に貢獻したいといふ何等高尚の熱情を見出し難い。表面上選擧戰の爭點たる普通選擧論に對しても、全然眞面目なる攻究を缺くことは、原首相の言說に徵して明白である。若し夫れ反對諸黨に至ては、果して心から普通選擧の卽時施行を國家社會の緊要事とするの確信を有するや否や、大に疑なきを得ないのである。少くとも表面上は普通選擧の實施といふ事が解散の理由であり、從つて選擧戰の唯一の爭點である。然らば在野諸黨は、這の政府の挑戰に對しては、小異を捨て、大同に賴り、須らく選擧同盟を作つて之に應酬する所なければならないではないか。假令解散前の討議に於て、各自其定むる所の主義を固執して互讓妥協の途に出でざりしとするも、少くとも總選擧戰に於ては、同盟對陣の策に出づること、諸外國に於ても殆んと例外なく見らるゝ通例である。然るに我が在野諸黨は、今仍ほ偏執の局量を持して、徒らに政府黨の乘ずる所となつて居るのは、何たる醜態であらう。

政黨の狀態畢竟上述の如き所以のものは、經綸の爲に爭ふに非ずして政權其ものゝ爲に爭ふが故である。普通選擧卽時施行に關する贊否の見を國民に諮ふといふは、立憲國の常例に强いて形式を合せやうといふ一時の權略に過ぎぬ。腹を探れば普通選擧だらうがさうでなからうが、政權にさへ有りつけば如何でもいゝのであらう。要するに問題の爲に爭ふのではない、否爭ふべき問題をすら有たないのだから、言論の振はさるも亦怪しむに足らぬ。

且今日の政治家は、もと〳〵言論を以て勝たうと思つてゐない。勝つための必要な武器は外にありとしてゐる。從つて彼等は始めから物質的準備なしには選擧戰には臨めないものときめてゐる。而して今次の政府の解散の斷行は、各反對黨の無準備の虚に乘じたもので、戰略としては眞に巧妙を極めたものである。是れ局外者から觀て今度の政戰の甚だ氣勢の揚らない所以である。

當事者たる政黨が冷淡なのだから、一般國民の甚だ無關心なるは言ふまでもない。而して一般國民間に於ける這の狀態の由來に就ては、一つには極端なる社會主義の流行に伴ふ政治否認說の影響もあらうが、又一つには現今我國の政界が、政府側と云はず反對側と云はず、甚だ輕佻浮薄にして國利民福を顧みず、悉く政治否認說を裏書する樣な不仕鱈を演じつゝあるの事實を數へなければならぬ。

思ふに一般國民は昨今案外に政治に冷淡になつた。とはいへ決して俄に公事に關する興味を減じたのではない。否彼等は今や此點に就ては大に覺醒し大に銳敏になつて來て居るのである。而かも之に基く彼等の熱烈なる要求の滿足を、彼等が自ら政治に賴るを敢てしないといふ現象は、果して喜ぶべきであるか如何か。

國民の無關心を解して熱情の冷却と觀る者あらば驚くべき近眼者流である。眼ある者の間に、自ら這の現象を憂ふべしとすると喜ぶべしとするとの二師あるが、玆處に先覺者の大に警戒すべき要點は伏在する。而して禍の根源は、記せよ、主として政黨者流の不眞面目と無誠意と短見とに在る事を。

中央公論



第卅五年第五號
五月號
第三百八十二號

失業問題を論じて其救濟策を提唱す

佐々木勝三郎

一

I gave a beggar from my store of well earned gold.
He spend the shinning ore.
And come again and get again, still cold,
And hungry as before,
I gave a thought, and through that thought of mine,

He found himself of a man, supreme, devine,
Both, clothed and crowned with blessing mainfold.
And now he begs no more.
—— Ella Whealer Wilcox ——

『勞働者若し失業者として其名を登錄するときは失業に關する地方官憲は該法に規定せられたる又は其他の方法により其者に職業を與ふべき義務ある者とす、若し職業を與へ得ざるときは其者竝に其者に依賴して生活する者爲に其生活資を供給すべし、但失業者が此の規定方法によりたる妥當なる職業を受けざるとき、又は地方に於ける職業の標準點を下らざる條件の下に雇傭を諾せざるときは、失業に關する地方官憲は本條の義務より免除せらるべし』これは英國の勞働黨が嘗て議會に於て勞働權を認めしめむと試みた有名なる勞働權法案の第三節である。當時武陵桃源の夢、圓かである妓、東海の孤島の汀にも海の彼方に起つた波動は漣となりて、ひそ〳〵と打ち寄せて居つたのである。歐州大戰の結果は總てのものゝ改造を促しまた必要としつゝある、その大潮は澎湃として曲浦長汀を洗つて驀て來るべき海嘯を報じて居る、醒めざるを得ない、國際聯盟規約には勞働の原則が認められ勞働黨は今や正にその最後の到着點に入らむとしてをる、全權委員が勞働組合の代表者に會見するとき急ち其の態度の豹變することなきを誰か能く必するものであらう、國際勞働規約の報に接したとき私は靜に想を歐洲の天地に馳せてその最後の「ゴール」に辿りつきつゝある彼等の得意を思ふて瞑目多時、急ち起る耳邊啾々たる楚歌の聲に肌に粟を生ぜしめた。

近時我が國に於て勞働問題に對する硏究が新聞に雜誌に盛に鼓吹せられて居る、これは時勢の然らしむる所である、然し英國の現狀を觀て我國の狀況を直に之に模せんとするものがありとすればそれは經濟史を無視するもので誠に無理な考へである。

想ふに舊制度が全然崩壞せらるゝにあらざれば、新時代に適應する新制度は到底これを樹立することを得ない、新たな

るものが生れんとするには產の苦痛が伴ふ、この產の苦痛に我國現下の事情が堪へ得るであらうか、經濟史を繙くときは此の產の苦痛の如何なるものであるかを知る人は知るであらう、近時我國に於て勞働問題の解決を叫ぶの人、果してその主張する制度の樹立に對し我國現下の事情がその產の苦痛に堪へ得ると信ずるや否や、徒にその聲を大にするとは害あつて少しも效がないことを知らねばならぬ、此の意味に於て現今に於ける我が論壇に於ける勞働問題に對する思想の混亂は憂慮すべきものがある、けれども時勢の變は如何ともすることが出來ない、見よ今や舊制度は次第に崩壞しつゝあるではないか、而して之に代るべき新制度は誠に混沌模糊としてをる、そこに今後の動搖と混亂があるであらう、幸に後進國の有難いとには、先進國に於ける貴重な經濟史は我國は昔はかうであつたと云ふことを丁寧的確に敎へてくれる、而して同時に燦として我等の步むべき方向を照してくれるのである、私は今後我國の痛感するであらう產の苦痛をして這般の經濟史の慈光に浴しながら最も輕くしたい、これ私が敢て本論を齎く所以の微意である、けれども私は到底勞働問題の全部に亘りて論ずるの遑がないが故に、我國に於て今後盛に發生する勞働問題中最も悲慘な勞働者の失業問題に就て述べたい。

二

近世勞働者の生活資源は其の賃銀にあるが故に、勞働者が賃銀獲得の機會を失ふことは彼等が生活資源に離れることを意味するのである、失業問題が勞働問題中で最も悲慘な色彩を帶び絕へず勞働者を脅威する所以である。

勞働者が賃銀獲得の機會を失ふ場合は

(一)勞働者が勞働の意思なき場合

(二)勞働者が勞働能力を喪失せる場合

(三)勞働者が勞働能力を有し勞働の意思を有するも職業を得る能はざる場合に分つことが出來る、而して普通この最後の場合のみを失業論の對照として論ずるものが多いけれども第一の場合を全然失業問題の圈外に排去すること

は決して失業問題を正當に解釋する以所でない。

想ふに勞働能力を有し兼て勞働意思を有する勞働者の失業と勞働能力の缺乏者失業とは之を區別するの必要はあるであらう、けれども之が爲に後者を全然失業問題の外に置くことは全く理由のないことである、蓋し勞働能力の缺乏者の失業を失業問題の對照たらずとする論者は、失業と勞働能力の缺乏との間には離るべからざる因果の關係あることを看過無視することより來る獨斷である。「ベヴリジ」氏は其の名著「失業」に於て失職と勞働能力の缺乏、勞働能力の缺乏と失業とは因果の關係を有し兩々相合して益々失業問題を險惡ならしむるものであると斷じ「ロウントリー」氏は之に呼應して失業を減ずることは軈て勞働能力の缺乏を減ずる所以であると裏書してゐる。

蓋し失業とは極めて廣汎なる意義を有して種々なる原因より生ずるものであるけれども、其發生する場合は仕事を爲す能はざるによるか若くは雇傭を獲得する能はざるによつて惹起せらるゝ狀態である、換言すれば賃銀勞働者が其の生活資源たる賃銀に離れ雇傭を求めむとするも其の能力に適したる雇傭を地方的標準によつて判斷し正當なる條件の下に於て雇傭を得る能はざる狀態と云ふことが出來る、然らば何故に勞働者が自ら進で雇傭を求めむとするに拘らず雇傭を得る能はざる場合が發生するのであるか、それには重大なる原因がなければならぬ。

三

戰爭若くは經濟界の急激な變動によつて勞働者が失業する場合のあることは云ふ迄もないことである、かゝる現象は過發的原因から生ずることで如何ともすべからざるものである、唯だ之に對する應急策を其の時に應じ臨機講究するの外はない、若し勞働者の失業の原因が之等にのみ止らば問題は至極簡單であるが、然し左樣な簡單なものでなく常住不斷勞働者を失業の奈落に投ぜしめむとする一大脅威がある、それは雇傭の不定と器械の適用と云ふことである、勿論これはたゞその脅威の重なるものである、吾人は先づ雇傭の不定と云ふことに就て考へたい。

比較的正確である「マサチユセツト」州及「紐育」州勞働組合によつて報告せられをる統計がある、それは千九百十

年の統計で少々古いがそれによると次の通りである。

「マサチユセツト」州一九一〇年三月三十一日現在

失業の原因	失業者數
仕事又は材料の缺乏	六、一八六
天候の不順	九六
同盟罷工又は工場閉鎖	一一三
勞働能力の喪失(怪我病氣老年)	一、六四六
其他の原因	二二一
合計	八、二六二

紐育州一九一〇年九月三十日現在

仕事の缺乏	二七、二二五
材料の缺乏	二、五一七
天候の不順	八九四
勞働紛爭	二、八六七
勞働不能	三、〇〇〇
其他の理由	四六五
合計	三六、九六八

右の統計によると失業の原因は大部分は仕事若くは材料の缺乏によることが知られるであらう、仕事の缺乏又は材料の缺乏と云ふことは生産者の勞働に對する需要の減却若くは減退と云ふことを意味するのである。各産業は孰れも程度の差こそあれ各々季節的に勞働に對する需要を減退する者である、即ち一般に個人たる傭主の雇傭能力の缺乏は總て勞働に對

する需要の減退となつて現はるるもので、それは全く勞働者の希望品質とか云ふ問題とは何等關係なき事由に原因する者である、私は此の現象を稱して雇傭の不定若くは雇傭の季節的變動と云ふのである、斯の如き雇傭の不定は或る程度までは總ての職業に通有する性質で實に近世勞働者の雇傭を斷つ重大なる原因をなすものである、或る産業に於ては這般の變動の荒廢的波動を蒙ること殊に甚しきものがある。

然るに兹に一考すべき點は勞働に對する需要には全體としては何等の季節的變動なしとする說がある、英國救貧法委員會で主張せられたものである、その云ふ所によると殆ど總の職業を通じて緩慢沈滯の季節ありとするも此の事實は一ケ年中の相異りたる時期に於て起るものである、英國商務院の過去十ケ年間に於ける最も正確なる統計により次の事實を確めることが出來る、或る若干の大産業に於て一ケ年中で最も不活潑な月があると同時に他の或る若干の大産業では最も繁忙な月があるのである、今、過去十ケ年間の實際の事實に徵するに一月は鐵採堀業は最も緩慢な季節であるが同月は倫敦其他の各港では最も業務敏活である、二月に入ると鉛匠は最も多くの失業者を出すのであるが製紙業は業務の敏活な時である、三月及四月は箍桶匠は閑散に苦むが製鋼鑛匠及織物職業は業務に忙殺せらるゝ、五、六の兩月は石炭採堀勞働者並倫敦の船渠人足に取つては最悪の月であるが衣服職業並鋸木匠に取つて最良の時である、七月は製鐵製鋼錫等の事業は沈滯するに反し鐵道業務休日の集合を目的とする凡ての職業は漸く其の繁を加へ、八、九月の候に入ると製紙印刷書籍煙草製造其他纖維工業に從事する勞働者は孰れも多大の失業者を出し失業に恐怖する時期であるが同時にその月は田舍に於ては農業の收穫時期で田園勞働者に取つては最も順調な月である、十一月に入ると造船業は沈衰して向上の氣配なきに反し印刷書籍煙草製造錫箔及金屬職業の大部分は一年を通じて最も景氣のよい季節である、一年の終りの十二月は大工技師木挽馬車熟皮刷子等の製造人の最も呪ふべき月なるが石炭坑夫劇場の勞働に從事するもの郵便局に勤務するもの瓦斯及び電氣の製造供給に從事するものに取りては好景氣の時期であると。

然し以上の事實のみによつて直に勞働に對する需要には實際上何等の季節的變動なしと斷定することを得ない、蓋し假令、甲産業の緩慢期が同時に乙産業の活躍期なりとするもそれは決して甲産業と乙産業とが其の使用人員生産の分量

種類性質に於て同一の事情の下に立つものではないからである、從て這般の個々の差異を大量觀察するとも爲にその差異は消滅するものではない、よし數步を讓つて其の差異が消滅するとしてもそれは勞働に對する總括的需給の投合に大なる懸隔を生ぜないと云ふ點に止るので、勞働者の種類性質熟練と云ふ樣なものが全然同一と考へられ彼是相融通が出來ると云ふことには決してならないのである、唯だ同一性質の產業に於て異にする緩慢季節と繁忙季節とは大に失業を緩和することゝなるのみである。

尙この點に關し「ウエブ」氏の所說を考へたい、氏は曰く吾人は每週總計若くは總量に於ては同額の貨物を（個々の內容に於て異ることは勿論である）消費するものである、從て這般の貨物生產に從事する勞働者の人員も其の總計では同數たるべき筈である、此の事實を明確にするとき此の週、英國に於て雇傭せられた勞働者の正確なる統計を作製することが出來る、如斯して作製せられた統計は英國に於ける雇傭統計と一致することを發見する、此の事實は不熟練勞働者の大多數及稍々特質化せられた勞働者に對しても確に眞理であると。

然し未だ俄に「ウエブ」氏に左袒することが出來ない、蓋し「ウエブ」氏の立論の根據は消費者の需要すべき貨物と生產者の供給すべき貨物との間に於て平衡を少くとも將來に於て平衡を保ち得ると云ふ論斷を前提とせない限り到底支持すべからざるものであるからである。而して現代の如き市場生產を目的とする信用經濟時代に於ては到底需給の平衡は現在は勿論、將來に於ても之を期待することが出來ない、只だ吾人と雖も勞働に對する需要期の各種の產業によつて異る事實は雇傭の季節的變動を緩和調節するの事實を認むるものである。けれども勞働者を失業せしむべき一大脅威である雇傭の不定は嚴として依然存在するの事實は之を否認することが出來ないのである。

何故に雇傭の不定と云ふ樣な現象が起るのであるか、その發生は之を根絕し得ずやと云ふ疑問が次で起るであらう。雇傭の不定を惹き起す原因は勿論種々雜多な事實に基くものであるが大別すると氣候の關係上から發生するものと社會上の關係に基因するものとに分つことが出來る、氣候の關係より發生するものに就ては例へば倫敦の波止場に於ては茶材木果實等は一年の或る一定の時期に於て生產地の氣候に應じて來るものであるが其の結果、倫敦では「クリスマス」

前後、又は初春に於ては八、九月の候よりも勞働に對する需要は增加するのである、この事實は我國の農業に於て最も顯著な事例である。

氣候の外、社會的原因としては趣好の變遷推移を擧ぐることが出來る、氣候的原因より生ずる雇傭の不定は每年略々一定の時期に發生するが故に大した苦痛を感じないけれども、社會的原因より發する雇傭の不定は勞働者に對し驟然一敵國を爲し常住不斷に彼等の生活を脅威するのである、何故に社會に於ける人々の趣好の變遷推移が雇傭の不定と云ふ事實を齎すか、それは吾人の財に對する慾望の多樣性、他の言葉を以て云へば吾人の貨物に對する需要の不規一と云ふ事實に基因するのである、平易な言葉を以て之を說明すると人々は每週若くは每月總量又は總計に於ては同一の貨物を消費するであらう、けれども其の個々の內容に至つては種々雜多であつて勿論その內容も絕へず趣好の推移に伴ひ變動するのである、而して必須品に就ては兎に角その他に至つては消費者自身に於ても豫め的確に之を知ることが出來ないで趣好の推移に伴ひ時々刻々遷り變るものである。そこで之等の財の生產に從事するものに於ては趣好の推移に伴ひ人々の慾望に時々刻々與ふべき變化に對しその生產量を調節することは到底出來ないのである、從てまた這般の生產に參加する勞働に對する需要は絕へず動搖する道理となるのである、而して文化の進步發達するや人々の慾望は益々增加し愈々多岐多樣に赴くが故に世運の向上に伴ひこの社會的原因の齎す雇傭の不定と云ふ現象は絕ゆるの時がない、かくて失業問題は世が進步すればする程、人々の慾望が增加すればする程熾烈となり其の極、炎々天に冲するに至るであらう、かくて勞働者に對して絕へず一種の恐怖心を生ぜしめそこに社會不安の叢淵を生ぜしめるのである、若しそれ一度失業の奈落の淵に投ぜられむか從來の恐怖心は變じて自暴自棄となり、滔々相率て頹落に流れ放縱なる性情に奔るのである。その結果は社會に貧窮頹落淫蕩放逸なる一團が到る處に現るゝのである、一切の社會問題生活上の暗闘は總てその一團を中心として湧出するであらう。而して之等は總て雇傭の不定と云ふ現象から生ずるのである。若し雇傭の不定と云ふ樣な現經濟組織下必至の現象に對して拱手傍觀何等の國策を樹てない國があるとするならば、その國は誠に嘆美すべき平安な國である、けれどもそう云ふ國は絕無？　である、これ孰れの國に於ても總て雇傭の不定と云ふことから生ずる失業

に對して何等かの政策を採つて居る理である、けれども雇傭の不定と云ふことは現經濟組織の下に於ては必至の勢で到底之が發生を根絶することが出來ないものであることに讀者の注意を危みながらも喚起せなければならぬ、我々はその禍害を最少限度まで緩和することに將來永く努力を繼續せなければならぬ、而して之が爲には國權の發動また止むを得ないのである、蓋し失業者の生ずると云ふことは國家の公序良俗を維持する上に於て爲政者の最も注意せなければならぬ點で、國家は特に雇傭の不定を來し若くは増加せんとする場合に於ては之を未發に又は事後に於て其の禍害を最少限度まで緩和せむが爲には相當の干渉を加ふるの覺悟がなければならぬ。之れ近時各國の社會政策が漸次分配政策より生産政策に向つて進みつゝあることは將にその理の然らしむる所である、時勢は侵々として瞬時も止まらないのである。

四

次に私は器械と云ふことを考へたい、失業と器械との關係に於て器械の使用若くは新器械の適用は勞働者に如何なる結果を與へるであらうか。問題は之を三點に包括することが出來る。第一は器械は勞働者を一時若くは永久に失業せしむることとなきやと云ふことである、第二は器械は必然的に雇傭の不定を來し更に進んで事業界に繁榮及び衰微の循環を生ぜしめる傾向なきやと云ふことである、而して第三に器械は勞働者間の競爭を増加し若くは勞働者を一層酷使し其の結果勞働者の普通働き盛りの時は既に業に勞働不能となつて失業の原因とならざるやと云ふことである。

「ホブソン」氏は其の名著「近代資本主義の進化」で近世資本主義的生産が失業を惹起する場合を指摘して次の如く述べて居る、曰く(一)勞働を節約せんとする器械の間斷なき増加は多くの勞働者を失業せしめる、換言すれば勞働節約器械の出現の結果、生じた新經濟狀態に勞働者が適應調節する迄此種の産業に從事する勞働者全部若くは一部は雇傭圏外に放擲せらるゝであらう、次に(二)廣汎な而も動搖し易い市場を目的とする器械的生産業の動もすれば陷り易き若くは偏向し勝なる過算又は一時的過剩生産は軈て該産業の長期的沈滯を伴ひ、其結果一時的に多數の熟練勞働者並に不熟練勞働者

を失業せしむるに至るであらう、終りに(三)重要なる產業に對する器械的生產の經營は商品供給に從事する職業並勞力の增加割合を驅逐する結果、自然商品に對する需要が不規則となるを以て勞働に對する需要の變化は一層大ならざるを得ないと。

即ち近世資本主義的生產の高調せらるゝに及んで玆に器械の輸入若くは適用となり、器械的生產の手工的家內生產に代つた爲に直接生じた結果は器械應用の爲め節約せられ若くは無用となつた勞働者が職業を失ふと云ふことは免れないのある、加之、現經濟組織の下に於ては生產者は自個の生產しつゝある貨物に對する需要の總量が知ることを得ない、唯たその市價を目標として進退するのみである、市價騰貴すれば急遽生產量を增加し市價低落すれば周章生產の縮少に努むるけれども資本主義的生產の現代に於ては進むに易けれども退くに難く此の間、到底過剩生產を免れない、已に過剩生產の聲に脅かさるゝや大資本を擁するものは益々その規模を大にし愈々生產額を增加し過剩生產より喪失すべき市價の低落を生產費の減殺によつて償はんとする商略に出づるが爲に自然小資本家は倒れざるを得ない。

勞働を節約すべき新器械又は同種計畫は多數勞働者の地位を一時奪ふに止らず屢々勞働者の從事する職業若くは仕事の價値を減却することがある、例へば器械發明の結果、靴工の價値は大に減少した、又た鉛板鑄造機の發明は印刷職業の價値に大なる動搖を與へたことは人の遍く知る所である。斯の如く器械の適用若くは新器械の發明が勞働者の仕事を奪ひ又はその熟練を要せざるに至るときは、かゝる職業に從事する熟練勞働者は永く失業するに至るのである、將又、器械使用の結果が業務の沈滯及活躍の循環性を有する傾向あることは是れまた現代の生產が資本主義的生產なるより生ずる結果であつて、恐慌及產業界の不景氣は器械適用に原因することが多い。器械が勞働者に與ふ影響の內で持續的で而もその禍害の尤も大なる點は勞働者の經濟的地位の降下である。之れ蓋し器械適用の結果、勞働の過程變化し婦人小兒と雖も壯年男子に伍して執業することが出來ること、並に企業家は器械に投じた資本を可及的迅速に償却するが爲に動もすれば勞働者を酷使し殊に新器械据附當時の機會を可及的利用せんとするに出るのである、加之、器械運轉の均一迅速と相關聯せる勞働は頗る激甚なるを免れないのである。

想ふに勞働者は其の生活の基礎が勞働による所得にあるが故に、一度職を失ひ若くは勞働能力を失ふときは生活の基礎一朝にして覆るを以て勞働者及び其家族は忽ち路頭に迷はなければならぬ、而して器械に原因する失業の場合に際する勞働者の地位は頗る薄弱である、それは器械新設の時は恰も被解傭勞働者多數なるを以て此の不利なる原因に對する勞働者反抗の效力最も少きが爲である。

器械適用により時としては勞働に對する需要を增加することがありうるけれども、多くの場合に於ては好良な仕事を奪はれ甚しく酷使せらるゝ傾向がある、分業並に產業の組織的になつたことは企業家の一勞働者に對する重要性を著しく減却した樣である、就中、不熟練勞働者の如きは今や全くその個性を失はんとしつゝある、彼等は單に長き連續せる鎖の内の鏈環たるに過ぎないのである、その個々の鏈環は何等仕事の進行を阻害することなくして屢々變更することが出來るのである、實に近世產業の特徵は產業上の制度に於て人間の不幸若くは破滅は該產業に對しては何等の負擔を齎すものでないと云ふことである、之れあるが爲に工場又は鑛山業に於ては企業家は勞働者の生命を不當に消耗せしめてをる、而して彼等が最上の身體的精力を出し得る時期を經過すると直に解傭せんとするのである、然し斯の如きことは雇主の地位より考ふるも決して利益なことではない、況や勞働者並に國民經濟の立場から見ると甚しき禍害と云はねばならぬ。「アダム、スミス」も既に富國論に於て此種の意味を述べて居る。『若し勞働者にして彼等が自由に個數により賃銀を支拂はれむか途に過勞に陷りその極、健康を害し二三ケ年にして其の心身を傷ふに至るであらう、倫敦其他に於ける大工は彼等の最上の力を出しうる時期は八ケ年以上を出でない』と、器械運轉の均一迅速に對し孜々營々相當相努めつゝある勞働者が如何にその心身を過勞せしむるかは蓋し思半に過ぐるものがあらう。

以上述べた通り器械の適用は勞働者の職業得亡の常規、勞働資格選擇の範圍、及勞働條件を動し彼是相待ち勞働者の地位を動かし之を低下せしむるに終るのである、實に器械適用の結果、利益のみを享くるものは資本主にして禍害のみを蒙るは勞働者なることは疑ふべからざる事實である。かくて賃銀勞働者の生活程度の引下は尙、影の形に伴ふ如くである、彼等の生活の程度の引下は軈て一家眷屬を驅つて補充的收入の獲得に參加せしむることは之れまた必至の勢であ

る、斯くて幼年婦女勞働の横溢となりその結果は勞働の豫備軍なるものが到る處に出現し失業の一大禍源となるであらう。國家は何等この禍源に手を染むる要なきであらうか。嗚呼失業の慘、實に斯の如くである、私は之より進んでその救濟論を述べんとするのである。

五

私は以上種々失業の重要なる原因として雇傭の不定と器械に就て論述した、想ふに雇傭の不定は吾人の慾望の存する限り存すべく、吾人の慾望の昂進に伴ひ愈々熾烈となるから結局現經濟組織の下に於ては雇傭の不定と云ふことは避るべからざることで、從て之より生ずる失業も亦必至の運命である、器械に就ても同樣で器械の適用を停止すれば則ち止む然らざる限り勞働者の地位の降下は如何ともすることが出來ない、殊に國民經濟の組織が大企業的となりつゝある現代に於ては器械に俟つの外なく從て器械より生ずる失業も亦た避くべからざる犧牲である。屢述べた通り現經濟組織の下に於ては失業と云ふ現象は根絶することを得ないのである、けれども勞働者が之が爲に塗炭の苦をなしつゝある以上は之に對して相當の保護と救濟とを講ぜなければならぬ。於是か勞働者をして絕へず雇傭を繼續せしむる政策を採る必要が起つて來るのである。

既に雇傭の不定が免るべからざる運命であり、器械の使用が抑止すべからざる必要であり、その上經濟界には時々突發的變動が事實發生する以上は、之が救濟としては、先づ第一には勞働者をして絕へず雇傭を繼續せしむる政策によるの外はない、失業すれば直に容易に職業を得ることの出來る樣な仕組が必要である、進むでは彼の勞働の豫備軍である臨時勞働者を永久的常備勞働者の地位に推し進める方法を考へなければならぬ。而して實に如斯ことは勞働市場を組織するとによつて爲し遂げ得らるゝのである、卽ち勞働紹介所制度の樹立これである、かくの如き制度が樹立せらるゝと更に失業保險制度に向つて其の一歩を進めなければならぬ。想ふに孰れの階級に於ても仕事を繼續する組職の必要なるが如く、休養休暇等に關する組織も亦看過することが出來ないが故に勞働者は現在若くは將來に於て起ることあるべき失業によ

つて喪失する賃銀は之を保險に附し一度失業するときは保險金の受領によつて失業期間を支持しその間は一部は休暇として平常の勞働生活の疲れを癒し以て浩然の氣を養ひ、その一部は技術上の習練に、他の一部は之を文藝上並に音樂上の娯樂に充て一つは以て勞働者自らの品格を高め他は以て新たなる精力と奮勵の氣風の振作に努めなければならぬと信ずる。而してかくの如き崇高な使命を果すものは失業保險制度である。然しかくの如き制度の實現は我國に於ては尙遠き將來の施設に俟たなければならぬので、差當り今日我國に於て焦眉の急に迫つてをるものは勞働市場の組織であらう、私はそれに就て叙述の筆を早めたい。

勞働紹介所の使命は三つある、既に職を失つたものに對して可及的早く雇傭圏內に復歸せしめることは其の一である、臨時勞働者を永久的常雇の地位に推し進めることは其の二である、而して失業保險制度を可能ならしむることは其の最後の目的である、既に述べた通り失業は産業の規模の問題でなくして其の組織の問題なるが故に現經濟組織の下に於ては其の發生は必至の運命である、失業はまた勞働に對する需要の容積問題に非ずして勞働に對する需要の變化及び變動の問題なるが故に勞働に對する需要に變化及び變動の存する限り避くべからざる犧牲である。

失業は勞働の需要に對する變化及び變動に伴ひ發生する勞力供給の一部が排除若くば置換せらるゝに基因するもので一度雇傭圏外に放出せられた勞力供給の一部が再び雇傭圏內に吸收せらるゝことは容易のことでない。失業の禍害は此の點に存するのである、故に失業の救濟策も勞働に對する需要の變化若くは變動により勞力供給の一部の排除、若くは置換に因り雇傭圏外に一時又は永久に放擲せられた勞働者を再び雇傭圏內に復歸せしめ更に進んで臨時勞働者を常傭の地位に進ましむるにある。從て失業問題の解決は一部は産業界の過渡期を圓滑にし一部は勞働の需要に對する變化若しくは變動に對して要求せらるべき勞働豫備の程度を減少せしめることが出來る、失業は産業の組織に淵源するのであるから産業の規模を擴張し若くは勞働に對する需要の增加と供給の增加との間に一般的平衡を保たしむることによつて遂せらるべきものではない。勞働の需要と供給の增加との間に一般的平衡を保たしむることによつて失業問題を解決せむとする論者の當然主張すべきことは新産業の創造と云ふことである、けれども此の說の誤謬なることは過去五十年間に

於て驚嘆すべき割合を以て新産業は創造せられ舊産業は擴張せられたが失業問題は少しも緩和せられない事實に證することが出來る。

其他人口の移動、若くは勞働時間の制限等は孰れも失業問題の從屬的解決策たるに過ぎない、之等の計畫は歐洲、就中英國に於て嘗て大規模の下に試みられたが甚しい效果がなかつた、則ち千八百七十六年以來英國に於ては出産率は千人に付三十六人三分より二十六人三分に降下し英本國より海外に移住せるもの總計四百萬（千九百六年までに）達し現今でも毎年少からず海外に移動しつゝあるに拘らず英國に於ける失業問題は益々險惡となつて居る、之等の政策は單に失業の根本的救濟に對する補助的救濟策である、從て又臨時的である。

想ふに新産業、殖林、土地開拓等を純然たる勞力貯藏所として創始し、由て以て勞働市場に於ける勞力に對する需要の伸縮に伴ひ伸縮するに足る彈力性ある勞働需要の源泉たらしむることを得ば、勞働者は失業するや否や直に這般の勞働需要の源泉に趨つて其の職を求め若くは再び普通の職業に復歸する間この一般的避難所に於て雨露を凌ぐことが出來るであらう。然し斯の如き一般的避難所の建設は論じて實行すべからざる『ユウトピア』である。蓋し國家の其の權力行使によりて失業者の全部若くは一部に有用なる仕事を保障することは不可能である、それは總ての失業者に對して其の能力の範圍内に於て爲し得べき仕事を供給することは事の實際に於て出來ないからである、少しも熟練適應を要せない仕事は殆んどないから國家が總ての失業者に對して勞働の貯藏所たらしめむとするが如き國家的雇傭制度の運用なるものは到底失敗に終るを免れない。況んや這般の事業を營利事業として行ふに於てをや、若しかくの如き國家的雇傭機關の運用には假令、支障を來すことなしとするも之等機關の運用には驚くべき經費を要することを知らねばならぬ、殷鑑遠からず、彼の佛國の國立工場の慘憺たる失敗に在る、千八百四十八年二月二十四日佛國は全く共和黨の手中に落ちた、而して共和黨の羽翼となつて勢力を有して居つた社會主義者が一度び假政府に代表者を出し得るや彼等は直に其の空想的制度の公布を要求し遂に所謂勞働權の宣布、國立工場の設立を見るに至つた、社會主義者の空想より生れた放縦無稽なる國立工場は實施數ヶ月で明に失敗した、政府より與へた賃銀支拂の保障は天下の浮浪人を雲霞の如く巴里に吸引

せしが爲め忽ちにして作業は拂底した、是に於て無用な開鑿運搬の工事を起して之に應ずるの盛況を呈し工場開業日尚幾許も經たないに係らず千八百四十八年六月現在の賃銀支拂登錄簿の職工其數實に十萬人以上に上つた、されば國庫の支出は驚くべき巨額に達し而も之等は無益有害なる空想の爲に徒費せらるゝのであるから軈て批難は翕然として起り遂にこの空想的國立工場は閉鎖せられたのである。

想ふに普通勞働市場に對する勞力貯藏所としての國家的雇傭制度の樹立は到底不可能である、勿論勞働者は斯の如き貯藏所に流入し來るであらう、けれどもそれは國家的雇傭が普通の雇傭よりも有利な場合にのみ限らるゝので從て其の有利なるべき障害が除去せらるゝ時は自然流出するであらう、それは國家的雇傭制度を樹立して一般勞働市場に對する勞力の貯藏所とする目的である、されど注意すべきことは一度一般勞働市場からかくの如き勞力の貯藏所に流入した勞働者は決して國家的雇傭が普通の雇傭に比し有利なる限り流出せないことである、加之かくの如き國家的雇傭制度は經濟界の沈滯に際しては殆んど總ての臨時勞働者若くは不熟練勞働者を吸收するに至るであらう。

私は以上屢々重復するのも厭はず專ら國家が絶へず新産業を起すとも決して仕事の缺乏を根絶し得ないぱを述べた、然し之に反して國家若くは公共團體が其雇傭を爲すに際し臨時勞働者の群を燒燼し以て勞働の豫備軍を一掃するとに勞力を繼續するに於ては勞働者を得んとする雇傭主は勢ひ其の雇傭條件を改良せなければならぬことゝなるのである、それば國家若くは公共團體のかくの如き雇傭政策は勞働者を傭する者に對し其の雇傭方法若くは條件を改良せしむる爲に間接的壓迫を加ふるとが出來るからである。此點に關し過般内務省で發表したと新聞紙の報じた失業者救濟要綱なるものはその要を得たもので若し之が訓命通り誠實に行はるゝとするならば勞働者の雇傭條件の改良に資すること大なることゝ私の信じて疑はざる所である。

臨時勞働者に對する政策如何と云ふことが軈て失業者救濟策の鼎の輕重を問ふことになつたのである、然らば臨時勞働者に對して如何なる政策を取るべきか臨時勞働者の豫備軍をして其の適歸する所を得しむるためには如何にすべきやと云ふ問題が次に起つてくる、私は之に對する政策として勞働市場の組織と云ふことを提唱したい。

六

街頭を歩むとき私は屢々丁稚又は小僧入用と云ふ掲示が店頭に飜々たるを目撃するが未だ靴入用と云ふ樣な種類の掲示を見ないのである、されど實際に於ては丁稚の勞働を要する場合がある如く靴を購入する必要も起るのである、然るに前者は其の欲求の表示が店頭に現はるゝに反し後者に於ては絕へて此のことなき誠に簡單な此の事實が產業界に於ける組織と非組織との相違を顯示するのである。

總て普通の商品には其程度の差こそあれ皆一定の場所があつて、買手は該商品を得むが爲めには其の定りたる場所に到るのであるが同時に、賣手も其場所に於て見出さるゝ、商業は實に此の賣手と買手とを接觸せしめて有無相通することを一層容易に完全ならしむることを目的とするのである、於是乎、重要なる商品に對しては一定の場所即ち市場が建設せられ、由て以て當該業務を集中せしむるのである、然るに勞力に關しては事情は根本的に異つてをる、雇傭の一般的方法は依然として仕事に對して個人的に志願するのである、換言すれば勞力提供の一般的方法は一軒一軒と尋ね步むので、而も之に對する勞力購買者即ち需要者側の最上の努力は勞力を欲する意思表示が辛ふじて店頭に掲げらるゝに過ぎないのである、それは蓋し勞働者の雇傭に就ては或る一定の制限せられた範圍內に於ては所謂被傭者と雇傭者とを接觸せしむべき組織若しくは方法が自然存在すること、及び假命斯の如き形式的の組織乃至方法が存在せない場合に於ても各產業に於ては習慣若くば其の他の規則があつて被傭者を容易に傭者に接觸せしめることが出來るからである。而して如斯、慣習若くは規則が存在するが爲めに勞働者は一見極めて便利な樣であるが實は大に不便なのである、勞働市場の組織とは勞働者を傭するかくの如き慣習若くは規則を全然廢止することを意味するのである、想ふに爲政者が如何に失業の解決法を講究するとも勞働市場の組織に手を染めざる限り充分なる效果を上ぐることは出來ない、我國に於ける失業問題の救濟事業は之を內務省のみに放任すべきものでない、勞働市場の組織と云といふことを內務省のみをして手を染めしむることは聊か見當違である、從て誠に無理な注文である、內務省で發表したと新聞紙が報じて居る失業救濟

要綱中には屢々勞働市場と云ふ文字を發見するから勿論、勞働市場の組織と云ふ樣なことも考慮の内に置かれたことゝ考へるが、深く此の點の注意と研究とを要するのである、蓋し失業者救濟の重心を爲すものであるからである。

然らば勞働市場を組織すると云ふことは如何なることを云ふのであるか、勞働市場の組織とは勞力の需供の投合の中心地を設けることを云ふのである、換言すれば事務所若くは紹介所を設置して雇傭主が勞働者を欲するときは必ず紹介所を通じて之を採用し、又た傭はれんとする勞働者は必ず紹介所に赴いて其勞力を提供する事が出來る樣にする仕組を云ふのである、ある産業に於て該産業に從事する雇傭主が勞働者を欲するときは其紹介所若くは關係紹介所より採用して、勞働紹介所を經由せずしては勞働者を雇傭せない狀態に達する事は該産業に對する勞働市場は組織せられたと云ふことが出來る、一國内の總ての産業に對する勞働市場が完全に組織せらるゝ時は臨時勞働者は大に減少すべく失業問題の解決、將に其の緒に就くと云ふことが出來る、一國、進むでは世界の産業に對する勞働市場の完全なる組織は或は「ユウトピア」であらう、けれども勞働市場の完全なる組織は決して不可能ではない、加之、勞働に對する需要を一定の場所に集中することは國家が失業問題を取扱ふ上に於て多大の便益を供するものである。

次に私は進むで勞働市場組織の目的並に其の組織より生すべき結果に就て少しく考へたい。現代は組織の世である、組織が非組織を征服するの時代である、科學の發達によつて起りたる理智主義は個人的行動を排して組織的行動を要求しつゝある、現代産業、就中器械的産業が理智主義從て生ずる規一的組織的によりて完全に向上發展しつゝありとすれば、之が生産に參加する勞働者の雇傭に關しても理智主義の眞理を認めなければならぬ、蓋し雇傭主が勞働需要に際し勞働市場なかりせば二つの經濟上の損耗を醸すであらう、即ち直接的には雇傭主側に於て自から勞働者を求めなければならぬ、而して勞働者側に於ては失業するや自から仕事を求むる爲めに奔馳せなければならぬ、此の場合に於て雇傭主が直に自個の欲する勞働者を發見せない以上、換言すれば失業の爲め職を求めつゝある勞働者と遇合せない限り、其の間生産は停止若くは延期せらるべく、惹て資本運轉の期を喪失するであらう、而も勞働者側に於ても失業するや否も何等の目的もなく暗中職業を求むるの結果、其の再び地位を得るに至る迄には多大の時間と賃銀とを喪失するであらう。此の

如き事象は實際に於て頻々として發生し、其の經濟的損耗に至りては吾人の想像以上に普遍的に行はれてをるものである、之が防止方法がなければならぬ、此の要求に應ずるものは勞働紹介所である、けれどもその紹介所たるや孤立的勞働紹介所が隨所に散在するだけでは不充分で、之と相關聯する中央勞働紹介所の設置が必要である、彼の倫敦に於ける中央雇傭紹介局に於て地方の勞力に對する需要を滿足せしむるが爲に勞働者を移轉しつゝある數の如何に大なるかは驚嘆すきもので、若し這般の中央集中機關なかりせば生產の一時的停止若くは延期は當然免ることが出來ないだらう、勞働紹介所が以上の如き使命を果すことに就ては人の能く知る所であるが、動もすればそれのみが勞働紹介所の作用であるかの如く考へる人がある、然しそれは未だ勞働紹介所の機能を充分に了解せないのである、勞働紹介所は既存の勞働の流通を圓滑ならしむと同時に、その裏面に於て實に彼の失業の禍源である臨時勞働者の群を掃蕩する一大機能を努めるので、私は此の勞働の豫備軍の掃蕩と云ふことが勞働紹介所の眞の目的であることを指摘したい、今後に於て勞働紹介所の目標は此の雲霞の如き勞働の豫備軍に向つて進まなければならぬ、蓋し臨時勞働者なるものは經濟程度の發達すると共に益〻増加し其横溢するに及んで玆に勞働の豫備軍を形成するに至るのである、於是乎、雇傭主は何時にても其の欲する勞働者を自個の門戶で得ることが出來る、蓋し雇傭主は其の勞力需要に際し待つことを要せない、之れ常に待ちつゝある勞働者の數、漸次增加しつゝあるからである、故に假令、勞働市場なしとするも雇傭主は不規則ながらも其の業務の繁閑變動に適應することが出來る樣に其の需要する勞働者を遲滯なく自個の門戶にて得ることが出來るのである。然し此の事實の反面に於ては勞働者が絕へず彼等の常に雇傭せらるべしと思惟する地點に群集しつゝあることを意味するのである、而して各雇傭主は各地方に於て這般の勞働の豫備軍を維持せんと努むるのである、此の著例は之を英國の波止場に於て見ることが出來る、蓋し勞働者側に於ては工場に何人雇傭せらるゝか若しくは何時雇傭せらるゝかを知らない、從て彼等が雇傭せらるべしと思惟する地點に群集して其數は漸次增加して最繁忙期に於て雇傭せらるべき數に達せんとする傾向がある、かくなれば雇傭主は最早何等の經費を投ずることなく其の業務の繁閑消長に應じて所要の勞働者を得べきが然し之が爲には右に述べた勞働者の大多數は失業の狀態に陷るのである、雇傭主側に於ては何時でも勞働者

を澁滯なく自個の門戸で其の業務の繁閑に應じて雇傭することが出來ると云ふことは實際上便利なるかの樣に考へらゝけれどもそれは大なる間違である、蓋し臨時勞働者即ち彼の勞働の豫備軍なるものは勞働效程が極めて低いからである、而して勞働者側から見て甚しく禍害であることは言ふを要せない、從て如斯「プール」換言すれば勞働者の豫備軍を維持存續せしめることは勞働者並雇傭主雙方にとりて有害であると云はねばならぬ、旣に雙方にとりて有害なりとすれば勞働者と雇傭主相呼應して這般の禍害の叢淵である勞働の豫備軍の撲滅に力を致さなければならぬことは明であらう　然らば這般の勞働の豫備軍の撲滅策如何、それは這般の隨時隨所に散在する孤立的「プール」を「共同プール」とし雇傭主が勞働者を得んと欲するときは必ず此の「共同プール」を經由せなければならぬと爲すこと之である。而して雇傭主が勞働者を雇傭するに際しては必ず一定の「共同プール」を經由すべしとの强要は一般に社會的良心の發達せざる時代に於ては到底免るべからざることで、此のことは毫も產業自由の精神と背馳する所はないと信ずる而して此の「共同的プール」としての任務を果すものは卽ち勞働紹介所である。

「シガー」敎授は其著「社會保險」中に勞働紹介所の機能を列擧してをる、敎授曰く勞働紹介所が設置せらるゝと（一）賃銀勞働者は彼等が雇傭を變せざるべからざる時に際し其の負担すべき經費を節減し且つ失業落膽して仕事を探索する必要が無くなるのみならず（二）現經濟組織の結果、生ずる不規則に雇傭せらるる勞働の豫備軍は全然之を除去することは出來ないにしても大に其の程度を減少せしむることが出來よう又（三）雇傭主は自個の欲する勞働者を採用することを得べく從て雇傭後間もなく解雇すると云ふ樣な場合も少くすることが出來る、而して最後に（四）失業者數の計算並に類別を可能ならしめる、此の類別は之を更に次の如く三大別することが出來る、卽ち（イ）適當にして勤勉なる勞働者の失業者（ロ）常に沈滯季節に失業する勞働能力の不充分なる勞働者の失業者、及び（ハ）身體上、若くは道德上の缺陷あるが爲め着實なる仕事に從事すること能はざる勞働者これである。

以上の如き失業者の分類種別と云ふことは勞働紹介所が爲すもので、實に勞働紹介所の存在する事は失業者に對する保護救濟の美風乃至制度を攪亂せしむるが如き方法を防止することが出來る、之を例へば勞働紹介所の存在は徇衙を防

徨する浮浪人は最早仕事を見出すことの不能を尤もらしく辨解することが出來なくなるであらう、この事實こそ實に勞働紹介所の究極の使命であり、現經濟組織の下に於ける勞働者の失業問題の最後の解決策の辿りつくべき「ゴール」である失業保險を可能ならしむるのである。蓋し故意に失業する者を如何にして防遏すべきかは失業保險の途に横はる最大の障害である、此の障害を比較的容易に防止することの出來る機關は今の處勞働紹介所を措て他に之を求むることを得ない、獨乙に於ては失業保險金受領の要件として勞働組合に屬せざるものは毎日勞働紹介所に出頭せしむるが如きことはその最も策を得たるものである。

想ふに勞働紹介制度は勞働に對する需要を發生、若くは創造するものでないから全然失業者を消滅せしむること能はざるは素よりその所である、けれども該制度は勞働の需要と供給とを密接ならしめ、更に進んで其の需要供給の平衡を保たしめむとするものであるが故に、勞働の流通力を増加せしめ既に存在する勞働の需要に對する供給を調節投合せしむるの作用を爲すものである、で勞働者に取りて便利なるは勿論、雇傭主に於ても勞働者雇傭に際し其の經費を節減し得べきは云ふ迄もなく自個の欲する勞働者を容易に獲得することが出來る。

七

私の叙述は極めて大體ながらも失業保險にまで來たのであるが、前に屢述べた勞働の豫備軍の掃蕩と云ふことに就て今少しく考へたい、勞働者の豫備軍の掃蕩と云ふことは他の言葉を以て云へば臨時勞働者の常備化と云ことである、即ち臨時勞働者を常備の地位まで推し進めると云ふことはそれだけ臨時勞働者の群集である勞働者の豫備軍を切り崩すと云ふこととなるのである。これは實に勞働紹介所の隱れたる社會政策的一大使命である、之れあるが爲に都市の廓清を來し産業界の平安を齎し一國勞働者の向上を促すに至るのである、人若し勞働紹介所の機能を解して單に雇傭を得しむる機關なりと速斷するものがあらば、それは未だ勞働紹介所の隱れたる前に述べた樣な一大社會政策的使命を看過するものである。彼の碩學「ロウントリー」氏が最も巧妙に喝破した通り、勞働紹介所なき所は勞働者に取りては深き泥濘壓を

沒する沼澤の地である、總ての勞働者は這般の沼澤中に埋沒せられて相互に仕事を求めむと相反嚙競爭するのである、所が斯の如き慘憺たる沼澤の地は踏めば從て沒し、堅固な足場なく從て瞬時も一地に固定することを得ない、而も此の内に捲き込まれつゝある勞働者は善良な性質を有する者多く身體また壯健なるものがあらう、況んや彼等は突如たる產業界の活躍に際しては立つて多大の貢献をなすものである、之は救濟せなければならぬ、蓋し善良なる勞働者は實際上永久の雇傭を得ることが出來るからである。唯だ或る故障の爲め彼等が臨時勞働者の群に投じ遂に周圍の事情の爲め惡感化を受けて善良なる性質を失ふに至ることは之を防止せなければならぬ、その或る故障とは何であるが、勞働紹介所の設置たきことと之である、實に勞働紹介所はかくの如き善良なる勞働者が沼澤中に陷り相反噬して悶々たるを救ひ上くべき任務を有するものである、然れども注意すべき點は現經濟組織の下に於ては總ての臨時勞働者に對して雇傭の地位を與ふることは出來ないと云ふことである、玆に重要なる問題が起つてくる、それは這般の沼澤中に相反嚙しつゝある臨時勞働者を出來うる限り常傭の雇傭まで推し進めるか然し到底、その地位まで進ますことが出來ないで最後まで殘留すべき勞働者は之を如何に處分すべきやとふ云ことである、これは實に解決に困難な問題であつて勞働紹介所論に於ける最も暗黑な部分である、即ち臨時勞働者中より其の適者を選擇して之に常傭の地位を與へんとする運動の反面にはまた一定の臨時勞働者が明にかゝる地位に對して不適當として排斥せらることを意味するのである、けれども沼澤中に善惡勞働者相混淆して反噬する結果は總ての沼澤中にある勞働者が「アンダー、エンプロイメント」の狀態に置かるゝ樣になるのであるから、此の内から適當な勞働者のみをして常傭の地位に推し進めるが如き政策を採らなければならぬ、而してかくの如き篩の作用を爲すものは勞働紹介所である、所が勞働紹介所制度を樹立して臨時勞働者中の一定數を取りて之に常傭の位置を與ふると共に他方その選に漏れた勞働者を如何にすべきやと云ふ問題が更に起つて來る、此の殘留すべき勞働者數の割合如何に至りては之を確めることは容易の業でないが、彼の「ロウントリー」氏が嘗て「ヨーク」市（調査當時の人口八萬二千）における失業の狀態を調査研究した結果によると、若し「ヨーク」市の勞働市場が完全に組織せらるゝときは――臨時勞働者中の適當なるものに常傭の地位を與へるとき――由て以て壓搾殘留せらるべき勞働

者數は二百乃至三百なることは確である、而も之等勞働者は總て劣等なる勞働者のみであると云ふてをる。

想ふに勞働紹介所を設置して臨時勞働者の群を一掃するときは、啻に勞働者間に於ける反噬狀態を緩和するばかりでなく軈て社會の平安を齎すであらう、就中臨時勞働者の集中すべき都市行政が如何に圓滑に趣くべきかは思半ばに過ぐるものがある。

けれども前に述べた通り臨時勞働の常備化と云ふ反面には一部の劣等なる勞働者が最後まで殘留すると云ふ悲慘は結果を齎すもので、此等の勞働者は到底之を常備の位まで向上せしむることが出來ないのである、といつて之等の勞働者を勞働市場に橫溢するに任せ放置するときは、彼等が可憐にも蹂躙せらるゝは云はずもがな、漸次その橫溢するに及び茲に勞働の豫備軍を增加し失業の叢淵を作り、既に勞働紹介所の作用によつて辛うじて常備の位置まで推し進められ、煕々その業を樂しみつゝある善良な勞働者の地位を脅かすに至るであらう、けれども彼等も人間である以上は生命を繫くべき糧もいらうし雨露を凌ぐべき避難所も必要である、之れが爲めには煕として其の職を樂しみつゝある勞働者を脅かすことも之れは生存慾の前には認めなければならぬ、けれども之を自然に放任するときは相反噬の極、茲に產業界の一大擾亂の基となるであらう、茲に於てか國家は這般の殘留したる勞働者を救濟するの必要を生ずるのである、先づ第一にその殘留勞働者を分類して如何なる仕事に適するかを極めなければならぬが、其の結果彼等が尙、勞働能力を有する場合に於ては問題は至極簡單である、蓋しその救濟はたゞ仕事を與ふれば足るからである、然し之に反し勞働能力を有せざる場合に於ては問題は甚だ容易ではない、例へば犯罪人なりしが爲に道德上の原因よりして勞働能力なき時は之を犯罪人殖民所若くは類似の制度の下に收容する方法を考へなければならぬ、身體上若くは精神上の原因の爲に勞働能力を缺くときは彼等をして其の勞働能力を回復せしめる樣な何等かの處置を講ぜなければならぬ、而して總て此種の施設若くは救濟は國家若くは自治團體の社會政策又は救貧制度に俟たなければならぬことは言ふ迄もないことである。

これ勞働紹介所制度は國家若くは公共團體によつて樹立せられなければならぬ所以である、就中都市が勞働紹介所を自ら經營するときは、積極的には既存の勞働の流通力を增加し以て都市の繁榮を策し都市の平安を齎し、消極的には浮

人の横行を防ぎ都市の品位を高め、彼此相俟つて都市行政の改善を來し其の圓滑を圖るに至るであらう。

八

加之、都市は又た勞働紹介所を自ら經營することによつて、早晩遭著すべき一大問題の解決に一歩を進めることが出來る、蓋し現代文明の向上と共に人口は都市に集中し更に進んで集積しつゝあるから、その結果一方に於ては失業問題を助長促進せしめつゝあると同時に他方に於ては住居問題を起してをる所が論ずるまでもなく人口の都市集中は自然に都市の家賃の騰貴となり玆に住居問題が發生してをる、而してその必然の結果として雜居と云ふ現象が隨所に出現してをる、一家と一家との限界が障子によりて限られ若くは梯子段によつて通ずると云ふ風になり、而も其の場所が年中日光の當らない濕潤な所であるから、其の保健上に於ける禍害は眞に慄然たるものがある、たゞ彼等の衞生思想の未だ幼稚なると、失業問題の如く當面の差迫りたる問題でないが爲に意に介せない樣であるが、國民敎育の普及により衞生思想が發達すれば愕然として覺醒し考慮するの時があらう而して考慮の結果遭著すべきは住居問題の解決と云ふことであるに相違ない、所が現在に於て住居問題を正當に解決せんとせば、去つて郊外に居を求め所謂田園都市の建設に取りかゝらねばならぬ、併し勞働者が交通機關の便を利用して郊外に分散する結果新に生ずべき傭人對被傭人の懸隔は之を考慮せなければならぬ、而して這般の懸隔を調節鹽梅し進んで之が投合を容易ならしむる機關は勞働紹介所である、英國に於ては都市に於て職を失はんか直に名稱を勞働紹介所に登錄し去つて田舍に向ふか、紹介所の飛電一下直に都市に復活することが出來るのである。白耳義は更に之に一歩を進めてをる、その勞働紹介所制度の完備は勿論、田園都市が建設せられ各勞働者は土地分配法によつて小地を得ることが出來るから、都市に於て失業するときは其間、一時這般の小地耕作に從事することが出來る樣になつてをる。此の消息は彼の社會問題の權威である「ロウントリー」氏によつて喝破せられて餘蘊なしである、氏曰く若し都市に住する勞働者が田舍に住することが出來、而して小地を耕し得るの便宜だにあらば大に失業の禍害を減ずるであらう、蓋しこのことは勞働者の從事する産業に對し一つの交替性を賦與するもので、該産業に於て一

度失業するときは去つて小地耕作に從事することが出來るからである、而して最も企業心に富む勞働者が先づ第一に這般の生活方法を採用すべく、是の生活方法によつて得らるべき利益が一般に承認せらるゝ時は爾餘の勞働者相繼いで之に倣ふに至り、彼等の子弟は田園にて養はれまた屢々田園に住するに至るであらう、斯くて時の經過と共に總ての種類の産業に從事する勞働者は都市の郊外に住し、彼等の失業の間小地耕作に從事するであらうと。理想は正に斯くなければならぬ。要之、勞働紹介所と田園都市、田園都市と住居問題とは唇齒輔車の關係に立つものである。

六

問題は次から次へと尙ほ盡きない、私は次から次へと更に考へなければならぬ、人口が都市に集中の結果、必然的に發生する住居問題と之が爲めに益々其の慘害を助長せしめる失業問題との關係に就ては以上述べた通りであるが、假令勞働者が失業しないにしても近時物價は益々騰貴し生活は愈々窮迫し來る結果、補充的收入の必要はどの家計に於ても痛切に感ずる所である、於是乎、夫婦若くは一家共稼ぎと云ふ樣な現象が一部上流階級を除くあらゆる方面に出現してをる、事情誠に已むを得ないことである、併し其の共稼が一時的の共稼であつては生活難てふ追擊の前には蟷螂の斧である、子供の出來ない內は共稼が出來るが子供が出產するともう働くことが出來ない。働くことが出來ぬことは致方ないとして子供の出產により經費は增加し而も家計の補充的收入杜絕となり生活は益々逼迫するであらう、人生に於ける悲劇は大抵この間から湧起するのである。

併しこのことは防止することが出來る、それは子供の出產した後も依然補充的收入を家計に供することの出來る樣な設備さへあればよいのである。小兒預所は此の種の要求に應じて現はれて來たものである、小兒預所は僅かな賃錢で若くは無料で子供を一定の時間預つてやるのである、卽ち母親は朝工場に出勤する時に預所に子女を托して夕方には連れて歸るのである、かくするときは兩親は安心して働くことが出來るのである、本制度は獨乙に於て盛に行はれ多大の效果を收めてをる。

要するに生活資源に離れた場合に比較的早く賃銀を得しむる勞働紹介所の設立だけでは未だ不充分で、是非とも生活資源は杜絕しないが然し一家の經費が増加したる場合家計の補充的收入の杜絕しない樣な設備である小兒預所を以てせなければならぬ、而して小兒預所は間接には亦た失業問題の緩和に貢献するのである、蓋し家計の困難はやがて補充的收入の追求となり而も尙之にても充すことが出來ない場合には、勢ひ生活程度の引下げとなり營養不良を來しやがて勞働能力の喪失となるからである。

一〇

私は以上縷々失業問題を詳論して其の救濟策に及んだ、私は今靜に我國の現狀を想ふ、勞働紹介所もある、小兒預所もある、住居問題に就ても益々研究せられてをる、而してその數は益々增加しその研究は愈々眞面目となり來りつゝある、それは一面から考へると將に來るべき時代を反照するものである、想ふに勞働問題中で我國に於て將來最も問題となるべきものは失業問題であらう、而してあらゆる勞働問題中失業問題ほど勞働者に打擊を與へるものはなからう、現下我國に於ける新聞雜誌は勞働問題で賑つてをる、それ等の論文に接し顧みて數年前の我論壇を想ふとき誰か今昔の感なきを得んやである、私の欣喜に堪へない所は勞働問題中最も主要な問題であるに拘らず殆んど從來顧みられなかつた失業問題——假令、戰後の復員に際し一時注目を惹いたが爲めとするも——が論ぜらるゝに至つたことである、而して進んで其の救濟と云ふ樣な議論が上下せらるゝ樣になり、一方では實際上の施設としても大阪市に於ける勞働紹介所制度は着々その步武を進め將に勞働市場の組織に取掛つてをる、私は大阪に於ける朝野の人士の勞を多とすると共に最近に於ける新聞紙によつて報ぜられた事實を看過することが出來ない、大正八年七月五日時事新報は「警視廳側の敗訴」と云ふ見出で保安課長の談として次の如き興味ある記事を掲げた、『麴町紀尾井町の人夫請負業組合が勞働者を雇主に供給した行爲は警視廳の見解では紹介營業であるから其の取締規則に依らねばならぬとして、其手續に依らずして同行爲を爲した右組合を處罰した、夫れを東京區裁判所で正式裁判の結果、警視の敗訴となつた、次は本日湯屋寄子請負組合も亦同一

の內容で敗訴となつた、裁判所は一定數の勞働者を供給する契約をしたものは其の勞働者の個人に關係なく之を單に勞働力の請負業と見る可きものであると云ふのであるが、警視廳は數の如何を論せず勞働者を人格と見て之を紹介するものは同取締に支配せらる可きものであると云ふのである、つまり裁判所は勞働者を「勞働力」といふ商品と見做し警視廳は勞働者を一人格と見做す點に解釋の相違がある」云々と。それに就て批評することを私は避けたゞ、今後の社會問題を取扱ふに際しては官憲は社會政策に對して無智であつてはならぬと云ふ事に讀者の注意を喚起し、この點に關して東西兩市に於ける社會的良心の相違を指摘するに止める、蓋し組合が雇主に勞働者を供給すると云ふことは勞働市場の組織に着手することで、總て都市行政の改善もそこから湧てくるからである、私は世上、勞働紹介所を目して勞働者に職業を得しむる機關なりと速斷するに急にして、その隱れたる一大社會政策的使命である勞働市場の組織と云ふことに想い及ぶ先覺者の少きことを遺憾とする、若しそれ社會政策としての勞働紹介所てふ大旆を翳すとき我國の失業問題の解決は正に其の緒に就くと自分は信ずる。

最後に勞働問題に對する私の意見を敍して本論を結びたい、それは經濟學者が千言萬語を尙足らずとして勞働問題の解決を叫ふも所詮、私が初に引用した「ウイルコツクス」の詩に到るより外はないのである、「ヘベリジ」氏曰く青年の敎育、殊に其の技術的敎育を施すときは次の好影響を齎すことが出來ると、第一には青年をして出來うる限り熟練的職業に進ましむることが出來る、勞働者にして不幸失業するときは特殊の技倆熟練なき限り再び熟練勞働者としての地位に復歸することは困難である、此の事實は總ての社會學者の一致する所である、彼の不熟練勞働市場が常に勞働の過剩に苦しむでをることは此種の消息を遺憾なく證するものである、而して之が鎭壓緩和の最も有效なる手段は青年の技術的敎育である。

第二には青年をして出來る限り新しき職業に向つて轉向せしむることが出來る、蓋し斯くすれば一方に於ては產業界の發展を便にし他方に於ては比較的年老いたる勞働者は之等青年の競爭を免ることが出來るから、安固なる生計を確保することが出來るであらうと論じ、尙續けて勞働者に對する敎育の普及若くは其の向上に對する要求は勞働市場の組織よ

りも遙に重大なりと叫んでをる、誠に至言である、世界に於て勞働者の最も自覺せりと云はるゝ英國に於て尚且つ此の絶叫がある、我國に於て勞働者に對する教育の必要なる多言を要せない。

近時我國に於ける團體運動が多く失敗に終り一も成功するものなきは、國民の自覺換言すれば個人としての自覺若くは發達の未だ至らざるの結果である、彼の產業組合の如き三十年の歷史を有するに拘らず其の效果の何等擧ぐべきものがないのは全く我國民が團體運動の成功要件を缺くものと考ふるより外はない、團體運動をして效果あらしめむとせば先づ其の團體を組織する分子たる個人が完全なる發達を遂げなければならぬ、換言すれば各團體の構成員が眞に自己が經濟上の弱者であると云ふ徹底的自覺を生ずるにあらねばならぬ、國家がその生在の目的を達せむとせば先づ國家を構成する要素である人民の多數の地他の向上發展を策することの必要なるは一點疑惑のなき所である、從て國民の多數を占むる勞働者の向上發展を策するは我國現代の焦眉の急務である、從て勞働者の向上發展を策する教育の普及は現代日本の生命を制する緊急問題である、想ふに現代の如き產業自由時代、換言すれば大體に於て自由競爭生存競爭が支障なく行はるゝ時代に於て弱者が自己階級の存續向上乃至發展を圖らむとするには只た一團體的運動あるのみである、而して前に述べた通り此の團體的運動成功の要因は勞働者の自覺である、而してその自覺を促す根源は實に勞働者の教育である、斯く論じ來るときは失業問題の徹底的解決に於て勞働紹介所は之を勞働者の教育に比するときは第二義に屬することゝなる、現代日本に於て勞働者に勞働者たるの自覺を與へるには彼等を教育するより他に途はないのである、私は再び初に引用した「ウィルコックス」氏の詩を誦して本論を結びたい。

「合理的勞働」の見地より觀たる
テーロイズムの批判

醫學士 暉峻義等

自分が玆に述べようとするのは、過去數ケ年の間に於て、歐米、特に米國の產業界に於いて、恐るべき支配力と、熱心なる渴仰とを收めた「テーロイズム」所謂科學的管理に就いて少しく立ち入つた批判を試みようとするのである。

「テーロイズム」に就いては、歐米諸國に起つた盛んな論爭、並にその興隆とともに、我國に於ても二三それを紹介し、或はその釋著も公けにせられたのであるが、その多くは、我國に於ける現代の凡ての社會の問題とその軌を一つにしてやはり無批判に紹介され、無反省のうちにこの新らしい產業界の管理方法が推奬されたに過ぎなかつたのである。自分はそれを非常に遺憾に思ふものの一人である。

今や我產業界は內的にも外的にも異常な時機に際會してゐる。工場管理、工場能率の問題は可なり學者、技術者、管理者をと惱ましてゐる。そしてそれらの凡ての人々は眞に「力」ある方法據つて以て信憑するに足る方策の出現を待ち望んでゐる。けれ共玆に尙遺憾に堪へないとは、我國に於ける工場並勞働問題の核心は經濟學的、社會學的の範圍にほとんど限局せられ、勞働者の生活が、依て以ていとなまるる生理學的事實、心理學的現象に就いて之を考慮するものは實に寥々たる有樣である。

而も工場管理を云々し、工場能率問題を論じ、勞働者の疲勞を論議するものは、多くは法律學、經濟學、社會學の教養を經たる人々か、或は工學機械學等所謂工場の技術者によつて論議せられ、而もそれらの人々のある部分に於ては、その問題の考察者とし、研究者とし、解決者として立派に世の信賴も受け、自らもそれを自認してゐる人達もあるようである。而してそれらの人達は、人間の勞働に關し、人間の生活機能に關して、科學的知識の缺如せるは勿論、眞の常識的知識さへも辨へてゐいな人々のあると云ふことは實に自分達から見れば誠に滑稽至極な

ことである。

日本に於ける工場管理、工場能率問題の考察が、前述する通り、經濟學的、法學的、工學的教養を經た人達ちによつて主として注意されて來たと云ふことは、日本産業界に於ける大いなる缺陷であるが、それらの人達にこの「テーロイズム」が如何に紹介され、理解されてゐるかを考へて來ると、自分は捨てゝおく理にはゆかない。故に自分はこの少篇に於て、「テーロイズム」に關する批判を述べると共に、勞働者問題の根本に横はれる、生理學的、心理學的事實が、いかに産業界にとつて重要なるものであるかを暗示したいと思ふ。

「テーロイズム」の起源

云ふまでもなく、産業界に於ける機械に關する科學の發達進歩は、今日既にその極度に達してゐると云つてよい、機械力の活用し得べく、應用し得べき所は、一刻も爭つて、何等の逡巡なく遲疑なく機械が使用せられてゐる。從つて機械に關する資本家並工場管理者の努力は實に周到を極めてゐると云つて過言ではない、機械的能率の増進、機械の保全のために費さるゝ資本及び努力は誠に驚嘆に價するものがある。

けれども之れに關連して吾々の考察すべきは、産業界に於ける他の重大なる要素である勞働者に關することである。十九世紀の中葉から今日にかけて、勞働者に關する問題も漸次考察され來つた。そして今日に於ては、最早純然たる科學上の問題となり、科學者の研究對象となるに至つた。

勿論、現在に於ては、多くの工場管理者並に資本家の勞働者に對する方策は、全く經驗に基いてゐる。彼等は自己の據つて以て處して來た産業的經驗を唯一至上のモットーとして勞働者を統理し來つた。而して勞働者は生理學的機械であつて、彼等はこの根據の上に立つて取扱はれねばならないと云ふ思想は、一種の學究的論議として見做され、實際的でない。研究室に於てのみ使用される思想であつて、直接産業界に適用さるゝものではないと云ひ習はされてゐたことは事實である。けれども『實際的』と云ふ言葉ほど眩惑的な誤まられ易いものはない、『實際的』と云ふ言葉のもとに、如何に眞理がけがされて來たか、また如何に赦すべからざる罪惡が公然行はれて來たか。

けれども『人間の機械』に關する科學は、それが産業界に利用されるものとしては、生命なき機械に關する科學ほどには發達してゐなかつたことは事實である。けれどもまた一方から見ると、生理學の利用は、その進歩と相並行してゐなかつたとも云へるであらう。

かくの如く産業界に於ては『人間の機械』に關する科學の發達利用は、遙かに生命なき機械に關する科學の發達利用に後れてゐた。そして勞働者は産業圏内にあつて久しきに渡つて酷使と過勞と生活力の浪費の間に放置されてゐたと云つてよいのである。

テーロイズムは産業組織圏内に於ける『人間の機械』に就いて、始めて一つの貴重なる研究を吾々に提供したものである。テーロイズム一度出づるや、歐米の産業界は靡然としてこれに從はふとした。實際テーロイズムは、科學的管理なる名のもとに一時非常な勢を以て産業界に行はれた。

この方法たるや、一八五六年米國ペンシルバニア州、ゲルマン市に生れたフレデリツク・ウインスロー・テーロアの創見にかゝるものであつて、彼は一門衛の地位から、その努力と勤勉とによつて、技師となり遂に工場管理者となるを得たほどの勢力絶倫の人であつた。彼は人間の勞働の合理的科學的組織に成功した第一人者であつた。彼は一九一五年ペンシルバニアに於て死んだ。彼の一生を通じての努力であつた人間の勞働の科學的管理に關する論著は、一九一一年 The Principles of Scientific management となつて紐育から出版された。今左にその根本原理に就いて述べて見ようと思ふ。

テーロアは彼の思想を實現するためには先づ完全なる準備的研究を積まねばならなかつた。即ちエネルギーの浪費を避け出來る丈最少の時間を以て人間の勞働を行はしむるためには、その勞働の樣式、大さ、輕重及び性質に就いて、十分に研究を重ねる必要があつた。即ち『人間の機械』に就いての科學的研究を進めておく必要があつた。けれどもかかる研究たるや莫大の費用を要し、而も直接には何等資本家に對して當面の利益を提供しないものであるから常に拒否さるゝを常とした。けれどもテーロアの熱心は遂に成功した。彼は約八萬圓の費用と、殆んど二十年(一八八〇——一九〇三)の歲月とを費してこの準備的研究を完成したのであつた。

彼は上記の準備的研究の完成とともに、これを産業組織のなかに實施せんと企てた。彼は先づ彼の創始にかゝる工場管理の諸原理實施の中樞を定めねばならなかつた。即ち、勞働者は各々所定の地位につき、作業中樞よりの命令の傳達及び各人の命令への服從が最も容易に徹底的に行はれることを必要としたからである。この事たるや實に至難なことであつたが、彼の努力は又この難事をも遂行することが出來た。

また勞働者をして彼の方法に從つて勞働せしむる爲めには、

その勞働に對する準備、勞働の實行の順序並方法が一定のカードに書いて與へられる、各勞働者は確實にそれに從つて勞働するのである。このカードの中には、其勞働には如何なる動作が必要であるか、またこの工具を用ふるには如何なる動作をすれば合理的であるか、またその動作を最も順序よく迅速に行ふには如何なる順序を經べきであるか、而してまた其の勞働を爲す時に、通常、無自覺に、而も不利益に行はれてゐる不用な動作があるが、それは省略しなくてはならない。と云ふ樣な注意が與へられてゐる。即ち要するに、必要缺く可からざる動作はこれを最少の時間に於て爲し、不必要なる動作はそれを全々除去し、最少の時間内に於て、最大の功果を擧げ、而して勞働者の過勞を防ぎ、人間の勞働をして最も有意義にその目的を達せしめようとするのがテーロイズムの使命である。玆に於てテーロアは一つの作業を爲すに要する標準時間を決定するの必要があつた。即ち彼は熟練なる勞働者が、その作業を爲すに要する時間をストップウオッチを以て測り、これより平均時間を算出して以てその作業に要する標準時間と定めた。而してこの標準はその作業に從事する他の凡ての勞働者の準據すべきものとなるのである。

テーロイズムの他の一つの特色は、作業の注意深き分析及びその作業に對して勞働者を特殊的に訓練するにある。即ちテーロアはその準備的研究に於て、十分に作業の科學的分析的研究を積み、一度勞働者にしてその作業に就かしめらるゝや、彼はその作業の性質、輕重、樣式に確適に一致するやうに練致されるのである。而してテーロアは勞働者のみならず、その作業に使用すべき工具の位置等も凡ての操作に適合する如く裝置することにも留意したのであつた。

以上記する所を以て見れば、テーロイズムの特色とする所は作業時間の測定及び作業方法の撰擇である。

尙一例を擧げて理解に便にしようと思ふ。

例へば今玆に鑄物運搬作業がある。この作業に要する時間は、次の如く分析される

一、鑄物を地上或は鑄物の堆積から動かす
二、該鑄物を運搬する
三、それを地上或は堆積の上に積み重ねる
四、空手でもとに歸る

分析されたる四動作は、熟練强壯なる勞働者に就いての試驗によつて一々の動作及び全作業に對する時間が測定せられ、これを以てその作業に就いての標準時間と決定される。一度標準時間決定せらるゝや、他の勞働者はこの標準時間を標的として、

彼の模範勞働者の生產額に一致するやうに能率技師によつて指導訓練せられる。

かくて未熟練勞働者も速かに立派な技術者となる。而して作業に關する機械的動作の生活が始まる。而してこゝに至ては、實に『時は黄金である』と云ふ格言が文字通りに實現されて來る。

テーロイズムの發達

テーロアの把持する主張は、現に非常なる勢を以て膨脹しつゝあつた產業界にとつては、實に天來の福音として響いたことは想像にかたくない。亂雜と不調和と、不統一と不秩序と、そして忍ぶ可からざる生活力と材料と金錢との浪費に氣付いてゐた工場管理者達は、テーロイズムを以て新宗教の出現の如く渇仰の眼を見張つたのであつた。

テーロアは云つてゐる。『現在に於ては如何なる勞働者も一日或ば二日以上怠惰に生活し得ない程に勞働の需要が增加した。それ故に、無能なる勞働者は、以前よりはよほど幸福な境地にある。吾々はそれらの無能なる勞働者を憐憫する代りに、反對の多數の有能なる價値ある勞働者をして、少くともその最高の賃金を得、生活向上に對する機會を得せしめることに悦びを持つべきである。』彼は徹頭徹尾適者選擇、有能者の拔擢を主張してゐる。而して不熟練なるもの、才能なきものに對しては、極力彼の決定したる類範に迄練致せしめることを強制してゐるのである。

かゝる彼の主張に對し、非常なる渇仰者と隨喜者があらはれるのは見易いことであるが、一方また猛烈なる反對者の現はれることも彼の主張を見るものには了解さるゝことである。實際に於て贊否の人達は激しい論議を產業界に提起した。

けれどもこの間にテーロイズムは急速に翼をのべていつた。テーロイズムは產業界の如何なる部分にも行はれんとしたのみならず、農業界、商業界にも施行せられるような一般的な性質を備へてゐた。

工場に於ては能率技師（Efficiency Engineer, Industrial Engineer, Industrial Counsellor）なる新らしい職務が出來た。そしてテーロアが一九一一年ニューヨークに『科學的管理に於ての原理』を著してから四年目に至つては、約八十の種々の異なれる米國の工場にテーロイズムが採用された。而して米國のみならず歐洲大陸に於ても續々テーロイズムの讃仰者が出現して來た。

これらのテーロイズムの渇仰者の發表する所によれば、みな非常に顯著なる成績が擧つてゐる。例へば綿糸工場に於ては二

○乃至三〇％の生産額の増進を見ある、機械工場では一〇〇％、と云ふ驚くべき増加を示し、官立兵器工場に於ては一五〇％、煉瓦積みは一七〇％、他のある機械工場に於ては二〇〇％、石炭掬ひの作業は二六八〇％、銑鐵運搬作業は二八〇％の生産額の増加を見たと報告されてゐる。これらの事實は、テーロアの云つた如く、『各勞働者の生産額を倍加することが確實又容易』であると云ふことを立證したのであつた。

テーロイズムの批判

テーロアの努力と彼がテーロイズム完成に費した勢力と熱情と、それは實に驚嘆と賛美に價するものであつた。吾人は彼の成就した業績に對する批判に進むに當つて特にこれに對する讃辭と敬意を呈するの必要を感ずるものである。

テーロアは長年月に渉る研究と、比較的多額の經費と、彼が半生の努力を費して科學的管理の方法を創始し、而してその一旦世に出づるや幾多の功績を産業界に及ぼしたことは既に述べた如く事實である。けれども惜むべし、テーロイズムには幾多の缺陷と誤謬とが藏せられてゐる。

テーロイズムに就いては、テーロアの外ガント、エマーソン其の他の著名なる指導者が出現したのであるが、彼等が等しく科學的管理法を說くに反し、その說く所の原理原則に至つてはみな各々其見を異にしてゐる。彼等がそのよつて以て立つてゐた原則を異にしてゐたと云ふ丈ではない、それらの原則が産業組織內に於ける實行に移さるゝや、彼等が自ら『科學的』と稱へたにも不拘、科學の最も特色とする『確實さ』に於て大いなる缺陷があつた。

第一に擧ぐ可きは、科學的管理の主唱者が、常に主要視した勞働者の選擇の方法である。彼等は『科學的』と唱へたにも不拘、何等科學的方法による選擇を行つたのではない、唯傳習的方法即ち先づ勞働者を幾日かの間一定の作業に從事せしめて、然る後始めてその適否を見ると云ふ、産業界の傳統的方法を踏襲したに過ぎない、そして何等の生理學的、心理學的方法による勞働者の資格選定を行つたのではない。

彼は勞働者をして一定の作業に理想的に適合せしむるために、彼の實驗による標準に據るべく勞働者に强制した、而して勞働者の適合及びその選擇に就いては實に嚴峻に彼の主張を實行した。けれどもそれは果して合理的な事であらうか。

吾々は惜む、彼は勞働者の作業への適合に關して、單に生産額と時間とを顧慮したに過ぎない。それは云はば資本主義的傾向をもつてゐると云つても差支はない程である。けれども吾々

は作業への適合に關しては、むしろ勞働者の『性質』の顧慮を以てより根本的なことであると信ずる。而して彼はまた勞働者の選擇に際して、何等『人間の意志』を尊重する所がなかつた、僅かの試驗によつて、テーロイズムの指示する標準及び規範に適合すべくもない勞働者に於ても、教育と馴化とによつては、善良なる勞働者となることが出來る。

即ち彼は勞働者の選擇及び作業への適合に關して、單に算術的計算を以てモツトーとした、それは彼の大なる缺陷であつて、テーロイズムが近代の勞働者並勞働運動の根本精神と相容れざる點であつて、テーロイズムの名の本には、計算と豫知とを許されざる『人間の天分』に關することが全く度外視されてゐるのである、換言すれば、如何に教養なき粗野なる人間にても、近代人はみな一樣に道德的精神を包藏せるものである。この精神こそ、凡ての困難に打ち勝つて、一個の善良なる勞働者として彼自身を磨いて行く意志の根底をなすものである。テーロアはこの點に關して彼の周到なる用意を缺いたのである。

又第二に彼等の最も力を用ひた作業標準時間の測定の方法であるが、こゝにも非科學的方法が使用されてゐる。即ち或時は最も迅速なる作業力を有する勞働者を用ひ、或時は最も緩漫なる勞働者を用ひ、或時は多數勞働者の單なる平均時間が標準となつてゐる。而のみならず、標準時間の算出に際しては、或時は實驗に供せられたる勞働者が描出したる凡ての場合の時間の平均が用ひられ、或は最も屢々現はれたる時間を標準とし、或は最も速かなる時間を標準にとり、又甚だしきに至つては得られたる時間が人爲的に任意に變化されてゐる。

こゝに注意すべきは、かくの如くして得られたる作業標準時間には、實驗の結果と、不確實なる主觀的判斷とが混在してゐることである。故にかゝる結果は、觀察者の如何によつて、種々に變化を餘義なくされると云ふことは避くべからざることである。

即ちテーロイズムの主唱者等が、特に『科學的』と高唱するにも不拘、科學の以て最も重要視する『確實さ』に於て大いなる弱點を見出すのである。彼等は科學的と稱するに反し、彼等の方法は非科學的計算と測定に立つてゐる。

第三に擧ぐべきは、科學的管理を唱ふる人々は、みな一樣に勞働者の過勞に就て注意を怠つてゐない。勞働者の疲勞を輕減せしむることは、彼等の方法の重要なる部分である。然るに吾々は彼等の矛盾撞着を見るものである。即ち彼等は人間の疲勞の本質に就いて知る所が甚だ少ないのである。彼等は人間の生活機能に關する基礎知識を殆んど有してゐないと言つても過言

ではあるまい。疲勞を避け、過勞を禁ぜんとすれば、勢ひ彼等は『疲勞とは何ぞや』と云ふ根本問題に就いて考ふる所無くてはならない筈である。然るに彼等は疲勞のよつて來る生理的現象に就いては殆んど無關心でゐる。從つて疲勞を計測する等の考案をも有せず、疲勞問題と直接的關係にある、休息時間の問題、疲勞素因除去の問題等に就いても何等考慮する所がない、のみならず、勞働時間の長さに關しても彼等のある一人は、單に道德上の問題であると放言してゐるものさへもあるのである。特に吾々の注目すべき事實は、勞働者の疲方と密接なる關係にある工場災害の數に見るに、所謂科學的管理方法の實施されたる工場と、然らざる工場とに於て、その災害の度に於て決して異なる所はないと云はれてゐることである。

第四はテーロイズムの全體に通じての缺陷であるが、テーロイズム出でゝより、彼の方法に據るものは成程理想的生產能力を發揮し得る勞働者を得られたに相違ない。けれども吾々の勞働者に對する問題の凡てが、この理想的生產能力の獲得によつて終るものではない。吾々の意志する『合理的勞働』は決して生產能力に比例して實現されるものではない。『合理的勞働』の理想を高き生產能力にのみ求むる時代はもう過ぎ去りつゝある。產業の振興にとつては、高き生產能力は必要缺く可からざるものであらう。而し吾々は『合理的勞働』の理想として、人間生活のよりよき向上、人間の責務のよりよき履行を意志しつゝあるものである。

テーロイズムはこの點に於て、餘りに人間を機械視した、彼等は勞働者をして機械化せしむべく強制してゐる、即ち人間の機械的能力の一方面にのみ心を奪はれて、機械的能力のよつて以て起り來る原動力に就て考慮する所がなかつたと云つてよい。即ちテーロイズムの根本的缺陷は、その主唱者等がみな一様に所謂工場の技術者であつて、何等勞働のよつて以てなさるゝ生理學的事實に關しての知識を有せず、又何等の考案を生理的に求むる所なく、勞働を支配する生理學的眞理に無關心であつたことである。

故に彼等の勞働界に致した努力は實に嘆賞に價するものがあるが、其の成果たるや、彼等が唱ふる如くしかく重大な價値を有するものではない、否むしろテーロイズムの主張は、人間の『合理的勞働』の理想から云へば、遠くかけ離れてゐるとも云へるのである。

政友會が絶對多數黨になつたら

順に守るが唯一の活路

文學博士　三宅雪嶺

政友會は一黨を以て過半數を制すれば、一まづ大喜びとし、いよ〳〵我が黨の天下となつたと祝するであらう。解散は種々の事情を伴ひつゝ、選擧法を活用し、黨勢を擴張するのを最も主要の事情とする。解散當時必ず過半數を制するを信じ切り、何處まで擴張するか知れぬ程の意氣込みであつたが、いよ〳〵選擧運動に着手すると共に、漸く思ふたよりも難しいことを知り、何とか過半數になれば可いと考へ初めた。當初候補者の多いのに困らうと思ひ、候補者とならうとする者も多かつたが、政府黨で運動費を澤山貰へると思ふ者が少くない。言ひ込んで來るのに如何はしいのがある。思ふた程の運動費が出ぬとあつては尻込みする。適當の候補者を見付けようとしては割合に難しく、當方で望むのは向ふで避け、向ふで望むのは當方で頭を傾ける。候補者は幾何でもあるやうで左うは行かず、何とか頭を揃へるものの、結果に心配がないではない。併し何や彼や過半數を制する事が出來やう。前よりも有利になると思はれる。今日勝利と思ひながら、多少の心配があるので、いよ〳〵勝利と知れた曉、今更らのやうに得意の鼻を鳴らし、何んなものかいとの勢を示すであらう。

選擧人は種々の食餌で釣られる。普選を以て選擧人の特權を脅かすとするのも一つの食餌になつて居り、地方の利益問題に至つては頗る效驗がある。以前よりの事であるが、隨分效驗が多い。鐵道の如き、相爭ふ者が各々政府の諒解を得て居ると信ずる。實に何れにもよいやうに挨拶あつたに由る。決定までに年數が懸るので、急に苦情が起らぬにしても、選擧終了後ぼつ〳〵問題にならう。或る地方では政友會の全盛に乘じ、一擧して

利益を得ようとし、躍鬼運動するのもあらう。幹部は此の類の事に馴れて居るけれど、時として面倒を覺ゆるであらう。戰後に論功行賞の煩はしいが如く、總選擧で勝つた後、利益分配の煩ひを見る。勝利を得たとて愉快ばかりのものでない。

併し總選擧の跡仕事の如き、何とか挨拶して居る内に日が過ぎ、今が今と云ふやうな事がない。何とか挨拶しさへせばよい。之に比べて退引ならぬ問題は、内閣の運命に在る。内閣を如何にするか、此の儘で續けて行くか、若干の椅子を取換へるだけで、依然原内閣を以て續けるか、それとも一時明け渡す事にするか、幹部中の幹部と云ふべき所に問題がある。或ひは原首相の頭腦の中で問題になる。問題にならぬと云ふても、問題にせずに居れぬ。此の問題は原氏の最も才能を發揮し得る所に屬る。原は外の事も相應に早解りするが、他人に優つて居ると云へぬ。事に依つて頗る劣る。併し内閣を如何に爲べきかに就ては、他の追隨を許さぬのがある。成るべく今の儘に續けて行かうとの考あるが、それよりも困難に陷るに先んじ體よく明け渡し、新たなる勢を以て盛り返すの得策なるをも思ふ。長居の無用を知らぬではない。特別に失敗しなくても、長居しては飽かれる。切り上げ時の肝要なのを知つて居る。然し英國でも近來内閣が長續きするやうになり、長く續かなくては思ふやうに政策を行ふ事が出來ぬとの意見がある。幹部の多くは之に傾く。閣員を順繰りに更迭し、大臣志望者を滿足せしむれば、いよ〳〵妙とする。原内閣で續くのも一案なれど、隨分問題が輻湊して居る。五大强國の一に列するだけ外交も容易でない。我國で大人しくして居るのに、米國の如き、他から意地惡く當つて來る。同盟國なる英國の植民地も、感じが良くない。支那も始末が困い。殊に西伯利は拔き差しが難しい。外務にも一理窟あり、陸軍にも一理窟あり、理窟と理窟とを捏ね合して一つにするに骨が折れる。下手をすれば取返しがつかなくなる。今の所次第に深味に入りさうにも思はれる。

此の方は各々責任者のある事として、姑く其の爲すが儘に委さうが、財界の動搖を如何にして防ぐか。總選擧後の動搖は、急に障りがなくても、公債政策に影響する所が多い。臨時議會は何とかして過し得るとし、次の通常議會に安全を期し難い。衆議院は多數で抑へ付けても貴族院はさう行かず、場合に由つて熱湯を呑まさぬと限らぬ。面と向つて喧嘩腰に出て來るものがないとて安心する譯に行かぬ。面倒の起らぬ先、體よく内閣を明け渡す方、政友會の力を充實する所以と考へぬでもない。臨時議會の形勢にも依るが、其の樣子次第で、或ひは明け渡しに取懸からう。それが巧く行けば、政友會の利益となるに相違

ない。併し周圍に見物人の多い中で手品を行ふは容易でなく、首尾よく運ぶか何うか一段の興味がある。

事は大權を以て極まるが、更迭の下準備は非公式に行はるゝ。原氏は何食はぬ顔して山縣公を訪問し、公もそれと云ふ顔を見せず、何かの話の中、内閣問題が出る。山縣は隨分此の邊の呼吸の解る方であつて、原との話合ひは双方共に合點が行き、或ひは言はず語らずの中に解る。何人を後繼者にするか、所謂首相級の人物を並べ立て、あれは何うとか、これは何うとか云ふ話がある。事あるを承知で言ひ込むのもあるし、事ないやうに話しかけるのもあらうし、其の内に何とか話が付かう。只山縣の方では後繼内閣が甚だしく政友會に牽制されぬ事を望み、原の方では一寸原内閣の代理を勤めさせようと望むであらう。互に露骨には云はぬが、急に纏まらぬ事があれば、其の邊の事情に於てする。後藤男が後繼者となるか何うか、山縣公は聊か危ぶみながら、可からうと云ふ位にならぬではない。原氏に於て後藤ならば心配が無く、一時働かせて置き、時を見計らひ取つて代る事難しくない。何と云ふても政友會が多數を制し、衆議院を何うでもする事が出來る。後繼内閣を組織する者は、一應原の傀儡となるを考へねばならぬ。後藤男は傀儡でも何でも首相に成りさへせば可いとする程お人好しであるか、それ程馬鹿にされる事は御免蒙ると出掛けるか、後藤男から牧野男に廻るか、又は他人に廻るか、いよ〳〵決定するまでに相應の手數を要する。

然し内閣は自らの都合を圖り、更迭の時期を考へたりするが、政友會は既に勝利を得、何でも我が黨の爲すが儘とし、勝手な振舞を仕兼ねぬ勢になる。内閣更迭しても我が黨を基礎にせずして何が出來るかと云はぬばかり寧ろ之を公言するを憚らぬ。追に幹部は相應に經驗を積み、横暴の譏りを受けたくない。併し譏りを受けずに横暴の實を行ふに贊成せぬ方でない。不正なる事をしてはならぬ。勝手な事を仕てはならぬと云ひつゝ、如何はしい事をすることが珍らしくない。或ひは事情の已むを得ぬに出づるとし、又實に已むを得ぬやうであつても、兎も角も横暴の名を值する事になるは極つて居る。政友會の盛衰は其處で分れる。立憲政治と云ひ、選擧と云ひ、非選擧と云ひ、分つて云へばたわいも無い狀態であり、政友會が何をしたとて通つて行かれぬではない。大手を振つて行かうと思へば行ける。三圓の納税で特權階級を形成らうとはするが、選擧人に對して勝手の眞似の出來ぬ筈はない。此の勢に乘じ黨の基本金を作り、黨

員の懐を暖かにしようと思へば出來ぬ事はない。併し勝手な事が出來るとて勝手な事をするのは、頓て勢の變ずる所である。今に初まつた事ではないが、民衆は解らぬやうで解り、まゝ鋭敏な程解る。露國の民衆は無智文盲、蹴つても叩いても屈從すると思ふたのが舊政府の重い手違ひである。之れ程無智文盲でなく、相應に智識を具へて居ると知らるゝ民衆は、如何に默つて居つても、何處の何處までも堪へ忍ぶものでない。解らぬやうで大體に於て判斷を過らぬ。山本内閣の下非政友熱の頓に起つたのは、何の事情の加はるにせよ、民衆が政友會の横暴を腹立しく感じたのに由る事多い。非政友熱で出來上つた大隈内閣が、初めの歡迎に似ず後に攻撃を受けたのも、政友會の二の舞をしたのによる。今は政友會に於て選擧人を籠絡しさへすれば、何でも出來ると心得て居るらしいが、さう思ふてはもはや先が短い。衆議院は選擧人が決定するのであり、漠然たる民衆が何を爲し得るものかと高を括るは、さう思ふので、燒打事件とか米騷動とか何とか騷ぎが起つて、内閣更迭となるのである。燒打事件の如き、憲政の下に有り得べきでなくて有るのは、政府が一般民衆を輕蔑するに由來する。さう輕蔑するならばこれぞと云ふやうになる。普通選擧にしても、民衆に於て特別に要求せぬやうに見えるであらう。見えるからそれで可いとしては、脚下から鳥が立つやうな事が無いとせぬ。政友會が勝利を得るならば、勝つて兜の緒を締めるを忘れてはならぬ。即ち今後又々横暴にならぬやうに注意するを要する。原首相初め幹部員一同此處ぞと思ひ、苟くも横暴に亙るの嫌ひある事は悉く廢止し、又は拒絶し、成程政友會は見違へたやうになつたと思はしめるやうに努むべきである。

解散は何と口實を設けても目的が知れ渡つて居る。肚の中が見え透いて居る。辨解するだけ淺間しく感ぜられる。それはそれとして既に行つた以上、出來るだけ惡い事をせぬやうにすべきである。逆に取つたものは今更ら仕方が無く、出來るだけ順に守るやうにせよ。原政友會總裁の能力が逆に取るよりも順に守るに顯はれるとあつては、何れ程總裁及び黨の爲めに利益になるか知れぬ。星亨が遞相となつた時、貴族院で攻撃されたけれど、當時星は有象無象の詰文を押へ、さういふ事を云ひ出してはならぬと制した。或ひは順に守るの術を示さずして死んだと云へる。横暴の張本と見られた星でさへさうである。原氏は此處で、生れ落ちてから最も奮發すべきである。思ひ切り奮發し、政友會の横暴を制限する事、單に政界の爲めのみでなく、彼等政友會員の爲めである。

政友會が絶對多數黨となつたら

早大教授　杉森孝次郎

絶對多數黨とは議會に於ける過半數黨といふ事だ。政友會は、目下の形勢では、原氏の、世に察せられたる内意通り、絶對多數黨となりさうだ。普選を問ふ形で總選擧は行はれる。投票者は、たとひ三圓でも特權階級だから、今度は普選反對者に信頼するだらう。無論全體ではないがだ。しかし、原氏は、一とたび去年の新選擧法に機會を與へて、名分が立つた上には、内外の情勢に察知して、みづから普選案を提唱するかも知れない。これが一つの豫想だ。

それから、政友會は、今度の總選擧では首尾よく成功しても、西伯利問題と不景氣問題が、その眞相が國民と反對黨に段々明知されて來て、内閣を投げだすかも知れない。事實、西伯利問題では、現内閣は引責辭任するだけの失敗をやつて來たのだ。國民がわからずにゐるから、無事に濟んで來たのだ。それに次いでは不景氣問題だ。現内閣が、不景氣の襲來を豫知して備ふるところなかりしは、そして却つて民間の浮薄なる企業熱を煽り揚げて來たことは、責任を問はれるだけの不明不德であつた

西伯利問題について言ふならば、そもそもオムスク政府を承認したことが、實に大いなる不明不德であつた。その後も、外務省と陸軍省との間に分限が明確でなかつたらしい巷說あり、極めて重要なる意義を日本の將來に、すぐの將來に有する對西伯を、極めて見當違ひに行なつて來た責めを、内閣は國民に對して負はねばならん。要するに、對伯西利策と經濟政策と、この一雙の内外政の失敗が致命傷となつて内閣總辭職に及ぶかも知れない。それにしても、議會に絶對多數黨たる地盤を築いて置いてから、野に下れば、再起の便ありといふ算段も、多少は原氏にあるかも知れん。いまはないと假定すれば、その内にあるやうにならう。

或は總辭職をば企てずして、閣員の部分的更迭で誤魔化さうとするかも知れない。外相、陸相、藏相と言つたやうな、内外失政の現當の局に當たつた部下を取り代へるのだ。けれども、いかに議會に絶對多數を占めてをるとは言つても、原氏がそれほどの無責任をばすまい。信用上からも損失だからだ。

そんなら誰れに明け渡すか。無論政友會の名實揃つての
には渡すまいかと努める。なんとなれば、そんな敵の内閣

れば、折角造つた絶對多數黨は、直ちに解散を食ふにきまつてゐる。解散は大抵政府黨の勝利を總選擧に結果する。清浦子とか、平田子とかいふ名を公山縣に持ちだして見るのか。それから後藤男か。この邊の知識は、私には全然缺乏してゐる。興味男缺乏してゐる。

あとは希望に移るわけだが、再び官僚內閣に逆戻りする時世ではない。後藤男は、內閣組織の機會をば、裝置を凝らしても實現したい氣の人かも知れない。新黨形成か。しかし、政友會に取つて代はる內閣は、國際的頭腦と手腕のしつかりしたものであることを要する。國防の充實、交通の完備、產業の發達、敎育の振興は結構だが、その國防が海陸軍擴張をのみ意味し、その敎育が學校增設をのみ意味する程度では心細い。國防は道德的文化的政治的たるべし。敎育は思想の改進たるべし。西伯利と不景氣に手を燒いた後の內閣は、外政が際だつて振はなくてはいけない。不景氣もその最大原因は國際盲にあるのだ。開戰が持ち來たした米日の好景氣が、終戰によつて持ち去られるのは、見越しのつくべき事變であつた。國際的政治家たる修養のある人が、原內閣に代はるに値ひする唯一の人だ。公山縣や貴族院を頭から敎へる識見力量のある人でなくては、代はり甲斐もない。變はりばえもしない。先づ以て爵位に戀々し、また謂はゆる官界の榮達に心を引かれる分際の人では、詰まらな
責任ある理想家がでて來なくてはいけない。侯大隈はわかる。だが、最後の思ひでに、侯爵を弊履の如くに脫ぎ棄てゝ、身を
て改造運動の純化と正化に盡す決意がないなら、動かない方
無難だ。斯う考へて來ると、たとひ政友會內閣は、內に於ては
入も公債も思ふやうに行かず、豫算は成り立たず、外には西伯利
で國威と國利を失墜し、加ふるに絶對多數黨を恃んでの橫暴
働いて國民の義憤を買ひ、大擧して野に下るとしても、格別の進
步を國民にむかつて機會づけるとは言へない。けれども、これ
は、原內閣の責めではない。國民全體の責めだ。政治家は英
でも呼ぶ通りに國家人でなくてはいけないが、誠意はあつても
國家觀が朽廢してゐたり、兎角に私意が勝つたりする人ばか
多くて、見物の興味から言うと、齒痒いこと夥だしい。い
ながら感ずるが、日本の政治家が、舊新を通じて、西洋排斥
自主であつたり、西洋崇拜の自由であつたりするのはよくな
眞理を崇拜する至純敬虔の心を以て、內外を批判し、改造す
人が、そろ〳〵政治界にでゝ來さうなものだ。

政友會が衆議院に絶對多數を制したら、そして利巧に押し
く立ち廻つたら、衆議院は無敵の境を行くが如けん。けれども
わが國の現狀では貴族院は大いに物の數だ。貴族院が政黨內閣

を嫉妬してその邪魔を續けるうちに、絶對多數黨の政友會內閣は、貴族院を相手どつて再び衆議院の解散を斷行するかも知れない。そして政友會が再び勝ちを得れば、政黨內閣の基礎はやゝ堅實になり、貴族院は影が薄らいで行かう。一進步だ。果たして政友會內閣がこの雌雄戰を繰り返すまで長命であるかどうかが先決問題として多少疑はれる。

現內閣が要するものは知識だ。後繼內閣が要するものも知識だ。西伯利は虎の尾だ。莫斯科は虎の頭だ。虎頭を見ずして虎尾を摑むやうな小藝を信じてはいけない。大戰は火元だ。景氣は烟だ。火が消えて烟が續くことを夢想したりしてはいけない。內の階級問題も知識を試驗する問題だ。變化を破滅と同一視してはいけない。成長も發達も變化だ。地方の發達をば市縣當局に信任する位の用意あれ。國際的社會に於ける日本の位置を、上手の碁打ちが盤に臨んで寸進尺取し、時として神算妙策の片鱗を自然とほのめかすが如くなれ。大人物出でよ。國際的に破邪顯正し、爲善去惡する政治家出でよ。

國際眼と國際手ある內閣が準備されてゐない間は、政友會內閣の長命と短命とは、國の大事でなくて黨の大事だ。憲政會と國民黨も、出來るだけ奮發して國際眼と國際手を內外政の上に於て政府黨に優るやうに準備し來たれ。けれども、天才出でずんば埒は明かない。天才が既成政黨からでない事は、現今の神學者に哲學者がゐない位に確實だ。吾人は國民の名に於て、純なる。しかも組織力ある理想家の出現を成るべく容易にする義務をわかたねばならない。今の世に於て政治は宗教だ。普遍價の信薄きものは昌えない。自己だけは階級人を超越し、また國民人を超越した人の眼と手を、今明日の內外政は要求する。超越とは以上といふ事だ。原氏が無碍なだけでも、隨分の得をして居るでないか。頭腦と誠意が明らかに現存政治家を凌ぐ人あらば、その如き人の結束は、祝すべき意味に於て絶對多數黨に往生を遂げさせよう。

政友會の絶對多數を政界の進步に利用するには

法學博士　吉野作造

政友會が假りに絶對多數を占めたとして、どれ丈けの事を彼が爲し得るかは分らない。從來の經歷に徵してどうせ大した事もなかりさうだが、只政友會が絶對多數を占めたと云ふ既定の

事實を、一切の情實を全然抜きにして理屈一遍から日本の政界の進歩に利用しようと云ふなら、どう働いて貰へばいいか此點を少しく考へて見よう。此註文を容れるか容れないかは向ふの勝手として、せめて斯う云ふ態度を執つて呉れゝば、罪悪に富む過去の歴史に拘らず、彼は大いに日本の政界に貢献することが出來るのである。

そは何かと云ふに、全然自主的になつて貰ひたいと云ふ事である。議會に絶對多數を占めた以上は政界に於ける基礎は著しく堅くなる。折角堅くなつたのだから、左右前後に顧慮する所なく、全然自主獨立の行動を執つて貰ひたい。政友會の從來の弊害は一つには理想の無い事と、もう一つには官僚軍閥等に阿ねり過ぎた事に原因する。日本の政界に於て一番安全な地位を占むるには議會に多數を占むることは勿論であるが、其他に所謂官僚軍閥と相通ずる所無ければならない。而して官僚軍閥の階級的偏見と利害とは到底一般的國利民福と相容るゝものでは無い。相容れざる二つのものを跨いで世の中を渡らうと云ふのだから矛盾がある。矛盾は即ち罪悪の源であつた。而して日本の政界には若し兩股を掛け續けることが出來ないなら、官僚軍閥の方に本據を置いた方が安全だと觀る考もあるが、併し政友會の幹部はまさかこんな考ではあるまい。只彼等は餘りに悧巧過ぎ、餘りに眼先が利き過ぎたから、本據を議會に置いて、而かも官僚軍閥の鼻息を窺ふことを怠らなかつた。事實亦官僚軍閥の鼻息を窺はねば時々裏を掻かれて議會に於ける本據をすら崩さるゝと云ふ懼れがあつた。そこでどうしても一切の政策を行るに自主的たるを得なかつた。之が禍の源であり、又國民の不信を買つた主因であるから、今度幸にして絶對多數を占め得たなら思ひ切つて官僚軍閥との腐れ縁を絶ち、正々堂々自主獨立の陣を張つて天下の大政黨たるの面目を立てゝはどうか。

之についてもう一つ希望したいのは普通選擧の實行である。政友會は普選反對を標榜して選擧を爭つたのだから、直ちに豹變するのは心苦しからう。けれども狡猾なる原總裁は解散理由の陳述の中に時勢の變によつては、普通選擧もわるくはない今の普選論は之を唱ふる動機がわるいと云つて、他日普選論に鞍代へするの餘地を樂に取つて居る。又此位の豹變は十年前自ら普選案を提出した連中の決して苦とする所でもあるまい。而して黨の利害から云つても選擧權の擴張を不得策とするのは一時目前の事であつて、結局は後の遣り様次第で新選擧權者の多數を味方にして尚一層鞏固なる地歩を占めることも出來よう。今や天下の人心は大體に於て政友會を離れて居る。併し人心の飽きて居るのは獨り政友會ばかりではない。憲政會國民黨亦同

じ程度に不信を買つて居るから、いはゞ多數の國民は之からはいゝ事をさへすればどの黨派にでも味方する。政友會を好まないと云つても特に政友會のみに反感を抱いて居るのではないと云ふ所に前途の希望がある。故に普通選擧を實行しても後の政治にいゝ事をすれば多數の國民を確實に味方にすることが不可能でないから、而して此味方は本當の確實な味方であるから、政友會の基礎は一層堅くなる。容易に官僚軍閥の攪亂を免るゝことが出來よう。

其上でいよ／＼自主的の面目を發揮し、官僚軍閥、更に進んでは財閥司法閥の階級的偏見を打破して貰ひたい。今日の社會が此等の階級的偏見の爲めにどれ丈け禍されて居るかはこゝに詳々しく述ぶるの必要もなからう。之を打破して國運の堅實なる進歩の前途を坦々たる大道たらしむるは獨り絶對多數を擁する大政黨のみ之を能くすることが出來る。



失業者問題

失業者問題の解決

法學博士　堀江歸一

原首相の詭辯

私は四月號の本誌に於て「不景氣の襲來と我國民生活」と題する一文を草し、不景氣が襲來した場合に、我國の經濟社會が如何なる影響を蒙る可きものであるか、之に對して國民は如何なる覺悟を持つ可きものであるかと云ふ問題に就て立論し、聊か讀者の參考に供しやうとしたが、此文が世間に公にされて間のない今日、我國の經濟社會は早くも不景氣の襲來する所と爲つた、少なくとも不景氣の前提とも云ふ可き種々不祥なる事件の續出して居るのは、蔽ふ可からざる事實である。大阪では相當の銀行が取付を蒙り、同業者の救援を受けて、辛うじて破綻を免かれた事實があり、東京でも一二取付に遭つた銀行もあるやに聞く。而して東西の株式取引所は株式市價暴落の餘波を受け取引を休止するの已むを得ざる狀態に陷り、餘程の救濟策が實行されない限り、取引を再開す可くも見へず、銀行は一齊に金融を引締め高い金利を負擔する覺悟があつても、資金の融通を受けるのは、甚だ困難であると傳へられる。市場が如何なる狀態に陷つた時が所謂パニックで、又此パニックが如何なる狀態に進んだ時に之をクライシスと呼ぶかと云ふ問題に就ては、人々の間に見解の相違のあることを免かれないが、兎に角今日の我國に於ける經濟狀態はパニックとクライシスとの間を彷徨しつゝあるものであつて、現時の儘に進んで行つたならば、經濟社會の諸方面に相當の打撃を蒙つて、幾年かの間、商工業をして從來の好景氣と反對に不景氣即ちデプレッションの狀態に陷らしめることは、勢ひ免かれ難き所である。然らば何が故に昨年の上半季まで、景氣旺盛であつた我國の經濟社會が下半季から大分形勢に變化を來し、今日反動來の徵候の歷然たるに至つたのであるか。原首相は大阪で開かれた政友會の近畿大會で、稍

にも無い經濟論を試み、輸入超過は原料品の輸入高の增加した爲めに起つたものであるから、結局輸出の增加を來すとか、金融逼迫は株式拂込の增加に基くものであつて一時的現象に過ぎないとか云ふやうな理屈を並べ立てゝ、不景氣襲來に對する世人の不安を除き、其失望を和げんとして居るやうであるが、私は何としても原氏の所說に與するを得ないのみならず、氏が自己の失政を掩う爲めに、鷺を烏と强辯する態度に對して、大なる反感を表するのである。今度の經濟的反動が昨年來の輸入超過、正貨減少、銀行の金利引上井に金融制限等に依つて、惹起されたものである以上は、決して原氏の考ふる如くに、一時的現象と認めることは出來ない。昨年に比較すると、本年に於ては我國の輸入貿易は輸出貿易よりも、大なる割合を以て增加して居る。是れは歐米諸國の經濟狀態が戰時の混亂を脫して、次第に平時に歸しつゝある結果であつて、我國の如く國內に存在する物質に對して、多くの通貨の流通しつゝある國が外國から多額の物資の輸入を受けて、一方に之に對して通貨中の正貨を拂出すのは、當然の道である。而して斯く正貨が拂出されて通貨が必然的に減縮する勢を示し來つたとしたならば、日本銀行を始め諸銀行が金利を引上げて、一方に市場を警戒すると共に、銀行自身の安全を保障することも、必要の處置であると認めなければならぬ。

斯く論じ來れば、今や我國に其端を開いた不景氣は今後貿易の逆勢、正貨の減少、金融の逼迫と云ふ現象の强く現はるれば現はれるだけ、其勢を增すものである。原氏を始め政友會の輩は總選擧を眼前に控へた今日、不景氣風が吹き捲つては、內閣に對する世間殊に投機業者や、虛業家の信望を失ふので、氣が氣でなく、不景氣の一時的現象に過ぎないことを力說して、世人の失望を揉み消さうとする次第と見受けられるが、不景氣の惹起された原因が以上の諸點であり、而して是等の諸事實は原內閣が如何なる膏藥張り式の救濟策を施した所で、又原首相自身が堅白異同の辯を弄した所で、之を如何ともするを得ない、不景氣の勢は次第に經濟社會の諸方面に浸潤し、從來の好景氣時代に於けると正反對の現象を呈するものと想像せざるを得ない。

不景氣時代の社會問題

不景氣と云ふことは、商工業が其經營上に打擊を受けるとか從來生產された物資の賣行が停まるとか云ふやうな點から見れば、純然たる經濟問題に過ぎざるやに考へられるが、事實に於ては、經濟問題の領域から、一歩踏み出して、一個の社會問題

と爲るのである。蓋し不景氣時代に生ずる影響の內で、特に著しいのは、人の勤勞若しくは勞働に對する需要の減少する一事であつて、好景氣の時代ならば、官廳にしろ、民間の諸機關にしろ、事務多忙であり、殊に商事會社などに爲れば、特に設立されるものもあり、既設の分は其規模を擴張し、斯くて多數の吏員を需要するので、彼等の俸給は自ら引上げられもし、又就職の希望ある者であれば、必ず此希望を充すだけの職業に就くことが出來、勞働者であれば、好景氣の場合には、全國一齊に事業の繁昌を告げるので、需要増加して、賃銀の上進するのは、動かす可からざる事實であつた。然るに今日の如く一旦反動的趨勢が現はれて、不景氣の端を發したと爲れば、經濟社會に及ぼす第一の影響は既設事業の縮小と新設事業の倒壞との二ツでなければならぬ。現に是等二ツの事實は着々我國の經濟社會を襲つて居るのであつて、其勢の進むに隨つて、一部の俸給衣食者は事業界に於て職を失ふことと爲り、勞働者も解雇されて、失業せざるを得ない。斯くて失業問題が俸給衣食者の社會に於て、勞働者の階級に於て、現實の問題と爲るのである。

從來の經濟狀態に於ても、社會を通じて最も生活難を強く感じたのは俸給衣食者の社會であつたが、それでも事業繁昌、事務煩忙である爲め、假令ひ物價騰貴の率に對して、釣合いは取れないまでも、若干の增給を受けて、生活難に當り、他日物價下落に基いて、生活の安易と爲る時期の來ることを待望して居つたのであるが、不景氣風が吹けば、物價の下落するよりも、第一に自分の地位に就て、不安を覺ゆると云ふのは、何たる不幸であらうか。成る程不景氣の前兆として、物價は下落したが、其下落と云ふは、定期市場に於ける相場の下落であつて、是れが次第に小賣相場にも及んで、世人一般の生活に餘裕を生ずるに至らしめるには、或る時期を要するのである。然らば俸給衣食者の如きは、物價下落に依て、生活に安易を感ずる前に、早くも失職の憂目を見る譯であつて、失職者と爲れば、所得の全部を喪失して、高からうが、安からうが、一枚の浴衣も、一升の米も貯蓄金を使ふか、借金をするか、非常の手段に依らなければ、買ふことの出來ないと云ふのは、誠に生活上の恐慌である。

勞働者は從來好景氣の時代に有利な地位に居つたが、彼等の內、果して所得の一部を貯蓄して、他日に備へた者は幾何を數へ得るであらうか。彼等の增加した所得の一部分は物價騰貴に基く生活費の膨脹で、削減され、更に平生の欲望を充す爲めに費消されて、餘す所を貯蓄したとした所で、數ふるに足る金額であつて、到底失業の爲めに蒙る打擊に當るに足らない、隨て

彼等が失業の場合に蒙る苦痛は俸給衣食者の夫れと比較して、異なる所はないと想像される。

俸給衣食者なり、勞働者なり失業の爲めに所得を喪失すると云ふことは、社會上に大なる弊害を齎す所以である。失業中彼等が何事をも爲さずして、徒手遊食するのは、取りも直さず社會全體の生產力を減損する道理であり、彼等の失業する期間が永きに及んだならば、多年の修練で修め得た技埶熟練等を忘却して、他日復業した曉に、以前と同樣の能率を發揮し難く、失業の苦痛を脫する爲めに、如何に不利な勞働條件にも滿足して、勞働しやうと爲れば、社會に於ける一般の勞働條件を壓迫すること丶爲り、殊に失業中生活難の甚だしきに至つた時には、自然子女の教養を怠るのは勿論、妻や娘をして賤む可き業を營ませ、社會の良俗を破ると云ふやうな種々の弊害を惹起するに至るのである。

失業救濟の設備なき我國

經濟社會に好景氣と不景氣との時代循環し、不景氣の時代に、失業者の發生することが動かす可からざる事實であり、又失業に伴つて、種々の弊害を生ずる以上は、失業を豫防するなり、失業の弊害を抑制するなり、夫れ〱の施設が一國に存しなければならぬ譯である。外國の例を取つて云へば、失業の起つた場合に、(一)失業者が勞働組合員であれば、勞働組合から失業惠與金を與へて、失業中の生活を保障し、(二)組合自ら全國の諸組合と聯絡を通じて、失業者の爲めに、新に就く可き職業を搜索して遣り、(三)國家なり、公共團體で失業保險法を實行して居つて、失業者に失業保險金を交付する道があり、(四)國家又は公共團體の經營する職業紹介所で、廣く失業者に對して職業を搜索し、進んで全國に渉つて、勞働者の移動を自由にするのみならず、時に外國に移住させることもあり、平時に於て、非常時に於て、失業者を救濟するに全力を盡して怠らないのである。

顧つて、我國に於て失業者の救濟に幾何の準備なり、設備なりがあるかと考へるに、一として之を見出すことが出來ない。勞働組合の鞏固なものがあつて、組合員中の失業者を救濟する譯でもなければ、失業保險法があるのでもなく、公私立の職業紹介所はあつても、充分の活動は望まれない。然らば我國では失業問題を解決する道は全然缺けて居るものと認めて差支ない。斯る場合に人爲的に極端なる程度まで刺戟された好景氣の反動として、不景氣が起つて、失業問題を生じたならば、我國では事實失業者を見殺し同樣の狀態に陷らせること丶爲る。斯

の如くして、社會の平安を維持しやうと云ふが如き、企て及ぶ可からざる所であつて、私は社會の平和を期圖し、又人心の安定を希望するの點から見て、我國が平生最も怠つて居つた失業問題の解決に十二分の力を致すことを以つて、當面の急務と考へるのである。

近頃我國では人心が險惡に爲つたとか、人々が危險思想を懷くやうに爲つたとか云つて、頻に現狀を懸念し、又將來を憂慮する向もあるやうであるが、人は必ずしも奇を喜び、變を望む者ではない。幾ら外國で奇矯な、又過激な思想が流布されたとした所で、又一二賣名的學徒や、好事者が何某の學說などゝ銘を打つて、紹介し、解說したとした所で、日本國民に安心立命の鞏固なる基礎があつたならば、決して輕浮な思想に動かされる譯のものでない。而して此安心立命は何から來るかと云へば其有形的方面に於けるものは、卽ち生活の安易であり、職業の保障であり、所得の安固であらなければならぬ。然るに今我國で失業問題が殺到し、失業者が澤山に出やうとする場合に臨んで、之に對する何等の政策も行はれず、施設も講ぜられず、失業者を見殺し同樣の狀態に置いて、職業の保障、所得の安固を奪はうとするのは、求めて危險思想を醸成し、人心を險惡ならしむるものと難ぜられても辯解の辭はあるまい。

失業の對策如何

我國の如く從來失業問題の解決を閑却して居つた國で、急に此解決を求めやうとする場合には、俗に言う「怠け者の節句働き」で、一度に色々の計畫に當らなければならぬ。私は試に其要目を數へて、左の諸點に外ならぬことを信ずるのである。

第一全國に亘つて、大規模の勞働者移動を計畫すること。

今日我國の經濟社會が反動的趨勢に襲はれたからと云つて、全國のあらゆる産業が一齊に萎微沈衰した譯のものではない。工業商業に於ける失業者を水産業なり、山林業なりに轉換させたならば、一部地方に發生した失業者を救濟することは出來る。隨て中央政府が地方官廳其他の團體を督勵して、各地方の産業狀態に就て、責任ある調査をさせ、之に據つて全國を通じて、勞働者の移動を期するのは、當面の急務であると思はれる。

第二職業紹介所の制度を完備すること。

從來中央政府が職業紹介所の制度に就て全く指を染めなかつたのは、勞働政策上の一大過失であつた。失業問題を眼前に控へて、職業紹介所を急設するのは、泥棒を捕へて、繩を綯うの譏を免かれないが、尙ほ爲さざるに勝るは萬々であつて、一方に公設や私設の紹介所を監督し、互に聯絡を設けて、活動した

ならば、失業者を救濟するに資する所あるを得やう。而して紹介所の紹介で、地方に往つて職を求める者に、紹介所自ら旅費を貸與するなり、鐵道院や汽船會社に交渉して、船車賃金の大割引を行はせたならば、以て勞働者の移動を助け得るであらう。

第三各種の官營公營事業殊に土木事業の如き、多數の不熟練勞働者を使傭する事業に於ては、豫定以上に仕事竣成の時期を繰上げること。

官營公營事業に於て、例へば八個月に完成す可き仕事を失業者の多く爲つた場合に、四個月で完成することゝし、以前の計畫に於けるよりも、倍數の勞働者を使傭することゝしたならば、自ら失業問題に當り得るの道理である。

第四失業抑制の目的を以て、或る努力を爲したる民間事業主に對しては、國家に於て、爲めに費した費用を償うこと。

官公營事業に使傭されて居る勞働者は全體の一小部分に過ぎない。隨て失業問題を解決するには、或る程度まで民間事業主の協力を待たなければならぬ。民間の事業主が失業者の續出する場合に、操業時間を短縮して、多數の従業者に仕事を與へたり、解雇する勞働者に充分に手當金を給與したり、又解雇する前に若干の豫告期間を與へるやうにしたならば、假令ひ失業の生ずるのは、已むを得ないとしても、多少失業者に及ぼす生活上の打撃を緩和し、失業其ものの弊害を抑制するを得る道理である。然も事業主としては是等の斟酌を爲す爲めに、多くの費用を負擔するものであるとしたならば、國家が失業問題を解決する見地に於て、此費用の全部なり、一部分なりを事業主に賠償して遣るのは、當然の處置と考へられる。

若し夫れ俸給衣食者の失業問題に就ては、從來傭者（政府を含む）と彼等との間に存して居る雇傭關係を根本的に一新し俸給衣食者が現に仕事に就て居る時に俸給を受けるのは勿論、自己の意思に反して、仕事を行はない時卽ち今日の免職休職等の場合に於ても、俸給を受け得ることゝし、恰も軍人の現役と豫後備退役との間に於けるやうな關係にするのを以て、解決の捷徑とするか、然らざれば俸給衣食者の間に團結を結ばせ、又彼等に對して社會保險の制を布かねばならぬ。今日の我國に於ては、俸給衣食者の失業に對しては、何等救濟の設備が無いのであつて、今後彼等が非常の窮地に陥ることも、略ぼ想像し得られるのである。

今後の勞働爭議

失業問題と共に、考へなければならないのは、今後の勞働爭議である。從來でも勞働爭議は隨分行はれたし、又結果の慘憺

たるものもあつたが、好景氣時代の事であるから、結局事業主の方で、勞働者の要求の全部なり、一部なりを容れて、事端を結ぶことが出來たのである。然るに今後不景氣の時代に爲つた場合に、勞働爭議は如何なる形態で起るであらうか。事業主は經濟上の壓迫に堪へない所から、或は勞働者を解雇するなり、或は賃銀を引下げるなり、夫れ〲の手段を取り、一方に勞働者は之に對抗する目的を以つて、同盟罷業を行ふのであるが、何分事業主の方では經濟社會の現狀に對して、恐怖心を懷き、都合に依つては、一時仕事を閉鎖して、他日の機會を待つても、宜しいと云ふ考を持つて居る時であるから、勞働爭議を機會に、勞働者を解傭するかも知れず、此氣振りが事業主の方に見へ出しては、勞働者も不景氣の折柄、他に轉職の自由を得ない弱味に制せられて、不利なる勞働條件に服從するの外はないやうな狀態に陷るであらう。

然らば今後勞働爭議があつても、勞働者側の敗北に歸する恐れがあり、又爭議が表面に現はれないとしても、夫れは眞の勞資間に於ける協調でなく、勞働者の已むを得ざる屈服であつて其內面には甚だ險惡な潮の流れて居ることを想像しなければならない。

失業問題

中澤臨川

私は本誌三月號に揭げた隨筆の中で、失業問題に言及して置いたところが、不幸にしてかくも速に自分の豫言が的中したことを悲むものである。私がその中で言つた事の要旨は大約からだ――今の經濟界の有樣から察すると、必ず近いうちに恐慌の時代がくる。するとそこに失業問題が起る。失業とは喰ふか喰はぬか、死ぬか生きるかの境の事だから、社會主義などいふ理想の閑問題(?)とは違つて甚だ恐ろしいものである。それは幾萬の餓虎が野に放たれたと同じだ。原首相は、議會の答辯の中で、國民の大多數をなす農民が裕福だから心配な事はないと言つてゐるが、そこが政治者流の短見といふもので、つまり社會心理を知らない者の世迷言だ。なるほど數にしたら農民が多からうが、十町步に一人づゝまかれてゐる人間と、一坪に幾人かづゝつめられてゐる人間とでは騷擾力に霄壤の差がある。社會の安寧といふ見地から言つたら、都會を中心として起る失業問題は餘程留意すべきであると。

果して經濟界の恐慌は來た。そして世間は今更の如く慌てゝ

失業問題の救濟にとりかゝらうとしてゐる。調査の聲ばかりで何一つ實行的準備のなかつた政府も、各市の當局者も、勞資協調會とやらも、眼の廻るほど多忙なことであらうと察せられる。この時に當つての應急策としては、殆んど極まつてゐるやうなもので、誰とて左程の名案のありやう筈はない。唯だ思ひきつて徹底的に社會政策を施すといふよりほかには道はない。然し今の政府の遣り方が、どうも資本家の救濟に急で、失業問題を二次的に取扱はうとしてゐる有樣は、我等の肘に落ちぬことである。

私は日本の現在の有樣をみて、直ちに西班牙の現狀を想起する。參考の爲めだから、少しくあの國の有樣を述べてみよう。我國と西班牙とは最近の境遇がよく似てゐる。御承知の如く戰前の西班牙はどの點から見ても甚だ振はないものであつたが、戰時中中立を持續したお蔭で思はぬ儲けをした。つまり一躍して戰爭成金となつたのである。その當時資本家階級の狂熱的鼻息はすごいほどであつたといはれる。西班牙が再び舊のやうに歐洲の商業界に雄飛する時期が來たのだとさへ想つたらしい。然るに戰後の形勢はかの國にとつて左程好都合でなかつた。事業の勃興に次いで起つた勞働問題は、賃銀値上や何かで一時を糊塗してゐたものゝ戰が濟んで事業界が豫期したほど思はしくないとなると、資本家側でもそろ〳〵遣れ切れなくなつて來たので、此度はあべこべに彼等側が同盟を組んで大仕懸の「ロックアウト」を初めた。その爲めに劇激の失業問題が起る。無智の勞働者は自暴自棄半分に過激の手段にでる。元來が勞働に組織も訓練もない國であるから、過激派の宣傳が横行する、共產主義とサンヂカリズムとが我物顔に勢力を擴張する。といふ有樣で、あの國の現狀は殆んど收拾の道がないと言つていゝ狀態にある。

で、西班牙がかやうな社會的動亂に急墜した原因を尋ねると、

(一)戰時中の思はぬ好景氣の爲めに、資本家は勿論、社會一般が慢心と驕傲に陷つたこと、

(二)幾世紀間か壓迫と無智とを強いられた勞働者が急に高賃金に馴れ、且外面的覺醒の爲めに惡るずれしたところへ、戰後の不景氣が一大痛撃を齎したので、彼等は殆んどやけ半分に暴徒化したこと、

(三)資本家が平生から無智と貧乏と舊教的詐僞と「慈善」の假面とのもとに勞働者を壓迫して、彼等に教化と組合的訓諫とを與へなかつたこと、

などを數へることが能きる。(西班牙の勞働界が今迄どんな有樣でゐたかといふ事を知るには、あの國の小說家イバニエツの二三の著書に如くものはない)。

かやうな西班牙の國情が今から我國に起らうとしてゐる失業問題其他に何ういふ教訓を與へるかを考ふべきである。資本家の慢心と無謀、勞働界の無智と無組織とがいつまでも對抗する結果は、どうしても過激思想の傳播といふ歸着よりほかには道がないので、その結果は餘程恐るべきものである。なほ世間には甚だお目出たい短見者流があつて、この不景氣では喧ましい勞働問題も閉息するだらうとか、恐慌來の爲めに相反目してゐた資本家と勞働者とは呉越同舟の格で相親むだらうとか言ふ者があるが、それは大きな間違である。西班牙の例でも見る如く、一度目ざめた勞働者は不景氣の續くほど益々資本家に怨恨を懷くやうになり、若し組合法の許可其他の方法により彼等の不平を導く溝渠を造つてやらない限り、はては暴動的色彩さへ加味し兼ねぬであらう。私は今の政府が無意義な解散などをする代りに、せめては勞働組合法の制定でも完成して置いてくれたならばと、切に思はぬではない。

それから、失業問題といふと直ちに社會政策を想像し、「慈善(チャリティ)」を聯想するが、今の時勢に於て、乞食に物を與へるやうな慈善が何の效果があるかは疑問である。社會政策にしてが一時的の手段に過ぎない。根本の解決は物質的救濟でなくて精神的解放にある。コールの言つてゐる通り、今の社會の病源は「貧乏」でなくして「奴隷」である。

失業者救濟の具體的方策

早大教授　安部磯雄

實際問題としての失業問題の解決は非常に困難である。第一、今私は實際の統計を得る事が出來ないから、今日起りつゝある財界の動搖の爲めに多くの失業者を出すことだけは考へられるが、それが何の位の程度に迄達するかは明確に豫測することが出來ない。然し兎に角失業問題の起ることは分つて居るから、こゝでは實際問題と云ふよりも學理的に此問題を取扱つて見やうと思ふ。

失業と云ふことは現代の經濟組織に必然に伴ふ弊害であつて、何れの國に於いても此事が問題とならない所はない。實に

此失業問題と云ふ事は昔に無くして近代の經濟組織にのみ附き纒ふ弊害とも云へる。先づ失業問題と云ふ事を考へるに當つて失業の原因から說き始める必要があらう。其原因の一部は殆ど人力の如何ともする能はざる所謂不可抗力に在ることを認めるのである。實例としては、我々の職業の中でも、或季節が來ると何うしても失業しなければならなくなるものがある。建築業に從事するものは、例へば大工とか左官の如き、これは何處に於いても春から夏、秋にかけては、職業があるけれども冬になると減少する傾きがある。此事は自然的にさうなるのであつて人力では如何ともすることが出來ないのである。然しこれらは豫めさうなることが分つて居るのであるから此種の失業に對する用意の道はあるであらう。も一つ不可抗力の原因としては、年齡と云ふことであつて、人が壯年時代を過ぎた或年齡に達した後一旦職業を失ふと、其年齡の點から新に職を得ることが甚だ困難になる。此二つの不可抗的な原因を除いては其他の失業の原因は皆社會的のものであつて、人間の力に依つて如何樣にも救濟することが出來るから、こゝでは私はそこを一番注意して見やうと思ふ。

今社會的の失業の原因を擧げて見るならばその第一は發明と云ふ事である。新しい發明が起れば舊いものは自然に廢れる故に或勞働者は當然職を失ふやうになる。例へば電車が出來れば俥屋が職を失ふ。これは極めて卑近なる例であるけれども他の製造業や商業に於いても斯かる例が屢々ある。次に第二の原因とも見るべきは流行の變化と云ふ事である。流行と云ふ事が其時々に於いて違ふから今迄大に行はれて居たものが或時期が來ると全く捨てゝ顧られなくなる。此流行の變化の爲めにまた少からぬ人々が失業するに至る場合がある。然し此等の失業の原因はそれ程大したものではなく次に擧げる第三の原因が最も重要なるものである。それは財界の恐慌とか不景氣とか云ふ言葉で云はれて居るものであつて、これが今日の經濟組織の缺陷を最もよく表はして居る證據である。此不景氣は時期を定めて來るものであつて、今迄多くの學者の云ふ所では二拾年置きに所謂恐慌が來り、また小く間を置いては拾年間置きに來る。丁度大波の後に小波が來り又大波が來ると云ふ風に不景氣の波が間を置いては押寄せて來るのである。其度に失業者の數も非常に多くなるのであつて、現に此度の經濟界の恐慌に際しても多數の失業者を出す見込である。斯かる場合には失業と云ふことはその事自身が勞働者の責任ではない。彼等の失業が彼等の怠惰とか橫着から來て居るのならば自業自得で止むを得ないけれども、幾ら一生懸命に働いても此不景氣と云ふ社會的原因に依

到底敵し得ないのであるから、私は今日の失業問題の原因を以て單に個人の責任と見ないで廣く社會が責任を負ふべきものと考へるのである。

之を社會問題として觀るも失業問題の結果には恐るべきものがある。失業に依つて生活の元を絕たれることは勞働者にとつて死活問題であるが、一方資本主は契約に依つて勞働者を傭つて居る所から愈々不用となれば勝手にこれを解雇する。烈しい言葉を以て云へば資本主が勞働者を解雇する仕方には丁度維新前の斬捨御免の觀がある。其結果には恐るべきものがあるに違ひないが、然しこれも社會の責任とすれば其救濟方法も又社會が考へなければならない所であつて、勞働者に勝手にしろと云つて捨てゝ置く譯には行かない。何れの文明國に於いても失業問題に對しては國家が自ら設備する所がなければならないが、未だ我國に於いては此問題に關する觀念が充分に強く明かでないから、斯かる問題の起つた際には甚だ心許ないけれども、兎に角社會が失業問題に對しては飽く迄も責任を以て取扱ふだけの覺悟がなければならぬ。

私は今こゝでは失業問題に關する救濟方法に就いては極めて卑近なるものから漸次根本的なものに立入つて述べて見やうと思ふ。先づ第一に應急的なものとしては慈善事業があるが、これは每も失業問題に對してそれが救濟の爲めに行はれて居る。實際今日職業なくして生活に困る者があれば種々なる慈善事業があつて、例へば養育院などでも之等の人々を收容することが出來るのである。英國にて於いては大規模に是等の事業が行はれて居り、救貧院などの設けもある。これは職を得ることが出來なくて食ふに困るものならば誰でも收容してくれる。此救貧院は全國に多くあつて、一年間に二百萬人から三百萬人の人が出入し、失業者多き時には最も繁昌するのである。然しこれも一時的應急策としては好いが、もともと是等の慈善事業は其性質として餘り好ましいものではない。何故ならば慈善事業に依つて彼等を救ふことになるとそれが度重なると彼等の獨立心や名譽心を失はしめるに至る恐れがあるからである。そこで失業者を救濟するには可成慈善事業に依ることを避けて、他の方法として第二に職業紹介事業と云ふものを考へて見やう。之は英國でも廣く行はれて居て、日本でも市で經營して居るものと個人で經營して居るものとあるが中央政府でやるか自治體でやつた方が好いと思ふ。更に此職業紹介事業は一歩を進めて單に職業の紹介に止まらず、時には遠隔の地に在る者には旅費を貸與してやる方法なども講じなければならない。此方法は勞働者の獨立心を害する恐れがないから大に效果があると信ずる。第三

は國家が種々なる事業主として土木事業などを平常は起さないで置いて一旦失業問題の起つた際に着手し始めると云ふ事も一つの方法である。是等の種類のものは尙様々あるであらうが、東京市などでも常に道路が問題になつて居るが、これなども大に金をかけて道路を石道か木道か或はアスファルトを布くかして改良する必要がある。それには八千萬圓から一億圓位の巨費を要するから公金に依つて相當の失業者を救濟することが出來る。此道路改良工事は築港事業などゝ共に一日も早く起工せられるに越したことはないが、差當り待つて待てぬこともないから他日失業問題の起る際に備へて置いて、今日のやうに問題の起つて來た時に於いてそろ／＼着手するのも好い。又大きな事業と思ふものには都會以外の田舍の道路の改良事業がある。今日でも交通機關の發達は啻に都會計りでなく田舍の道路にも盛に自働車を疾驅せしめて居る時であるから、今後田舍の道路を改良して完全なものにすることは益々交通機關を發達せしめる所以であつて、一國の富の經濟の上から云つても重大なる意義を持つて居る。斯くして日本中の道路を改良することは大事業であるから之を十年二十年の繼續事業として失業問題の起る度毎に行ふやうにするのである。其他に適當な事業と思はれるのは昨年あたりから問題になつて居る土地開拓事業であるとか、又別に山林事業などがある。山林事業などは禿山などもあつて五十年、百年の後でなければ利益をあげる事が出來ないから、土地開拓事業と共に國家事業として失業問題の解決に備へれば好いと思ふ。以上擧げたやうな種類の事業は、今差當つての失業問題の救濟策として實際的で直ぐにも實行が出來るのである。然し私が斯う云ふと或人はそれでは之等の事業を起すに要する財源は何處から得たら好いかと云ふかも知れないが、それに對して私は明に答へ得る。前に述べた如く失業者を救濟するにも慈善事業に依ることもあるが、其性質として好ましくない、慈善事業の消極的方法に依るよりも寧ろ積極的に彼等に仕事を與へてやる方策を執つた方が好いことであるし、そして同じく孰れにしても金のかゝることであるから、國民が各自に費用を負擔して國家に租税を拂ふやうにすれば前に云つたやうな事業の財源は容易に得られる譯である。第四の救濟策は最も根本的なものでそれは勞働者をして可成都會以外の土地に住まはせる事である。一般に失業問題の起るのは都會に多くして比較的田舍に少い。此現象は日本計りでなく、人が田舍を捨てゝ働くために都會に多く集まる結果である。都會には工場が多いから從つて都會は多くの勞働者を要するが、然し都會の勞働者が必しも都會に住まなければならぬと云ふ理由はない。田舍に住んで居ても

交通機關を利用すれば、朝都會に出て一日工場に働き夕には再び田舍に歸ることが出來る。人間が都會に計り多く吸集されると云ふことは一國の方針から云つても好いことではなく失業問題を豫想した場合には尙更政府が勞働者を都會以外の土地に住居せしめるやうな政策を執る必要がある。此方法を最も模範的に行つて居るのはベルギーである。ベルギーの農業人口は全人口の四分の一であるが、然らば此四分の一が田舍に住んで居て殘の四分の三が都會に住んで居るのかと云へばさうではない。實際は田舍に住む者が半分以上である。それは都會で働く勞働者の多數は田舍に住んで居て其處から都會に通つて居る事を意味する。彼等は毎日自働者や汽車で、或は輕便鐵道で都會に通ふ。斯くの如く勞働者が多く田舍に住むことになれば當然彼等は小さくとも家を持ち又家の周圍に畑を作る。そして少しく廣い土地を買へば家族も働いて百姓の仕事が出來る。平日は彼等は工場で働くが日曜、祭日の休みには家族と共に鍬を持つのである。斯くして馬鈴薯、其他の野菜類を作つて充分に一年中の自家の食用を得られるし、又羊などを飼へば自家用の乳を取るとも容易である。平常此用意があれば一朝失業するやうなことがあつても其場合には又百姓の仕事があるから失業も恐るゝに足らない。此ベルギーの勞働者の生活は丁度日本の北海道の屯田兵を逆に行つたもので、彼等は平常田を耕して居るがいざ

なれば兵士となつて戰場へも出る。ベルギーの勞働者は平素工場で働いて居るがいざ失業したとなると自分の家へ歸つて畑を耕す。其進退は屯田兵と反對であるが、其精神に至つては同一である。斯くの如くベルギーの勞働者が彼等に取つて都合の好い生活方法を選ぶことが出來るのは、彼等が交通機關を安い賃金で利用することが出來るのに由る。今ベルギーの交通機關の中で汽車の賃金の安い例を擧げれば、勞働者が都會以外の地に在つて三哩の距離の所から都會に通ふとすれば、日曜を除いた六日間の往復の汽車賃金は三拾六錢であつて、一哩に就いて僅か一錢の割合で拂へば好い譯である。又六哩四分の一の距離の所から通ふものとすれば一週間の汽車賃は五拾錢で一哩六厘

毛に當る。十二哩二分の一の距離の所から通ふならば、其處は青森線で云へば丁度浦和の距離に當り、東海道線なら鶴見、川崎に當る所で一週の汽車賃は六拾錢、一哩四厘に當り、又二十五哩の距離から通へば其處は東海道線なら平塚か大船に當り、一週間の汽車賃七拾八錢、一哩に就き二厘六毛の割合となる。更に勞働者に許されたる最大限の距離六拾二哩の所から通へば、其處は丁度青森線なら宇都宮邊に當り、東海道線にすると山北と御殿場の間にある駿河の距離になり、一週間の汽車賃金は一圓二

十四錢で一哩は一厘七毛に當る。此樣に交通機關が安く利用出來れば勞働者は都會にのみ居る必要はないから自然に田舍に住むやうになり、從つて土地も安く買ひ求められるから百姓の仕事をするに足る充分の畑も得られる。ベルギーに行はれて居る此方法は失業問題の根本的解決策として社會問題研究者の留意しなければならない所である。今日、日本も商業國、工業國として發展することは結構であるが、政治家などがベルギーの此方法に鑑みて、失業問題に對して根本的政策を樹立しなければ駄目だと思ふ。

最後に私は失業問題の解決法として根本的であつて同時に大規模なる事業である失業保險を擧げなければならない。失業保險は大別して任意的保險と强制的保險の二種類に分けられる。任意的保險も又二つに分けて、一つは其保險に加入して居る者が自分達でやる相互保險であつて、之は各國の勞働組合に依つて行はれ國家は之に與らない。他の一つは主として都會で行ふもので、瑞西ならベルン、獨逸ならコローン、ライプチヒなどでやるが、然し任意的保險は其範圍が甚だ狹い。强制的保險は世界中で英國に於いてあるのみで、之は國家保險である。此國家保險は獨逸で先鞭を着けたが英國のロイド、ジョージが大藏大臣であつた時に獨逸に行つて研究して來て之を完成した。然もロイド、ジョージは當時獨逸もやらなかつた失業保險を創したのは偉とすべきである。英國に於いて保險事業の法律となつたのは千九百十一年十二月で、その實施は千九百十二年七十五日からであつたが、主に疾病保險が行はれ、最も難かしい業保險は試驗的に六職業、即ち建築、土木、機械、鑄鐵、車製板等の職業に限つて實行して見た。ロイド、ジョージは之依つて英國の勞働者の全部の六分の一は此失業保險の恩惠にする事が出來ると信じた。此失業保險の組織は非常に面白いので、其掛金の仕方は賃金の多少に依つて三つの階級を作りそれに從つたけれども、然も掛金をするのは單に勞働者計りなく傭主も國家も共に掛金をする。而も其割合は賃金の安い働者に對しては多く賃金の高い勞働者に對して少く掛金をするので、各々の勞働者の掛金こそ違ふけれ共、傭主と國家が助をしてくれるから結局皆が同じ掛金をすることになる。斯して男は七片、女は六片の割合で毎週掛金をする。然し乍ら業した時の手當は少く、此法律制定當時では一週間七志貰へが、戰時中は十一志を給されることになつた。そして其上に手當も無制限に貰ふことは出來ないのであつて、一年に十五間を越へることを許されない。所が近頃新聞紙の報ずる所にると今年の三月に開かれた英國議會に於いて失業保險を

るためにそれの改正案が提出された筈である。若し之が通過すると英國の勞働者の全部は此失業保險に加入することになるのであつて其恩惠に浴する者は一千一百四十二萬五千の多數に上る。

斯く考へ來れば日本に於ても失業問題に對しては姑息な手段な執らずに、政府が當面の問題としては救濟策の第三なる土木事業を平常から勞働者の爲めに準備してやるとか、更にもつと根本的なものとしては重要なる第四、及び第五の方法を講ずるのが、勞働者に對しても親切なる遣り方でもあり、失業問題の解決策としても適當なる政策であることを信ずるのである。

失業問題概論

慶大教授　小泉信三

この問題は現に吾々の目前に迫つて居る不景氣の到來に處して如何なる應急施設をなすべきやに就ての意見を募る爲めに課せられたものかも知れないが、私は姑らく問題の範圍を我邦刻下の施設のみに限らず、もつと一般的に失業問題の全體を一通り論じて回答の責をふさがうと思ふ。それは吾々の目前にある失業問題は吾々の逢着する最初の失業問題でも、また最後の失業問題でもなく、既に過去に於て幾度か經驗し、更に將來にても猶ほ遭遇すべき幾多の場合の一たるに過ぎない。從て刻の時事問題に對する答へは自らにして此一般論の中に含まるき筈だと思ふからである。

對失業策の問題は大體二つにして考へることが出來る。第に失業は果して之を防止することが出來るか。若し出來るとればどの程度まで出來るか。第二に失業は之を悉く未然に防することが（出來るとすれば問題はないが）出來ないとすれ其場合に現に失業に陷つた勞働者を如何にして救助すべきか云ふ事である。ところで失業豫防の手段を講ずる爲めには先失業發生の原因を究はめなくてはならぬ。失業の原因として者の列擧するところは屢々多岐に亘ることがあるけれども、の最も重もなるものは事業の季節的繁閑と好景氣不景氣の週的更代とである。そこでこの二つをもう少し注意して觀察し見る必要がある。

先づ第一のものを取つて見ると、季節に依て生産業に繁閑ある事實その者は誰れでも知つて居る事である。農業が播種穫の兩季に忙しくて他の季節には甚だ閑散なる事、建築業の閑が直接天候に依て左右せられ、炭鑛業瓦斯會社の事業が稍間接ながら同じく是に依て左右せらるる事、その他休暇、新年

聖誕祭交際季節等の爲めに需要の方面から事業の繁閑が時を異にし、又は技術上の關係から或季節には作業を繼續することの出來ない爲めに仕事が閑になる幾多の事例は吾々の日常目擊するところである。而して是等の原因に基づく事業の繁閑の爲めに勞働者は其都度多少の程度に於て失業の運命に脅かされることを免かれ得ないのである。そこで是に對して如何なる手段を講ずべきかと云ふに、少くも現在の事實に基づいて觀察すれば、季節に由る事業の繁閑その者は殆ど人力を以て左右することが出來ぬらしく思はれる。從て此點に於ては失業の豫防は殆ど不可能の觀がある。併しもう少し細かに觀察して見ると成程個々の產業に就て見れば季節に依て繁閑の動搖あることは殆ど免れ難き事實であるけれども、或種の事業の閑散を極める季節は必しも同時に凡べての事業の閑散に困しむ季節ではない。閑散を嘆ずる事業と繁忙に困しむ事業とは相並立して居るのである。この事實を觀察して更に細かに調査を試みた結果シドニイエツプは個々の事業に於てこそ、季節的繁忙なるものはあるけれども「社會全體に於ては seasonal slackness なし」と云ふ斷案を下したのである。卽ち英國の產業に就て彼れの記するところに依ると、一年中の各月に於て一方に仕事の忙しい產業があれば、他方に必ず閑な產業があつて忙閑相補ふの狀をなして居ることは左表に記す通りである。

	忙	閑
一月	船渠、炭坑業	鐵鑛、家具製造
二月	製紙業	鉛管取付工
三月・四月	製鋼、織維工業 家具製造業	桶匠
五月・六月	衣服製造 製材業	船渠、炭坑業
七月・八月	鐵道その他避暑轉地に關係ある職業。	製鐵、製鋼、製錫業
八月・九月	農業	製紙、印刷、製本、織維業、烟草工場
十月	製鐵、製鋼業	衣服業
十一月	印刷、製本、煙草工場 金屬工業	造船業
十二月	炭坑、劇場關係者、郵便局員、瓦斯、電燈從業者	大工、機械工、製材工、輛製造工、皮革業、刷毛造者

是に由て觀ると一切の產業全體を通觀すれば勞働に對する要は一年を通じ略ぼ平均して甚しく動搖することがない。勿社會全體に就て見れば seasonal slackness なしとふエツプの樂觀的斷案には異議を挾むものがないのではない

殊に劍橋のピグウの如きは之に反對で、冬季間には一方で勞働に對する需要の增加することがあつても他方に於けるその收縮の程度に及ばないから、社會全體としても勞働市場は閑散となることを避け難いと云つて居る。併し一事業と他の事業との繁閑が正に相殺するか何うかに就ては議論があつても、兎に角一年四季を通じて凡べての事業が同時に忙しく、又同時に閑になる譯でない事は明かである。我邦ではまだ此種の詳しい調査をしたもののある事を聞かないけれども、若し之を試みたならば大體に於て同じ様な結果を見ることだらうと豫想される。兎に角所謂季節的繁閑を原因とする失業なるものは凡べての產業を通じて同時に勞働者が解雇されると云ふ譯ではなくて、一方には失業者があると同時に他方には勞働者の缺乏に困しむものがあると云ふ次第であるから、之に處するの途も亦た一方の過剩を以て他方の缺乏を補ふにあることは了解し易き道理である。具體的に云へば勞働紹介所を設け、又はその相互の連絡を密接にして勞働の需要と供給との疏通を計るのである。何等特別の練習素養を要さないで、時々の必要に應じて容易に一の事業から他の事業に轉々することの出來る無熟練勞働者に就て云へばその失業の甚だ大なる部分は勞働紹介所の發達完備に依て之を防ぐことが出來る。勿論熟練職工にあつては一方の缺を他方の過剩を以て補ふことが出來ないのは勿論であるが、併しエッ等の記すところに依ると英吉利に於ても無熟練勞働者は全勞者の約半數を占めて居ると云ふ事でもあるし、又季節的失業熟練技術を必要とし且つ熟練職工の供給に制限のある場合に餘り著しくない（Webb, Seasonal Trades）と云ふ事でもあから、此種の失業を防止する上に於て勞働紹介所の貢獻し得ところは甚だ大きいと云はなくてはならぬ。

次は是よりも一層困難なる、景氣不景氣の循環に基づく失豫防の問題である。この問題も亦た姑らく二つに分けて論じう。景氣不景氣の循環その者は人力に依て之を左右すること出來るか何うか。景氣不景氣の循環その者は如何ともすべ可らざるものだとして、それから生ずる失業は之を防ぐ事出るか何うかである。この二つの問題を引離して論じるのは少無理かとも思ふが、說明の便宜上姑らく分けて說明して見る

前の季節的繁閑に原因する失業と云ふのは一年中の或季節或產業が閑になることを云ふのであるが、これから論じようするのは有らゆる產業を通じ、一年以上數年に亘つて勞働の給が之に對する需要に超過することである。而してその原因る景氣の循環に就ては古來様々の說明があるけれども、試み近年の學者の說の二三を紹介すれば、ホブソンは不景氣の

を以て一社會の所得の中消費せらるゝ部分と貯蓄せらるゝ部分とが均衡を失して後者が過大となることに歸し、引いて貯蓄せらるべき餘剩の所得の存することを以てその究極の原因として居る。即ち彼れの謂ふところに從ふと、一定の時一定の社會に於ては消費と貯蓄との適當なる割合がある。適當なる割合と云ふのは生産物に對する需要が貯蓄に依て供給せらるゝ生産物量に依て丁度滿たされるやうな割合を稱して謂ふのである。然るに少數なる富裕階級が好景氣の時に收受する無勤勞所得は收得者の消費力以上に上るので勢ひ貯蓄されなければならぬ。さうするとこの過貯蓄(オヴアセエヴイング)は生産資料に投資される。そこで貨物の産出額が消費と比例を失して增加する。價格が下落する。富裕階級の所得が減少する。過度の貯蓄が止んで生産過剩の狀態が平常に復すると云ふ譯である。故にホブソンは曰く「過貯蓄はこの狀態の直接の原因であり、餘剩所得の存在はその究極の原因である」と。從つてホブソンの失業豫防の方策も亦たこの理論から割り出される譯である。即ち不景氣到來の原因は餘剩所得の存在にあるのであるから、不景氣の豫防の爲めにはこの餘剩所得をなくなすか少なくするかして「消費能力を消費せんとする欲求に伴はせ」なければならぬ。即ち彼れが無勤勞所得の課税、賃銀の引上、勞働時間の短縮、病者少年勞働者を勞働市場より排斥すること等を主張する所以である。

然るに失業問題一方の權威たるビエリッジは景氣の循環を以て自由競爭に必然伴ふ現象であるとなし、自由競爭の行はれる限り各生産者は夫れ〴〵販路を擴張しようと努力するの餘り不知不識生産過剩を招致しなければ止まぬ。從て現在の社會組織の下では不景氣の襲來を豫防することは不可能だと諦めて居るのである。

理論家のピグウはまた別の説明を下して居る。彼れは「綜合賃銀基金(ゲートエーヂファンド)」と云ふ言葉を使ふ。「綜合賃銀基金」とは一定の時に於ける一社會の勞働雇傭力(商品で云へば購買力)の謂であるが、この「綜合賃銀基金」の大小は何に由て定まるかと云ふと社會の實所得と事業家が事業の見込に對して抱いて居る樂觀の程度とに依る。然るにこの二つのものゝ變動は自然產物產出量の異動に依て左右される。そこで結局可なり多くの場合に於て景氣は農産物の豐作に依て招致されると云ふ結論になる。彼れは景氣の循環を太陽斑點の増加に依て説明しようとしたジェヴンスの説には多量の眞理が含まれて居る事を認めようとするのである。彼れは又之に附加へて、生産要具(機械その他)の製造に力を集注する國は失業者を出すことが特に甚だしいと云ふ。その理由は第一、綜合賃銀基金の大小と云ふことに

資の增減を意味するのであるが、投資は主として工場、機械、船舶等の生産用具に具體せらるるのであるから、投資の增減は當然最も強く是種のもの丶生産業に響く譯である。第二に生産要具は年々生産せられて年々消費せらるるものでなくて、年々の生産量は全供給量の一部分をなすに過ぎないから之に對する需要の增減は他の貨物に於けるよりも一層強くその生産者に響くと云ふの意である。

而してピグウの對不景氣策も亦た右の理論から演繹されて居る。今その詳しい説明をして居る遑がないので、之を個條書にすると、彼れの景氣の動搖防止策は（一）信用取引を少なくして現金取引の範圍を擴張し、併せて貸借の期間を短縮する事、（二）好景氣の時に於て愼重に、恐慌時に於て大膽なる銀行政策（三）貨幣の購買力を不變にすることに依て好景氣の刺戟を薄弱にする事。（ピグウの意味するところは、好景氣の際物價騰貴の勢が繼續すると、借手は得して貸手は損する。借手は實際に於て物價の騰貴する丈け利子を拂つて資金を借入れる結果になり、從てそれが好景氣の勢を煽ると云ふに在る）。此點に於て彼れは物價指數の增減に應じ、地金の造幣價格を上下することに依て弗の購買力を安定ならしめん事を期した亞米利加のフィッシャアの考案に贊成するものである。今この第三の點は姑らく措き、第二第一の策に對しては實際家の間にも異議はないやうに見える。たゞ彼等は常に好景氣の時には之を忘れ、不景氣の迫るを俟つて之を想起するのでそれが有効に行はれないのである。

次に景氣の循環その者に人力を以て如何ともする事がなと して、さて不景氣襲來に際して能く失業の發生を豫防し得る手段があるか何うかと云ふ問題に移る。失業防止の策としては賃銀率の適度なる引下げ、勞働時間の短縮、植林、開墾事業を起すこと等の方策が提議されて居るが、その中最も注意すべきは千九百三年英吉利救貧法調査委員會少數報告（即ちヱッブ等の意見）が熱心に主張した、國家及び公共團體の支出を勞働市場の景況に應じて伸縮するの案であらう。その大略を記すとから である。

英吉利の勞働組合中失職保險の設備ある組合に屬するもの約七十五萬人に就て見るに、就業繼續者の失業者に對する比率は好景氣の年に於て九割八歩、不景氣の年に於て八割九歩であると云ふ。又別の調査によると二十世紀の最初の十年中、最も好景氣の年に賃銀として支拂はれた金額は七億磅であつて、之が約千六百萬人の勞働者を就業せしめ、最も不景氣の年に於ては六億八千萬磅で、之が千五百九十五萬の勞働者を就業せしめた

と云ふ。之に由て觀ると景氣の最も惡るい年でも勞働者全數の約十六分十五は猶ほ職を失はず、景氣最良の年に於て需要せらるゝ勞働者全數の約百分九十五は猶ほ引續き賃銀の支拂を受けて居る。事實上景氣最良と最惡の年とに於て支拂はるゝ賃銀額の差は千五百萬磅から二千萬磅の間を上下して居るに過ぎないのである。さて一方に中央並に地方政府の支出する經費額を見ると、約一億五千萬磅に上つて居る。即ち右の千五百萬磅―二千萬磅の八乃至十倍に達して居るのである。今ベウレー教授の計算に依れば、此經費總額の百分の三乃至四を好景氣の年に保留して之を不景氣の年に支出するときは優に勞働市場の動搖を防ぐ事が出來ると云ふ。そこでエッブ等は政府が一國に於ける最大の購買者たる地位を利用して、不景氣期が正に始まらうとするときに、平常よりも少しく多くの建築工事を起こし、物資の購入高を增加し、電話電信の工事を急ぐ等の事をするときは政府の註文を受けた工業はその經營を縮少するの必要なく、從て勞働者の解雇を防ぐ事が出來るに違ひないと云ふのである。勿論この年々經費の部分的繰上げ繰下げの影響を直接蒙るものは政府に對する物資の販賣者に限らる可き筈であるが、玆に注意すべきは失職の影響は一産業から他の産業に波及するとである。即ち一産業の雇主並に從業員は同時に他の産業の顧客たる關係たる關係に立つて居るから、一産業に於て失業者を多く出せば、是等の人を顧客とする他の産業も不良の影響を蒙けなければならぬ道理であると同時に、政府の支出の繰上げ繰下げに依て政府と直接取引ある産業に於て能く失業の發生を豫防することが出來るならば、その好影響は他の産業にも波及せずには居ない筈だと彼等は主張する。而して是が今日迄に私の見るところでは最も周到で最も效果あるらしく思はれる失業豫防策である。

　失業は果して之を豫防することが出來るか。或は何うすれば之を豫防することが出來るかの問に對する專門家の解答は大體右に述べたやうなものである。併し、右に述べた諸說の何れを若しくは凡てを採用しても、失業を悉く未然に防ぎ一人の失業者をも出すことなからしめ得るものとは固より信ずることが出來ない。そこで何うしても失業豫防策と共に失業者救濟策を講じなければならないのである。それでは失業者救濟の爲めには如何なる方法があるかと云ふに、今日までのところ失業者救濟の健全なる方法は唯一つしかないやうに思はれる。健全なる方法と云ふのは慈善若しくは貧民救助の形に陷らずして失業者を救濟するの方法と云ふ意味である。而してそれは失業者

ある。失業保險には大凡そ三種がある。任意保險と强制保險と云はゞこの二者の中間に位するゲント（ガン）式保險が是である。ところで任意保險は專ら勞働組合の行ふところであるが、勞働組合の中でも所謂失職手當を給するものは僅かにその一部分に過ぎない許りでなく（英吉利勞働組合に就て見るも、失職手當を給するものは組合中の約半數に過ぎず）勞働組合の失業保險にあつては同じ職業に從事するものが相互に助け合ふのであるが、或一の事業が不振の狀態にあるときは失業又は減收の虞れは勞働組合員全體を脅かす道理であるから、一方に失業手當の支給を求めるものが續出する時期は同時に同じ組合に屬する全員が保險料の醵出に困難を感ずる時である。勞働組合による任意失業保險にはこの根本的な難問がある。併しその困難がないとしても、我邦では勞働組合の發達を官憲が人爲的に妨害して居るから（勞働組合の發達は妨害しない、同盟罷工の煽動誘惑丈けを罰するのだと云ふ辨解は度々聞かされて居るがこの辨解を眞面目に聽いて居る人は尠ないだらう）任意失業保險の發達も亦困難にされて居ると云はなければならぬ。玆で參考に供すべきは私設失業保險に公共團體が補助を給する、所謂ゲント式保險制度である。これはその名の示す通り始め白耳義ゲント市で試みられ爾來和蘭瑞西獨逸佛蘭西丁抹諾威等諸國の政府若しくは地方自治體に依て摸倣せられて、失業保險普及の最も有效な方法と認められて居る。併し失業保險制度の發達上一新紀元を劃したのは一九一一年英國で制定せられた國家的强制失業保險法である。併し此制度も一般に凡べての失業者に適用せられるのではなくて、平生失業者を出すことの最も多い建築業及び機械製作業に屬する數種の工業丈けに先づ適用せられたのである。併し國家的强制失業保險の制度を設けると、失業者は國家と雇主との醵金に依て扶助を受けることになる。そこで問題になるのはその際何うして怠惰者が自ら失業者と稱して保險給與の支給を受けることを防ぐ事が出來るかと云ふ事である。voluntary idleness と involuntary idleness とを何うして見分けるかと云ふのである。これにはどうしても勞働紹介所によ外はない。即ち勞働紹介所の設備を完全にし、之を通じて失業保險の行政を行ふより外はないのである。英吉利の制度に就て見ると失業者は勞働紹介所の帳簿に登錄して就職を求め、即ち勞働意思あることを證明し）而して登錄を繼續する期間內（即ち紹介所が仕事を紹介すること能はざる期間）のみ紹介所を通じて失業給支の支拂を受ける仕組になつて居る。失業豫防の上に於ける勞働紹介所の效能に就ては既に前に記したが、その勞働紹介所は更に失業保險實施の爲めにも頗る重要な役目を帶び

て居るのである。即ちそれ自身の價値の爲めにも、また失業保險實施の準備の爲めにも勞働紹介所の完成を計るのは第一の急務であらう。これが對失業施設の最少限度(ミニマム)であると云つて好い。而してこの一事に就ては學者の間にも實際家の間には全然異議はない事だらうと思ふ。（九、四、二三、）

失業問題と經濟組織の改造

早大教授　北澤新次郎

一

元來世間が好景氣で諸種の産業が益々繁榮に向ひつゝある際には失業問題は割合に世人の注意を惹起しないものである。斯かる時には勞働の需要が多大なるが爲め、勞働者はよしや一時其の職を失つてもすぐ他に職を求めるに少こしの困難を感じない。從つて失業の弊害も極めて尠ない。然し一朝全般の産業界が不況に陷る様になると事業の縮少、又は倒壞が出來て、其の結果失業勞働者が續々と増加し、日頃準備の不足勝な彼等の困憊せる狀態は自然世人の注意を喚起し、此處に於て失業問題なるものが社會の前線に顯はれてくる。蓋し我國は歐洲戰亂の結果諸種製造工業が非常に殷賑を極め、其の結果勞働者の供給の缺乏を來し、到る處で勞働者の爭奪が行はれ、勞働者の生活狀態は幾分向上たかの如く思はれた。然し戰亂の終熄は我國の産業界に一大調整を餘儀なくせしめ、爲めに戰時中過度に膨脹した諸種の産業は一大打擊を受け、産業的不況は頗る顯著なるものがあるであらうと思惟せられたが、我國の實狀は此の豫想を裏切つて、戰後に於ても依然として産業界の好況は持續高調せられて居つた。だが斯かる現象は決して健全なるものではないので、早晚其の逆轉期が來るものである事は確實で、其れが單に時期の問題であつた。而して最近愈々事實となつて顯はれた經濟的動搖はこの反動の端的象徵ではあるまいか。そして此れがよしや急轉直下の勢を以て進展しないとしても、其の必然的波及は我國の産業的不振を誘致する事は免れない處で、爲めに多數の勞働者は失業の憂目に遭遇し、種々の社會的弊害を釀成するに至るは豫睹するに難くない。玆に於て失業に對する確固たる方策を樹立し、之れが適當なる施設を怠らざるは焦眉の急務であると思ふ。

二

一體失業問題は現代の經濟組織に隨伴して必然的に起る弊害で、如何なる產業國にも其の數の差異こそあれ失業者の存在を見ない處はない。而して勞働者が失業する原因は甚しく複雜で、或は勞働者の個人的の事情例へば疾病、惡癖、怠惰に依るものがあるが、失業の大部分は勞働者の制御する事の來ない產業的原因に基くものである事は此問題の研究者の等しく認容する處である。卽ち今日の經濟組織に特有のものである產業界の循環的不振、浮浪勞働(カジユアルレーバー)の集群、勞働爭議、技術並びに經營組織の進步に因る生產過程の變更等は皆失業の機會を多大ならしむるものである。吾人は今此等の諸原因の詳論をする餘白を持たないばかりでなく、其の必要もないと信ずるが、唯此內最も注意を要するは產業界の循環不振と浮浪勞働の集群である。而して產業界の不振は季節的に起るものと週期的に顯はれるものとある。前者は氣候の關係に基くもので多くの產業が季節に依つて繁閑の程度を異にするは世人の能く知る處で、其の結果勞働需要の多寡を來し、失業者を生ずる事が尠くない。例へば農業上に於ては春秋の季節には農業勞働に對する需要が盛であるが、其の他の時期では然からざるが故に失業者が出來る事あるべく、建築業に從事する勞働者は冬季に於ては閑散たらざるを得ない場合が多かるべく、其れに基く失業者の生ずるは當然である。しかし此種の原因に因る失業は左程其の救濟に困難のものでない。なぜなれば季候の關係から起る變動は總べての產業が同時に苦しむものでないので、一年中それ〴〵異つた季節に生ずるものであるから、勞働者をして其の變動に適應せしむる事は敢へて難事でない。更に困難なのは經濟界に週期的に顯はれる產業的不況である。而して此の現象は現代の經濟組織に固有のもので、十九世紀の初頭以來循環的に經濟史を彩色した事は爭はれざる事實である。產業的不況の原因に關しては種々なる解釋があつて未だ定論を見ないが、兎も角一度斯くの如き產業的不振が來襲すると總べての經濟的活動が殆んど相續いて萎縮し、爲めに生產額の減退、貿易の衰頽となり、其の結果は會社工場の勞働者の一部分の解雇、甚しきは其の閉鎖、倒壞に伴ふ多數勞働者の失業を來し、しかも其の期間は季節的變動に因る失業と異なり頗る長期に亙る事がないでもない。實に失業の諸原因中此種の失業は其の及ぼす影響の甚大なるは到底他に其の類を見ない。

次ぎに浮浪勞働者の集群も亦現今の經濟組織の一特徴で、何等特殊の技倆を有せず、過廉なる賃銀で短期の勞働を販賣せん

として、一場所から他場所へと放浪的生活をして徘徊する所謂臨時日傭取は何れの産業國にも存在する處で、此等の浮浪勞働者が失業者の群れを又構成する一大要素である事は論を俟たない。此他前に述べた今日の産業界に必然的に起る勞働爭議の結果勞働者が失業の境遇に陷る場合も決して尠くないであらうし、又器械器具の發明や經營方法の變更による生産過程の進化の結果多くの勞働者が失業者となる事も多い。

三

勞働者が其の個人的の事情に依つて其の職業を失ふは已むを得ないとしても、勞働能力並びに勞働意思を有する勞働者が如何ともする事の出來ない外的の事情の爲めに失職し、自己及其れに倚頼する家族が其の生活資料を得る事に窮迫するは之れを勞働者の罪過なりとする事は出來ない。寧ろ此の責任は社會が負擔すべきものではあるまいか。そして失業の勞働者に及ぼす害惡は唯に物質的影響ばかりではなく、精神的にも多大の結果を齎すものである。即ち失業のために勞働者は單に糊口の道に窮するのみでなく、遂には自暴自棄に陷り、其の結果如何なる暴行爲を爲すかも知れない。故に斯の如きものが存在する事は勞働者の爲めに不利不幸であるのみならず、決して堅實なる社會的發展を致す所以ではない。茲に於てか失業者の救濟が必要であるばかりでなく、出來得べくんば失業の根本的芟除が大切となるのである。

從來失業の減少策として傳統的に主張せられたる方策施設は公共的事業の調整按配、勞働紹介所の設立、失業保險等である。而して此等のものは勿論失業を匡濟する方法として多大の効果ある事は歐米諸國の過去の經驗の證明する處である。殊に失業の大部分の場合は勞働の需要供給の調節、平衡を得ざるが爲めであるから組織の的機關を通じて勞働の需要供給の調節を謀れば無益の努力と苦痛と害惡は相當に回避する事が出來る。獨逸は夙に此點に注意を拂つて獨逸的の綿密さと組織力を應用して勞働紹介所を設立して、此の方面に貢獻した。而し近年英國は非常なる勇斷を以て大規模の國立勞働紹介所制度を實施して非常の意氣で失業の防止に盡力してゐる。然るに我國に於ては今や將に經濟界の動亂と共に失業者の續出せんとする狀態にあるにも係からず、斯かる問題に對しては無爲無能なる爲政者は唯調査に藉口して何等其の實施をなす誠意を示さない事は誠に遺憾である。たまく東京市に於て其の勞働紹介所を二三設立すれば其の經營方法は粗雜、不備却つて、無きにしかざる狀態にある。思ふに勞働問題上の方策、施設に關しては、我國は甚しく有

利の地位にあるもので、歐米諸國に山なす經驗があるのであるから、其れを我國情に適應し、其長を採り、短を捨て機敏に適宜の對策を講ずるは敢へて難事ではない。然るに斯くの如き問題に無理解なる當局は事に當りて常に躊躇逡巡して、唯姑息なる彌縫的手段を採るが爲め、事態は益々紛糾するのである。實に今日我國に於て大規模なる組織的勞働紹介所の設立が來らんとする失業對策上肝要なるは何人も否定する事が出來ないと信ずる。

統一ある組織的勞働紹介所制度と相俟つて失業者救濟上缺くべからざるものは失業保險である。尤も失業保險は其の實施に際して幾多の難關の隨伴するが爲めに其の失業防止策としての價値は從來屢學者間に於て論議せられたものであるが、近年之れに對する研究調査の進捗するに從ひ且つは歐洲各國に於ける種々たる施設の試みられたるに依りて漸次發達し、殊に千九百十一年英國に於ける國民保險法の制定と共に頗る大膽にして進步的なる失業保險の施行さるる事に及んで急速の進步發達を見た。而して英國に於ける大規模の失業保險は其の戰時中にかけ る效果の頗る顯著なるものがあつたが爲め、英國政府では益其の適用實施の範圍を擴大して居るのを見ても、此れが失業者救濟上利益の尠くない事が明白である。我國に於ても早晩此種の保險を施行する必要がある事は論を俟たない。

前述の諸施設が失業の匡濟策として多大の效果あるは否定する事の出來ない事實であるが、此等のものを以てしては失業其ものを根本的に芟除する事は出來ない事も亦事實である。蓋し既に述べたるが如く失業なる現象は現代の經濟組織に固有の必然的の產物であつて、失業の大部分は單に其の一病的象徵に外ならない。故に今日の資本主義的經濟組織自體に失業問題を分泌する病源を含有するもので、其れが派出されたる際に投藥として以上の諸設備が必要なのである。だから弊害多き現代の失業問題を根本的に解決せんと欲せば勢ひ、其の根源に溯つて自由競爭並に私有財產制度上に基礎づかれたる今日の資本主義的經濟組織を改造しなければならない事になる。之れを此の儘にしてをいて失業問題の根本的芟除を謀らんとするは水源を濟めずして末流の濁らざらん事を希望すると同一ではあるまいか。然からば如何に今日の經濟組織の改造をなすべきかは稿を改めて論じたいと思ふが少くとも賃銀奴隷の存在を前提とする現今の獨斷的專制的なる產業的秩序を現狀の儘にして失業問題を解決せんとするは殆んど不可能の事であると信ずる。

天覧台覧

蘇峰德富猪一郎新著

内容一斑贈呈

近世日本國民史 豐臣氏時代 甲篇

上製 菊版クロース 函入六四〇頁 定價金三圓八拾錢 郵税十八錢

織田氏時代は、創業艱難を極め、其の歷史的行程は、宛も峨々たる高山の如く、崎嶇羊腸たり。豐臣氏時代に至りては、則ち沃野千里、春風得意馬蹄輕の觀あり。是れ太閤が其の獨特の天才に伩り、驟かに天下統一の事業を成就し、豪華無比の桃山時代を開きたるが爲め也。然りと雖も、秀吉豈に僥倖漢ならんや、豈に熟柿主義ならんや。彼が拮据、努力、忍耐、決心、剛毅は其の敏活、識度、器局、包容等の天才と相待つて、彼が絶大の運命を開拓したり。本

並製 四六版 六四〇頁 定價金二圓 郵税十二錢

篇は則ち秀吉の開運第一期に屬するものにして、啻に織田氏より豐臣氏に推移せる、時代の大潮流を了得するのみならず、英雄兒秀吉の眞面目を學ぶに於て、餘師あらん。著者の『近世日本國民史』は愈愈膏の乘りつゝあるを覺ゆ。

記註、年表、索引、肖像、戰圖

例によりて、本卷にも亦た、興味ある記註、精確なる時代年表、人物年表、索引、精工なる戰圖肖像等を用ひたり。以て本文に羽翼して、其の光彩を増すに足る。

近世日本國民史 織田氏時代 完成

全三冊

上製各冊 參圓五十錢 税各十八錢

並製各冊 壹圓六十錢 税各十二錢

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社

おれのぺん

オノト萬年筆……無飾 八圓 / 飾付 九圓以上

アルビオン萬年筆……飾付 五圓以上

オノト萬年筆……無飾 貳圓八拾錢

萬年筆用アテナインキ……四拾五錢

送料各八拾錢



神曲

地獄篇

―人間に天國を望む權利は無い。けれども地獄は何うしても無ければならない―

生方敏郎



發端

「世の中は三日見ぬ間の櫻かな、」ほんたうに花の盛りもひとしきりで、新聞の上では昨日は上野、今日は向島、さて其の翌日は飛鳥山といふやうに、花は彼方此方と咲いて廻るが、風來居士はうんと朝寢をして、日差は高く三竿に掛つた子供達の襁褓に照り付ける頃起き上るから、何處へも出掛けない內に日が暮れてしまひ、其の內に花も散つてしまひ、何時しか綠の世界になつた。

或る朝氣の合つた友達から上州館林の躑躅を見に行かないかとの葉書が來た。そこで翌朝珍らしく早起きをした積りで、約束の時間に間に合ふようにと急いで淺草驛へ向つたが、行つて見るともう驛の時間は十二時を廻つて居る。そして友達四人の姿が一人も見えない。此の儘歸るも業腹だし、一人取り殘されて先へ出るのも心細しと思つて待合室を出ると、

先へ行く　同行四人

として自分の名宛てが、白く認めてあるボールドが眼に着いた。そこで矢張り行く事にした。

もう館林へ着くと、日は餘程西へ傾いて居た。田舍臭い猪木舟に乘つて濠河を急がせ、漸く躑躅ケ岡に着いて見ると、花の間には辨當包みの竹の皮や新聞紙やらが散らかつて居る許りで、宛るで園遊會の跡のやうに、汚く殺風景で、人影は全く見えず、泣き度い程寂しい。春の夕暮は秋のそれよりも一層悲しく、涙ぐまれるものだと、私は其の時沁々感じた。歸り

で、麥畑の中を急ぐ内に、日はとつぷりと暮れてしまつた。それだのに私は悪い慾を出して尚ほ茂林寺の文福茶釜をも見たいと思ひ、それを尋ねて行く内に、何う路を踏み違へたものか、唯茫々と廣い野原へ出てしまつた。森も見えなければ、家も見えない。小一時間も狼の通ひさうな草刈り道を、當てもなく歩いて居たが、それさへ、野やら道やらけじめが着かなくなつてしまつた。

私は思案に暮れて、道端へ腰を下ろし、兎も角一服しやうと思つて袂を探ぐると、これはしたり！　マッチばかりあつて煙草がない。仕方がないから唯徒らにマッチだけ擦つて見た、パッと明るくなつたと思ふと、直きに元との闇に還へる。闇に還つた時は、水の底へ沈んだやうな、次ぎのマッチを擦ると、また水面へ浮び上つたやうな氣がする。

ふと後ろの方でガサ〳〵といふ音がした。山犬だらうか？　狼だらうか？　私は驚いて其の方へ向つて身構へをした。

「火を呉れないか？先つきから提燈の灯が消えて困つて居る。」

と其の者が云つた。私もそれが人間である事に安心して、いや、安心といふ以上に非常に喜んで、マッチを擦つて、彼の提燈に火を移した。マッチを擦つた時、私は彼の眼玉がギョロついて居るのを見た。提燈を持つて立上つた彼は、雲突くばかりの大男であつた。

私は元來人間は大嫌ひである。他人は他人のやうに嫌やだし親類は親類のやうに、他人以上に嫌やだ。それだのに此の闇の中で人間を見た時、私は非常に嬉しくて、滅多に經驗した事のないほどの嬉しさを感じた。だが、それは彼が人間である事を知つた刹那だけで、もうその顔と姿とを見ると、恐ろしくなつた。彼は强盗であるかも知れない。暫くして

「君は此處に何して居たのだ。」

と云ふ彼の聲は大きいが、何處やら親切氣が含まれて居た。

「道に迷つて途方に暮れて居たんです。」

「さうか、そして君は一體何方へ行かうと思つて居るんだ。」

「ステーションの方へ出たいと思つて居るんです。早く東京へ歸りたいんですから。」

「それぢや飛んでもない處へ來てしまつた譯だ。一體なんだつてこんな處へ迷ひ込んだのだ。」

「友達に誘はれて館林の躑躅を見に來たんです。」

「でも、君一人限ぢやないか。尤もこれから先きは誰でも一人で來る處で、團隊見物と云ふ譯にや行かない。君は旅行が好きかい？　まあ歩きながら話さう。」

「旅行は大好きです。此の春は上方の方へ行つて來ました。去

年の秋は箱根へ行つてゐました。今年の夏は奥の細道でも歩いて見たいと思つて居ます。」

「うん、そいつは話せる。實は俺も旅行好きで、北は奥州から西は博多長崎まで歩いたもんだ。京都は其の後餘程樣子が變つたと聞いたが、さうかね？」

「私は古いところの事は知りませんが、こなひだ行つて見ますと、加茂川の眞中を電車がガラ〳〵驅け廻つて、矢釜しいとも五月蠅さいともお話にはなりません。千鳥も何にも驚いて、何處かへ逃げてしまひました。」

「大阪は何うだね？」

「大阪はえらい大都會になりました。天下の富を悉く集めて、成金が榮華を誇つて居ます。其の内に勞働問題が起つて、甘い夢が破るでせう。」

彼は太い煙管に煙草を塡めて、提燈の火を移して、すぱ〳〵と吸つた。私も吸ひたくて腹の蟲がむず〳〵して來た。そこで一服貰つて吸ひ、一つの煙管を代る代る遣り取りして、闇の道を歩いた。だが何の方角へ連れて行かれる事だらう。私は煙草を吸つて心が落ち着くと、自分の現在居る位置が知りたくなつた。

「一體此處は何處です？」

「これは地獄の一丁目さ！」

と大男は平氣で云つた。

「脅かしちやいけません。こんな眞暗な處でそんな恐ろしい事を聞かされちや、私のやうな氣の弱い者は卒倒してしまひます。」

「さうすりや再び人間社會へ逆戻りする譯だ。昔から死ぬと云ふ奴に死んだ例しがなし、恐ろしいから卒倒すると云ふ男が卒倒する氣遣ひはない。まあ地獄つてそんなに、見た事のない者が想像するほど恐ろしいものでもない。來た序でに見て置いたらいゝだらう。宿屋の設備もあるし、今では飛行機といふ便利なものもある。餘程邊鄙な處へ行つても、地獄には汽車や電車は通つて居るんだ。もう少し行くと夜が明ける。」

もうかうなつては引き返しようもない。恐怖が私を取り圍んで、何方へも遁らずに、何うしても其の大男の後へ付いて行かねばならないやうにした。

二三里も來たと思ふ頃、黄金の虹を空へ掛けたやうに、眼に輝く大きな門が見えて來た。それには「黄金地獄」の四字が丁度廻轉廣告のやうに現はれて居た。

一　黄金地獄

「こりや冗談ぢやない。矢張り私は地獄へ連れて來られたのだ。」

さう思ひつゝ私は大男の後に付いて其の門を這入つた。すると右側の小屋から、口が耳まで裂けた、眼の飛び出た、蒼い顏の怪物で、身裝りは守衛のやうなのが、私を遮ぎつて、

「こら、こら、貴樣見せ金があるか？」

と叫んだ。

「少しは有ります。十圓位なら。」

「馬鹿！　十圓位で何うする。そんな奴は極樂へ行け。黄金地獄へ這入るには、百萬圓以上の見せ金が要るぞ。」

　これではまるで移民が亞米利加へ着いた時のやうだ。すると案内人の大男が、

「なあに鳥渡見物に連れて來たのだ。黄金地獄へ移住するといふ譯ぢやない。」

　此の大男は餘程顏が賣れて居ると見えて、門番は何も云はずに引込んだ。

　だん／＼夜が明けて來た。矢張り廣い野原だ。これでも昔は人の住んだ村であつたのだらうと思はれるやうな壞れ掛かゝつた百姓家やら、荒れた田や畑が見渡される。其の中を寂しさうに一筋の川が流れて居るが、河原の石は赭茶けて、何等の美しさも無い。遠くに山が見えるが、山の樹は立ち枯れで、青葉といふものが少しも無い。田畑の跡にも草一つ生えては居ない。唯其の形があるだけだ。私は此の時ふと何處やらで前にこんな處を見た事があるやうな氣がした。熟く／＼考へて見ると、それは渡瀨川の川岸の村だ。野州足尾から流れ出て、上州山田郡の一端を迂回し、末は野州と下總の方へ流れて、利根川へ注川だ。生命の影の全く跡を絕つた光景だ。

「何うです、此處は渡瀨川に似て居るやうですね。」

　私がさう云ふと大男は、

「君もさう思ふか？　此の憐れな荒凉たる有樣は全く彼れに酷く似て居るな。誰も彼の川の岸邊に立つて、荒廢した村々を見るならば、淚を流さずには居られないだらう。だが、何うし君は彼の邊の地理を知つて居る？」

「私は上州生れですもの。」

「うんさうか。俺も上州だ。」

「へえ、上州ですか、それはお懐しい。上州は何の邊で

「新田郡さ。名前は彥九郎と云ふのだ。だからこれから俺の事は彥さんと呼ぶがいゝ。あなたなんて堅苦しい事は廢せ。」

　暫く行く内に、後の方でドタバタと大きな石でも投げ付けるやうな音がした。振り向いて見ると、これは危險！　三角や四角な、重さ一貫目もありさうな銅の塊りが、雹のやうに、天からバラ／＼降つて居るのだ。青天の霹靂どころの騷

ぢやない。私は縮み上つてしまひ、足が竦んで、逃げ出す事も出來なかつた。彥さんは自分の冠つて居る菅笠を取つて私の頭へ乘せた。

「これは魔除けの菅笠だ。濟厥の笠といふのだ。これさへあれば黄金地獄で難に遭ふ事はない。」

「でも、あなたは何ゥなんです？」

「俺の頭は鐵石だ。魔性の方が避けて通る。」

併し菅笠位では何んだか危なかしくつて、私は少しも安心出來なかつたが、仕合せと銅の雹は、私には中らなかつた。

急いで行く內に、小さい小屋が眼に這入つた。初め小屋だと思つたのが、近づくに從つてそれは大厦高樓となつた。先づ彼處へ行つて一休みしようと、二人は急いだ。

如何にもそれは百萬長者、否、千萬長者でなければ住む事の出來ないやうな立派な屋敷であつた。併し不思議な事には、門を這入つても咎める犬も無く、屋敷は廣いが森閑として人影が無い。餘り走つたので咽喉が渴くから茶を貰ひたいと思ひ、

「こんちは。誰も居りませんか？　お留守ですか？」

と私が何度も呼ぶと、奥から幽靈のやうな女が出て來た。着物はぴか／＼する立派なのを着て居るが、顏は蒼褪め、髮の毛は脫け、手頸は餓鬼のやうに瘠せて居た。

「申兼ねますが、湯でも茶でも一杯貰へないでせうか？」

私がさう云ふと、女は

「差上げない譯ではありませんが、此の邊の井戶でも河でも銹毒がありまして、旅人がそれを召し上がれば、血を吐いて死んでしまひますから差上げられません。」

「でもあなたは生きて居るぢやありませんか？」

「ほんの吸呼が通つて居るだけのこと事で御座います。」

とさめ／＼と泣いた。幽靈のやうでも何處やら艶めかしい所がある。彥さんは

「わしが消毒をしてやるから、水を持つて來なさい。」

と云ひつゝ彼は印籠から、丸藥を一粒出した。

「これは慈善丸と云ふのだ。これを吞めば毒は消える。」

私は尙ほも二三杯水を所望した。

「お宅はこんなに廣いのに、他には誰も居なさらないのですか？　それにあなたは病人のやうですね。」

すると彼女は、淚をはら／＼と流して、

「何といふ因果でせう。私達七人の女は此家の主人の妾で御座いまして、奥さんは嫉妬のあまり此の裏の古河へ身を投げて新くなられました。身投も出來ずに生中此家に居る私達こそほんたうに不仕合です。金も銅もあの通り庭にも奥座敷にも、中

積んでありますけれど、喰べ物が無くつて金ばかり有つても、それが何になりませう？　主人は若旦那と今日も畑へ出て居りますが、いくら耕しても、穀物は取れないのです。此の山の上の熔鑛爐から噴き出す煙の爲めに、樹も草も皆枯らされてしまふのです。」

「それではあなたがたは何を喰べて居るのです？」

「山の上に居る坑夫蛇から絞つた膏と血とを舐めて、僅かに露命を繋いで居ります。」

私達がこの悲慘な陰欝な家を辭する頃には、銅の雹は止んで居た。此家から五六丁も田圃道を行くと、爪先上りになつて、先き見えた立ち枯れの樹のある山の麓になる。何處からともなく人の呻く聲がするから、怪しみつゝ其の方へ近寄ると、蛇に足を絡まれ、頭から赤黑い血を流して丁髷の大きな鼻の先の曲つた爺さんが倒れて居た。先きの銅の雹に打たれたものらしい。

「お爺さん、しつかりしなさい。どうしたんです？」

と私が聲を掛けると、爺さんは纔かに眼を開けて、

「うん苦しい、苦しい。先きの雹に打たれて倒れたものだから、弱り目に祟り目で、こんな蛇に惱ませられる。」

見るとその蛇は、全體は青黑く、眼ばかり光つた、併しなかなか逞しい蛇だ。その邊りの土の中の穴から、鎌首を擡げて爺さんの方へ向つて來る。常に土に穴を穿つて住む爲めに、こなに體が青いのだらう。

私が爺さんを憐んで居る間に、彦さんの姿が見えなくなつた。驚いて四方を見廻すと、もうずつと高い所へ行つて居た。私漸く息を切つて追付いた。彦さんは

「捨てゝ置け、捨てゝ置け。あゝいふものを見て一々憐れみんで居ては、地獄の旅行は覺束ない。まだこの先き、あんなはいくらもある。」

二　勞働天國

彦九郎さんの後に付いて私は嶮しい山を登つた。道などは論無い。木の根と岩角に足を掛けたり、手を掛けたりして登つた。

「こんなとこを登らないでも、何處か道は無いのですか？」

「地獄から地獄へ往く道は無い事もないが、續けざまに地獄かりを見せると、君は神經衰弱を起してしまふだらう。そにまだ朝飯も喰べてないし、昨夜は夜も夜通し歩いたぢやなか。この上の極樂へ上つて、鳥渡一憩みして氣を拔かうと思のさ。」

「へえ、この上に極樂があるんですか？　今此處が地獄なのに

直ぐその傍に天國があるんですか？」

「さうさ。天國と地獄の距離ほど近いものは無いんだ。それはお互に、犬牙錯綜して居るんだ。地獄の壁一重隣りは極樂だよ。」

「あんまり壁一重でもない。近いにしても骨が折れますね。」

「弱い音を吹くな。今御馳走を喰べさせてやるから。」

御馳走といふ聲に勵まされて、私は力を限りに登つた。少し樂になつたと思ふと、もう足許には、菫だの蒲公英だのが咲いて居る。土筆は伸びて青い杉菜になつて居る。五行の花も咲いて居る。向うに小さなバラツクが見えた。それこそひどい建物だ。近寄つて見ると、それは掘立小屋で、一つの棟が五軒に分れ、その棟がいくつも繋がつて居る。周圍からは板を打付けただけのもので、壁も何もない。入口の日向で赤坊を背負つた七八つの女の子と、五つ位の男の兒と遊んで居た。二人共頬は林檎のやうに紅く、男の兒の方の鼻の下には、青洟が胡座を搔いて居る。彥さんはお馴染であると見えて、

「ちやんは居るか？」

と訊いた。女の子は

「ちやんは芋堀りに行つたけれど、もう戾つて來るだんべえ。」

「おツかあは？」

「おツかあは晝寢して居るよ。」

彥さんの大きな聲を聞いて眼が覺めたと見えて、髮を椎尻卷きにした太ツちようのおツかあなるものが出て來た。そして

「まあ先生ですか、何うぞ此方へ。」

と中へ案內した。案內すると云ふと大袈裟だがこの家は六疊と四疊半の二間限りで、四疊半の方には疊も敷いてない。見廻したところ、押入れといふものが一つもないので、食器やら何やら、皆その板の間に並べてある。天井を見ると、杉の皮が一枚渡してあるだけだ。私は呆れて

「彥さん、何でこれが天國なんです？、あんまりお粗末な天國ぢやありませんか？」

すると彥さんは笑つて、

「これが天國だよ。だが決してお粗末なものぢやないんだ。まアこの疊へ腰をかけて見給へ。何うだ、この柔らかさはまるで羽根蒲團のやうだらう。」

彥さんが尻を下すから、私もその疊へ尻を衝いた。すると全くクツシヨンのやうにぽこんと中まで落ちて行きさうた。彥さんは材目板の節穴を指して、

「あすこに節穴があるだらう。あれがなかなか面白いものなんだ。」

「冬になつたらあの穴から風が吹きこんで、さぞ寒い事でせうね。」

「さうでない。風が吹く時あすこへ耳を當てると、天人の奏でる音樂の音が聞えて來る。又あすこへ眼を當ると、何處でも自分の思ふ通りの、美しい山水が見えるのだ。まア試みにやつて見るがいゝ。松島でも、橋立でも、ナイヤガラの瀧でも、何でも見える。」

私はその節穴を覗いて見た。すると、上野の山は今花盛りで、目も醒めるやうだ。池の畔の柳は綠だ。成程これは面白い節穴もあつたものだ。今度は耳を當てると、幽谷で啼く鶯の唄が聞える。

お神さんは、子供の背負つて居る赤ン坊を下して、大きな乳房を含ませながら、その板の間で汚い土瓶から、番茶を汲んで出した。それがまた何とも云へない旨さだ。

「見たところはこんな汚い小屋でも、この部屋の空氣は、冬寒くなると同時に暖くなる。夏は却つて冷しくなるのだ。」

彥さんがいろ〳〵このお粗末な天國の效果を述べ立てゝ居ると、表で、

「やあ、ちやんが歸つて來た。」

と喜ぶ子供等の聲が聞えた。

ちやんは笊へ一杯馬鈴薯のやうなものを入れて、持つて

そして彥九郎さんを見て、

「やア、先生ですか？」

「まだ俺達は朝めしを喰べてないんだが、この薯でも振舞つて吳れないか？」

「お易い事です。さア、たんと喰べて下さい。」

と、洗ひもしない土だらけの薯を出した。彥さんはそれを取つて、土の着いたまゝムシヤ〳〵喰べて、私にも喰べろと云つた。併し、土だらけの生薯に向つて、私は手を出す氣がしない。私は中學生の時分、修業旅行に出て、妙義から榛名へ越さうとして、風切峠で道に迷ひ、三ノ倉の百姓家で稗團子を御馳走になつた事があるが、この生薯の御馳走はそれよりひどい。彥さんは

「遠慮する事はない。こんなものは天國にはいくらもあるんだ

と云つた。冗談ぢやない。天國へまで行かないつたつて、生薯位宅へ來る八百屋の八公の店にも轉がつて居る。又彥さんは、

「まア喰べて見な、君が泥だと思ふのは、こりやア砂糖だよ。鳥渡も汚い事はない。」

と彥さんこそ遠慮もなく、またあとを頰張つた。私もオヅ〳〵一口喰べて見ると、生薯と思ひきや、それはドウナッツのやうなお旨しい麵麭で、中には私の好きなクリームが入つて居る。立

と思つたのは、砂糖をまぶしたのであつた。私達は苺酒のやうな味のする番茶を飲みながら、この麺麭菓を鱈腹喰べた。彦さんは、

「何うだ、もう出掛けようか？」

とお禮も云はずに、ノコ／＼小屋を出てしまつた。

「あの人達は何んです？」

「あれは天國の坑夫共だ。丁度腹の減る位の勞働をして、あゝいふ旨いものを喰べて居るんだ。あの人達になると、强制的に勞働させられるのではないから、勞働と遊戯は同一なんだ。此處には資本家もなければ、煽動家もないんだ。從つてストライキやサボタージュの必要もない。」

三　電車地獄

山を下つて、暫く平坦な路へ出た。前にも後にも旅人が夥しく通る。男も女も、子供も年寄も、ソロ／＼行く。四五十人の團隊になつて行くのもある。

「何んです？　天國にもお祭でもあるんですか？　大變な人ですね。」

と私が訊くと、彦さんは、

「なアに、近頃流行性感冒のお蔭で、あんなに一どきにドカ／＼とやつて來るんだ。一體天國や地獄は、誰も一人宛來るところであつて、團隊見物は許されて居ないんだが、此頃は流感の爲めにあの通りなんだ。これでは電車もさぞ込む事だらう。一體この路はどの地獄へも、どの極樂へも行かれる路だから、この通り大變な人なんだ。」

急いで行く内に電車の乘り場があつた。ボギー車も通るが、小さいのも通る。それが何れも滿員鈴生りの形で、全く東京の電車と殆ど變りはない。お客の苦しいのも一通りではあるまいが、車掌の骨折りも、さこそと思ひやられる。停留場には五六十人の人が立つて待つて居る。

「間誤々々して居ると乘れないぜ。」

「こんな時は義理も人情も云つちや居られない。」

なぞと云ふ聲が聞える。見るとそれは洋服細民だ。地獄へ來るにまで腰辨を持つて居なくもよささうなものだが、多年の習慣は仕方がないと見えて、辨當箱をぶら下げて居る。

私達は五つ六つ電車をやり過して、少し空いた電車を見計らつて乘つた積りだつたが、後から後から乘手があるので、矢張り壽司詰めの滿員以上になつてしまつた。足の置き場がないので、體が浮いて居る。それだから揺れるたんびに倒れさうになつて人の足を踏む。人いきれで臭さは臭さし、堪らない。その人込

を分けて、白髮頭のお爺さんが、
「鳥渡御免なさい、通して下さい、切符をいりますから。」
と云ひながら、通り抜けようとする。勞働天國への乘換へを下さいとか、新思想天國へは何處で乘換へるんですとか、代議士地獄の乘換へを與れとか云ふ聲が、周り中から一度に起る。
「淫賣地獄の乘換を頂戴！ あら、人の云ふのを聞かずに行つてしまやがつた。あんな野暮な爺いの車掌を、何んだつて使ふんだらう。畜生！ 耄碌！ 野暮爺い！」
と潰し島田に結つた、仇つぽい姐さんが毒付いて居る。
「さう間に合ふものか？ この通りの人込みを、たつた一人で切符を切つて居るんだもの。」
と商人體の老人が同情する。私も全く車掌は可哀想だなアと思ひながら、切符切りに來たその顏を見ると、失禮ながら東京市長田尻稻次郎さんにそつくりだ。私はよつぽど、
「あなたは田尻博士ぢやありませんか？ 何うしてこんな所へ來て、車掌なんか仕て居るのです？」
と云はうとしたが、眞逆と思つて、それは云はなかつた。だが、彥さんは前からの馴染と見えて、
「車掌さん、毎日御苦勞だね。まア／＼何時までかう込む譯でもあるまいが。」
と慰めると、老車掌は額の汗を拭いて、
「全くこれぢややり切れません。車掌をもつと殖やして、車掌を優待して與れるのでなくては、堪つたものぢやありません。お客には剣突を喰はされるし、體はへと／＼に疲れるし、だから誰も皆、電車地獄に勤める位なら、どんな辛い地獄でも、外へ移して貰ひたいと零して居ないものはありません。」
すると彥さんは、
「さうさ、君なんかはそんなに惡い事を爲たといふ譯でもないんだから、その內に低い所でも天國の方へ移されるだらう。もう暫く辛抱するがいゝ。君が後悔したのを見れば、ぢき天國へやられるよ。」
と慰めた。すると、市長によく肖た車掌さんは、さめ／＼泣いて、
「それに私は、朝は四時頃から電車に乘つて、夕方までの時もあれば、夜一時まで勤めて、宅へ歸つて二時になる事もあるのです。それで一日僅か十二錢の食料しか宛てがはれて居ないのですから、鳩豆と梅干ばかり喰べて居るより外はないので、此頃は餘程營養不良になつたと見えて、かうして居ても眼が眩みさうです。」
すると彥さんはカラ／＼と豪傑笑ひをして、

「だから云はないこつちやない。矢張り日本人は米を喰はなくつちや働けないと云ふのに、君は鳩豆と梅干さへ喰べて居れば澤山だなぞと、あんまり豪傑らしい事を云つたものだから、矢張りさういふ運命に陥ちたんだらう、車夫や勞働者は體を剛しく使ふから、人並より旨いものを喰べないでは、全く體が弱つてしまうさ。十二錢の食料で何うして命が續くものかね。」

すると、車掌は嘆息して、

「今となつて勞働者の苦勞が分りました。娑婆に居る時のやうに、博士の肩書を持ち、大きな屋敷に住んで、何不自由なく暮して居た頃は、米にも飽きて、鳩豆が喰ふのが旨く、珍味佳肴は欲しければ何時でも買へると思ふものだから、却つて梅干が珍らしく、御馳走のやうに思はれもしたのです。唯の車掌と成下つて見れば、矢張り旨いものも喰ひたし、勞働時間も短かくして貰ひたし、一日十二錢の食費では、働く張合もなくなる譯です。その上私はお仕着せもなく、ほんたうに着たなりですから、もう〳〵虱が湧いて體中がむず痒く、こんな苦しい事はありません。何と云つても着た切り雀では、洗濯をする事も出來ず、ほんたうに困つてしまひます。」

するとまた彥さんは、持ち前の豪傑笑ひをして、

「王莽は虱を捫つて天下を論じたといふから、豪傑は宜しく虱を養殖すべしさ。併し君のやうに豪傑の柄でもない男には、着たなりでは少々可哀想だね。」

「そのうち局長さんに逢つたら、お仕着せが貰へるやうに、頼んで置いて下さいませんか？」

「ハツハツハ、着たなりには餘程閉口したと見えるな。併しまア時の來るまで苦しむがいゝ。苦しまねば罪は脫けない。」

車掌は金切聲を出して、

「鑵詰地獄でお降りのお方はありませんか？　お聲が無ければ止めません。」

「降りるよ、降りるよ。」

と彥さんが云つた。

四　鑵詰地獄

鑵詰地獄へ行く路はなか〳〵急な勾配であつた。その上满洲の道で見るやうな、赤壁ばかりの泥濘み道で、ともすれば足を取られて倒れさうになる。さんざ苦しんで、漸く村へ辿り着くと、右側に大きな倉が見える。だが倉だけ有つて家が無い。母屋も納屋も、火事にでも遭つて燒けてしまつたものらしい。

「馬鹿に大きな倉が立つて居ますね。」

「さうさ、あの倉も三四千萬圓は懸つて居るだらう。何にしる

餘程の金持ちでなければ建てる事の出來ない大倉だ。あの中に無邪氣な面白い男が住んで居るから、君に紹介しよう。」

丁度私達が行つた時、食事中と見えて、主人は膳に向つて居た。私達の姿を見て、膳を片付けようとしたが、彦さんは手を振つて、

「いや、いや、遠慮する事はない、食事を濟ませてしまひなさい。」

「では御免蒙つて喰べやせう。此頃は歯が弱くなりやして、何うも食事に手間が取れます。誠に困つたものでげす。」

何を喰べて居るかと思つて膳の上を見ると、鰻の蒲燒と傍に何か牛肉のやうなのが、鑵詰と見えて、鑵のまゝ乘つて居る。鰻は餘程好物と見えて、忽ちぺろ〳〵と喰べてしまつたが、牛肉の方は嫌ひと見えて、喰べ澁つて居た。それにも拘はらず箸で摘み上げた。けれども鰻を喰べて居る時の嬉しさうな顔は何處へやら消え失せて、顔は憂ひに滿ち、唇は蒼くなり、力無さ

さうに牛肉を口へやつた。

「彦さん、この人は餘程牛肉が嫌ひのやうですが、嫌ひなものを何んだつて喰べるのでせう?」

私がさう訊くと、彦さんが答へる前に、主人は涙をぼろ〳〵と零し、

「聞いておくんなさい。私は此事を會ふ人毎に懺悔しさへすば幾分かづゝ罪は消滅するのです。何を隱しませう、私の膳上つて居る牛肉の鑵詰は、實は石ころの鑵詰なのです。けれも私は何うしてもこれを毎日一鑵づゝ喰べなければ、罪が消しないのです。それは何ういふ譯とお尋ねになるまでも無く私から申上げませう。」

と云ひつゝ彼は、その石ころの牛肉を歯でばり〳〵噛まうとたが、歯の根から血がたら〳〵と出た。けれども彼は、眼を黑させて、その石の一つを嚥み下した。そして言葉を繼いで語つた。

「我國が或る大國と大戰爭をする事になり、國民は擧國一致若い者は血税を拂ひ、國に止まる者は、無け無しの財布の底を叩いて軍費を集めました。そんな時私は生來の貪婪心から事泥的の根性を起し、當局へ賄賂を使つて御用商人となり、國家の爲めに氷の野原で血を流す兵隊の食糧品として納むべき牛

肉の鑵詰へ、牛を詰めずに石ころを詰めて、ぼろい儲けをしたの

です。せめて蛇か蛙の肉でも詰めてやれば、まだしもよかつたのに、蛇よりも石ころの方が安いものですから、石ころにしたのは、私の一生の失策でした。その罪に依り、かうして此處で毎日一鑵づゝの石ころを喰べねばならぬ運命に落ちたのです。

御覽の通り、倉でこそあれ、金殿玉樓にも優るほどの、善美を盡くした家に住み、この通り綺羅錦繡を家族の者に纏はせて、贅澤の限りを盡くし、悴は謠を、私は一中節を心の慰めにし、人に羨まれるやうな生活はして居ますが、三度の食事に石を喰べなければならぬとは、何といふ情ない事でせう。」

と語り終つて彼はさめ〴〵と泣いた。

顏を見れば、そんなに惡黨らしい老爺でもなし、その泣く聲が如何にも哀れなので、私は可哀想でならなくなつた。

「君は兵隊さんに石の鑵詰を送つたのですね。しかし、兵隊さんは、決してそれを喰べやしなかつたでせう。それだけの事なら、後からその賠償をすれば、罪の大半は消え相なものを、永久に鑵詰地獄に墮されてゐるといふのは、餘りにお氣の毒な次第です。」

すると、彼は、また一層苦しげに

「いや〳〵私の犯した罪はそんな纔かなことではないのです。それは表面世間へ知れ亘つた罪惡で、もつと〳〵その數千倍も數萬倍も、隱れた罪が有るのです。私は初め下谷上野の八百屋から身を起したものですが、元來大膽で機敏であつたのが却つて此身に禍ひし、御用商人として袖の下を使ひ奇利を博するの面白さを覺えてから、賄賂を贈るに巧妙なる番頭を集め、官邊を腐敗させたことは、何の位だか知れません。その罪かくの如く深きにも拘らず、遂に法網を免れた上に家には巨萬の富を積んだのです。こゝへ落ちて、こんな苦しい年月を送る位なら、矢張元の八百屋で天秤棒をかついで一生を終つた方が、何の位幸福であつたか知れなかつたものを！　あゝ、あツ、苦しい」

と悲しみ呻く。

彥さんは、相變らず哄笑して

「まあ、〳〵、そんなに愚痴を言ふな。娑婆にゐる時は、さんざいゝ事をして來たんだから、その位のことは我慢するさ。元來、お前は惡人ぢやあない。唯、元が無學下賤で、越後人の惡い方面をチョツト發揮したといふだけたんだ。後悔すりやあ、また天國へ移住を命ぜられる日が來ないとも限らない」

と慰めた。

主人は淚をこぼして

「有がたう存じます。さて、之から私は鋸山へ登らねばならぬ時間が參りましたから、之で失禮いたします」

と云つた。彥さんは

「その鋸山へ俺達も登るんだ」

「何故です。あんなところへ誰も登れたものぢやありません」

「あツハハハハ。俺の脚は鋏石だ。何も危險なことはない。風

來は俺の背に負はれなさい。」

五　鋸梯地獄

大倉住の主人は困た相な兵隊靴を穿き私達の後に從つた。赤壁のねばねばした道を數丁行くと、もう山の根だ。だが、之は山といふよりも懸崖絶壁で、到底人間の登り得るものではない。義經は鹿も四足馬も四足とやら警句を吐いて、鵯越(ひよどり)を下りたといふが、下りるなら絶壁も何うにかならう。登るには全く手がかりがない。よく見ると、そこには鮫の齒のやうな鋸の梯子が掛つてゐる。彦さんは、私を負ふて、何の苦もなく梯子を登つた。まるで猿の木登りの樣だ。下を見ると眼もくるめく。

二百級ほど梯子を登つたところで、一寸息をつく位の平地が有つた。私達はそこで一服しつゝ、大倉住の主人が來るのを待つてゐた。しばらくしてから漸く登つて來た主人の顏を見ると、眞青に變り、腦貧血を起した人の樣だつた。そればかりでなく足の蹠(うら)を傷つけたと見えて、歩く度に血の赤い足痕がつく。

「何うしたのです？　あなたの足は？ひどいお怪我をされた樣ですね」

主人は又も落涙して

「私のはいてゐる兵隊靴の裏は、皆さんが市内でお求めになる靴屋の靴の樣に、鋲(びやう)で止めたものではないのです。これは糊(のり)で貼り着けたものに過ぎないのです。これで赤土の泥濘道を歩くと、裏は一枚〱剝げてしまふのですから、此鋸梯子を登り初める頃は、私の靴の裏底(そこ)は全く剝げてしまひ、靴は有れども洗足(はだし)も同樣なのです。之も私の會社で製造した兵隊靴です。賄賂でも使はなければ、誰もこんな靴を買はれるお客さまは有りますまい。私はこの靴でもぼろい儲けをいたしました。私が何故鋸地獄で此靴をはかねばならぬか、言はないでも大抵お察し下さいませう。あいたツ。痛い。痛い。いたたたた……うゝんううん」

と遂にそこへ彼は卒倒してしまつた。彦さんは私に

「君、惡いことは出來ないねえ」

と言つて、主人を見下ろしてゐる。私は再び、そのいたはしい姿を見るに忍びず、顏を背けて

「彦九郎先生、何とかして、この人を助けてやることは出來ませんか？　そんなに惡る相な人でもないのに。餘り之では懲罰が殘忍過ぎます。」

と泣き相に成つて言つた。彦さんは又大笑ひして

「君も案外氣の弱い男だなあ。捨てゝ置けば程なく蘇生するよ。併し蘇生するのは尚更ら憐れなものだ。毎月此苦しみを繰り返

さねばならないのだからな。」

彦さんは又私を背負ひ、山猿の様にする〳〵と次の梯子を上り盡し、又その次と、宛で狼の牙か鮫の齒のやうな二百級の鋸梯子を、皆で九つ登つてしまふと、今度はまた岩石の嵯峨たる急坂だ。坂の右側の巨大な自然石に

六　酒保極樂之より二里二丁上り口

と記してある。そして、その石の左側には、左り三里十二丁代議士地獄路とあり、又石の右側を見ると、右四里三十丁フットボール地獄路と刻り付けてある。

「どうだい、足序でに、少し登り路だが、兵隊さんの天國なる、酒保極樂へ行つて見ようか？　それとも代議士地獄へ下りようか？　代議士地獄へ行く路は、猛烈な解散風が、砂礫を飛ばして吹きつけるから、眼も口も開けないやうな、厭なところだ。」

と彦さんが云つた。私は汗を拭きながら、

「さう厭なもの續きぢや堪りませんから、今度はどうか極樂の方へ御案内を願ひませうか？　ですがそのフットボール地獄とと云ふのはどんなものでせう？　それは面白さうぢやありませんか。道は少し遠いようですけれど。」

「どうして、飛んでもない事だ。フットボール地獄の物愴さは、今まで見て來たやうな類ひのものぢやない。これは黃金地獄の中でも、隨分罪の深い方だからな。」

「一體どんな人が這入つて居るのです？　早稻田や一高あたりの運動のチャンピオンですか？　親爺の金を無暗と絞り上げて勉强もしずに牛肉食ひの競爭をしたり、デッカンショばかり唄つたりして、怠け通す運動家の行くところですか？」

「さうぢやない。世間を知らない學生を、景氣の好い廣告を以て欺いて入學させ、教育なんかはそつち退けにして置いて、一方からは月謝を搾り、他方からは寄附金をねだり、何んとか帳尻を誤魔化して、私利私慾を逞くした、奸黠偽善な教育商人共が日毎夜毎怨恨に阿修羅を燃やす角帽鬼に蹴飛ばされて、轉がり廻る地獄なんだ。その殘忍さは、到底二た眼と見られない光景だぞ。」

そこで矢張われ〳〵は、息拔きの爲めに、酒保極樂を見舞ふ事にした。坂はます〳〵急に、動ともすれば足許の石が壞れ墜ちて、容易に登る事が出來なかつたが、一里ばかり登ると、路の幅もだん〳〵廣く、勾配も緩くなり、何處からともなく、涼しい風が吹いて來た。その猫の毛で撫でるやうな微風の中に、沈香を炷くやうな、良い香りが含まれて居た。山躑躅や櫻が、此處にも彼處にも、爛漫と咲いて居る。ボウ、ボウと鳩の鳴く聲

がする。登るに從つて、勇ましい馬の嘶きも聞えて來た。そのうちに、瀏亮たる喇叭の響が聞えた。犬の吠える聲も聞えた。

私達は何時とはなしに、もうこの構內へ這入つて居たと見える。軍隊らしい建物が、彼處にも此處にも見える。そして今日は、祝日ででもあるやうに、目醒しい國旗が、翩翻と風に飜つて居る。

射的場では、盛りに鐵砲を撃つて居た。私はその鐵砲の的を見ると、戶山が原などで見るやうな人形の形ではなく、それは大きな果樹で、兵隊は筒先をその果物に向けて打ち落して居るのであつた。樹の下にもまた兵隊が籠を持ち落ちた果物を、拾ひ集めて居た。また左側の練兵場では、一小隊ばかりの兵隊が劍を拔いて草を刈つて居た。彥さんは其處に居た若い士官を呼び掛けて言つた。

「今日は參觀人があるんだが、君、案內して呉れないか？」

士官は私に擧手の禮を返して、

「何んでも質問して下さい、說明します。」

そこで私は訊いた。

「あの兵隊達は、劍を鉾して何をして居るのですか？ 草を刈つて居るやうですね。一體劍は人殺しの爲めの道具ぢやないのですか？」

すると士官は莞爾して、

「さうかも知れません。併し此處ではもう人殺しの必要が無いから、あれを振り舞はして遊んだり、草を刈つたり稻を刈つたりする位のものであります。」

士官に誘はれて、練兵場の奧へと進んで行くと、其處では兵隊さんが、馳けつこをやるやら、木馬を飛ぶやら、ブランコに乘るやら、旗取りをするやら、まるで小學校の運動會のやうだ。綱引きもして居た。どの兵隊の顏にも、健康と愉快さとが輝いて見えた。

「私は友人の兵隊から、よく上官に對つて生意氣な事を云つた爲めに、帶革で毆ぐられたり、營倉へ打ち込まれたりしたと聞きましたが、此處にも營倉といふのが有りますか？」

私が訊くと士官は、

「それは有ります。御案內しませう。」

と云つて連れて行つた。營倉は薄暗い部屋だつた。そしてその中には兵隊が這入つて居た。

「あの人は何か惡い事でもしたのですか？ 上官の機嫌を損ねるやうな事でも云つたのですか？」

「さうぢやありません。此處では誰も强制的に營倉へ入れられる人は無いのであります。又士官が兵卒の行動に對して怒ると

いふやうな事もありません。此處へ這入るものは、自分から這入りたくつて這入るのであります。あんまり多勢の人と遊んだり、飲み食ひするのに飽きた時、一人になる爲めに入るのであります。團隊の中に居て、個性が稀薄になるのを自覺した時に、此處へ這入つて、個性の養生をするのであります。この中には書物も澤山備つてあるし、また樂器もあれば、繪の具もあります。如何です？ 何もありませんが酒保の御馳走を味はつて下さいませんか？ ほんの兵隊料理で、堅パンだの溫飩かけだの、碌なものはありませんが、ほんのお腹の足しになるだけであります。」

士官は私達を酒保へ案内した。酒保にはビールも、正宗も、サイダーも、壽司、しるこ、饂飩かけ、團子、餡餅、鹽煎餅堅パン、餡パン、クラツカー、ボンボン、ミルク・チヨコレート、其他煙草も山のやうに積まれてあつた。それを圍んで椅子が澤山並んで居た。もう兵隊が一杯詰め掛けて、如何にもお旨しさうに、銘々自分の好きなものを飲み食ひして居た。楣間には、

一兵卒の生命は一發八厘の彈丸と一枚一錢五厘の葉書代の和より尊し。

と認めた大きな額が懸つて居た。

基督は、一人の人の生命は地球の全體よりも尊いと云つた。一錢五厘と八厘とを加へれば二錢三厘だがこの額の意味によると、一兵卒の生命は二錢三厘よりも尊いといふのだ。私には何の事だか分らない。これは或ひは、デルフイあたりの託宣の文句かも知れない。私は、

「その額の意味はどういふのです？」

と訊くと、士官は、

「なアに、あれは兵卒の惡戲書きなのですが、誰かまた惡戲に表具して、あんなところへ懸けたのでせう。此處ではない事ですが、昔何處かの地方の相場だと、兵卒一人を銃殺する丸の價が八厘で、それを補充する爲めには、一枚の葉書で事がす。足りるといふ話です。併しそれよりも兵卒の命の方が尊いといふ譯なのでせう。砂上の偶語といつたやうなものです」

午刻から大分山坂を上つて、空腹になつて居た爲めか、私は溫飩をぺろ〳〵と三杯も喰べた。彥さんは十杯も喰べたらう。そして例の豪傑笑ひをして、

「君の胃袋はどうしたんだ？ 昔から溫飩は一升、蕎麥は五合米は三合喰べるのが一人前と云はれたものだ。そんな事だとぢき腹が減つて、その先き歩いて居る内にへト〳〵になるぜ。」

すると士官は、

「高山先生は、まだこの酒保の溫飩の效力を御經驗なすつた

がないと見えますね？この饂飩の特色はその次ぎの食物を得られるまで、空腹を感じないといふ點に在るのであります。だから一杯でも喰べて置けば、三日でも四日でも大丈夫です。ですが、歩きながらの口慰みに、餡パンやお菓子をお持ちなさいまし。」

かう云つて士官に、彦さんの風呂敷包みの中へ、いろ／＼の御馳走を澤山包んで與れた。

七　代議士地獄

「代議士地獄は、元來權勢地獄から岬のやうに突き出して、黄金地獄の中へ喰ひ込んで居る地獄だから、本來は權勢地獄の方へ編入るべきだが、道の都合上、これを見て、再び黄金地獄へ戻る事にしよう。此處もなか／＼お愛嬌のところで餘興として面白いかも知れない。」

かう云つて、彦さんは私を案内して、酒保極樂の裏道から、だら／＼坂を下りた。約二里も下りたと思ふと、また少し爪先上りになつて、十五丁も登ると、それは峠になつて居る。そして右の方に、新にステキに高い山が見え初めた。

「これからあの山を越さなければならない。これがまた、なか／＼の骨折りだ。あの山の後がすぐ黄金地獄になつて居るので、その方から時々、悪い雲が來て、旅客は足を滑らして、收賄獄へ墮ち込んだりする。この收賄地獄は、代議士地獄のやうな滑稽味を帯びたものではなく、それは實に陰慘な、地獄の中でも最も怕ろしいところの一つなのだ。」

「隨分高い山ですが、何といふ名があるんですか？」

「あれは選擧山と云つて、あれを越え得られぬものは、落選ヶ谷へ蹴げ落される。まア氣を注けて行かう」

少時行くと、路の兩側に、ボロ／＼のフロツクコートを着て、シルクハツトを冠つた男が、幾人も並んで据つて居る。そして中には、女も混淆つて居る。私達が近寄ると、シルクハツトを取つて、地びたへ頭を付けたり、上げたり、まるで米舂きバツタのやうに、お辭儀をして、おろ／＼聲で

「通りかゝりのお旦那さまや、これは足腰のたたない憐れなもので御座います。旅して此處まで來かゝりましたが、御覽の通りの萎れ足で、どうしてあの山が越されませう。お情け、お慈悲で御座りまする。どうぞや一票お惠み下され。」

と、吾妻橋の上の乞食のやうに、張子の片脚を傍へ引き付けて、選擧前の代議士候補者のやうに、見る眼も卑しく、憐れに訴へて居る。又中には女乞食も混淆つて居て、

「どうぞ、この腰抜けの悴の爲に、一票を惠んでやつて下さい

ませ。旦那お情けで御座りまする。

「通りがかりのお旦那さま、どうぞこの腰抜けの私の夫に、一票恵んで下さいませ。お情け、お慈悲で御座りまする。」

と、まるで鼻唄を唄ふやうに歎願しながら、立て續けにお辭儀をした。髪は額の眞中から兩方へ分けて、ハイカラな束髪に結つて居るが、それも亂れて、埃がひどくたかつて居る。

「先生、何の事だか分りませんけれど、何か欲しがつて居るやうですから、恵んでやらうぢやありませんか？　先刻の餡パンか何かどうです？」

と、私が彦さんを呼止めると、彦さんは、

「此奴らの相手をして居られるものか？　此奴らは伊勢の乞食よりも、もつと始末の惡い奴等だ。腰抜けで、自分の力ではあの山は到底越えられないのだが、この山には、壯士籠を舁ぐ雲助が居るから、これに島田さへ握らせれば、八合目までは登れるのだ。併し其處まで行くと、矢釜しい山番が居て、それから上へは通されない。けれども、若し數千人の推擧者があれば、山番が籠を通すのだ。この一票、一票と云つて居るのは、その推薦状を書いて呉れと云ふ事なのだ。」

と、彦さんが説明した。

「では書いてやらうぢやありませんか？　フロツクコートの乞食なんかは、あんまり見たところも良くないし、第一あんなにお辭儀をするのを見ると、可哀想でなりません。それからあの女の人なんかは、子供や夫の爲めに、あゝやつて人眼も耻ぢず、乞食の眞似をするところなんか、全く同情に堪えませんもの。」

すると、彦さんはまたカラ〳〵と笑つて、

「成程、初めて此處へ來たものは、あの憐れつぽいお辭儀に、誰も一杯食はされるんだが、彼奴等はほんたうの膝行ぢやない。夕立が來れば、張子の腐れ脚を荷いで、逃げ出さうといふ橋の上の乞食と同じ事だ。たゞその一票が欲しさに、乞食をして居る眞膝行でまんまと、峠を越して代議士町へ這入つてしまへばそれから先きは、一人で越したやうな顔をして、一票を書いたものに路で逢つても挨拶するではなし、高く留まつて天下の名士振るんだ。それからあの女共は、毎年彼處へ出娑婆るが、夫や伜を代議士町へ送つてしまふと、それあ良妻賢母振つて鼻持ちのならない奴等だ。あんな女乞食よりや、賣淫地獄に墮されて居る、何も知らない娼婦の方が、まだしも同情に値するだらう。」

かう云ひ捨てゝ彦さんは、兩側の乞食には眼も呉れず、ずん〳〵行き過ぎてしまつた。四五町行くと、劇場がいくつもある。こんな山にも芝居が掛るのかと思つて、熟く見ると、表には看

看板の代りに、大聲會代議士候補金權擁五郎君政見發表演說會だの、又他の劇場の前には是々非々會代議士候補無學蟲樹君推薦演說會などいふビラが張り出してある。又その傍には普通選擧尚早論、五用等。余が官本主義法學博士植杉猾吉などいふビラも見えた。私は立ち止まつて、

「どうです、金權擁五郎君の演說でも聽きませうか？　あの官本主義といふのは何でせう？　あれらこそ婆婆への良い土産になりますから。」

と、彦さんを呼び止めたが、彦さんは大きな頭を振つて、

「聽くがものはない。暇潰しだから止せ。止せ。それより早く代議士町へ行つて見よう。もつと面白い事が澤山あるから。」

さう云つて道を急いだ。此處いらから駕籠が道端に幾挺か見えた。

「旦那、駕籠は如何です？　お安くして置きます。」

と、五月蠅く雲助が集まつて來る。それは壯士籠といふだけあつて、その雲助の風態を見ると、瀧縞の白つぽい袴を穿いて腕捲りをし、息杖の代りに仕込杖を突いて居る。彦さんは手を振つて、

「要らない、要らない。俺達はこんな好い脚を持つて居る。腰拔け乞食痛者連とは、玉が違ふんだ。」

壯士共は、何を！といふやうに此方を見たが、彦さんの爛々たる眼を見ると、縮み上つて、唯お世辭笑ひをした。

私達はだん〳〵登つて、八合目に近付いて、谷へ臨んで居る崖の上へ來た時、私達の先きに行つた二挺の駕籠の雲助が、足を踏み滑らしたと見えて、駕籠のまゝ、何千丈とも底知れぬ深味へ墮ちて行くのを見た。私は思はずゾツとして、

「これはえらい難所ですね。可哀相に、今落ちた人はどうなるでせう？」

彦さんは又も笑つて、

「問題にするな、先刻の腰拔け共が墮ちたんだ。この谷は落選ケ谷といふんだから、もう容易には上がれまい。だが此先もつとひどい處がある。まあ、臆せず、俺に付いて來なさい」

それからの道は恰も屛風の上を歩く樣に、折れ曲りつゝ緩い勾配を登るのだから、足は左まで疲れないが、左側には何も落選谷が暗い大きい口を開いてゐるし、右は切り立つたやうな高い絕壁で、絕壁の上も向ふも。それに遮ぎられて見えない。四五丁行くと、私達の足が早かつた爲めか、谷を隔てゝ直き先に七八十挺の駕籠が見える。駕籠の前後には、それ〳〵大聲會候補とか、黑眠黨候補とか、吾徒の宣言とか、物價調節とか、鐵道敷

設とか、航路補助とか地租減稅とか營業稅撤廢とか樣々の文句を認めたバカ大い旗を押し立て、エーホイ、エンサカホイと掛聲勇ましく進んで行く。壯士雲助がその周圍を取り卷き、お抱え記者は大きな萬年筆を擔いで附き添ひ、ワイ〱と大變な景氣だ。

ところが、不思議！　不思議といふより怖ろしい事だつた！　恰度右手の崖に枝の出つた松の大木の見えるところまで來かゝると、俄に上から、何者とも知らず、澤山のサーベルを投げ掛けた。それがまたバラ〱ピカ〱と、宛で銀の雨か、氷柱の雨が降りかゝる樣だ。壯士雲助も大和杖を引拔き上を見上げて齒がみをしたが、對手の姿は見えずして唯サーベルばかりが降りかゝるので、邊りに逃げ込む可き家も無し、見る見る中に數多の雲助は血みどりちんがいの酷たらしい死骸と成つて、そのまゝ其處へ斃れるもあれば、駕籠を打捨てゝ逃げ出すもあり、上を下へと狼狽してゐる中に、道の左側に穴を穿ち隱れてゐた何者かの黑い手が地面に布いてある繩を引くと、亂れ崩れて駕籠を運び出し逃げて來た候補乞食の兩足は、その脚首で引つ括られ、轉ぶが早いか、落選ケ谷へ投げ込まれた。

「卑怯だ」

などゝ叫ぶ者もあつたが、それが何に成るものか？　このサーベルの雨と黑い手の繩を免れて、上へと逃げのびたのは、十分の一にも足りなかつたであらう。

私は、このむごたらしい光景に身の毛をよだて、もう足は前へ進まない。

「あれは何者の仕業でせう。伏兵と見えましたね。しかし、ずいぶんひどい事をしたものです。山賊でせうか？　何でせう」

私が恁う訊くと、彦さんは

「うん、あすこに松の大木が有るだらう。あれは大寒松といふ松で、政府の持物だ。何でも、あの邊からサーベルが降つたらしいな。うん。危險〱氣を付けて來い」

と私を勵ました。併し幸にも、私達の通る時は、もう何等の危險も無かつた。黑い手も何處へか隱れて見えなかつた。たゞ捨てられた駕籠ばかりが、餘り廣くもない道を塞いでゐた。

その中に、山番のゐる小舍へ來た。彦さんの顏が賣れてゐるので、此嚴めしい山番さへも、何も言はずに通して呉れた。

選擧山の絕頂には青い雲が懸つて居た。彦さんはそれを指差して、

「權勢地獄の本部へ行く細道が、あの青い雲のところから付いて居るが、それは非常な難所で、其處からは幾人も越したものが無い。權勢地獄へ行くには却つて山を降つて黃金地獄を廻り

閻魔地獄を通れば、それが一番近くもあるし、道も平坦だから、これから俺達も代議士町の景況を見て、もう一度黄金地獄へ下りる事にしよう。」

そこで私達は峯よりも稍低い山の肩のあたりの峠を越して、比較的楽な道を十二三丁下りると人家がぽつ〳〵ある。

彦さんは、

「さていよ〳〵代議士町へ來た。どうだ、どの家もなか〳〵立派なものだらう。こんな家を借りれば、家賃だけでも大したものだ。」

「さうですね。借家難の東京には、こんな立派な借家は、到底見當りません。今は隨分ひどい洋服細民の住む家でも、四五十圓はするんですから、こんな立派な門構へでは、矢張百萬長者でなくては住まへますまい。」

「ところが、歳費僅に三千圓のフロックコート細民が住んで居るんだから、この地獄は面白いだらう。三千圓のフロックコート細民は、かういふ立派な家に住み、書畫骨董を蒐集し、妾宅を構へ、待合へ通ひ、自働車を備へ、女中の少くも四五人と書生の二人も養つて行かうといふのだから、えらい手腕だらう。」

「歳費三千圓といへば、僅か月三百圓に足りない收入ですね。それでさういふ生活が出來るといふのは、地獄はよつぽど物價が廉いと見えます。それではこゝの代議士諸君は、物價調節の必要を認めないでせう。」

彦さんは、

「なアにあのどの家の地下室にも、トンネルが穿つてあつて、それが皆黄金地獄へ通じて居る。彼處に見える一番大きい白頭熱柿といふ男の家のトンネルは、君と一番初め通つて來た、あの鑛毒村の一つ家へ通じて居るのさ。三井戸村や三獅子村のお大盤や畢友村や須々木村や、何れそんなところに皆それ〳〵通じて居るのだ。さアこれから直ぐに衆愚院を見物に行かう。」

「衆愚院といふのは有名なお寺ですか?」

すると彦さんは腹を抱へて笑つたが、

「お寺は好かつたな。頭の禿げたのと、白髪の人ばかりが行くところだから、お寺と云つてもいいやうなものだし、女兒戯に等しい騒ぎをやつて居るところから見ると、頭の禿げた幼稚園と云つてもいいが、お寺にしては娑婆つ氣が強過ぎるし、幼稚園と云ふには餘りに邪氣が多過ぎる。いや、邪氣それ自身、娑婆つ氣それ自身と云つてもいゝ位なんだ。併し、羅漢は並んで居るよ。五百羅漢には數が足りない。まあ、四百羅漢位のところだ」

衆敵山衆愚院は此所の中央の廣場に在つた。寺とは云ひ乍ら、

南蠻寺を模倣して建立したとやらで、本堂は全く西洋式で、その高く聳えたキュポラは、可成遠方からでも、一目にそれと望まれる。この分では、ずいぶん諸式ハイカラの寺と思つて近づくと、山門前の石柱には、大字で

禁ㇾ入二自由平等新思想一

と刻り付けてある。

門内の庭を行くと道傍に數多の石塔がある。それには朱の文字で何やら彫り込んである。私は妙な石塔だが、何人の墓かと思つて近よつて見ると、それは墓ではなかつた。近頃は何處の寺でも如才なく發表するやうに、此寺でも喜捨した善男善女の名の爲めに受取證代りの紀念碑を建てゝあるのであつた。

先づ第一眼に入つたのは

金百萬圓也　是々非々佛天蓋　右寄附者　地方大地主講

又次のは

金五十萬圓也　犬聲羅漢臺座　右寄附者　大阪資本家講

金二十萬圓也　是々非々如來金銀蓮華一對　右寄附者　全國船成金講

金十五萬圓也　黑眠堂屋根變へ費　右寄附者　神戸　造船講

金二百萬圓也　護用塔建築費　右寄附者　神戸　奸商講

その他、夥しく多い。よほど靈驗いやちこと見える。

私は丁度京都北野の天滿宮へ行つた時石燈籠の寄進者や山絨がきを面白がつて見たやうに、かういふ碑面を穿鑿して讀んだ。大きな碑が後ろの方へ倒れてゐる。見れば仲々立派なものだ。

「自由塔木材費執次星盗人坊明治二十六年米穀取引所信徒。大同庫裏部進歩堂改築費五十萬圓明治四十二年三月五日大日本精糖株式會社講中」その他まだ小さなのが澤山あつた。

彦さんは私を促して

「下らないものを見るな。そんな古い碑なんぞは、もう誰も見る者は無い。忘れてゐる時分だ。早く本堂へ行つて羅漢と如來佛とを見物するが宜い」

本堂の玄關から彦さんが

「頼まう」

と怒鳴つた。柿色の腰衣を付けた小僧が取次に出た。

「喧海和尚は内かな」

「へい。いらつしゃいます。あなたは高山先生で」

「さうだ。彦九郎だ。今日は見物人を連れて來たんだ」

早速喧海和尚の部屋へ通された。
　部屋には光明赫耀たる黄金佛を飾り、前に香爐など宜しく有る。部屋の隅にある机は一寸普通の机と形が變り、義太夫を語る時の見臺に似てゐる。後にて聞けば、之は喧海好みといふて特別の誂へだ相だ。五行本のやうなのはお經であらう。表紙には艶姿女舞衣、三勝半七酒屋の段と記してある。
　だが、違ひ棚の上のお經を見ると、日本書紀法解、資本家擁護經、選擧民瞞着經、議會解散鎭撫秘法經等のお經がうづ高く積んである。
「これは〳〵、高山先生、ようこそ、御光來、今日はどういふ風の吹き廻しで。」
　と黄金とダイヤの念珠をつまぐる。
「いや、私は衆議院は見たくも無し、又此所の三尊佛は大嫌ひだが、今日は見物人を案內して來たのだ。」
　と彦さんが答へた。
私は和尚の汲んでくれた茶を飲んで、
「いくらかお布施をしてお經を上げて貰ひませう」
と彦さんに囁いた。すると彦さんは
「あはハハハハ、それも一興だらう。和尚さん。何か此人の爲めにお經をあげてやつてくれないか」
と言つた。
「はい承知致しました」
と、喧海和尚は如來三尊五百羅漢の並んでゐるところへ私達を導いた。若い味噌擂坊主が多勢並んだ。木魚を叩くのもあつた。和尚は自ら鉦を叩いた。ガン、オン、オン、オン、オンンン……と鉦が鳴つた。
「南無からたんのうとらやあやあ……夫られ日本は金國なり。金の力さへあれば何でも……ウ、出ヱ來イるウとウはア有難い國ならずや、南無黄金菩薩奇妙重來……つら〳〵惟るに富豪に媚びて政權を私する時んば、轉んでもウ……こオろンでヱもウ起オきイてヱもウ、損は行かず、なア、そうぢやあねえかア、是々非々如來イ……オホンぽろ〳〵オ普通選擧はア、まアだアいイ……そんな時イ勢ヱに來られヱたアらア、とウてヱもう、早我々議ウ餘ウぎいんは、ニイ度ウとウ、ふウたアたびイ、代議イ士イには成られヱめえ。なあ、きようだいのヘツポコ陣笠羅漢もウ、、ようウく聽けヱ。どんなア事があつても……決して普選なんかにしてはア、たアまアらねいぞよウ、ポコポコポコ、ポコ（木魚の音）そこでヱ選擧の時はアよろしく頼むウぞオ各地、方の縣ちぐ、及び警察ぶウちやう、ガン、オン、オンオンンンン……（鐘の音）我黨は難ウどうウでヱもオ、何でも敷い

ゃあるウからア……我黨ぎいんをせんきようしイろオいイ……南ア無はくしししぎ如來、じくしししぎ如來、ぜゞひひ如來。おほんぼろ〳〵〳〵……」

お經が濟むと、喧海和尙は私達の前へ來て叩頭をした。彦さんは

「今のお經は、ついぞ之まで聽いたことがないが、あれは何といふお經かい」と訊いた。喧海和尙は殊勝らしく念珠をつまぐりつゝ

「左樣、あれは金權擁護經と申しまして、當今一番御利益の多い經文でございます。まだ他にも選擧民瞞着經といふのもありますが、それは當院の秘法でございまして、普通は四年に一度位しか行ひません。當年も五月にお出で下さいますと、その秘法をいたしてお目にかけます、その際はな、以前はずいぶん黄白の小判餅なぞを參詣の客に施したものですが、近頃はメリンスの風呂敷やら鰹節の切手やらを施すことにしました。又盤若湯も接待します。胡麻菓子なども進ぜますので、當山も仲々賑ひます」

私は此時はじめて如來を見た。眞中の一番大きいのは頭が雪を頂いた樣に白く、兩側の二尊佛は眼ばかりギョロ〳〵光つてゐる。

「この佛像は、普通の寺の佛像とは大分違つてゐる樣ですが、何といふ佛樣ですか」と私は不審に堪えずして訊いた。すると喧海和尙は、恭しく

「左樣、之は何れも運慶の作で、眞中の白頭羽織袴の立像が、即ち是々非々如來として、中で尤も尊い御方、右隣は普段は黑眠堂の方にありますのを、唯今お開帳の中だけ玆へ遷しましたもの、即憲政僞佛と申し奉り、仲々の荒佛、お供物が少いと祟りを致します。顔は淸廉潔白相でも、腹はずいぶん穢い佛。又左のは犬養堂から遷し奉つた功名盆藏佛でございます」

と說明した。

「あの高いところへズラリと並んでゐるのは羅漢樣でせうね」

「左樣、あれは四百羅漢でござる。當院のは五百は無い」

「羅漢といふものは、餘程行儀の惡いものですね。欠伸をしてゐるのや居眠をしてゐるのもある。それに大抵頭が禿げてゐますね。禿げてるのはお賓頭盧さまですか？　陣笠みたいな物を被つたのもずいぶん有りますね」

「左樣、あれらは陣笠雜漢といふて居ります。何うも、お供物ばかり喰べたがつて致方ありません」

「ずいぶん、いやしい雜漢さまですね。」

「いやしいのはまだしも宜しいが、仲に武吉雜漢たの良吉雜漢だのとなると、彌次馬で喧しく、時には亂暴も働きますから。

懲罰に附することさへ珍しくないのです」
「へい。此羅漢は物を言ひますか？」
「言ひますとも。問答をして御覧なさい。まあ、御悠くりなさいませ。高山先生、これにて失禮いたします。後から墓地の方を御案内させます」
と言ひ置いて、喧海和尚は自分の部屋へ歸つた。
そこで、私は陣笠羅漢と話さうと思つてゐると、私の近くの羅漢が棚の上から
「オイ、參詣人、何か喰ひ物を呉れ。我輩は腹がひだるくて堪らない」
と言葉を掛けた。
「あなたは羅漢さまだといふのに、何うしてお供物を喰べたがるのです。神佛がお供物を喰べたら、誰もお供物を上げるものは無くなります。お供物なんてものは、喰べないからこそ上げるのです」
「いゝや、さうでない」と羅漢は下つ腹に力の無い聲を出して
「我輩共は實は人間以上の靈物ではない。むしろ人間以下の蟲けらに等しい俗物なのだ。我輩共は、現世に在る頃、無學無識無理想にして眼中國家も民衆も無く、唯自家の利益を計ることと、虚名を賣ることのみに汲々としてゐた。巧みに黄白を散じて投票を買收し、日比谷の衆議員の一員と成つたを幸ひ、奸商と氣脈を通じて政權を濫用し、不義の金を得、待合に入びたり妾宅通ひをなせし報にて此代議士地獄へ送られつゝ衆愚院の贋羅漢とは爲されたり。それより終日、終夜此高い棚の上に坐らせられ、酒食は少しも與へられずして、朝から鼻の下でいぶくさい抹香を燃かれ、夜は鼠に頭から大小便をひつ濺けられ、窮屈とも空腹とも窮屈とも言はふやうなき此苦しさ。推諒して、何なりとも喰物あらば惠み玉へ」
と陣笠をふるはせて泣き立てた。
私はその顔を見ると、何うやら少しは見覺えがある樣でもある。新聞の漫畫ででも見たのかも知れない。
「彦さん。何だか可哀相な羅漢ですね。ビスケットが有つたらやつて下さい」
私は彦さんの風呂敷包みから出したビスケットを與へた。けれども不思議！　彼等羅漢共がそれを口へ入れて嚙ると、カリと音がしたので吐き出すと、ビスケットは金に變つてゐた。羅漢は驚いて第二のビスケットを口へ入れると今度は銀に變つてしまつた。天國の食物は、地獄の者の口へは這入らないと見える。すると、羅漢は涙をハラ〳〵とこぼして
「悪いことは出來ません。私は代議士であつた頃、金銀を取る

ことばかり樂みました罪に依り口へ入れれば何も皆金銀に成つてしまひます。今にして思へば、世の中には金よりも銀よりも尊い物が多かつたのに！」

と泣いた。

「君の名は、何といふのです」

「私は齋炭〃申します」

「私は五時半と申します」

「私はオガヘイと申します」

「私はモチ小太と申します」

「私は武吉と申します」

「私は赤ンヤツ招き猫と申します」

「私は蒙古王と申します」

「私はムト金ことと英國のゼノアと申します」

と皆なペコ〳〵叩頭をした。彦さんは之を聞いて

「まるで乞食のやうな名前ばかりだな。名前といふより符牒みたやうなものだ。名前には、もつと人格の尊厳が表徴されてゐなければならない。」

と笑つた。私は

「そして君のお國は何地です」

と訊いた。陣笠の一人が

「私は群馬縣です。群馬縣から金で買收して代議士に成つた男です。私達の場合選擧されたといふのは、餘り僭越ですから」

と從順に答へた。

群馬縣と聞いて、私は同情の涙がこみ上げて來た。そして

「彦さん。此雜漢も僕達と同國(くに)だと言ひます。あの清い利根川の水を汲み、あの高い赤城の姿を眺めつゝ育つた仲間なのだ相です。何とかして、助けてやる方法は無いものでせうか」

彦さんは頭を振つて

「ならん。長脇差と俠骨とで誇つた俺達の國からも、代議士地獄へ落ちる樣な汚ならしい蛆虫が生れたか？　これは抑も時勢の罪か？　社會の罪か？　全く情けないことだなあ。俺も京都へ遊んだ頃は、まだ若かつたものだから、尊氏の木像を割つたことがある。今はこいつらの木像を見ても叩き割る氣にもならない。蹴落してやらうよ」

彦九郎さんは四百雜漢を悉く棚から蹴落し、三尊佛を蹴倒し、ぱつと青痰をひつ濺(か)けて、大股に本堂を出て行つた。

裏の墓地へ行かうとしてゐると、納所坊主がやつて來た。彦さんが

「噴海和尚は何處にゐる。墓地の案内を頼み度い」

といふと、坊主は

「和尚さんは今先生が御立腹の様子を見て命から〲何處へやら、逃げ出してしまひました。あの人は三十六計逃げることが一番上手な人ですから。墓地なら愚僧が御案内申しませう」

すると彦さんは、又以前の機嫌に返り哄笑して

「さうさ、俺は何時もの癇癪を出したな。捨てゝ置いても鼠に喰はれてボロ〲に滅び失すべき彼等蚰虫に對して怒つたのは我ながら滑稽の至りだつた。」

墓の中で前に澤山供つてある樒の葉が、特に人目を惹くのは星盗人といふ前住職の墓であつた。

「この方は、手癖が悪く、まあ鼠小僧の様な人で此衆愚院の住職でありながら賄賂取りの大泥棒でしたが、よく乾兒に寶を分けたので人望がありました。それで、今でも此通り花を手向ける者が絶えないのでございます。併し此人は積悪の報ひ、白晝刺客の手に斃れたのでした」

と納所坊主は説明した。

三三

私達がまだ此所にゐる中に、空からバラ〲赤い灰が降つて來た。不圖東の空を仰ぐと、選擧山よりもズツト高い山が天に沖つてゐて、その頂上から盛んに煙を吐いてゐる。活火山であるらしい。

「オヽ、あんなところに噴火山がありますね」

と私が、その方を指差すと、坊主は答へて

「えゝ、あれは新思想ケ嶽と申して、此界隈で一等高い峯です。あの山の向ひ側には理想郷や又普通仙境などいふ極楽が有るのだ相です。あの火山がある爲めに、此所では絶えず地震に脅かされてゐます。今迄も度々鳴動してその都度灰を噴いたのですが、近頃のやうに烈しく噴火することは、以前には無かつた相でございます。臆病なこゝの住職などはガタ〲と云ふ音さへ聞けば逃げ出すやうな始末です。又普通仙境の方から吹く風に當ると、此所の人は風邪を引くといふので恐れてゐるところへこれも亦近い中に烈しい感冒が普通仙境の方から流行つて來て、此所の住民に感染するとの風説が傳はり、それにも皆な恐れてゐる様です。何だかもう私達もそれに感ぶれたらしく、苦しくはありませんが、時々妙な咳が出ます」

と語つた。

その中に、又も烈しく新思想山は煙を吐き、灰がバラ〲盛んに降りつゞいた。

八　解散風

私達は代議士町を出て、急な坂道を下つた。下る間も赤い灰は盛んに降つて、帽子や肩や襟に赤く積るので、私達は袖を振

り〳〵歩かねばならなかつた。もう日ざしは餘程西へ傾いて來た。それに空は一面に曇つて、灰の上に更に雨さへ交つて來た。

「こりやあ、とても堪らない。この分では今夜あたり解散風のひどいのが吹くかも知れない。この四五丁先きの谷に向つた崖の邊りが、何時もそれを喰ふところだ。氣をつけて來なさい」

と彥さんが注意した。

果たして、それらしい風が來た。遠雷も聞こえた。パラ〳〵と降り注ぐ雨と灰とを横しぶきにして、なまぐさい風が吹いて來た。風が吹く毎に草は靡き樹は悲鳴を擧げた。空は殆んど夜の暗に近いほど、暗く成つた。私は杖にすがりつゝ歩いたが、兎もすれば轉び相に成つた。

さうする中に、コロ〳〵と私達の後から轉んで來るものがある。鹿か兎か？さうではない。陣笠だ。陣笠が引千切れて幾つも轉がつて來て、私達を追ひ越し前の深い暗い谷間へと落ちた。又コロ〳〵と今度は重さうな大きいものが轉がつて來た。私は體をかはして、それを避けた。それは私の側を過ぎてドーンと前の谷へ落ちて行つた。又轉がつて來た。これは、私達を見て

「助けて下さい。命を助けて下さい。私は先刻の羅漢です。陣笠と羅漢です。烈しい解散風が……」

といふ間に、之もドーンと谷へ落ちた。

「助けて下さい」

といふ聲が又側でする。そして直ぐ又ドーンと落ちてしまふ。全く助ける暇もない。このやうにして數百の羅漢は谷へ落ちた。

彥さんは

「あんな者の對手に成つてゐて怪我をするな。前の谷は奈落の淵だ。こゝへ落ちた奴は再び救はれないぞ。」と言つた。

その中に、そこらが一面にパット晝のやうに明るく成つた。草や木の靡くのがよく見えた。彥さんは振向いて

「見ろ。町は一面の大火に成つた。」

噴火山から降つた火が町の家々へ移つたらしい。私達は立ち留まつて暫らくその方を見てゐた。

やがて、パラ〳〵〳〵と町の方から人々が駈けて來た。道を踏み迷らして谷へ落ちたのもあれば、下の村へと駈け下つて行くのもあつた。

「天から火がふつて來た。町は火事だ。火事だア。」

「助けてくれえエ」

と走り乍ら口々に言つた。

そこへ、先刻の衆愚院の住職喧海和尙が洗足で、裸體で納所や小僧に援けられつゝ走つて來た。そして丁度私の前で轉んだ。

「うゝん。苦しい。〳〵。〳〵」

「和尚さま。しつかりなさいませ。私共が付いてゐます」
「ついてゐても、もう駄目だ」
「和尚さん何です。火事は直き止みます。もうこゝは家主地獄の口まで來てますのに！　あゝ！」

九　大屋地獄

零落ケ淵へ落ち込んだ陣笠羅漢は、その後どうなつたであらう。また身をもだえてゐた喧海和尚は、その後どうなつたであらう。私達は彼等をあとに殘して、下の村へと下りて行つた。
もう日もとつぷり暮れた。彦さんの話によれば、
「衆愚院から吹き飛ばされた陣笠どもの中には、發狂するものもあらうし、また乞食になるものもあらう、或は詐欺師になるものもあつて、それ〲ちがつた地獄へ落ちてゆくだらう。しかし、地獄の悲しさは、一人も死ぬものはない。苦しい地獄の生活は、永久に續かねばならないのだ。」
と、いふのだ。
酒保天國で食べた食物のお蔭でお腹はまだへらないが、昨夜から歩き續けなので、健脚な彦さんは平氣だが、私はだいぶくたびれた。はやくどこか家をみつけて、泊りたいものだ。
數丁下りると、もう平坦なところへ出た。二丁程先きから、ちらほら家が見えた。近よつて見ると、遠くから見たにはましてずつと立派な家ばかりだ。コンクリートの長い塀や、錬塀や黒板塀や、いろ〲あるが、いづれも廣大な屋敷らしく見える。門なども立派に見える。あまり屋敷が立派なので、宿をもとめるには少し氣遲れがするやうだ。しかし私は彦さんに、
「もう宿をとらなければなりませんね。どこかこのへんの家で泊めて呉れないでせうか。それとも宿屋がありますか。」
と、いふと、彦さんは頭を振つて、
「泊んことはなからうが、君の方で一晩の辛抱が出來なからう」
「でもみんな立派な家ばかりぢやありませんすか。」
「それや立派だとも。みかけだけはすばらしいものだ。此處はなにしろ、大屋地獄とよばれて、强慾非道頑冥不靈な大屋どもが、すんでゐる地獄だ。ひとつ見物するのも一興だらう。まあの家へ入らう。」
と前の家へ彦さんは私を案内した。その門前に白髮頭の瘦せた卑しい顏の老人が、イんでゐた。彦さんは彼に訊いた。
「これはお前の家かい」
「さうです」
と、彼は答へた。
「なかを見せて貰はうか」

「お見せ申すことは出來ますが、とても泊れるところではありません。」

「よろしい。見て行くだけだ。」

この家の主は門の側の犬くゞりから、ほんとうに犬のやうに這ひ込んだ。

「あの人は妙な眞似をしますね。」

と、私がきくと彥さんは、

「あれはいつも門を閉め切つて置いて、たづねてくる客を犬くゞりからばかり出入させた呪のために、門の前へ來ると、自然ところんで四這ひになるんだ。」と說明した。

實に堂々たる玄關だ。式臺も立派なものだ。だが、妙なことには、屋根がない。主人が先にたつて、唐紙を開けて座敷へ通した。床柱も立派なれば、違棚、地袋、器具調度、柱の電燈の光のとゞくかぎり實に立派なものだ。しかし、こゝにも屋根がなかつた。空がまるで見える。

「この通りですから、貴方がたがお泊りになることは出來ますまい。」と、主人が云つた。

「何故この家は天井がないんです。風に吹き拂はれたんですか」

すると主人は、悲しそうに、

「そうです。仰せの通り、風に吹きとられたのです。そのくせ私のこゝへ來ての仕事は、朝から晩まで天井を張ることゝ、屋根を葺くことなのです。しかし何度葺いても何度張つても、屋根も天井も風にとられてしまひます。」

「貴方は屋根屋さんですか。」

「いゝえ、私は大屋です。屋根屋ならば屋根を葺くことも、こんなに骨は折れないでせうし、大工ならばもつと、丈夫な天井をはることが出來るでせうが、私はその方にはまつたく素人です。」

「では、屋根屋に賴んでしつかりとこしらへさせたらいゝでせう。」

すると、主人は顏をしかめて泣いた。

「これは私が昔店子どもをいぢめた罪の報です。屋根がもつて困るといつて店子どもが泣きついてきても、うちすてゝ置いてただ家賃を値上げすることばかり考へてゐたのです。家が無くつて人が困れば困るほど、私たちはそれをいゝことにして、値上げをしたのです。値上げをしたゞけでなくいろ〳〵意地の惡いことをして、借家人を侮辱しました。その値上げも初めは二三割でしたが、貸家拂底のために、借屋人が默つて泣寢入にしますから、それをいゝことにして、七割も十割も十二割もあげ、最後に色々の口實をもうけて、店立を食はせ、あとで來た

人に、またずつと高くして貸すといふやうな非道なことをした報で、私の家族は、屋根の下へ寢ることが出來ない運命なのです。それでも私が日中屋根をこしらへてゐる間は苦痛を忘れますが、若し仕事を怠ければ、雨や雪が降つてきたり、または砂が吹き込んできて、その苦しさに堪へないのです。」

私たちは北の家を出て隣の屋敷へ入つた。

こゝの家族は立派な家の軒下に佇んでゐた。主人らしい老人が私たちを見て、

「この家は戸は開いてはゐますけれど、入ることは出來ないのです。」

と、その中の主人が語つた。私はその言葉をさほど氣にもとめず玄關へ入らうとすると私の足音とゝもに戸は内から自然と閉つた。これは不思議と思つて、庭から椽側へあがらうとすると、また戸が自然にガラ〳〵としまつた。止むを得ずもとのところへ歸つて來ると、そこの主人が云ふには、

「これは私が家賃をあげるために、情用捨なく借家人に店立を食はせた罪の報ひです。こんな立派な家を持ちながら私たちの家族は夜、何時も軒場にたつて、雨風に曝されねばならないのです。まつたく私が店立を食はせたなかには悲慘なものもありました。」

と、云ふ主人の言葉について、その妻君らしい束髮の老婆が

「私たちは元來貸家など持たなくも何不足ない身の上でした。私の父はK伯爵と申しまして、維新時代の大人物と世間から誤解されてゐますが、實は三代相恩の主家を賣つた奸物です。しかし私はその伯爵の娘と生れました性質が出しや張りであるために婦人雜誌などに度々その名をうたはれたM男爵夫人といふものです。私はよく富士登山の話をしたり勤儉貯蓄の話をしたりして、有名なものでした。しかし少でも多く財産をふやさうと思つて、邸内に多くの貸屋を建て、そこへ來る借屋人を苦しめました。或る借屋人の家族などは、小さい小供が多いのに、妻君は三年も病ひに臥して枕があがらなかつたのです。しかしそんな悲慘な家族に貸して置いては、思ふやうな家賃もとれませんから、その家は朝鮮人の某に賣つたからと僞を構へて、店立を食はせました。そこの妻君は死んだやうな青い顏をして引越車のあとから吊臺に載せられて運ばれました。そして間もなく死んだそうです。」

私たちは向側の家へいつてみた。しかし、そこでは、座敷のの壁がこと〳〵く落ちてゐて、風が吹き曝しだつた。またその隣家はいるが早いか何百といふ蚤が私の足を刺した。私はそれを拂ひ落して慌いて逃げ出した。こんなことで

私たちの安眠の出來るやうな家は、この村には一つもなかつた。

十　地震地獄

前の村の村はづれに、大屋地獄地震地獄境界といふ棒杭が立つてゐた。私はそれから二足三足行くと、もう足をとられて、地びたへ投げ出された。それをみて彦さんはカラ／＼と笑つた。

「どうしたんだい、意氣地のない。まるで酒に醉つたやうぢやないか。」

「ほんとうに何うしたんでせう。あ痛ツ、膝の皮を擦り剝いてしまつた。」

と、いつてたちあがると、また地面が、ゆらゆらと搖れた。私は足を踏みしめ腰をすえたが、到底歩くことは出來なかつた。

「どれ俺が負つてやらう。こゝは地震地獄だから、おまへたちには歩かれない。」

私は彦さんにおぶさつた。

「こゝはどんな人のゐる地獄です。」

「無暗と地面を慾張つて人を苦しめた奴等の呪はれてゐる地獄だ。みんなが當り前にしてゐれば、世界はそんなに狹くはない。誰しも、自分の食物を得るだけの地面、自分の眼をたのしますだけの庭、自分の住宅を構へるだけの宅地くらゐは、十分得られる筈なんだ。しかるに、一人で數萬町歩の田地を獨佔する慾張りがあつたり、數萬坪の宅地を貪る馬鹿者があるために、一方には耕すに土地なく、住むにところなく、困窮する多數の人間が出來るのだ。この地獄は、地面を慾張つた馬鹿者どもが苦しむためにつくられたのだ。」

まつたく地面は波の樣に絕間なく搖れて、あたりは一體に黑い海の樣であつた。兩側の家から人々の泣き叫ぶ聲がきこえてきた。たほれた門柱の下にされて、苦しみもがいてゐる男もあれば、出口の鴨居が落ちて、その下で苦しんでゐる女もあつた。また便所から泣き叫ぶ聲も聞こえた。彦さんは

「なんでお前は泣いてゐるんだ。」

と、聞くと便所の中から

「私は便所よりそとへは出られない身の上なのです。借地人が、家を建てゝから、私は無法に地代を値上げしたのです。借地人は困つて、私にその家を買つて貰ひたいと云ふから、私は安く買ひとつて、これを他のものに貸しました。それを借りた人は家族が多いので、更に便所と物置を建て増して暫くすんでゐましたが、私がまた／＼無法な家賃の値上げをしたので、彼は轉居しましたが、自分の建てた便所と物置までも、遠方へ持ち運ぶ譯にはゆかず、私に買つて呉れと賴みましたが、私はそれに

應じないのみか、速刻それをも持運んで貰ひたいと、强硬談判したために、彼はそのまゝ私に呉れて行きました。そうして私はこの地獄へ來てこの便所へ這入つたなり、どうしても出ることが出來ず。そとも見られねば、食べることも寝ることも出來す、たゞ臭い臭ひばかりを嗅いで、死ぬことも出來ずに、辛い月日を送つてゐます。どうぞ私を憐んで下さい。お禮に地面はいくらでもやります。どうかしてこの戸を開けて私を逃がしてください。」

と、泣き叫んだ。彦さんは、相變らず笑つて、

「穢ない奴だなあ。便所の慾なぞをかいだ奴は、便所の中で永久に苦しむのが當然だ。」

と、そこを行過ぎた。また路傍の一本の杭の上に立つて泣いてゐる男があつた。立つてゐるかと思へば、忽ち下へ振り落され、また泣き乍らその杭へ攀登つた。私は古代のキリスト教徒の一派に、柱の上で苦行する僧侶があるときいたが、そんな類のものかと思つた。彼は私たちを見ると、助けて下さいと叫んだ。

「お前は何故そんな杭から下りたり上つたりしてゐるんだ。」

と、彦さんがきいた。すると

「この杭の下の地面は火よりも熱いのです。だから杭より他には私のゐるところはありません。それだのに地震で絶えず振り落されて私は火傷してゐるのです。飲むものも食ふものも、この杭の上には無いのです。何か食べる物があつたら惠んで下さい。水一杯でも飲ませて下さい。私はもうこれで三年以上飲まず食はずに杭の上にゐるのですから。」

彦さんは笑つて

「お前は、以前に何をした? 惡いことをする時、ヅウ／＼しい奴に限つて、刑罰を受ける時に意氣地の無いものだ。泣く暇が有つたら、前非を悔ゐろ。」

すると、杭の男はおろ／＼聲で

「私は百姓に金を貸して地面を抵當に取り、そして終ひにそれを捲き上げてしまつたり、隣人の田畑の境界を一寸／＼削り取つたり、土地の慾ばかり乾いてゐました」

と語つた。

私は之を見て、トルストイの「人は何れ程の地面を要するか」といふ話を思ひ出した。或男が異國に旅していろ／＼珍らしい品物を献じ、その報酬としてその國の王から

「お前が終日歩き廻つた丈けの地面を遣らう」

と云はれ、その翌朝から歩き出し、驅け出し、野を越え山を越え、出來るだけ廣い地面を一周しやうと考へて、水も飲まず休

息もせずに辿りつゞけて、日没迄に廣い〳〵地域を廻つて元の場所へ歸つて來たが、過勞の結果、そこへ斃れた。そして、彼の得るところは、その死體を埋む可き六尺の土地に過ぎなかつた。といふのだ。

私は數年前に讀んだ此話をウロ覺えに覺えてゐるだけ、彦さんに話した。その中に何時しか地震地獄を離れてゐた。

「だが、彦さん。私達の旅は、何處まで行けば盡きるのです。私はもう心も體も疲れ切つてしまひましたが」

と私が言ふと、

「弱い音を吹くな。地獄は廣いぞ。足元から眼の屆く限り、地平線の先きの先きまで、地獄は續く。」

「こんな怖ろしいところを、此上見るのは、もう御免です」

「バカな。意氣地無しめ。今更ら引返したとて、ずいぶん遠いぞ。今夜は寢心地の良い天國へ連れて行つてやらう。もつと勇氣と根氣を出して、行くところ迄、行き盡せ」

と彦さんは私の手を取つて勵ました。

聖德太子は果して逆臣馬子を赦し給ひしか

一、太子の鴻業
二、太子と穴穗部皇子
三、馬子大逆前後の事情
四、太子と守屋
五、排佛の具
六、太子馬子を赦し給はず
七、太子の眞精神大理想

高島米峯

一、太子の鴻業

如何なる言語文字を以て、讃嘆し奉るべきか、全くその辭を得るに苦しむものは、聖德太子の偉德と鴻業となり。推古天皇の皇太子として、しかも攝政の大任を帶び、朝に立ち給ふこと正に三十年、內政に外交に、宗教に學問に、美術に產業に、夫の嶄然たる推古時代の文化を建設し給ひし功績は、誠に日本文明の母として、轉ゞ尊崇恭敬の念を起さしめずむば止まざるものあるなり。これを以て本邦最古の官選國史たる『日本書紀』は、太子を以て、單に一個の人間を以て目せず、全く聖人としてこれを記載せり。此くの如きは、本邦正史の上に、太子を外にして、未だこれあるを見ざるところ。太子の人格が、如何に偉大なるものなりしかは、この一事を以てするも、尚これを證し得べきにあらずや。爾來、國民の尊信は、依然として、太子を聖者となし佛陀の化身となすことに、分毫の異變なかりしもの實に一千年。然るに、德川時代に至つて、初めて、儒者及び神道家の太子を非難するものを出せること、頗る奇なりといふべし。されど歷史研究の幼稚なりし時代にありて、しかも排佛の先入主によりて、故意に太子を傷つけなとする心情の發露は、寧ろこれを憐むべしとせむ。たゞ文運隆盛の大正の昭代、尚この、德川時代の漢學者國學者流の糟粕を嘗めて、太子を非難せむとするが如きものあるを、悲しまざる能はず。

聖德太子が、如何に能く、外來思想の輸入と消化とのために、力を竭し給ひしか、如何に能く、自主的外交によりて、當時の强國隋に對し、日東帝國の尊貴を示し給ひしか等、現代の政治及思想問題に即して、考察と批判とを加へたき、興味ある好題目甚だ少からされども、今はたゞ、馬子の弑逆に對する太子の態度のみについて、一言するにとゞめむと欲す。

二、太子と穴穗部皇子

難者の說に從へば、聖德太子は、天位を望むの野心を藏し、この野心を遂げむがために、正義の人、物部守屋を殺し、又當然天位に上るべき、穴穗部皇子をも殺せるものなりとなす。されど、此くの如きは、全く難者が獨斷の暴論にして、『書紀』の記載は、全然これを否定せり。

天皇病彌留、崩于大殿、是時、起殯宮於廣瀨、(中略)三輪君逆、使隼人、相距於殯庭、穴穗部皇子、欲取天下、發憤稱曰、何故事死王之庭、弗事生王之所也、(敏達天皇紀)

穴穗部皇子、欲奸炊屋姬皇后、而自強入於殯宮、(用明天皇紀)

穴穗部皇子、陰謀王天下之事、而口詐在於殺逆君、遂與物部守屋大連、率兵圍繞磐余池邊、(用明天皇紀)

物部大連、元欲去餘皇子等、而立穴穗部皇子、爲天皇、及至於今、望因遊獵而謀替立、密使人於穴穗部皇子曰、願與皇子將馳獵於淡路、謀泄六月甲辰朔、庚戌、蘇我馬子宿禰等、奉炊屋姬尊、詔佐伯連丹經手、土師連磐村、的臣眞嚙曰、汝等嚴兵、速往誅殺穴穗部皇子與宅部皇、(崇峻天皇紀)

それ此くの如く、穴穗部皇子は、難者の言へるが如き、當然天位に上るべき人にあらざるのみならず、却つて無法に天位に上らむと企てたる人なり。敏達天皇崩御の後は、その皇太子たる大兄皇子(用明天皇)こそ、當然即位し給ふべきことと、些の疑議を許さず。然るに、穴穗部皇子、自ら位を奪はむと謀りしのみならず、或は、敏達天皇の殯宮に闖入し、或は、先帝の皇后炊屋媛尊(後の推古天皇)を奸せむとせるが如き、或は、敏達天皇の殯宮守護の任にありし寵臣、三輪逆君を殺せるが如き、亂暴狼籍至らざるところなかりしが、天遂に惡を助けず、その目的を遂すること能はざりしは、もとより當然のことに屬す。然るに、用明天皇の崩御し給ふや、物部守屋と心を合せて、再び簒奪の惡計を運らし、陰謀露顯して、遂に誅せられたるなり。

此くの如き人物と、聖德太子とを、同架に列して論ぜむとするさへ、甚だその倫を失するを畏れざる能はず。況んや、難者の如く、穴穗部皇子の云爲と、聖德太子の行動とを、全然入れ替へにしての聖德太子攻擊は、あまりに馬鹿々々しくして、眞面目にお對手も仕り兼ぬるのみならず、簒奪の謀を廻らせる物部守屋を、正義の人と稱するに至つては、難者自ら、己の邪を以て己の咽を扼らむとするもの、その愚、誠に愍殺を値せずや。

三、馬子大逆前後の事情

崇峻天皇は、穴穗部皇子と同腹の御兄弟にましく〳〵たるより初は、物部守屋に心を寄せ給ひつらむとも、想像し奉ることを得べし。然るを、如何なるか事情の下に、蘇我馬子との間に

解を生じ、守屋が、穴穗部皇子を擁立せむと企てたるにも關はらず、遂に、用明天皇に次いで、位に卽き給ひしなり。この間の消息は、正史の記載詳ならずと雖も、この推測にして、多少の理由ありとせば、守屋誅に伏したる後の崇峻天皇は、全く、蘇我一族の勢力の中に、その横暴を、拱手してこれを眺め給ふといふが如き、極めて不快と不滿とに、遣瀨なき日を送り給ひしものと、恐察し奉ること難からず。卽ち、表に馬子と力を協せたるが如きを粧ひ給ふと雖も、裏に馬子の專恣を憤り給ふの情、禁じ難きもの在しましたらむ。『書紀』に曰はく、

五年冬十月癸酉朔、丙子、有獻山猪、天皇指猪詔曰、何時如斷此猪之頸、斷朕所嫌之人、多設兵仗、有異於常、(崇峻天皇紀)

と。卽ち、崇峻天皇が、如何に馬子を惡み給ひしかは、以て察し奉るに餘りあらずや。此くの如く、崇峻天皇が、多く兵仗を設け、將に馬子征討の軍を起さむとし給ふや、當時、馬子一族の勢力より成れる朝廷に在りて、その大多數が、崇峻天皇に御同情申上ぐるものの無かりしこと、眞に申すも畏き極みなるのみならず、却つて、馬子をして、勢を恃みて、その狂暴の獸性を發揮せしめ、遂に弑逆の大罪を犯さしむるに至りしこと、眞に千歲の恨事と言はざるべからず。『書紀』に曰はく、

蘇我馬子宿禰、聞天皇所詔、恐嫌於已、招聚儻者、謀弑天皇、
十一月癸卯朔、乙巳、馬子宿禰、詐於群臣曰、今日、進東國之調、乃使東漢直駒、殺于天皇、是日、葬天皇于倉梯岡陵、(崇峻天皇紀)

如何に蘇我一族の勢力滿廷に扶植せられたりとは言へ、當くの皇族中、一人の立ちて、逆徒を誅せむとし給ふ方もなく、數時多くの國民中、一人の立つて斬奸を叫ぶものもなきのみなず、天皇の御遺骸を、卽日これを葬りて、在朝在野、一人の怪しものなかりしといふが如き、今日の思想を以てしては、到底これを解釋し能はざる事態ならずや。崇峻天皇の御境遇は、此くの如く、御同情に堪へざるものありしと同時に、當時の事情は、今日より想像することとさへ、不可能なるが如きものありしなり。この間に在りて、若し、眞にこの事に對して、國家のために、衷心よ遺憾なりと感じたる人ありたりとせば、そは正に、聖德太子なざるべからず。

四、太子と守屋

雜者又曰はく、聖德太子が、物部守屋を征討し給ひしは、十歲の御時なり。年少十四歲にして、能く守屋を征討し給ひたる子が、眞に馬子の弑逆に對して、衷心より遺憾を感じ給ひしもの

とせば、十九歳の青年になりまして、何故に、馬子誅戮の軍を與すに堪へ給はずといふかと。『書紀』に曰はく、

秋七月、蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子與群臣、謀滅物部守屋大連、泊瀬部皇子、竹田皇子、廐戸皇子、難波皇子、春日皇子、蘇我馬子宿禰大臣、紀臣麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣賀拕夫、葛城臣烏那羅、倶率軍旅、進討大連、（崇峻天皇紀）。

と。卽ち、幾多の皇子と、幾多の將軍とが、各々軍隊を率ゐて、守屋の征討に向ひたるものにして、當時僅に十四歳の聖徳太子も、亦他の諸皇子諸將軍と共に、一軍の指揮に任じ給ひしにとゞまり、決して、全軍を統べ給ひしにもあらず、又聖徳太子御一人の事業にてもあらざりしなり。しかも、守屋の軍强盛にして、家に塡ち野に溢れ、皇子等の軍と群臣の衆と共に恐怖して、三たび退却の已むを得ざるに至れる時、廐戸の皇子は、軍の後方に在しませるが、自ら忖りて曰はく、『將た敗らるゝ無らむや、願に非ざれば成り難からむ』と。乃ち白膠木を斬り取り、速に四天王の像を作りて頂髮に置き、誓を發して曰はく、『今若し我をして敵に勝たしめば、必ず當に護世四天王を奉じ、寺塔を建てむ』と。蘇我馬子も亦誓を立て、更に兵備を嚴にして進み伐ち、漸くにして守屋を誅することを得たりしなり。爾來五周年、蘇我一族の勢力甚だ强大となり、遂に弑逆の下手人たる東漢直駒をして、『唯大臣を識りて、未だ天皇の尊を識らず』と叫ばしむるに至れるのみならず、皇族の微力彼が如く、國民の意向彼が如き時代に於て、如何に聰明に渡らせ給ひしとは言へ、孤立無援の聖徳太子一人の力を以てして、如何ぞ馬子征討の軍を起し、政治の革新を企て給ふことを得むや。

五、排佛の具

又難者ありて曰はく、崇峻天皇が弑逆に遭ひ給へる時、聖徳太子が、たゞ『過去の報なり』と嘆息せられたるのみにして、敢て逆徒馬子を誅戮し給はざりしは、これ全く、佛に泥するものなりと。されど、太子は、佛教の如き、儒教の如き、外來思想を、巧に日本化して、依つて以て、當時の國民性に培ひ、國民道德の基礎を確立し給ひしものにして、斷じて、佛に泥し儒に黨すといふが如き、現代人の小我小見を以て、忖度することを許さゞる底の偉器にてましませしなり。殊に『過去の報なり』と嘆息し給へりといふが如き事實は、太子の薨去を距ること甚だ遠からざりし時代に成りし『上宮聖德法王帝說』にも、國史の最高權威たる『日本書紀』にも、太子傳中重要の地歩を占むる『太子傳補闕記』にも、記載せられざるところにして、もとよりこれを信ずるに足らず、たゞ、藤原時代の末葉頃にてもあらむか、不確實なる修飾を多

して、面白く書きなされたる『聖德太子傳曆』にのみ、この記事あるを見ると雖も、しかも『傳曆』の歷史的價値は、專門史家の間に定評ありて、もとより史論の評權となすに足らざるものなり。

或は曰はく、啻に『傳曆』のみならず、水戶の『大日本史』にもこれあり、賴山陽の『日本政記』にもこれあり、林道春の『蘇我馬子辨』にもこれあり、荻生徂徠の『擬家大連檄』にもこれあり、平田篤胤の『出定笑語』にもこれありと。されど、『大日本史』が何故に此くの如き根據の確實ならざる記事を載せたるかを考ふるに、そは、『大日本史』の佛教に對する態度の、頗る偏頗依怙なるよりして、これを解釋すること、甚だ難からざるものあるなり。佛教の功績は、成るべくこれを默殺せむと欲し、苟も佛教を傷つくるに足るが如き材料と見れば、敢てその傳說なりや史實なりやを問ふことなく、採つて以てこれを針小棒大に記載す、今この聖德太子の場合の如きも、全くその慣用の手段を弄したるに過ぎざるなり。排佛の熱度漸く高くして、史眼ために眩める水戶學者が『傳曆』の記事を發見したる時は、恐らくは、鬼の首にても取りたらむが如く、雀躍したることとなるべし。こゝに於て、何等の批判と考覈とを加ふることなく、たゞ有頂天になりてこれを援引したるものなること、殆ど疑ふの餘地あることなし。又賴山陽の『日本外史』『日本政記』の類に至りては、歷史として、何等根本的研究を加へられたるものにあらずして、從つて、史書としての權威を有せざること、これまた言を要せず。林道春、荻生徂徠の徒が、故意に太子を傷つけむとしたるは、彼等慣用の論鋒を借りてこれを言へば、儒に阿るところよりして、傳說を基礎として、強ひて排佛の具に供したるに過ぎざるものにして、その情や寧ろ憐むべく、その志や惡むべし。

六、太子馬子を赦し給はず

難者更に曰はく、聖德太子が、『過去の報なり』と嘆息せられたりや否やに關する所論、正に然るべく、又正に然らざるべからず。されど、何故に、聰明なる太子が、逆徒馬子と共に朝に立ち、提挈三十年の久しきに及べるか、これ明に、太子、馬子の弑逆を寬容し給ひしものと解すべからずや。果して然らば、この點に於て、太子を非難するは、非難するものゝ誤りにあらざるべし、如何と。善哉、問や。今正に答へむ、冀くは諦に聽け。

禪讓放伐の危險思想を包藏せる、支那の儒教の信奉者ならばいざ知らず、穴穗部皇子を助けて、簒奪の計略を廻らしたる物部守屋を尊敬する、一部の神道者流ならばいざ知らず、天下何人か、弑逆を是認し、逆徒を寬假する痴呆漢あらむや。蘇我馬子が、崇峻天皇を弑し奉りたる大逆無道は、天人共に容れざるところ、

聰明に渡らせられたる聖德太子の、いかでかこれを赦し給はむや。皇室の爲なり、國家の爲なり、叔父君の爲なり、おのれやれとは思召しつらむも、時利あらずして、殊に力足らざりしを如何せむ。强ひて輕擧して、馬子を誅せむとして、却つて馬子のために敗れむか、たゞさへ横暴無比、弑逆をさへ憚らざる馬子、勢に乘じて、何事を爲さむも未だ測り知るべからず。弑逆に次ぐに弑逆を以てし、遂に或は天位を窺ふなきを保すべからず。少くとも、國は亂れむ、民は苦しまむ。自ら力を揣らずして、進んで皇統を危くし、國家を擾亂し、國民を痛苦せしむること、聰明なる聖德太子の、到底忍び給ふこと能はざるところ。加かず、徐に計を定めて、この逆賊及びその一族をして、再起すること能はざらしめむには。乃ち、聖德太子は、皇室の萬歲、國家の安泰、國民の幸福のために、姑く恨を呑み、怒を抑へ、表に馬子を信任するの意を示し、裏に逆賊誅戮の刄を研ぎすましつゝ在せしなり。これこの太子の苦衷を諒とせず、遠大なる理想を看取し得ずして、たゞ逆徒馬子と共に、朝に立ち給ひしといふ表面の事實に膠着して、以て、太子馬子の大逆を赦し給へりとなし、太子を非難せむとするさへあるに、甚だしきは、春秋の筆法とやらむいふを振廻はして、太子崇峻天皇を弑し奉るなど論ずるものある、これをしも奇怪ならずと言はゞ、天下何ものゝ奇怪かこれあらむ。

七、太子の眞精神大理想

聖德太子の眞精神と大理想とは、その制定にかゝる十七條憲法中に躍如たり。十七條憲法は、實に本邦成文法中、最古のものにして、『太子傳補闕記』に、

太子、即制十七條政事修國修身事、

と記せるが如く。當時政治の局に當れる吏僚に對する、道德的政治的訓誡にして、太子の政治上に於ける理想と方針と要綱とを示し、以て、國家統治の精神を、明にし給ひしものと見ることを得べし。その文章、奇古にして含蓄多く、遠く漢魏の遺風ありと稱せられ、單に一篇の文章としてこれを見るも、萬世不磨の佳作を價す。況んや、その佛教の精神と、儒家の德目と、法家の思想とを併せ採りて、巧にその大理想を道破し給ひしに於てをや。即ちこの十七條憲法の、日本政治史上に於ける地位の重要なることは、近く、明治天皇の欽定憲法と相對して、毫も遜色なきものと稱すべきなり。

按ずるに、太子の憲法十七條、孰れも重要ならざるはなしと雖も、中に就き、馬子の弑逆に對する太子の態度の、如何に公明正大なるものありしかを證據立つべき、最も重要なる條項は、即ちその第一條と、第三條と、第十二條となり。

第一條に曰はく、

以和爲貴、無忤爲宗、人皆有黨、亦少達者、是以或不順君父、乍違隣里、然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成、

太子は、親しく、蘇我物部兩黨が、政權爭奪の渦中に投じ、閥族の勢を得るは、皇室の繁榮、國運の發展、國民の向上を妨ぐるものなることを痛感し給ひ、幸にして、第一の閥族たりし物部氏を倒すことを得たりしも、蘇我氏の跋扈はこゝに第二の閥族として暴威を振ひ、如何ともすること能はず。縱令、これを討滅することを得たりとするも、黨爭の根本的解決の方途樹たずむば、第二の閥族倒れむも、第三の閥族第四の閥族現はれ來りて、永久に廢止するところを知らざるべし。これを深憂し給ひたる太子は、即ち憲法第一條に於て、まづ、國家を治むるの要道は、朝野和合、上下一致するに在りて、夫の徒に黨を樹てゝ鬪爭するが如きは、天下擾亂の基なることを切言し、久しく大臣大連が、相嫉視して紛爭止むことなかりし氏族制度の弊害を、根本的に廓清し、以て蘇我氏が頂門に、一大鐵槌を下し給ひしなり。

第三條に曰はく、

承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、方氣得通、地欲覆天、則致壞耳、是以君言臣承、上行下靡、故承詔必愼、不謹自敗、

君は天なり、臣は地なり。天は覆ひ、地は載す。若し地にして天を覆ふが如きことあらむか、これ正に宇宙の破壞にして、世界の滅亡なり。即ちこれ、天皇神聖の主張にして、帝國憲法に謂はゆる『天皇ハ神聖ニシテ犯スヘカラス』とあるは、その意實にこの條に發したりと言ふべし。世の太子を非難せむと欲する人々が論難に考慮一番せよ。天皇神聖論の主張者が、弑逆を是認すといふが如きことの、果して有り得べしや如何。たゞ、弑逆を行ひたる時、直にこれを誅戮し給はざりしもの、強ひて隱忍して、機緣熟し、時節到來するを待ち給ひしに外ならざりしなり。第十二條に曰はく、

國司國造、勿斂百姓、國非二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓、

即ち太子は、封建制度を打破して、國體の基礎を鞏固ならしめむがために、國に二君なく、民に兩主なしと說き、以て天皇中心主義を宣明し給べり。惟ふに、太子以前の日本の政治は、明に地方分權の制度にして、國造伴造の勢力强大なりしがために、天皇の御稜威も、或は四海を壓し給ふこと能はざりしやも未だ知るべからず。これを以て、日本の國體は、萬世一系にして、日本の國家は、天皇これを知し召すべきこと、もとより言を待たざるところなれども、しかも、事實は、國造伴造の封建的政體は、地方分權

の性質上、神武天皇以來、天皇の直轄地とも言ふべきもの、甚だ廣からざりしなり。この封建制度を打破して、以て、天皇の大權の下に一統し、日本の政治の根本的改革を企て、眞の國體の基礎を築き給ひしは、實に聖德太子にして、この一事を以てするも、尙且つ太子は、全國民の、深厚なる崇敬を受け給ふべき、偉大なる政治家にてましませりと言はざるべからず。

國司國造とは、地方諸侯の總稱にして、當時の日本の土地及び人民は、多く國司國造の所有にして、國司國造は、直接に其の人民より租稅を徵收せり。されど、日本に於ては、人民に對して、徵稅の權能あるものは、天皇御一人たるべきものなるに、從來、天皇の下に國司國造なるもの存せしがために、恰も、人民は、二重に君を戴くが如き奇觀ありしなり。この奇觀を打破して、普天の下皆王土、率土の濱皆王臣の實を現じ、飽くまでも、天皇の權力を絕對神聖なるものとなし、以て天皇の位置を高く且つ尊きものとなし給はむこと、全く聖德太子の大理想たりしなり。この大理想の實現によりて、以て、蘇我氏の如き閥族をして、自然に滅亡せしめむと欲し給ひしこと、全く聖德太子の眞精神たりしなり。此くても尙、太子馬子の大逆を是認し給ふと誣ふることを得べきか。惜しむべし、天、太子に壽を假さず、僅に四十九歲にして薨じ給ひ、馬子誅戮の機緣熟さず、時節到らず、蘇我氏一族が、天誅に伏して滅亡することを見給はざりしことは、誠に遺憾の極みなりといふべきなり。されど、皇極天皇の時に至りて、逆く太子の理想の一面は實現せられ、中大兄皇子によりて、蘇我入鹿は誅せられ、その父蝦夷は自殺して、さしもに權勢を縱にせ蘇我一族も、こゝに全く滅亡し、孝德天皇の時に至りて、太子の理想の他の一面は實現せられ、政治の面目全く一新を見るに至れり。蓋し、大化の改新は、全然太子の遺策を繼承し給ひしものと見るべく、太子によりて派遣せられたる留學生、僧旻、高向玄理等の立案に成りしものなることを思へば、太子また、以て瞑す給ふことを得べきか。

八、太子の御一族と蘇我の一族

虎子を獲むがために虎穴に入るものゝ心は、逆徒馬子ゝ並立ちて、政治を知し召したる太子の御心なり。蘇我氏の如き勢ある閥族を敵視し、不和合の狀態にて、睨み合ひ居給はむには、到底、蘇我氏のために、忌まれ憚られ、遂に太子も亦、未だ蘇我を滅ぼさむとする大目的を達し給はざるに、却つて、崇峻天皇同一運命に陷り給はむも、未だ知るべからず。こゝに於て、涙呑みて馬子と結び、秋毫の隔意なきを示して、徐に理想の實現計り給ひしなり。然るに、虎の如かりし馬子も、憲法の制

りて、太子の犯すべからざる威力に恐悚し、窃に爪を研ぎつゝも、しかも、太子の前には、全く柔順なる猫の如くなるに至れり。されど、太子薨後、漸くその野獣性を露し、推古天皇卅二年（太子薨後二年）に二臣をして、大和の葛城縣を賜はらむことを奏せしむ。天皇詔して曰はく、

今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣夜不明、日言矣日不晩、何辭不用、然今當朕之世、頓失是縣、後君曰、愚痴婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之悪名、則不聽、（推古天皇紀）

天皇の公明正大なる御心は、斷乎として情實を斥け、敢然としてその請を拒絶し給ひしこと、何ぞそれ痛快なるや。こはたゞ一事例のみ、此くの如きの驕恣と横暴とは、殆ど數ふるに堪へざりしところならむ、爾來、聖德太子の御一族と、蘇我氏の一族との關係は、次第に險悪となり、遂に、聖德太子の御子、山背大兄皇子御一族廿有餘人が、馬子の孫入鹿のために亡ぼされ給ふに至れり。かゝる悲慘事も、畢竟、聖德太子が。如何にかして、馬子及び蘇我の一族に制裁を加へむとし給ひしに對する、蘇我の報復ならずとせず。『書紀』は、此の一段の悲劇を叙して曰はく、

山背大兄王等、自山還入斑鳩寺、軍將等則以兵圍寺、於是、山背大兄王、使三輪文屋君謂軍將等曰、吾起兵代入鹿者、其勝定之、然由一身之故、不欲傷殘百姓、是以、吾之一身賜於入鹿、終與子弟妃妾、一時自經俱死也。（皇極天皇紀）

嗚呼、何等悲壯の最期ぞや。殊に、兵を揚げて入鹿を伐たば勝[illegible]歴々たるものあるにも拘らず、かくては、無辜の國民を傷[illegible]すこと少からざるべきを慮り、國民の生命と財産との安固のた[illegible]に、其一身を入鹿に賜ふといふ。その慈悲宏大、眞に救世[illegible]あり。御父聖德太子は、國家のため國民のために、恨を呑みて[illegible]徒馬子と朝に並び立ち給ひ、御子山背大兄王も、亦、國家のた[illegible]國民のために、御一族を擧げてこれを入鹿に賜ふ。その公明正[illegible]仁慈博愛の御精神は御父子を一貫して、全然符節を合す。吾等[illegible]民、此くの如き大人格を尊崇恭敬し奉らずして、はた何をか[illegible]か尊崇恭敬し奉るべきか。『書紀』が、聖德太子の薨去を記して

是時、諸王諸臣及天下百姓悉、長老如失愛兒、而鹽酢之味在[illegible]不甞、少幼者如亡慈父母、以哭泣之聲、滿於行路、乃耕夫[illegible]舂女不杵、皆日月失輝、天地既崩、自今以後誰恃哉、（推古天[illegible]紀）

と。國民の哀悼思慕、殆どその極に達せるを見ずや。而して、山[illegible]大兄王の薨去に際しては、

于時、五色幡蓋、種種伎樂、照灼於空、臨垂於寺、衆人仰觀稱[illegible]（皇極天皇紀）

と記せり。天に異象を生ぜりと想はしむるまでに、時人を感激せしめたるのみならず、入鹿は、その父蝦夷によりて、

噫入鹿極甚愚癡 專行暴惡、儞之身命、亦不殆乎(皇極天皇紀)

と嗔罵せらるゝに至る。又以て、山背大兄王の德望を、察するに難からざるにあらずや。

九、史實の批判と時代思想

予は敢て、過去に於て、佛教が日本化したるが如く、儒教が日本化したるが如く、近くは、デモクラシーが日本化しつゝあるが如く、將來、幾千百年かの後、アナーキズムの日本化を見るべしと言はむと欲するものにあらず。又予は、今を距ること餘り遠からざる、德川時代の政治及び道德さへ、今日の思想を以てこれを批判すれば、增補訂正若くは全然削除せざるべからざるもの多きが故にといふを理由として、千三百年前の史實を批判するに、進歩せる今日の思想を以てすることを危險なりと言はむと欲するものにあらず。又予は、崇峻天皇が縱令、弑逆のために崩御し給ひしとは言へ、『其日これを葬り』奉りて、朝野一人のこれを怪しむものもなかりしといふ事實は、朝野の人々が、蘇我氏の威勢に恐を懷きて、故らにこれを怪しまざるが如きを粧ひたりしものなるか、或は、當時の國民思想に、何等かの缺陷ありて、弑逆に對して、これを怪しみ、これを處分せむとするが如き觀念を起すだけの、力をさへ有せざりしものなるか、などゝいふ疑問を挿まむと欲するものにもあらず。又予は、難者が、聖德太子の佛教の理に通曉し給ひしことのみを知りて、その儒學にも精通し給ひしことを知らず、却つて太子佛に薰するがために、馬子の弑逆を寬恕せりといふに對し、儒教には、殷紂夏桀の如き、暴君は天に代つてこれを誅すといふ思想あれども、佛教は、元來、慈悲の教にして、殺生を五戒の隨一となすものなるが故に、馬子の大逆を思想上より批判せば、佛教の感化と言はむよりは、寧ろ儒教の影響なりと言はざるべからず、殊に、直接手を下して大逆を敢行したる東漢直駒は、儒教を家業としたるものならずや、など言はむと欲するものにもあらず。又予は、太子が、弑逆の下手人たる東漢直駒の一族を、不赦の例に入れ給ひたることのみを以て、太子の弑逆に對する態度の、如何に峻嚴なるものありしかを看取し得べしと、言はむと欲するものにもあらず。たゞ、歷史事實の批判は、事實そのものゝみを分析解剖して、原因結果を闡明するのみにとどめず、當時の社會の狀態、國民の思想、事件の周圍、及び背景等をも、謂はゆる紙背に徹する底の史眼を以て、深刻なる觀察を下し、且つその當時の標準思想を尺度とし、依つて以てこれを批判し、これを斷定すべきものなることを、叫ばむと欲す、

のなり。

十、皇統の連綿と太子

萬世一系の皇室、儼として今日に存するのみならず、天壤と共に無窮なるべきは、もとより國體の然らしむるところ、國民忠誠の致せるところ。しかも、又、千三百年以前、聖德太子が、自己の力を揣らず、一時の怒に乘じて、輕擧妄動し給はず、徐に計を樹てゝ、理想の實現に努力し給ひ、第二第三の馬子の出づること能はざるに至らしめ給ひしことも、亦與つて大に力あることを思ひ、日本の國民は、その儒者たると、神道家たると、將た基督教徒たるとを問はず、等しく、太子に對して、無限の感謝を捧げ、佛教徒のみが、太子を私すべきものにあらざる所以を、明にせざるべからざるなり。佛教徒また、太子を我物顏して、我田引水的の

護論をなすが如きを愼しむべし。何となれば、太子の行藏は、末世の坊さんを煩はして、その辯護を請はざるべからざる程の、弱點を有し給はざればなり。否啻に然るのみならず、太子の心事彼が如く公明に、太子の態度彼が如く正大なり、また、何者の辯護をか要し給はむや。世に若し、強ひて太子を辯護せむと企つるものあらば、それは全く僭上の沙汰なり、その贔屓の引倒しに終こと、『傳暦』の記事の如く、坊さんのお說教の如けむ。然り、もとより敢て辯護を要とせず、たゞ眞に、太子の偉德と鴻業とを讃嘆せむと欲するものあらば、たゞ須く、史實の根本的研究によりて太子の眞精神と、太子の大理想とを闡明することを得て以て足れりとすべきにあらずや。（大正九年三月五日）

馬宿の娘

村松梢風

一

松平越中守定信が、奥州白河から、祖先の地である勢州桑名へ轉封になつたのが、文政六年であつた。おなじく九年四月、致仕して家督を忰定永に讓り、越えて文政十二年五月十三日、薨は江戶の上屋敷に於て死去した。墓は深川靈巖寺にある。

定信に男の子が二人あつた。長子が定永で、次男は信州松代藩へ養子に行つて眞田幸貫と稱した。此の人は後に老中を勤めた。

徳川十五代の治世を通じて最も偉大なる政治家とされてゐる松平定信卽ち白河樂翁公の事蹟は餘りに有名であるから爰に叙說するの要はあるまい。が、斯かる偉人を父に有つた定永と幸貫の事はあまり世間でも識るまいと思ふ。由來英傑の二代續いた例はなく、偉人の子は凡人、明君の後は必ず暗君と相場が極まつたやうに思はれてゐるが、然し是れも一種の見樣で、時代と境遇を勘定に入れずにいきなり天賦の賢愚を品評するが爲めに隨分と酷に陷る場合がある。蓄財家の悴が、道樂をすると馬鹿野郞にされるが、其の實親父と雖も最初から金持の若旦那だつたら遊蕩兒になり兼ないのと同じ事だ。定永幸貫の場合は夫れとは尠しく異ふが、矢張り、なまじ父が偉過ぎたばかりに兎角此の兄弟は光彩の乏しいものになつてしまふ。

けれども、事實に於ては、二人とも非常に優れた處を有つてゐた。何れも父の子たるに恥ぢない兄弟だつた。が、夫れは全然異つた方面に於て兩者とも頭角を抽でてゐたのであつて、此の二人は兄弟とは言ひ條全く相背馳した兩極端の立ち場を代表する人物だつた。一と口に言ふと、兄の方は風流三昧で何處か隱遁的の色彩を帶びた人物であつたが、弟の方は是れに反して剛毅質撲、そして何處迄も活動家であつた。渠は最も良く父の衣鉢を傳へてゐると言はれてゐた。詰まり名宰相としての樂翁公の面影は、此の次男幸貫の上にのみ遺憾無く躍動してゐるのだつた。渠は父に似て學問を好むだが、夫れは經世を最後の目的とする政治家の修養から一步も出てはゐなかつた。佐久間象山を拔擢したのが渠であるが、是れとても詰まりは其の意味に他ならない。唯、渠が老中の座に列したといふに止まり、史上に功名の赫々たる物を殘さないといふ事を以て直ちに政治家としての器量が父に劣るものと考へるのは早計である。渠とても、父定信が田沼が秕政の後を受けて幼君の輔佐役に推され、將軍の從叔父たる威光を以て天下に臨むだ如き有利なる立ち場に置かれたのであつたならばどれ丈の手腕を振るつたのかも分らないではあるまいか。此の弟幸貫とは全く正反對の傾向を有つて生まれたのが定永である。然らば定永は父に似つてゐなかつたのかと言ふと決してさうではない。樂翁公といふ人は單なる政治者流の人物ではなく、一面綽々たる餘裕を存して風流の道にも造詣の深かつた事は洽く世の知る處だが、其の血が長子定永に流れ引いて、更に更に完成された物になつてゐるのだつた。偉人松平定信の面影を偲ぶには、此の兄弟二人を合せて見て、初めて完全な物と言はれるのだつた。

定永は飽く迄優雅な人物であつた。其の上に、徳川の華と謳はれた化政の爛熟期に遭遇して、高貴權勢の門に生まれて何の苦勞も知らずに人と成つた定永は、全くみやび男の典型であつた。風流の道であるならば、渠は何一つ暗いといふ事はなかつた。詩歌俳諧は言ふに及ばず、管絃の道にも堪能で、書は父の代から仕へてゐる谷文晁に學んだ。茶道は最も得意とする處のもので、家中でも滿足に渠の茶の相手を爲し得る者は無かつたほどである。要するに渠は、將軍家齊と並んで其の時代を代表する最高のデカダンであつたと言つて宜ろしいのである。

私は、此の桑名九代の藩主、從四位下左兵衛少將松平越中守定永公に傳はる一つの物語を書いて見やうと思ふのである。

二

暖かい日が二三日續くと、物の感じが何となく柔かに活き活きとして來て、急に春らしくなつて來た。城の外には南へ直ぐ海を控へてゐるので、甘いやうな潮の香が空氣の中に滲み込んで流れてゐる。空は朝から青々と澄んでゐた。其の青空へ城の周りを取り圍んで立つてゐる大きな松の木が、どれも是れも繪に畫いたやうな面白い枝振りを見せて突き出てゐる。ついさき頃迄切るやうな冷たい風を吹き下ろしてゐた鈴鹿山の峯が何時の間にか跡方もなく消えてゐた。

餘り戸外の天氣が佳いので、定永は家の中に閉ぢ籠つてゐるのが莫迦々々しいやうな氣持になつた。草木でさへも春を迎へた歡びに耀いてゐる。暖かい、暢び暢びとした自然に包まれた時の、體も心も其の中へ融け込んで仕舞ふやうな快さを渠は想像した。

「今日は久し振りだから佛參をしやう――」と、渠は考へた。

菩提所は照源寺といふ寺で、桑名の城下から半道ばかり西へ寄つた大山田村といふ處にあつた。渠は大抵月に一回其の寺へ佛參に行くのが例になつてゐたが、先月は餘り寒さが嚴しかつたためについ出掛ける日が無くて仕舞つた。

「丁度梅が見頃だらう――」

夫れから道々の景色も渠の眼に浮かんだ。繁華な城下の町を長閑な野路丁度箕位に麥が伸びたであらう。あの水々した緑色の縞を織り出してゐる麥畑――と角一と足外へ踏み出せば、暗鬱な冬の穴倉から解放されて總ての物が雀躍りしてゐる……

「これよ……」と、定永は緣側に立つたまま人を呼んだ。

「お供しに御座りまするか」

髮を高島田に上げて帶を大きく矢の字に背負つた腰元が一間ばかり側へ寄つて蹲踞まつた。

	著者	書名	冊	定價
	小林房太郎	新地理 外國 中學用	中	金五拾九錢
(新)	中川詮吉	最新平面幾何教科書	全	金壹圓六錢
	安東伊三次郎	中學生理衛生教科書 改訂版	全	金七拾七錢
(新)	圖書教育研究會	中等圖畫教科書 再訂	三	金五拾七錢
	小島憲之	用器畫教科書 投影圖法	上	金五拾參錢
	保科孝一	大正國語副讀本	三	金四拾五錢
(新)	仝人	大正日本文法	上	金參拾六錢

「今日は唯今から佛參にまゐるぞ。表へ申し付けて用意を致せと申せ」

「畏りました」

腰元はもう一遍お辭儀をしてから起つと、矢張り軀を屈めた儘徐かに後退りをして向うへ行つた。定永は夢を見るやうな眼つきをした空を眺めてゐたが、軈て性急な足取りで自身の居間へ這入つた。

其處から尾州宮の宿(熱田)へ通ふ七里の渡しの渡船場には今しも出帆しやうとする船が可成りの客を乘せて停まつてゐた。然し船は出さうに見えてゐてなかなか出なかつた。陸へ上つてゐる一人の船子は町の方を向いて頻りに竹法螺を「ブウー／＼」と鳴らした。其の音に驅されて、乘り遲れては大變だといふ樣にあちらからもこちらからも旅人が驅けて來る。側らの大塚本陣の門前には「松平――守樣御休」と書いた大きな立札が建ててあるばかりで、まだ同勢が到着せぬと見えて奥の方まで寂りと靜まつてゐる。

川口には絶え間なしに船が通つてゐる。小舟も、傳馬も、澤山帆を掛けた大きな親船も通る。漫々たる川水の上に緑の松の枝や朱塗りの祠の影を繪の具を溶かしたやうに滲ませてゐる水神の社の邊りには夫れらの船が無數に碇泊してゐる。其處から深く入り込んでゐる堀割の奥には土藏が幾棟も立ち並んで、白壁からギラ／＼と陽を反射してゐる。

渡船場は、丁度城の内濠と川との出合ひになつてゐた。濠の外側には町家の家が並んでゐた。内側は嚴重な石垣で、其の上の土手には大きな松が枝を組み合はせる程に立ち並んでゐる。城廓の隅に門があつた。それを舟入門と呼んでゐた。門の眞下の處には何時でも御座船と傳馬が一艘づつ退屈さうに舫つてゐた。

と、舟入門から立派な武士が出て來て、無造作に傳馬船に乘り移つた。其の後から隨つて來た二名の武士が左右へ、艫の處には船役人らしいのが一名畏つてゐる。艄子は棹を一つ石垣へ當てて置いて櫓に手を掛けた。船は徐かに前へ出た。鳥の翼のやうに擴がつて行く水面の波紋が濠の奥の方迄傳はつて行つた。

陸に居る者も渡船に乘つてゐる者も皆眼を峙てて其の舟の方を見た。問屋場役人だの船頭などは各々居合せた場へベタ／＼土下座を突いて頭を下げてゐた。

船がこちら側へ着くと定永はヒラリと陸へ上つた。二名の武士も續いて上つた。主從の者は直ぐに町の方へ歩いて行つた。

定永は、佛參に行く時は何時でも徒歩で行つた。そして供も矢張り今日のやうに大小姓を二名連れて歩くばかりであつた。

平常の渠はどちらかと言へば形式を重んじ過ぎる位の人間でもあつたから、猶更そんな輕々しい振舞をするとは不思議なやうにも聞こえるが、夫れには又別の仔細があるのだつた。全體、定永といふ人は非常な美男だつた。渠の父の定信も、大きな眼と氣高い鼻とを有つた立派な男ではあつたが、渠は寧ろ其の父よりも母に似てゐた。渠の生母は眞順院と言つて古今無双の美人と言はれた人であつたが、渠は其の母の美貌を其の儘生き寫しに繼承したゐた。弟の幸貫が父に似て容貌も男性的であつたのと反對に、渠の容貌は寧ろ女性的ではあつたが、夫れだけに人を魅するやうな濃艶な美しさをもつてゐた。或人が渠の風采性格を目して古の源實朝卿に比較した事があつたが、さうした批評が人々をして十分肯かせることが出來た程渠は氣高さと艶やかさを有つてゐたのである。渠は道樂といふ範圍に屬する事で何一つ手を染めないといふ物は無かつたが、然し假りに其の中で一番優れた藝を以てした處で、或ひは又渠の身に具はつてゐる處の門閥や官位の尊嚴を以て臨んで見た處で、夫れらは到底渠の容貌風采が人に與へる程の大きな感動を起させる事は望めなかつた。詰まり渠の身に附いてゐる總ての物の中で一番優秀な物と言へば渠の縹緻だつたのである。渠は自身でもよく夫れを承知してゐた。渠の最上の誇りも、强味も、其處にあるのだつた。渠は子供の時分にひどい腕白をしたものだ。其の惡戯が餘りしつこくなると終ひには誰れでも腹を立てて來る。さうした場合に渠は飽く迄も相手を怒らせて置いて、軈て一番最後にぴたりと惡戯を止めて媚びるやうな眼付きをして嫣然笑つて見せる。すると相手は忽ち其の美貌に魅せられて今迄の腹立ちも何もかも忘れて仕舞つて、思はず自分まで笑顔に引き込まれて仕舞ふ。あの嚴格な父の定信でさへもさうだつた。恁うした事から渠は知らず識らず、謂はば人を制する利器が自身の容貌にある事を子供のうちから自覺したのだつた。渠は現在でも自身の容貌に對して何より強い誇りを有つてゐた。と同時に、己れの顏をば人に見せるといふ事が有らゆる場合に於て良い結果を生み出すといふ自信をも有つてゐた。渠が城下を乘物を用ひずに歩くといふのも、詰まり此の誇りと政略との二つの心持から出てゐる事だつた。家臣の者や城下の民はそれを「殿樣の御縹緻自慢だ」と蔭では言つてゐたが……。

定永が知らぬ間に、渠の通行する道筋へは布れが廻つてゐた。家々では門先きへ蓆など敷いて、家内中夫れへ出て座つて殿樣のお通りを拜むのだつた。

玉虫色に耀く錦の羽織に同じやうな袴をはき、金銀作りの細身の大小を手挾み、麻裏草履をはいて、宛ら錦繪から拔け出し

たやうな美しい姿をした定永は、路傍の者に對しても例の微笑を與へながらさも愉快さうに歩いて行つた。

三

或晩定永は當直の侍の詰所の前を通りかかつた。すると、障子を閉め切つた部屋の中から頻りに話聲が聞きえて「お上お上」といふ言葉が耳についたので、不圖立ち聞きして遣らうといふ氣になつて、そつと足音を盗んで近寄つて行つた。

「全く可哀相な咄だな。夫れも是れも皆もとはお上の酔興から起きた事だ、そんなのが幾たりも出來て來ぬうちにお上も徒歩(おひろひ)の御佛參だけはお廢めになればいいのに――」

「夫れに違ひない。然し、お上も飛んだ處へ罪をお作りになつたといふものだて」

恁う言つて二三人で聲を忍ばせて笑つたが、話は其處で切れて仕舞つた。定永は忽ち顔色を變へて、足音も荒く其處から自分の居間へ戻つた。

詰所に居た藤田忠左衛門、永井久之進どいふ二名の侍が時を移さず渠等の君公の御前へ呼び出された。彼等は一と眼仰ぎ見るなり主君が甚だしく不興である事を知つた。黒眼勝ちの切れの長い定永の眼には滅多に見たこともないやうな憤怒の色が燃えて、まな尻が吊り上つてゐた。彼等は直ぐにさきの足音の事を思ひ出した。

「これ！ 其方達は今詰所で何を話してゐた？」定永は其眼で兩人を睨み付けながら天性細い聲を餘計に甲走らせて言つた。

「は――」兩人は一度に聲を發して疊へ喰ひ付くやうに頭を下げた。

「其方達は予を誹謗して居つたであらうが……」

「いえなかなかもちまして左様な事が……」

「默れ！ それでは何んで予が佛參に徒で行くのを惡いと申した？ 久之進、其方は予の事を罪作りとか申したな、さ、夫れはどういふ譯ぢや？」

定永は脇息を後へ押しけるやうにして前へ乘り出しながら疊み掛けて言つた。家來の分際として主君の行爲に就いて兎や角蔭口を弄するとは不埒千萬な者共だ。且又佛參に微行する事が決して惡い事である道理は無い。以前も一度此の事で家老の久松十郎左衛門が、餘り輕々敷く渡るからと言つて諫めた事があつたが、渠は決してさうは思つてゐない。此の泰平の代に而も己れの領分を歩くさへ、鎗を立てたり行列を揃へたりしなければ危險だとか尊嚴が保たれないとかいふやうな事でどうなる。縱ひ裸で通行したからとてわれは一城の主だ。全體、領民をし

しみ懐かしめんが爲には已れ先づ渠等に親しんで見せなければならぬ。此考が誤つてゐない事は日頃自分に對する渠等の忠實な態度でわかるではないか――と、定永は堅く信じてゐるのだ。

　家來の者は何んとか辯解しなければならなかつた。渠等は、如何にして自分達に對する君公の誤解を説き、そして各々の忠節を明かにする事が出來るかといふ事で思ひ惱んだ。定永の怒りは全く見當違ひだつた。

「恐れ乍ら忠左衛門申上げます。先刻徒然の折柄雜談の端が思はず我君のお噂に亘りました處、計らずもお耳に入りましたかにて、何とも恐れ入りました次第で御座りまする。が、何しに以て吾々が我君を誹謗仕りませう――決して左樣な譯では御座りませぬ……」

「では何を話して居たのぢや？　有體に申して見い」

「は……實は取にも足らぬ事――改めてお耳にいれる程の儀では御座りませぬ。此の段は平に……」

「成らぬ、成らぬ。何事でも有體に申さぬに於ては此の儘には許し置かんぞ」

　兩名は絶體絶命といふ容子に見えた。忠左衛門は額からボタ〳〵汗を流しながら並んで座つてゐる同僚の顔をチラと覗いて見た。すると久之進も横目を使つて「いつそ申上げて仕舞つた方が善いだらう」といふやうな顔つきをして見せた。夫れで忠左衛門も漸う決心が付いたらしく顔を上げた。

「では申上げる事に仕りまする。が、誠に莫迦々々敷い事で御座りますれば何卒お笑ひ草と思し召されまして、此の場限りにお聞き流しの程が願はしう存じまする」

　忠左衛門の話は、定永の耳には全く新らしい思ひも寄らぬ事だつた。夫れは恁ういふ譯だつた。此の桑名の城下に、本陣の居宿渡世江戸屋小左衛門といふ者がある。其の小左衛門の一粒種でおまんといふ今年十七になる、江戸屋小町とまで謳はれる評判娘がある、處が、此のおまんが去年の秋頃からブラ〳〵病ひに罹つてゐる。醫者に見せても別段體に異狀は無い。歳ごろの事ではあるし、何か心に思ひ詰めてゐる事でもあつて夫れが病の原因になつてゐるらしいと言ふので、兩親から夫れとなく問ひ糺して見ると案の如くおまんは戀煩らひをしてゐるのだつた。子故に迷ふ親心で、小左衛門夫婦は夫れ程娘が熱心の男であるならば必ず思ひを叶へさせて遣るからと言つて、相手は何處の何者だか言はせやうとしたけれど、娘は容易に夫れを明かさなかつた。明かさなかつたのも道理である。おまんの意中の人といふのは御領主様だつた。御佛參にお通りになる御領主様のお姿を拜むでから、彼女は人知れず其の幻を胸に秘めて暮らして

ゐるのだつた。夫れと知つた兩親の騷きは譬へやうもなかつた。彼等は代る〴〵娘を叱つたり諭したりして其の非望を斷念させ度いと思つたが、何の因果かおまんは諦らめる事が出來ないのだつた。所詮及ばぬ戀である事は知つてゐながら思ひは益募るばかりで、近頃では夫れがために病の褥について枕も上らぬ體になつて仕舞つた。双親も嘆いたけれども仕方が無い。憐れな事と言へば、過日も定永が久し振りで佛參に出掛けた時、江戶屋の夫婦は病み窶れた娘を兩方から助けて門先きへ連れ出して、餘所ながら娘にお暇を告げさせたいといふのであつた。

定永は何んとも言へない異様な感動を受けた。此の世に夫れ程迄自分を思ひ詰めてゐる女があるといふ事が、彼の胸に强い滿足な氣持を起させた。日常自分が相手にしてゐる女達にも果して夫れ程の眞情を有つてゐる者があるだらうか。夫れ程の切ない心持に比べて見たならば渠等のは殆んど戀とは云へないものだ。卑しい馬宿渡世の娘が此の世に於て自分に與へられた唯一の戀の相手であるのかも知れない……

「ふびんな奴ぢや――」

渠は溜め息を突くやうに恁う言つて、非常に懷かしいやうな氣持でおまんといふ女を腦裡に描いて見た。

四

其の晩餘程夜が更けてから江戶屋小左衞門の門口を叩く者があつた。奉公人が起きて表の戶を明けて見ると、往來に立派な乘物が一挺据えられてあつて、其の側に二三人の侍と仲間が立つてゐた。

「あゝこりやこりや、是れへお越しになつたのは御領主様よりのお使であるぞ。主に申し傳へて粗忽の無いやう御出迎ひを申せ」と、一名の侍が前へ進んで來て言つた。

小左衞門夫婦の者は仰天した。娘の一件が役人の耳へ這入りでもして其の御咎めを受けるのだかもしれないと思つた。然し夫れならば晝間役所へ呼びだされさうなものだのに、深夜に及んで而も殿様からお使者が來るといふのは譯がわからない――兎に角愚圖々々しては居られないので、手早く衣服を革めて門口へ出て土下座を突いてゐた。

乘物から出て來た人を見ると、歳頃四十前後の奧勤めの老女であつた。老女は一人だけ侍を連れてずつと奥の座敷へ通つた。

小左衞門は次ぎの間迄恐る〴〵出て行つた。

「これは〳〵、御使者様には宜うこそのお越しに御座りまする。手前事は當家の主小左衞門めに御座ります。御用の趣きをお聞

かせ下さりまするならば有難い仕合せに存じまする――」

すると老女は思つたより穩やかな聲で

「これ〱、今宵妾が參つたは殿樣のお言ひ付けではあるが、何も六か敷い事ではないほどに必ず心配しやるには及ばぬぞへ」と言つて品よく笑つて見せた。

「そちにはまんと申す娘があるであらうの？」

「はい、まんは手前に取りましてたつた一人の娘で御座りまする」

「其のまんが久敷く病で臥せつてゐるとの事ぢやが、全く左樣かの？」

「御意に御座りまする」

「して、昨今氣分はどうぢや？」

「お有難う存じます。娘の病氣は日增しに重くなりまするばかり、最早何時とも知れぬ有樣で御座りまする」

「ふーむ、氣の毒な事ぢやな。何とかして今一度本復させる事は出來まいかのう」と、老女は顏の色を曇らせて言つた。

小左衞門は思はず吊り込まれて老ひの眼からホロ〱泪を零した。

「樣々手も盡して見まして御座りまするが、何を申すにも久敷く食事も取りませず、衰弱が劇しく御座りますので、最早到底助かる見込みは無いとお醫者樣も申されまして御座りまする」

「はてさて殘念な事ぢやのう」と老女も力を落したやうに言つた。

「小左衞門、まんが病氣の趣きがお上のお耳に入り、ふびんな奴ぢや、折角養生致せとの有難いお言葉、其の上お垢付きのお小袖を一重ね下し置かれたのぢや。其方娘に代つて謹んで拜領致すが宜い」

老女は威儀をもつた調子で恁う言つて、側らの侍に眼配せした。侍は小袖を載せた黑塗りの臺を恭しく持つて行つて小左衞門の前へ置いた。

おまんは其の夜死んだのであつた。朝まで誰れも夫れを知らなかつた。朝早くに母親が娘の病間へ行つて見ると、彼女は布團の上に突つ臥して夜前殿樣から拜領した小袖を靱りと抱き締めた儘疾うに體は冷たくなつてゐるのであつた。よくよく見ると、其の小袖の片袖ばかりが食べ散らされてあつた。

五高等學校對抗短艇競漕 一高對三高陸上競技野球戰 精評

春の運動だより

＝地方に居る彌次の某君へ＝

「東京日々新聞」記者　弓館小鰐

◇向ヶ岡の大鼓の響き

△△君――東京の運動界は、四月に入つて全く眩(めまぐ)るしい許りの賑かさだ。運動と云へば何を差置いても見物に出かけた大彌次馬の君が、今ま地方にスツ込んでる身となつて、嘸かしヤキモキしてる事だらう。彌次馬として君のいゝ相棒であつた僕は、友誼として又義務として、見聞した運動競技のくさ〴〵を注進せずばなるまい。

何と云つても是迄で一番の人氣を惹いたのは、一高對三高の野球戰だ。五日の筈が雨で延びて七日になつたが、丁度薄曇の野球日和。僕は晝前に家を出て本郷三丁目で乘換を待つたが、來る電車も來る電車も皆一高行の見物で鈴生りの滿員、何時迄經つても乘れさうでない。思切つて歩き出すと赤門に差掛る頃から、ドドン〳〵といふ太鼓の音に、ワツ〳〵と應援歌らしい騷音が交つて、人の心を唆り立てるやうに聞こえて來る。僕も外のテク連中も堪らなくなつて、一高の校門まで息せき駈付けたが、開戰までまだ一時間半もあるのに、もう門をおろして黃色の腕章をした委員が、門内から『一杯で迚も駄目だ〳〵〳〵』と怒鳴つて居る。せき止められて電車道まで溢れた群衆は、色〳〵と懇願するが頑强に撥ね付けて肯かばこそ、僕は漸く知つた顏の委員を見付けて、柵を越えて中に飛込まして貰つた。

グラウンドに行つて見ると驚いた、全くハチ切れさうな觀衆である。一壘の側には薄汚ない白旗を押樹てた一高の彌次軍が陣取り、根津權現其他から借集めた太鼓を砲列のやうに並べて居る。三高の應援隊は六旒の大きな赤旗を立てゝ三壘側に陣を

布き、京都から態々持つて來た吉田神社の太鼓を据えて敵に對峙し、もう練習を始めて居る選手の一擧一動毎に拍手する、太皷を鳴らす、歡聲を揚げる。試合前から既に應援の戰さだ。彌次隊の背後から櫻の蕾が薄く色付いた外野にかけて、周圍に重なり合つてる觀衆は、正味三萬はあらう。中には十時前から辨當持參でやつて來た者も、二三千あつたさうで、ネツト裏から遠望すると、其無數の顏が宛ら鮭の筋子でも撒いたやうだとでも云はうか、夫が應援隊の騷ぎに釣込まれて同じく戰鬪氣分になり、贔屓々々に依つてワイ〳〵騷立てる。イヤもう大した人氣だ。

◇興を唆つた島村馘首事件

△△君――君も御存じの通り此試合は技倆の戰ひとしてなら大して價値のあるものではない。日比谷公園あたりに行つても是位の技倆の試合なら見られるかも知れない。夫なのに此戰ひが斯くも世間の絕大な興を集めるのは、單に選手九人宛の野球技を見んとする爲ではなく、選手も應援も先輩も、全校擧つてブツカリ合ふ熾烈な熱が人を引付けるのである。彼等が自稱する如く一高の『自治』と三高の『自由』此兩校の標語(モットー)とする意氣と意氣の相搏つ燦爛たる火花が試合を終始緊張させ、觀る者を魅了するからである。殊に今年は此試合を一層興味あらしむべく、色々な前提の條件があつたから、斯くも驚くべき人を喚んだのだ。

その興味を唆つた條件は何々かといへば、第一に技倆伯仲眞箇の好敵手と目されて居た事である。三高は昨春大敗して歸るや、選手の大更迭が行はれ、宇津木古海伊藤の三者が殘つた丈他は總て新らしい選手に代つた。一高はそれ程大勢の變動はないが、其神の如き怪腕を以て二年續け樣に三高を慘敗の憂目に遇はした投手内村が大學に去り、此人在らば期し得べき必勝が期し得なくなつた。譬へば勝負(かちまけ)の豫想が大概の處まで付いて居ても、飽迄眞劍なこの試合は、常に人を熱狂させずには置かないのに、内村が去つて勢力が漸く、平均し、勝敗の豫案が全く出來なくなつたから一倍の興が湧いて來る。而も對戰が二週日の後に迫つた際に、内村の後を承けて投手板(プレート)に立ち、一年の努力を此一戰の爲に注いで來た鬪將島村の馘首事件が持上つたから、益面白くなつて來た。

この馘首事件の近因はかうだ。三月廿一日一高は其運動場で慶大と練習試合をやつたが、六回目に一高小田切の走壘から、敵の三壘手松本が妨害した、せぬで物言が付いた。特に斯麼種類の試合ではアツサリ審判――此日の審判は一高野球部の氏神ともいふべき中野老鐵山であつた――に從ふべき筈なのを、島

村はどう冠を曲げたか憤然場を去つたから問題が起きた。元來彼は餘程感情の鋭どい男と見えて、昨年も練習の際獎勵的に激語を放つた先輩に球を叩き付けて問題を起した事がある。又眞僞は保證し兼るが主將木内との折合も圓滑を缺いて居たとの噂で、此退場が元になり先輩や選手等で協議の末、野球部の精神に背くものとして斷然除名處分に出で天下を驚かした。

◇何としても負られぬ三高

△△君——之が若し有つても無くともいゝ選手であつたなら大した珍事ではないのだが、賴みとする最重要位置の投手であるが上に、打撃にも走壘にも傑出した雄者であるから、一高の此處斷には誰しも驚かされた。一高は外野から笹川を引張り出して俄かに投手の練習を始めさせたが——笹川は一高に入つて始めて野球を始め、今度も彼奴が一番肩がよさそうだからとの故で、重任を負はされたのだ——斯と京都で聞いた出征前の三高軍は、却つて一高の此決死的な勇氣に恐れたといふのも、或は實際かも知れない。一高が大戰を目前に控へて、泣て馬稷を斬る底の處置に出でたのも壯とすべきだが、馘られた島村が、『俺は野球を運動の爲にやつて居たので精神修養の爲ではなかつた、旨意が違ふから止めろといふなら潔よく止める』と平然豪語したといふのも、如何にも荒武者らしい其卒直さを買つてやるべきではなからうか。兎に角此事件から、一高は俄仕立の投手で甚麽死物狂ひの試合をするだらうかと、球狂の興味を新たにした事は少くなかつた。

夫から此兩校の試合は、明治卅九年に始めて矛を交へて以來昨年迄に都合十二回戰ひ、三高は七敗四勝（外に勝負無しの引分一回）の不成績で、若し此春も負けると勝星が半分になつて了ふ。それに若し今年も一高が勝つて三回連勝するならば、三高との試合は之で斷はり、明年からは東北の雄鎭二高軍の挑戰に應ずるかも知れぬなどゝ傳へられ、又年中練習の際に迄太鼓を鳴らし立てゝ激勵して呉れる校友の手前にも、是非今年は讐を打つて怨みを晴さねばならぬ所だ。出發の際にも血涙の滴るやうた激勵の演說を餞けられ、京都の市民迄勝つて歸らば國旗球燈を揭げて迎へやうと意氣込んで居るのに、どの顏さし負けて歸れやう。斯くも双方一生懸命になつて居る上に、此野球戰に先立つて行はれた陸上競技と端艇競漕は互に一勝一敗に終り、云はゞ野球は決勝戰の態となつて來たから、見物の方はどう決まる事かと、一層力瘤が入つた譯だ。偖之からいよ〳〵野球の戰況を物語るべき段になつたが、順序でもあるから日程を變更して、其前に先づ陸上競技と競漕に就て報告する事にしやう。

◇問題の島村陸上競技に

陸上競技の豫定日は四日であつたが、其前日に突然三高から一高に物言が付いた。其物言たるや曩に物言を付けて野球選手を罷める事になつた島村が、陸上の選手として出るに就て物言が付いたのだから面白いぢやないか。三高側の云ふには、島村は何等かの失態があつた爲に云はゞ野球部を追はれたのだ、夫れを陸上競技の選手として出すといふのは、陸上部を野球部より一段下に見たと同然で、斯る選手を出すのは我三高陸上部に對して禮を缺いて居るものだ。その島村を加へてる陸上部と戰ふのは吾人の潔よしとせざる處であるとの申條である。一高は斯う云はれてハイ左樣で御座いますか、では島村を除いて試合を致しませうとどうして云へやう。若し其麼事でもいつたら、折角拾ひ上げた島村の男を潰す事にもなるし、又一高陸上部の威信にも關はる事になる。で、島村の野球部脱退は運動家としての汚點があつた爲ではなく、唯意志の疏通が行はれなかつた爲なる事を力説したが、三高も云出した以上容易に引かない。到頭島村が出るなら競技をせずに歸るとまで云出し、形勢險惡となつたまゝ其晩は別れたが、四日午前再度委員が會見し、遂には一高の運動部長が出て脱退の事由を説明し、諒解を求める幕とまでなつた。其結果三高も漸く意が解け、連日の雨があがつた許りの泥濘の帝大運動場に、俄かに砂を撒くやら繩を張るやらして競技を開く事になつたのだ。

考へて見れば、三高は尻の穴の狹い捻ぢけた物言を付けたものである。敵の陸上部は島村を認めて選手とした以上は之に異論を狹んで云爲するこそ、却つて非禮ではあるまいか。あの場合運動部長が出て饒舌らずば納まりが付かなかつたかも知れないが、一高の陸上部が眞に島村を信認し自分達の部を重んずるならば、飽迄理義の上から爭ひ説得に努めべきであつた。夫でも三高が肯かぬとならば、反對に競技を拒絶してこそ部の威信を保ち得たらうに、部長を引出して辯解させるとは、餘りに自らを輕んじた仕方と云はねばならぬ。△△君、君はどう思ふ

地面は濡れて居て滑る爲に、競技はどれも仕悄くさうだつた。第一回の百米突競走で三高の大村香山藤田の三人が全勝し、短距離競走に得意なるを示し、先づ三高の爲に氣を吐いたが、千五百米突及び砲丸投では一高方よく、得點同じく九點宛となつて大分觀衆の興を湧かし、双方の應援隊にも油が乘出して來た。併し次で來る八百米突のリレー以下一高が自信を持つて居た槍投も又二百米突も皆三高軍にしてやられ、僅かに問題の人島村が二三等に交つて敵の蹂躙を防いでるやうな始末だから甚

だ情けない。殊に板橋迄往復の十哩マラソンでは一高方に利ありと思はれたに三高の柴野石川が魁をして一高を瞠若たらしめ、此時迄一高の得點十二に對する三高二十九の大差で、此痛手は到底恢復すべくも見えずなつた。

其後の八競技に於ては走幅跳と高ハードル（ハイ）で三高の大村香山が一等を得た丈、他は悉く一高軍で一等を占めたものゝ、三高が二三等でチョク〳〵得點して行くので到庭取返しが付かず、結局四十九對三十六、卽ち十三點の差で凱歌は三高軍に揚げられた。競技の順序に依る得點表は左の如く、之に依つて見ると豫評通り短距離は三高、中距離は一高、唯フイールドやハードル類は三高方が餘程拔んで居ると噂されたが、一高方が大した遜色なく戰つたのは、其力戰稱すべきである。

	一高	三高
百米突	0	6
千五百米	5	1
砲丸投	4	2
八百リレー	0	3
槍投	1	5
二百米突	2	4
マラソン	1	8
走高跳	3	3
八百米突	5	1
圓盤投	4	2
四百米突	3	3
低ハードル	3	2
走幅跳	2	4
高ハードル	0	5
一哩リレー	3	0
	36	49

（採點は一等三點、二等二點、三等一點、但しマラソンは五點三點一點、リレーは一等のみ三點、ハードルは三等を採らず。）

◇ロー・ハードル笑話

三高の香山主將は負けじ魂が面上に漲つてる頑固な體軀をした好選手、トラックに最もよくフイルドにも得意があり一人で十一點を稼いだのは、百二百及び幅跳で總て一等を得、九點を占めた大村と共に三高軍の花形役者であつた。一高ではトラックで島村神田フイルドで長澤夏目齋藤などが目覺ましい奮鬪をなし、十五の競技の中一等を得た事は却つて三高より多かつたが、練習が積んで居ない證據には一體としての出來が劣り此敗を見たのである。其代り一高には練習に依つて大に發達し得るX（エックス）が少なくないやうだから、一流の頑張に合理的の練習に努力したならば、此秋京都に於る第二回戰は必ずや接迫戰を演ずるに違ひない。我國ではまだ振はざる陸上競技界に在つて、斯種の對抗は好箇の刺戟となつて斯界の發達に資する事尠なからぬものがあるから、下らん物言などは付けずに、一生懸命勵み合つて欲しいものだ。

△△君――此競技に關し一つ息拔きに愛嬌ある、插話（エピソード）を語らう。三高が上京する前、競技の種目に就て一高との交涉に、双方の委員が長距離電話で話した。何はやりませう、何は止しませうと話し合つた中に『ハードルはどうしませうか』と三高が

で尋ねた。一高は低(ロー)ハードルは多少練習してるが、高(ハイ)ハードルは殆どやつてるものがない。で一高の委員は『ロー・ハードルをやりませう』と答へた。併其後愈々三高が上京し、試合の前日出場選手の名前書を交換したが、一高方の委員がそれを見るとやらぬ約束だつた高ハードルが種目に書入れてある。『電話でお話した時ロー・ハードル丈と申した筈ですが……』と云ふと、三高の委員『ハハアそうでしたか、私は又兩ハードルと聞いて高の方も入れる事にしたので……』と大笑ひになつた。一高は向ふでやる積で來たのだからと高ハードルも戰ふ事にし、高跳の選手が間に合せに出場したが果せる哉全敗した。併しロー・ハードルでは大した經驗もない加藤が、敵の猛將香山を破つて一等になつたのは案外な拾ひ星だつた。

◇五校必死の競漕準備

翌五日は墨堤否我國空前の大競漕とも稱すべき、全國五高等學校の大レースが行はれた。一體我國の端艇史には對抗競漕なるものが數へる位しかなく、二十餘年前一高高商の對戰が墨堤の春を賑はしたものだが、彌次隊の係爭が問題になつて中絶となり、其後早大對慶應、明大對外人のレースが一二度行はれた切り、之も經費の都合や其他で忽ち影を失つて了つた。だから端艇競漕といつても總て學校の内輪同志の戰ひで、自然一般的の興を惹く事少なかつたが、昨秋帝大早大の對抗が敢行されてから、俄然として對抗競漕の緒口が開け、今度帝大の斡旋で全國各地から五つの高校選手が集まり、大對抗戰を行ふやうになつたのは、我運動界史上に特筆大書すべき痛快事であらねばならぬ

各高校は此レースの爲に、數ケ月前から負けず劣らず粉骨砕身の猛練習を積んだ。地の利を占めてる一高は、若し自分の膝(ひざ)下(もと)で負けでもしては、飛んだ赤耻を搔かねばならぬと先輩が督勵の下にあらゆる研鑽を重ね、川に行かぬ日はバック臺は無論の事、工科大學の水槽(タンク)を借りて固定の艇に櫂先の稽古を勵んだ。風の便に此事を聞いた二高の彌次軍も默つては居られない。こつちの選手にもタンクで練習させねばと、學校の庭にアツシヨイ〳〵と自分達の手で恰好な池を堀り上げ、松島灣に出かけぬ日はこゝで練習するやうな設備をした。之までにして選手の勝を祈る學友の眞情、實に美くしくも有難い事ではないか。

三高も琵琶湖まで出かけて熱心な練習をやつた。試合が近づくにつれ川の水の調子を覺えて置かねばと、瀬田川まで行つて川に對する研究を積んだ。其頃の寫眞が東京の新聞に載ると、その姿勢から敵に漕方力量を悟らるゝを慮り、多少漕方を變革したと傳へられた程懸命に勵んだ。四高も六高も夫々猛烈に練習

し半歳の努力を唯數分間に決しやうと必死の意氣で東上した。まだ泥濘の深い向島の土手は朝から押寄せた無數の彌次隊と觀衆で一層ゴッタ返した。殊に此競漕には一切船上の應援が禁じられたから、河の面はいつもに比べて物足らぬ氣がするが、堤上は全く身動のならぬ賑ひで、紅（三高）白（一高）綠（二高）藍（四高）桃（六高）と色々な小旗が翻めく樣、河上から之を眺めると櫻時よりも一層の美觀だつた。

◇墨堤を埋めた白旗の輝き

豫選競漕は朝の十時から行はれ、最初は二高四高六高の三隻が鬪ふ事になつた。一際目立て頑健な體格の選手を載せた二高の艇は豫評に違はず頗る強勇、最初からグン〳〵二艇を拔き、言問に來た頃はもう十艇身を拔き、知らずに見ると後の四高と六高と丈が競漕してるやうで、二高は其仲間ではないと思はれる程度に進み、堂々たる大勝を博した。青葉城下から遙々應援に跟いて來た彌次連は此快勝に狂喜して、もう決選にも大丈夫だと歡呼の聲を揚げる。夫よりも尙遠い金澤や岡山から來た應援隊は餘りの慘めな負け方に呆然として立縮んでるのも氣の毒であつた。

次の一高對三高は双方の歷史的の敵愾心に加ふるに技倆全く相匹敵すると目され、本競漕以上の興味を以て迎へられたが、一高の力強いオールはスタートから寸一寸と拔き出し、ピッチの緩急も宜しきを得四艇身の差で悠々と勝を占めた。前日陸上競技の怨みある一高の彌次はこゝぞと許り呼號するのを、艇内に臥し乍ら聞く三高選手の胸中はどんなであつたらう。一般の豫評では寧ろ三高が優れりとされたのに、斯くも手輕に敗れやうとは誰れしも思設けぬ處である。此慘敗に赤旗の陣營は一聲なく皆涙を吞み、唯白旗のみ飛雪の如くに動いて歡喜の叫び聲はいつ迄も續いた。

一高二高の決勝戰は四時十分に開始されたが、流石に選られた兩雄である。前半に於ては二高稍よく水戶邸の邊では一艇身弱を拔いたと見たが、一高は餘力を蓄へて悠々焦せらず、竹屋邊から力漕して肉薄し竹屋を過た頃却つて一艇身を拔返したまゝ、立派た競漕を續けて決勝點に入り霸權は遂に向陵健兒の手に收められた。綠軍の選手も彌次も目を伏せて唯泣くばかり、豫選に大勝した丈に此敗北は如何に口惜しかつたらうと、諄々として慰藉する彌次に圍まれつゝ艇を上る選手と對した時、思はず僕もホロリとした。

△△君——僕は何だかボートの選手だけにはなりたくないネ。勝てばこそいかにも華々しいが、半歳の苦を積んだ努力が、

タツタ五分か六分で敗衂と決する時の呆氣なさを思へば、いくら思切らうとしても思切れぬ。その口惜しさに、僕は迚も堪へられさうにない。或は之を潔よいといふ人もあらうが、之では餘りに潔よさ過ぎる。

◇火花の散るやうな野球戰

却說、愈よ元に戻つて一高三高野球戰の段となる譯だが、大分前置が長かつたから、細々しい事は端折つて要點丈を批評する事にしやう。一高は此戰ひに初めから勝運に見放されてるやうであつた。一回には四死球で滿壘、二回目は敵の過失で又滿壘、三回には走者が三壘迄及んだが、總てスタンデンクに終つて點とならず、三高は見ン事是等の危機を免かれ得た。三高は之に反して走者を出しさへすれば大概は之をモノにし、一回に一點三回に二點を得て戰闘の當初から非常な優勢だ。一點二點と云へば少ないやうだが、斯麽固くなつてる試合では容易に返せるものではない。夫れに五回には三高敵の失で走者を出すと、其後に古海勝島などの中堅が揃つてタイムリーの、而も見事な二壘打(ツーベースヒット)を出し更に三點を加へたから、一高の彌次も流石に顏色を失つた。滿場の觀衆も六對零ではと一人として一高に絕望の歎を洩さぬはなかつた。

然るに六回目に、ヒョンな事から今迄縮んで居た一高の運が頭を擡げ出した。一死滿壘の時に立つて最終打者(ラストバッター)の高根が、二(ツー)打三球(スリー)の後で惡球を振り三振したが、捕手の古海は之を落した爲、周章の餘り投げずともアウトなのを一壘に投げる低能なプレーを演じ、三壘の走者をロハで還らせた。之に勢を得て七回には戶田笹川池田が安打し、八回には高根兼重戶田が桔槹打にヒットを送り二點宛を得て、差は僅かに一點と迫つたから大騒ぎだ。此勢では一高が盛返すなと思つてる矢先、九回眞先に出た池野のグラウンダーを遊擊が一擧に高く投げて一擧に二壘を與へたから、滿場總立ち、彌次の灼熱は極點迄に度を加へた。此時の騒ぎは全く君の推察に任せる外はない。

併し三高の投手山根が死物狂の投球は、次の二人は三振居つた。一縷の望みは兼重が如何に打つかにあつたが、發止と打つた球は遊擊を猛襲し、一寸掌中に轉々させてから盲滅法に投げた球が、一壘の一間許前でヒドいロングバウンドになつた。若し一高に最後迄の運があつたならば、此難球は勝島のミットに入る筈ではなかつたらうが、之も夢中で出した手の中にポカリと球が飛込んだから萬事休すだ。躍るやうにして赤軍の陣營に歸つた選手は、群がる彌次に抱付かれて本當に嬉し涙を流してゐる。其傍を默々たる一高の選手は悲痛な顏をして歸つて行

く。其劇的な光景よ！！

勝敗の分岐を考へて見るに全く運であつたといふ外はない。若し八回の好機に木内主將が三振せずして何ものかを飛ばし、九回に愼重の球が寧ろ奇蹟的に勝島に獲られずば勝負は逆になつたかも知れぬ。唯強いといふならば山根が難局に處しての健闘と、出れば大概はモノにする作戰が稍一高を凌いで此勝を齎らしたのだと云へやう。併し勝つも光榮負るも光榮、此緊張した試合をした處の兩選手に君と共に滿腔の敬意を捧げやうではないか。

三高が凱旋するや京都の町ではイルミネーションを點じて迎へたさうだ。明春は一高が京都に行つて甚麼意氣の戰ひをする事だらう。東京驛頭『……行けや行け九戰士、揚げて歸れよ勝鬨を』といふ、聞いて居て涙ぐまるゝやうな悲痛な應援歌に送られて行く選手を、僕は今から幸あれと祝福する。

◇市俄古の敵はいづれ

一高三高戰に引續いてリーグ戰が開始されてるが、健棒揃の早稻田、新田小野の名投手を持つ慶應に對して、勢力の減殺した法政、明大はいづれも十點餘りの差で負けた。早慶が戰はずに下タ手の明治丈を相手にして居ては、リーグ戰も相變らず大した興味はなからう。五月の初めに市俄古一學が來ると又活氣立つだらうが、バットの利く彼等に對して望みのあるのは先づ好投手を持つ慶應だけではなからうか。早稻田は如何に攻守に努めても、老投手伊藤を立てなくてはならぬやうな投手難では、ボカ／＼やられはしまいかと思ふ。併し今度のチームには前に來たペーヂ、ヂャーデンのやうな恐ろしい投手が居ぬさうだから案外面白い戰となるかも知れぬ。何しろ來月が待遠うな事だ。オリムピック豫選、三校庭球戰も續いて行はれやう。どれもこれも見逃したくない。人生彌次馬たる亦多忙なる哉だ。いづれ又面白い戰ひでもあつたらお注進申さう。左樣なら△△君。

對校競漕總評

「時事新報」記者　海老名一雄

一　競漕の成立するまで

▲早慶試合の中止以來我野球界熱狂の中心となつた一高對三高試合と、今年始めて計畫されて而かも運動界隨一の呼び物となつた五高等學校對校競漕とが、四月の初旬即ち六七の兩日に引續いて行はれたので今春の運動界は目の廻る程忙がしかつた。

野球試合の方は又自ら之を詳論する人もあると思ふから、私は自ら最も興味を有し又其成立以來直接間接の關係を結んで居る短艇競漕の方を選んで出來得る限りの詳評を試みたいと思ふ。

▲私は先づ此對校競漕が帝大の主催に依つて成立した順序から語らねばならぬ。即此對校競漕は東都各大學の對校競漕――去年は帝大對早大競漕であつたが――の成立と深い因緣のあるとを知らねばならぬ。話は去年の春に遡るが、帝大がスライヂング・シート、アウト・リガーの新式競艇を採用した事が動機となつて東都の漕艇界が長夜の惰眠から覺め、玆に斯界復興の機運が到來した時、第一に企畫されたものが東都各大學の對校競漕であつた。從來學生界の覇王として天下を見下して居た帝大の官學氣分は此時に破れた。而して天降つた帝大は高商及び各私立大學と圓卓を圍んで只管漕艇界復興の爲めに盡力することゝなつた。帝大が示した此雅量に對しては古るい頭の所有者たる先輩仲間に幾分反對があつたけれども、機運の向ふ所一瀉千里忽ちにして計畫は實現された。高商と明大とは事故の爲に參加出來ず。慶大も對早大問題があるので袖手傍觀の態度に出でたが、帝大對早大競漕は事實上都下各大學對校競漕の一變形として成立したのであつた。

▲此時帝大側として考へねばならなかつたのは一高の地位であつた。一高は漕艇界に於て早大や明大よりも遙かに古るい歷史を有し、其實力も立派なものであり、且つ高商に對しては二十年前連戰連勝の歷史を有して居る。之れを除外することは向島の歷史が許さない。然れども高等學校は高等學校であつて大學では無い。加ふるに一高が參加すれば事實上帝大對一高と云ふ兄弟爭ひが起らねばならぬ。玆に於て帝大側は斷然東都各大學競漕に關しては一高を度外視する方針を採つた。

▲併し一高の爲に何とか方法を講じてやらねばならぬ。啻に兄貴分たる帝大として情に於て忍びざるのみならず、墨堤競漕界の爲めに多大の損失である。左樣かと云つて同日に擧行された外語對高工競漕に參加せしむる譯には行かぬ。第一歷史が違ふ上に實力も違ふのである。其處で唯一の解決方法として各高等學校の對校競漕、即ち凡ての意味に於て均衡の地位に在る二高三高其他と競漕させやうでは無いかと云ふことに結着したのであつた。

▲話が愈極まつてから二高三高並に一高に對する內相談は割合に順調に進行した。併しいざ對校選手を選出する段取りになつてから學校內の對部關係で各學校とも少なからぬ異議が起つた。一二三部と自ら系統を異にする漕法を一朝一夕に渾一するのは困難だと云ふ議論も出た。去年の對部競漕の優勝者が當然

對校選手として出場す可きであると主張するものも出た。併し先輩たる帝大で法工醫混合のピックアップ選手が出來た以上、高等學校として斯くの如き內輪の爭は許さる可きもので無かつた。斯くして三高等學校は同じ主義の上に立ち、同じ步調の下に其選手を決定して去年の暮から練習に取懸かることゝなり、一高は例によつて銚子方面に遠漕し、二高三高は冬期休暇を利用して上京し、隅田川の本場で先輩のコーチを受けた。

二　競漕前の練習

▲競漕前の練習を語るに當り私は先づ日本に於ける漕法の發達に就いて一言して置きたい。理論から云へば凡ての運動競技と等しく漕法の原則に異同は無い筈である。素人眼から見ればボートを漕ぐ位單純なものは無さゝうであるが、野球に慶應流あり早大流あり又一高流あるが如く短艇の漕法には色々な流儀があり、此流儀は場所の狀態に依つて變化し、優秀なる選手の出現に依つて改革され、何時しか一の型を生み出すやうになる。即ち少し熟練した眼で見ると十餘町も離れた遠方にある艇の櫂の動き具合だけで何處の艇だと云ふことが即時に判定されるのは畢竟此型なるものが存在するからである。

▲今回の競漕に於て一高と二高とは素より型は異つて居るが共系統に於ては等しく隅田川から生れ出た流儀を繼承したものであつた。之に對して全然其系統を異にして居るのは琵琶湖系とでも云ふ可き三高の漕法であつた。玆に兩者の異同を具體的に云ふことは極めて困難であるが、私の眼に映じただけで云ふと三高の漕法は其外形ほどの實質を伴はない頗る不完全なものであると評せざるを得ない。フエザリングに於て手がうまく出來るから櫂先のフイニツシユも完全に出來て居るやうに見えるが、其實櫂が水を出る瞬間は決して賞讚す可き程のもので無かつた。又體のスウイングが立派なほど櫂は充分に且有效に動いて居なかつた。換言すれば三高の漕法には外觀に伴ふ確實性を缺いて居たと云ひ得る。從つて上げ潮に乘じて巧に調子を引かざる限り其勝味は頗る少ないものであるとは三高が四月に上京して以來前日までの練習を見て私が心窃かに信じて居た所であつた。

▲漕法として私が最も激賞したのは二高の漕法である。彼の漕法は少くとも飜譯漕法で無い。日本で發達した固定席艇に順應して考へ出されたものである。やゝ古るい記憶をたどると明治四十一年に帝大法科が勝つた時の漕法である。又近くは兩三年前の醫科が熱心に主張した漕法の流を酌んで居る。即ち眞面目なるキヤツチに次いで眞面目に一定の水幅を漕ぎ了らうと云ふ

のが其眼目である。

▲私は常に考へて居る。固定席艇が算術であれば滑席艇は代數であると。換言すれば滑席艇では滑席と云ふXとYとが使へるから問題が簡單に解決されるが、固定席艇には此XとYとが無い爲めに丁度四則の問題を解くやうに色々と變則な解決法が考へ出されるのである。其結果として滑席艇本位の漕法即ち歐米で出版されたテキストブックが教ふる漕法は理想に近いものであるが其儘實用に供することが出來ぬ。之に反し一見邪路に走つて居るかの如く見ゆる隅田川系の漕法には幾多の先輩が固定席艇の漕法に苦心した名殘が示されて居る。從つて現在の隅田川系漕法は之を鵜呑にすれば頗る有害なものであるかも知れぬが、其漕法を生み出した精神を玩味すると玆に云ふ可からざる妙味があるのである。

▲二高の漕法は前にも述べた通り全然隅田川の大選手が考へて考へて案出されたものであつた。併し此漕法を採用す可く二高のクルウは餘に體力が不足であつた。而して此體力の不足を補ふだけの練習期間がまた不足であつた。其結果として二高のクルウは競漕當日に至つても尙ほ未成品たらざるを得なかつた。即ち一定のピッチの下には可成漕げるまでの練習が出來て居たが、之を如何なる調子の下に於ても充分に押し通し得るだけの餘裕が無かつた。更に具體的に云ふと二高のクルウはあれだけ熟練した整調を有し乍ら其整調の技能を活用し得るだけの實力が出來なかつたのであつて、引潮の競漕に於て絕大の强味を示し得たに拘らず、上潮の競漕には頗る不用意の點が多かつたのである。

▲隅田川漕法の嫡流たる一高が三箇月前に練習を開始した時の漕法は恐らく凡ての先輩を憤慨させ又失望させたものであつたらう。體のスウイングは人並に出來ては居たものゝ、選手の凡てが腰が弱く、其フイニッシュは幽靈然として更に力が入らず艇足の遲いことは一人乘のスカルでも追ひ附けさうに見えた。

▲併し乍ら三月間主としてバック臺に依つて訓練された結果として選手達の腰は見違へるやうに强くなつた。フイニッシュも充分とまでは行かぬが可成に確つかりして來た。體のスウイングに於ては近年向島で見ない程立派なものとなつた。漕力も意外に强くなつた。唯五番とバウとの癖のある漕法が往々にしてスプラッシュを起さしめるので競漕當日に風が强かつたり波が高かつたりすると大きな失敗をやりはしまいかと心配された。

三　抽籤と豫漕の豫想

▲四月三日の午後一時に抽籤が行はれた豫選競漕の組合せとコ

ースとが決定した。即ち第一回豫選に於て二、四、六高が競漕し、第二回豫選に於て一、三高が競漕する。而して第一回豫選に第二着を占めたものは第二回豫選に參加することが出來ると云ふ決定であつた。

▲私は最初から此對校競漕は主義として勝者は絕對、敗者も亦絕對たる可きもので、二着三着の區別は認めらる可きもので無いと信じて居た。所が四高側から是非とも三隻競漕の第二着は決勝競漕に參加させて貰ひたいと云ふ希望が提出され、六高之に同意し、一二高は反對したが、帝大側では此提議を拒絕したもの丶遠來の珍客に花を持たせると云ふ意味で一の妥協が成立し、前述の如く第一回豫選の第二着は希望に依つて第二回豫選に參加することが出來るやうになつた。而して抽籤で組合せが決定すると同時に四高と六高とは若し二着となれば第二回豫選に參加すると申出た。二高は自信も充分にあつたらうが男らしく斯う云ふ申出を試みなかつた。

▲此組合せは實にうまく出來たものであつた。運命の神は飽くまで皮肉な組合せをして吳れたものと云はざるを得ない。凡ての意味からして好敵手であり、互に張り合つて居る一高と三高とを豫選で組合せるなど丶云ふことは運命の神ならでは出來ぬ皮肉な遣り方であつた。加ふるに引潮競漕に於て最も確實性ある二高を選んで四高六高に對せしめ、完全に番狂はせの競漕を封ずるに至つては實にうまいものである。

▲此組合せが出來た結果として私の想像した所は斯うであつた。第一回豫選では二高が確實に勝ち決勝競漕に出ることになるであらう。第二回豫選の結果は判らぬ。恐らく一高が勝つたらうとは考へられるもの丶、隅田川漕法にのみ目慣れた私には三高の實力は競漕が始まるまで疑問として殘さゞるを得なかつた。而して若し三高が一高を破るとすれば三高の漕法は私の判斷した所よりも優良なる或物を有するのであるから、あの體力とあの調子とを以てすれば決勝に於て二高を破ること必ずしも難くはあるまい。而して一高若し三高を破れば決勝に於ける二高との對戰は非常なる接戰となるであらうと。以上の豫想は大體に於て裏切られずに終つた。

四　豫選競漕

▲二高對六四兩高の競漕は兩國方面の水路を作りに行つて居たので見損つた。聞く所に據れば引潮競漕に有利にして而かも他の二校よりは遙かに勝つた實力を有する二高は誰でも豫想した通り悠々として大勝したさうだ。云ひ殘したが此日の午前は北東の弱風で水路は實に平靜であつた。數日來の雨の結果とし

引潮に加ふるに强よい落水であつた。二高のタイム七分四十六秒は決して怪しむに足らぬ。而して他の兩校に對する差が非常に大きかつたのも全く此關係に依るものである。

▲一高對三高競漕は時間が豫定より大分遲れて午後十二時三十二分に發艇した。潮は未だ引いて居たが二高の時よりも大分弱くなつて居た。スタートの浮標は豫定の場所と大分違つて三高は一半、一高は二半のコースを採つた。コースの事で三高が提起した抗議に就ては後に論ずるが、茲に注意す可きは三高の採つた一半のコースが決して一般に信ぜられた如き惡コースで無かつたことである。否スタートに於ける一乃至一半のコースは當日極めて有利であつたのである。昔から隅田川の水路に於て一コースは甚しく不利だと云ふ大なる迷信が傳へられて居るが、私の知れる限り眞に實力あり又適當なる策戰に出でた艇で單に一コースなるが故に敗れた實例は斷じて無いのである。加ふるに此日の水路を審査して直に氣附いたことは枕橋の川から吐き出す水が一コースを通り拔け二半乃至三コースから左折して流下して居たことである。此事は浮標に當る水の勢を見たゞけでも明かに觀破することが出來た筈である。第一回の豫選で二高があれだけ他を凌駕する實力を有し乍らスタートで半艇身近くも遲れたのは全く潮流が三コースに不利であつた結果である。

▲スタートに於て三高はいゝ辷り出しを示した。一高が之に對し沈着に一二本少ないピッチを以て應戰したのは豫定の策戰であつたらう。果然一高は八百松を越えると同時に其頽勢を挽回し始め、水門の上即ち一高應援隊が陣取つて居つた邊から次第に頭を出して來た。而して兩艇の差は次第に擴大し、決勝線に於ては約四艇身の大差となつた。コースの事から幾分氣を腐らしたことは酌量す可であらうが、三高の敗は先づ必然であつて怪しむに足るものではない。

◇決勝競漕

▲一高對二高の決勝競漕は廿年來隅田川で見られなかつた美事な競漕であつた。力も技量も伯仲し、水路のコンヂションも公平であつた此競漕は、兩選手の意氣と意氣との爭ひで實に物凄い程緊張したものであつた。

▲コースは一高が三、二高が二、發艇者が號砲を以てスタートを命じた四時十分の潮は上げ鼻で、落水がある爲め流れは極めて徐るかつた。

▲スタートで二高の四番がまごついた爲に一本損をしたが、水路の良かつた爲めか二高の方がよく辷り出した。そして水門ま

での約五百米突と云ふものは一高が三十三のピッチに對し三十前後の緩調子を持しつゝ尙ほ約半艇身を利して居た。

▲一高は水門でやつと敵と並行した。併し八百松の上から悠々と敵を壓迫した調子の巧妙さは流石に隅田川の急所を知つて居るだけある。私の眼には此の八百松の上の急所で一高は第一の勝因を作つたものと映じた。

▲水門から渡場、渡場から石碑、石碑から帝大艇庫前と、隅田川水路の要所々々で一高は一本づゝ調子を上げて行つた。そして二高のピッチが思ふやうに上らない隙に乘じて尺一尺と敵を抜き遂に一艇身の差で決勝線に入つつた。

▲素人眼で見ると如何にも單純な勝負であつた。併し小力士の初切り相撲よりも、寛政式横綱相撲に無限の滋味ある如く、此變化の少ない競漕には老漕手達を三嘆せしめる味があつた。双方の策戰は徹頭徹尾眞面目であつた。一高が唯要所要所で爲す可きことを爲したと云ふだけで、他は終始一貫、力と力意氣と意氣の攻あ合であつた。競漕が了んだ時、勝つた一高も、負けた二高も余力を蕩盡してヘトヘトになつて居たのは嬉しかつた。これでこそ對校競漕である。

◇競漕の味と教訓

▲人間として其の全力を費し盡すと云ふことは六つかしいことである。よくベストを盡すと云ふが實際ベストを盡すことは困難である。恐らく大多數の人間はベストを盡したと云ふ經驗無くして一生を終つて了ふに相違無い。されば此ベストを盡したと云ふ經驗は人間のあらゆる體驗中最も尊ぶ可きものゝ一つである。つまり此尊い體驗を有するものは何時なりとも眞面目になり得るのである。此の意味に於て、一高と二高の選手が實際に其のベストを盡した實驗を今回の競漕に依つて爲したと云ふことは極めて意義深いことである。

▲私は此競漕の一瞬間毎に無限の感激に充たされた。ボートレースは面白ろく無いと云ふ人は、彌次競漕と選手競漕、而して普通の選手競漕と對校競漕との間に如何なる心理的相違があり、又此心理的相違が如何に事實に於て顯はれて來るかを知らぬ人、若くは判別し能はざる人である。見物して一番面白いのは野球であると云ふ。私も左樣思ふ。併しボートレースを見た翌日に野球試合を見ると何と無く物足らないのである。感激を求める腹の蟲が治まらないのである。どの瞬間にもファインプレーがあり又ホームランでも無ければ何と無く治まらないやうな氣持がするのである。

▲私は此競漕の翌日、一高對三高の野球試合をネットの後から

見た。私の隣りには前日優勝した醫科の東君兄弟が居た。試合が稍々佳境に入つた時、東君が嘆聲を發して『ベースボールもいゝが、何しろ一人々々でやるのだから』と云つた。云ふ迄も無く野球は團體競技でチームワークは最も大切なることであるに違ひないが、野球のチームワークにはプレーヤー一人々々の個性が殘つて居る。否チームワーク其ものが、攻撃に際しても守備に際しても此個性を出發點として作られたものである。所がボートの方では此個性は全然無いのである。一度オールを握つて漕ぎ出したのが最後、其處に整調も無ければ五番も無い。況んや藤原も無ければ橘もない。六つの櫂が一の調子の下に動く時、六人の體と心とは全然渾一されて了ふ。『夫れ行け』ヨーシ』と聲がかゝつた時、一人々々の漕手は其櫂先に六倍の力が加はつて居ることを明かに自覺するのである。此の實驗を持つボートマンが野球試合を見て何と無くもどかしく思ふのは當り前である。

七　水路問題の判決

▲最後に私は此對校競漕がボート趣味の普及、而して競漕に關はるゝ獨得のスポーツマンシップを天下に鼓吹する絶好の機會となつたことを喜び、主催者たる帝大當事者の勞を謝するものであるが、唯例の水路問題で三高の抗議を惹起し、純白なる可かりし此競漕の記錄の一の黒點を印したと云ふ不祥事の出來を此上も無く遺憾に思ふ。

▲私は此紛議の判決を下して喧嘩兩成敗と云ひたい。つまり主催者側も惡るければ三高側も間違がつて居るのである。其間違つた同士が丸るで見當違いの理由で議論をし合つて居るを傍で聞いて居る私は寧ろ笑止千萬だと思つた。

▲本來主催者たる帝大の役員が此の二十年來に無い重大なレースの出鱈目な浮標の置き方をしたと云ふのが重々惡るいのである。昨年帝大對早大のレースの時如何に水路掛が浮標の置き方に苦心をしたか、帝大の當事者が此苦心の意義の那邊に存するかを未だ了解し得ずして水路掛と云ふものを審判とか發艇とか判定に比較して單なる人足の仕事でゞもあるかのやうに考へて居るのが抑々此紛議を惹起した根本である。

▲三高側の申し立ても決して採用さる可きもので無い。第一にレース後に異議を申立てることは斷じて許されないのである。第二に三高側で數日前に與へられたコースの目標を絶對なものであると考へたのが誤りである。如何なる目標を有するコースが一のコースであり又二のコースであるかは便宜上定められるのであつて、審判規則には無いのである。審判規則の精神で解

釋すると審判長が決定したコースが正當なりと云ふことになる。從つて先達のやうに二のコースの浮標が一半の所に置いてあつたとすると、三高の舵手は須らく豫定の目標から一寸右へ外れた所に新たなる目標を案出して進む必要が出來て來るのである。繰返して曰ふ。帝大側で切角青寫眞まで作つて水路の測量をして置乍ら、あんな不注意千萬な浮標の入れ方をしたと云ふことは實にいくら責めても責め足りない。第二に三高に對し今回の審判規則の精神を飽くまで徹底さして置かなかつたのは之れも帝大に居る先輩達の不注意である。而して愈紛議が起つてから審判艇の上で明快な判決が下されず、丸で見當違いの理窟が双方で捏ね廻されて居たことは實に醜體であつたと云はねばならぬ。私は斯くの如き紛議が一日も早く解決されんことを望む。帝大側も三高側も須く反省す可きである。併し此の問題を柄に取つて三高に競漕脱退を勸誘するやうな後援者があり、又新聞がありとすれば、それこそボート選手を相撲扱ひにし、つまらぬ物言ひを種に直ぐに休場させたがる所謂後援會の遣り口を神聖なるレースに應用せんとするもので、其心情の下劣なる實に唾棄す可しと云はねばならぬ。(終)

高等學校の對抗競技を觀て

「東京朝日新聞記者」植村陸郎

近來學生の運動競技が校内の狹い圏内から脱して漸次對校競技に移つて來たと云ふ事は本邦運動競技界にとつて最も慶すべき事である。社會一般の事凡てが國内的より國際的に進みつゝある折柄競技界も亦之と同じ經路を採つて進み軈がては世界の運動競技の檜舞臺に各國選手と鎬を削ると云ふ事は國家の基礎たる國民の保健體質向上と云ふ意味からも國家の正に大に奬勵すべき事であるまいか。這般の歐洲大戰に際し軍隊の派遣殆んど覺束無しとさへ思はれた米國が能く大軍を派し而も大偉勳を樹て得たと云ふ事は國家が常に國民の體育奬勵に努力怠らなかつたからだと識者は云ふて居る。日本體育協會は少數一部分乍らも今夏白耳義安土府に開催される萬國オリムピツク競技會に我が代表選手を派遣し本邦運動界の權威たる東京帝國大學の運動會が過般高等學校對抗端艇競漕會を擧行した事は如上の意味からしても本邦運動競技界にとつて絶大なる貢献と云つて宜い

らう。その餘波を享けて吉例の一高三高の野球試合は更に緊張も之れに附帶して前兩校の對抗陸上競技會が催されたる事は我が運動界の前途を益々祝福するものに相違ない。

次に私は五高校對抗レース並に一高三高の野球陸上競技に關する私見を述ぶる前に高等學校の對抗競技を如何に觀るべきかに就いて一言を試みたい。

中學生の競技はその技倆に於いて精神修養に於いて未だ稚氣のある競技に過ぎない。又大學生の競技には覇氣が乏しい。茲に於いてか高等學校の競技は選手は體格も十分、研究も相當に積み精神の修養も出來、元氣が横溢し赤誠ある應援は熾烈を極め責任觀念最も強く實に緊張した殺氣滿々たる大激戰が演ぜられるのだ、そうして選手は皆上氣して戰場に立ち固くなり乍らも何處かに落着きを見せ刀折れ矢盡きて全く精も魂も絶え果つるまで奮戰する光景は到底他の種の學校の競技には見られない快味がある。人嗤つて「それはあまりに殘酷性あり、進歩せる今日の競技はサイエンチフイツクの研究を戰はすのだ」と云ふかも知れぬ。勿論今は最早アニマルた競技時代は過ぎた。競技は眞面目に秩序的にサイエンチフイツクの研究を戰はす程に進んでは來て居るものの、我が學生の競技は外國に見るフロフエシヨナルのゲームではない以上サイエンチフイツクの研究以戰はさねばならぬのだ。又從つて責任觀念に自ら異つて居る點がある。此の意味からしても本邦に於ける競技會で高等學校の對抗競技程眞劍なものはない。從つて選手は技倆以外の非常な苦心をして戰ふのだ。私は其點を買つてやらねばならぬと思ふので、觀る人も技倆その物の戰以外此の點を頭に置いて觀て貰ひたい外に選手の人格をと思ふ。

私は最初五高等學校對抗端艇競漕に就いて私見を述べて見たい。此のレースは一高正に勝つべくして見事に勝つたと云つて宜からう。二高三高勿論必勝を期して居つたに違ゐない。四高六高若しも勝算ありと自信して居たとすれば假令他校を見ざるとは云へそれはあまりに自分を知らざるものであつたと云はなければならない。

三高は工科の漕法を汲んで皆何れも立派な體格を漕手が持つて居た。而も琵琶湖上の猛練習は可成りな自信を抱かしめたか知らぬが遺憾ながら漕法を完全にマスターし了らせなかつたのだ。上京して向島の練習振り等も覇氣縱横巨軀を十分フオア・バツクに利かして見事なスウヰングを好く揃えて一見實に立派なお調子漕ぎであつたからそのアツピアランスは見る者をして一寸アツと云はせたに違ひない。然し惜しい事には水のキヤツチがどうも完全に行かなかつた。果せる哉競漕當日一高と豫選を

やつたが成程外見は見事なものでも艇の滑りが非常に悪い。而もピツチを上げれば上げる程艇がその割合に出ない。玆に於てか漕法の研究不十分な事が現れて來て遂に慘敗の憂目を見たのである。尙三高については當時新聞紙上で報じた如く浮標問題が起つたが此の問題に就いては單に次の事丈けを云ふて置く。それは當日三高は何故それと知つてレース前に斷固として徹底的に抗議を申込まなかつたかと云ふ事である。偖而一高と二高はどんなレースを演つたか、共に豫選に於いて大勝を博したクルーである。そして又前述の通り共に醫科の漕法を則つて居た。スタートも共にスライデング式で全く同じと云つて好い。而もその練習振りを覗いた時は一高は體格に於いて優れ、フオームに於いて勝つて居つたが力は全く伯仲の間にあると思つた。そして一高は川に馴れ地の利を占めその上遠漕に鍊え上げて居たと聞いた時六分の勝味は確實であると信じて居た。然もフオームは不味いが底力のある二高の漕法は下潮、逆風で川面が悪いと云ふ様なコンデイションに乘ずれば或は却つて有利であるかも知れぬとも思はれて居た。處が兩者決勝の選に入りて見れば風は稍逆だがホンの微風、その他のコンデイションは全く反對となつて現れたので初めから二高の望みはあるまいと思つて見て居た。號砲一發スタートを切つたと見るまに二高の漕番は全く無駄オールを一本入れて了つた、これが單なる無駄丈けであつたら好いが最后まで祟りを爲したのだ。此の失敗は辛うじてスタートヘビーで回復はしたものゝ此の結果二高は悉皆逆上して了つた、一高はと見れば練習中レースの前日迄も疑問にされてたオールの引き切りが實に立派で見違える程見事に而も落着き拂つて漕いで來る。そして一シート許り先じた二高は三十一のスタートヘビーを廿九の平調に下げて見たが一高の追縱鋭く見る／＼その差は無くなり水門で全く兩艇並行の姿となつたので二高は策戰が外れて大狼狽を始め再びピツチを上げて力漕し始めたのが第二の失敗となつた。一高は三十五のピツチを引いて竹屋の渡では最早二高を拔く半シートなり、益々勢込んで漕いで行く、玆に至つて二高は力漕又力漕と焦つたが一高の艇の出は頗る好く到底及ばない。而も二高のピツチはどうも上らない。從つてその差は益々隔る許り、遂に一高は三十七半迄ピツチを上げたが二高は最后に至つて三十五のピツチが一本下つて三十四となり一艇身の差で一高の勝ちとなつた、二高は事實策戰を誤り一高は實力以上の見事さを見せ而も策戰適中して大勝した。只二高が僅かの失策から完全に實力を發揮し得なかつたのは誠に氣の毒に堪えない。私は玆に來年の此の大競漕の一層盛大ならん事を希ふて一高三高の陸上競技所感に移らう。

一高對三高の陸上競技は本年初めて生れたもので、從來高等學校には盛んでなかつた陸上競技は之れを切掛けに今後非常に盛大となり同競技界には之迄あまり認められなかつた高等學校選手に優秀な選手を號出するに至るだらうと云ふ事は明白な事である。此の競技は兩校共技倆全く伯仲と豫評されてあつたが案外三高方の成績頗る良く遂に十三點の大差を以つて三高方の大捷となつた、元來三高の陸上競技部と云ふものは一昨年生れた許りで競技の經驗も薄く又フイールド競技の如きは迚ても問題になるまいと思はれて居た、一高方もさりとて拔群と思はれる選手もなく只野球部を去つた島村、及び病癒えて久振りに出場する河野と短中距離に此の兩氏を賴みとして戰つた樣な譯であつた。尙競技當日は數日來の降雨でトラックも頗る軟かく無論優良な記錄等も希まれなかつた譯だが結果は割合に良好と云つて宜からう。兩校の練習振りは見なかつたが當日の成績から又競技振りから推斷すると三高の方が確かに練習が積んで居た樣に思はれた。一高は甘く見た譯でもあるまいが兎もあれ練習不足の結果が好く現はれて居た。而して三高大勝の原因としては短距離及長距離に於ける得點に依つたと云つて宜からう。そして又一高に自信ありと思はれた八百米突リレー、及ジヤヴエリンで三高にシテやられたと云ふ事も一高敗因の一つだ、百米突の如き三高全部の得點を占め十哩マラソンでは一、二着を三がどり九點の得點を八點迄贏得たと云ふ事は一高如何に踏張つても最早取返しの付かぬ破目に陷つたのだ。兩校の最も優秀な選手を擧げてみるならば第一に三高の大村を指さねばならぬ。當日の彼の濕つたトラックで百米突を十二秒で駈つたと云ふ事は奇蹟と云つても宜からう。更に練習の功を積めば本邦に於ける最初の十一秒ランナーとなり得る素質は十分あると思ふ。次に三高の香山、一高の島村を擧げねばなるまい。兩氏はトラックにフイールドに何れも優れた技倆を持つて居り、而も尙進歩の餘地は十分ある。之れに次いでは三高の藤川一高の神田亦將來の見込は可成と見て宜からう。最后にマラソンで一着を占めた三高の柴野選手だが聞く處に依ると余程優良の選手であると云ふ事だがいくら泥濘の路とは云へ十哩を一時間以上要した事は甚だ遺憾に堪えない、又一高の夏目選手が全然アニマな跳び方で走高跳一米突五九を跳んだ事は特筆に價する而して同氏をして今後サイエンテフイクの練習を積ましめば恐るべきチヤンパーが出來上るだらうと思はれる。

要之を要するに兩校共今後一層の努力に依りては本邦の記錄破りたるを得る素質を有する者が却々少なくないと思ふ。そして來年度からの此の競技が更に興味あるものとなる事は疑を容

れない。最后に吉例野球戰を顧みて見よう、三高は三年振りで辛うじて勝つた、然し決して之は見事な勝ち方と賞める譯には行かぬと云つて決して卑劣と云ふ意味ではない。所謂危い處を辛うじて喰ひ止めたと云ふ意味である。

一高の敗因は何んと云つても投手力の劣つて居た事がその大部分である、島村を失つた一高野球部は守備にも打撃にも大損失たるを免れなかつた。此の點を見拔いた三高軍は先づ最善の努力を盡して走者を出し走者が敵投手を牽制してその虚に出でんと試みた。如何に落着いた笹川技手とは云へ投手としての初舞臺ではあり、自分の投球に未だ自信もなく而も形勢は守勢の容であれば人間たる以上何處かに乘ぜられる破綻が生じて來る。これは無理もない勢であつた。而して一高は又敵を攻める策戰を誤つた。三高山根投手が最初その投球にコントロールを缺いたのを見て四球を得て樂に走者を出す事を考へたがその惰性が球の整ひ來たつた時に當つても打つて出る事を忘れた感なきを得ない。而も一高第一、第二回の好機を逸し三高に三點を先取せられた時に於いてすら尚一高が打つて出る事を試みず漸次得點を加へらるゝに從つて士氣は益に沮喪する許り、已に六點を先取せられた時敵捕手の失策に依り始めて一點を得、勢に乘じて攻めたてたが最早遲れ馳せの失敗であつた。一高が何故に三點を先取せられた時何故此努力を試みなかつたかを惜しむものである。之に反し三高山根投手は一度球のコントロールを失ひ後勝に乘じて能く之れを持ち直し再度投球の亂れ出したのを敵の追從に對し渾身の努力を以つて前後の防戰に成功したのは十分買つてやつて好い。又此の投手を助けて味方の士氣を始終振ひ起さうとする事に努力した吉海捕手の功も稱すべきである。然も此の捕手にして第六回表一死滿壘の際打者三振し捕手返球せしが當然打者のアウトたるを忘れて一壘に投球しその間三壘にありしランナーに生還を得せしめたは一代の失策にして大選手の恥づべき處、而もその一點たるや一高最初の得點にして此の導火線が敵の乘ずる處となり遂に最后まで五點を盛り返さしめた事は大責任として捕手は嚴罰に附されても文句も云へぬ事である。又一高方高根三手壘が一、二壘に走者ある時打者の三壘飛球を取つて一壘に投じたるは之れ又大に叱責の價あるプレーだ、要するに三高は六點を先取して少しく油斷の色見えたるを一高に乘ぜられたが辛うじて喰ひ止めたもので三高の勝と共に一高の敗は決して稱むべき事でない。最后に此のゲーム時間三時間五十分を要したのは何時もの事ながら兩軍殊に三高軍の反省すべき事であつて、愼重の態度は必ずしも時間を要するものでなくゲーム時間の長きはゲームの緊張味を大に殺ぐもの

である事を考へねばなるまい。又投手として最も注意して貰ひたい一事はボークの事であるが第六回三高山根投手が一壘に投球し小田切走者を一二壘間に挾殺せし時の投手のモーションは確實にボークたるを免れまい。之れを何故一高は抗議せざりしか。事ゲーム結了の上は止むを得ざるも當然の權利は十分主張すべきものなりと信ずると共に投手は爾後大に反省を要すべきものであるまいか。妄言多謝筆を措く。

春の運動競技總まくり

「萬朝報」記者　鷲田成男

我運動界も漸く多事になつて來た、殊に今春の如き一層多端を極め未だ曾てない盛況であつた、曰くオリムピツク豫選會、曰く高等學校對抗端艇競漕、曰く、一高對三高陸上競技と數ふるに遑の無い有樣だ、而も其の後には我が陸上競技、水泳、庭球界の猛者は遙々北歐アントワープに赴きて列强の選手と技を鬪はさんとし、内は市俄古大學野球團の來襲に據つて各野球團が火花を散らさんとしてゐる、之れ何んたる快事か、長年月の間不撓不屈の練習を爲して鍛へたる技術に、細心の頭腦を働かして鬪技する此種運動の勃興普及は將に我國民の覺醒したる例證ではあるまいか、かうした競技の中に意氣と精神を唯一の信條とする高等學校同志各競技は絢爛たる櫻の花にも譬ふべく、血湧き肉躍る壯觀の中に見る人をして何物をか考へせしめる力がある、その内心に觸るゝ力こそ誠に尊きものである。

春未だ淺き一月、寒風を衝いて各チームは猛烈な練習を行つた、秋より練つて來た技術は一入冴へて來た、北は二高短艇部の松島灣に雨を衝き風と戰ひての猛練習、四高短艇部は金石犀川の河口より日本海の荒浪に揉まれ、一高野球部は霜柱に泥濘と化する運動場に日暮るゝ迄も球を追へば、短艇部は隅田川に琢磨の苦を積み阪東太郎信濃川に上りつ下りつする、陸上運動部は帝大のトラックに襯衣一枚で朝も駈ける、夕べも韋駄天となる、三高はと云へば短艇部は琵琶の大湖の眞只中に黃塵を放れての練習、野球部陸上運動部も臥薪嘗炎の苦を積む、六高端艇部は悠々瀬戸内海に榮冠の夢を見つゝ來らん日を俟つてゐたかゝる間に多くの事件を生みつゝ三月に入つて一高の聯合野球試合が終ると、もうは四月は前に控へてゐた、勇み喜ぶ中に悲壯の氣は各選手の頭腦に印した、勝敗！　それは半年の練習の判斷である、その判斷に惱み苦しむ時突如として一高野球部に一

沫の陰影が投げられた、それは一高野球部の柱石、守備に於いて投手となり攻撃に三番の重鎭を承る島村君の優退であつた、新聞には漫然とそれを傳へ一高野球部は多大の力を割かれたとのみであつたが、島村君の周圍、一高生は此の問題に就いて非常に腦まされたのである、事の起りは三月廿日一高運動場に催された一高對帝大の練習野球戰で、六回目一高の走者小川切君が三壘に入らんとして壘手松本君に沮まれアウトの宣告されたのを一高方から抗議を申込み遂に島村君が寮に歸つた爲めであるが、又島村君の優退問題が早くから根ざしてゐた爲めもある、而し之は可なり大きな犠牲であつた、其の内部的精神に一の矛盾を描いた、話は前に遡るが昨年三高が一高に破れた其の夜、小石川植物園で慰勞會があつた、其の席上當日の敗因を考ふるもの多く、其の敗因は選手が一致を缺いた爲めであると云ふ論に歸結し當時同軍の重鎭であつた數名が引退する事となつた、敗けて其の因を考へ大なる犠牲を拂つたものも、行き盡す處は勝利の榮の一路であつた、三高は精神的にも技術にも一高に敗けた、敗けて櫻の花の散る夕べ悄々と歸らんとするに先だち、應援隊長濱野君が一高のリーダーであつた尾形君の處へ來て、「私等は考へさせられた、又來年お會ひしませう」と悲壯の言葉を殘していつたさうである、それを考へ島村君退部當時の情況を照合せると若い人々の中にも無限の悲しみがある事が分る。

今、春は廻つて來たのである、破れた三高軍の中にも遊擊伊藤君、二壘の宇津木君は繩帶を締めて練習し、復讐の念、燃ゆる如きものがあつた、一高は一の暗影を除いて野球部の精神を發露するには勝敗何ものぞとの慨を示した、技術に於いて大差の無い高等學校同志である、之で勝敗は分明になつてゐた、今年は戰はなくてもよい、意氣に於いて三高は優つてゐた、一高は同氣相求むるの士の集りであると云ふを一の誇りとして此の春を送り、又淋しい春を迎へねばならないのである。

四月二日であつた、陰氣な雨が蕭々と降る東京驛頭に着いた三高野球團は淋し氣に出迎への人と挨拶を代はして宿へ引揚げた、去年遠征の折は燃ゆるやうな復讐の念に共鳴して驛頭に出迎へた人も多かつた、列車の着く前から「紅燃ゆる丘の花の校歌が合唱されたのに、今年は云ふに云へない悲壯の氣が漲つてゐた、再度の遠征、復讐、それがかうした光景を描いたのだ、其の翌日三高の應援隊二百名が東京驛へ着き、朝まだきから大鼓、法螺の音に氣勢を添へた、八尺に五丈の大旆、直徑五尺の大太鼓、傍外の人は馬鹿らしいと考へよう、又面白いとも思へやう、而し全校を擧げて復讐せんとする其の意氣に觸るゝ

は、壯烈の氣に同化され鬼神も泣くであらう、若き血汐の高鳴りする者ならでは此麼馬鹿も出來ない、而し又此麼痛快な思ひも出來ない、沈香も焚かず屁もひらない者は駄目である、扨て此の燃ゆるやうな意氣と意氣は雨で練習も思ひの外出來ない間に、四月七日向ケ岡に鏑を削る事となつた、兩高等學校の勝敗の歷史は明治卅九年始めて三高の東征して來た時から大正八年迄に一高は七勝、三高は四勝で他に一の引分がある、そして一方が三度續けて敗けると云ふ事は無かつた、二年打續いて勝つてゐる一高は不見識な因緣の上から云つても此年は破れねばならない年であつた、一高に假令島村君が居つても意氣の上では一高は敗けてゐる、併し島村君と云ふ熱血兒が意氣と技倆と合せて持つてゐた、木內主將に據つて統率さるゝ一高軍の中に一際目立つたのは島村君であつた、それだけ島村君の我意も强かつたのだらう。島村君の居た時の一高と三高を比べて見ると、投手は島村君と山根君とは互角と云ふのが定評であつた、けれども伸びる分子は島村君に餘計あつた、捕手木內君と古海君とを見るに木內君には重々しい處があつた代り敏捷の點が無い、古海は可なり好い肩を持つてゐたが貫錄を缺いてゐた、內野全體としては三高は丸尾伊藤君等が垢拔けして居り、一高は遊擊小田切君が一寸劣つた他は何れも上手である。外野は兩軍同一で、打擊は一高が優つてゐた、即ち島村木內君の超弩級の

川兼重戶田君のやうなムラのない打者があるに、三高には伊藤古海島田勝島君と揃つてゐるやうでも自信のある又投手から見て恐ろしい打者は殆んど無かつた、それが一高から島村君を除いて笹川君を投手に立てると良いコントロールとドロップを持つてゐると云ふものゝ投手として試合に臨んだ事がない、レギユラバッティングの投手をたつた一度勤めたと云ふ投手の呼吸のよく飲込めない人であるから味方には心細い、そしてそれが爲め外野に變動が起つて大分見劣りして來た、打擊は全く振はないやうになつた、此麼大きな犧牲を拂つて迄も部の精神の發揚に努めた一高は豪いとも云へやう、而し一昨年野球部が全勝した時勝つてこそ寮生の士氣も上つたのだと云つた事を考へ合して見ると、島村君の優退を結構な事だと濟ましては置けない、島村君の優退は一高の興廢である、豪傑連の揃つてゐる昔の一高生であつたら、之れを問題としてもう少し善惡を突詰めたよらう、悲しむべき結果を自ら招いたと云へ島村君も氣の毒である。一高野球部全勝の一頁を飾つた君が奮闘の今後見られないのは實に惜しみても餘りある。

一高對三高野球戰の行はれたのは連日の陰雨全く霽れた四月七日である、陸上競技では一高が敗けた、短艇競漕では三高が

破れた、全校を擧げての戰も、今野球と云ふ賽の目に據つて決勝を爭ふのだ、雨の上つた運動場には朝の十時頃から觀衆が潮のやうに雪崩れ込んで來た、見よ外野席は人の顏ばかりで其上には半開の櫻が笑つてゐる、三壘側の三高應援隊席には燃ゆるやうな紅ゐの大旆數旒があるか無きかの春風に飜つてゐる、一壘側に陣取つた一高方には清楚の氣に漲る白旗翩翩と閃いて戰ふ前から戰氣は滿ちゝゐる、と起つて來る一高壹千の健兒が歌ふ寮歌は勝たねば止まぬ意氣を示してゐる。三高軍も劣らず應援に努めた、試合は一高の先攻に始まつて一回一高が好機に接したがスツカリ固くなつて此の機を逸した、それに反して三高は四球安打と出てダブルスチールを行ふ、そして其後が美しいバントで一點を入れた、幸先の一點は緣起のよいもので士氣の振興に關する事重大である、二回にも一高は機會を得たが笹川君の打上げで終つてゐる、而も其れが第一球であつた、三高の投手山根君はコントロールが附いてゐないとは云へ急所々々を引締めて行く力が強かつたのだ、三回に三は高共に三壘の失策に出て犧牲打と投手の暴投で入つてゐる、之等も一高方が急に賴みの綱を取られて固くなつた證據であらう、五回に三高は敵失に出た。二人の走者が打續く二壘打を合せて三點を取つた、笹川君は此時可なり苦心したゞらうが、既に勢に乘じた三高軍は死力を盡して攻め掛つたのである、かうした調子で前半は殆んど一高方が壓迫されたのに、六回となると一高方は一死滿壘と云ふ時機になつた、責任打者高根君は三振する、それを古海捕手が一壘に投球したばかりに橋本君は三壘から還つて一點を得た、三高は、之れで全く上つた形となつた、そして七回八回と打つて出て二點宛を得ゝ六對五で勝敗の差は一點、而も一高方投手笹川君は落着いて來た、打擊は當る、もう九回に一點を得たらと見る間もなく第一打者池野君が敵失で二壘に入つた、而し續く打者は三振した、武運の盡きる處は致し方ない、遂に一高は豫定の通り破れたのである、けれども猶一縷の望みを繫いでゐたものは今更に敗衂の悲しみに遣る瀨ない思ひを抱いたゞらう。

私は此の敗衂を立派なものと思はない、死しても勝たんと云ふ意氣に濁りのあつた事を認むるなら何故に此の矛盾を描いたかと云ひたい、實に一昨年來の一高應援團は天下の模範であつた、非應援說者も一高の應援には多大の共鳴を持つてゐたものである、それが今年になつて聊か秩序の亂れて來た事を思はせた、試合の前或る一高の先輩は「三高の應援團にワツショイだけは止めるやう勸告しやうではないか」と云つてゐた、私は良い事だと思つた、而し戰の一高に非なるや一高の應援團はワツ、

ヨイ〳〵を繰返し放談亂舞した、決して昨年や一昨年に見るやうな美はしいものは無かつた、そして中に流るゝ力強さを缺いてゐた、それでも表面の力は大きかつた、總ゆる應援を盡して敵三高を破らんと力んだ、爰で私は一言しやう、然らば何故投手島村君を戰間近かに優退させたかと、一高先輩の淺慮であると斷言したい、兩軍此日の出來を見るに一高に强打者、恐るべき打者の一人が有つたなら斯くも壓迫されなかつたゞらう、それでも一高は後半よく盛返した、あの力量を私は推賞したい、兼重戸田笹川君のやうな好選手の奮鬪は一高の花である、笹川君も度胸の良い投手であると感心した、一高に取つては六對五の成績に漕ぎつけた事が大出來の方である、意氣と意氣の戰である此の野球戰は我が野球界の誇りである、戰の後を顧みて內省する時、又來る春に咲く花は色も美しく香も床しいだらう。

陸上競技は四月四日、雨こそ晴れたが所々水溜りの出來てゐる帝大トラックで催された、此の競技に先だち一高と三高との間に取交はされた條文は割合に不行屆であつた、先づ一人の選手が數種目に出るのは團體競技として餘り面白くない、多くとも一選手は三種目位に限定したかつた、又競技種目を定むるに始め百米突、二百米突、四百米突、八百米突、千五百米突、半哩リレー、一哩リレー、槍投、圓盤投、砲丸投、走巾跳、走高跳の拾四に定めて置きながらマラソンとハードルを入れたのには兩校の交渉が判明せなかつた、卽ち三高はマラソンを一等五點二等三點三等一點とする代りハードルはローもハイも入れたいと申込んで來た、一高はローハードルのみの心算で承知の旨を答へた、そして愈々試合前の二三日になつて兩ハードルであつた事を知つて改めて交渉すると云ふ不手際を演じた、それが爲め一高はハイハードルの練習を行はず走高跳の選手を出して對抗すると云ふ慘めな事になつた、之等は前以て能く交渉して双方理解を得て置く要があつた、來年からは棒高跳、五種競技のやうなものも入れて行きたい、白旗赤旗の應援を排して眞個の技倆を發揮せん事に努力したのは當を得たものだ、當日の應援は可なり秩序だつたもので拍手、寮歌、其の他は無言の應援に場內の空氣を緊張せしめた。

此の競技を行ふ前日になつて三高は一高に島村君の居るを非とした、野球部で運動精神に反する選手と認めた人を出場させたくないとの事であつた、實に三高の申出では一見妥當の如くで洞察を缺いたものであつた、かうした問題を起すには餘りに島村君が善良すぎる、若し島村君の技倆を恐れてなら殊に問題であつた、併しそれも事なく三高は了解した、良解されないのは却て一高生で斯かる隙を敵に與へ一矢報ゐられた事は取りも

直さず一高運動部の連絡を缺いたものだとも云ひ又野球部の處置の分に過ぎてゐるとも云ふ、全ては解決された。愈々戰ふ四日朝降りしく雨を衝いて帝大トラックに來て見ると一高は來て居て三高は來ない、襲に三高は三日を四日に延ばし晴雨を論ぜず擧行すると云ひながら此の朝になつて降雨を理由としてゲームを延ばさんとしたのである、幸ひ仲裁するものがあつて戰ふ事となつたが、其の交渉の折も三高方は宿を出でず一高方から再三再四出向いてゐた、此際三高側委員は帝大トラックに來て話し合ふのが當然では無かつたか、何しろ戰ふ迄の三高が態度は感服出來ない。

競技は百米から始められた、そして百米は三高が全勝した、而も三高大村君は第三のコースの水溜りの最も多い處にあつて拾二秒のレコードを作つたのは恐るべきものである、平素でも此のトラックは上り勾配になつてゐて駈け惡く拾二秒のレコードが最も良いのであるに、此の濡れた運動場で拾二秒となつたのは强いものだ、二百米を廿五秒五分の一で走つたのも愉快であつた、君は身長五尺八寸スタートもよく頑張りも利く好個のスプリンターである、今一方練習を勵んで八十米位から出る工夫が出來たら日本一となるだらう、一高では短距離の雄窪田君が出なかつたので大差を生じた、八百米、千五百米で一着を占めた一高の神田君は良いロングを引いてゐた、君には猶餘裕があつた、マラソンは一二等を三高が得た、若し一高の加藤君が〇場したら一等を得たゞらうに怠つて出場出來なかつたのは部の精神が徹底せない爲めだ、走高跳は三高のものに思はれたのに一高夏目君が一米五九で一等となつたのは面白かつた、一高は棄てゝゐたのだに突然此麼選手が出て日本のレコードに近い處迄いつた爲め泣いてゐた、フォーム等も出來てゐない、氣で跳んだのだ、聞けば家で繩を張つて走高跳の練習をしてゐるとの事だ、槍投は香山君が百三十一尺二寸で一等であつた、一高の齋藤君は百四拾八九尺を投げるので當然一等と思つたのに此日振はなかつたのは惜しい、其の代り圓盤で踏張つた、ハードルは一高が棄てゝゐたにローハードルで加藤君が一着を占めたのは一寸案外であつた、最後の一哩リレーは一高の島村君が香山君を拔いて勝つたものであるが、香山君のスタートする時一高應援團が前を通つた、インタフエアと云へば物言ひ附くに其の儘物言ひを附けなかつたのは此の試合の最後を一層美しくした、そして四拾九點對卅六點で三高は大勝した、三高では香山君拾一點、大村君が九點で此の兩君で半哩も勝つた、香山主將の努力奮鬪は見上げたものだが、ランナーとしては大村君が大物であつた、君が短距離界に名を謳はるゝ日は近い中に來るだらう、

而し三高の勝因は二人の好選手のみの力でない、全べてに亙つて細心の注意を拂ひ、システマテツクな練習を積んでゐた爲めである、一高が此の大敗は豫想外であつた、其れは加藤君（マラソン）窪田君（百米突、二百米突）に出場出來なかつた爲めであるが、三高軍の如く周到な練習は出來てゐなかつた、ハードルを捨てゝゐたり、マラソンの選手が居なかつたりしたのは大なる不注意である、今後は一層細心の注意を拂つて行きたいものだ、對抗競漕として火花を散らし正々堂々戰つた事は嬉しかつた。

端艇競漕は四月六日であつた、之は何の苦情もなく圓滑に事は進んだ、そして凋落してゐた端艇界は盛況を極むるに到つた、此の主催者である委員諸氏に對し甚大なる敬意を表する、此の高等學校競漕は昨秋の帝大對早大競漕が模範的に行はれた事より忽ち定まつた、而もそれは學生生活を一層意義あらしめんと云ふ大なる抱負の下に練習は土、日曜日に限り行ひ、全べては各クルウが同一の歩調を取つて來た、實に其の方法は各種運動界の模範であつた、三月三十日頃から各高等學校は集まつて來た、そして四月一日から一齊に練習を始めた、各校の漕法を見るに、三高と六高は同一の型、一高二高四高は又一の型を作つてゐた、土手評は三高最も呼聲高かつたがレースコースを漕ぐ時艇庫前に來て選手は疲れず力漕するを見て早くもスタートに缺陷なきやと疑つた、二高は腰よりの上體が能く動いて頑張りの利く點等は殊に恐れられた、六高は四高より上手であつたが兩校共に練習不足である、其の中に一高は兎角の評が有つたが漕法も美しくコースにも馴れてゐた爲め、假令全勝の夢に醉ふてゐるとは云へ、一高は最も勝味が多かつた、俄然レースとなると四高六高は二高に百米餘も追ひ拔かれ、三高は下け潮、一のコースの不利な地位に有つて一高に破れた、後三高からコースの問題が出て一のコースに近かつたと云つて來たが既にそれは四艇身も拔かれた後であつて、問題とするには遲かつた、若し出發前に抗議を申込んだら斯樣の事は無かつたゞらう、反省以て來春には捲土重來して欲しい、斯くて案の定一高と二高が優勝を爭つた、兩校共三十二のピツチに出たが二高はオール一本遲く、之を取返さんと三十五のピツチに上げて八百松裏で半艇先んじたが間もなく廿九に下した、其の際に一高は漸次ピツチを上げて除々と二高を拔いた、二高は後を趁ふたが舵が思はしくない、整調はオールを流してピツチは上らない、唯一の望みの頑張りは遂に利かず一高に破れた、二高には不利な上げ汐であつた爲めもある、而し後半整調のオールが亂れたのは此の敗因の大なるものである、日暮れて長堤に響く一高の寮歌は如何に勇ましく響いたか、夢のやうなレースであつた。

吁此の雄者よ、勝ちたるものは奢らず勝を續けん事に注意せよ、破れたるものは其の敗因を極め雪辱を行へ、待たるゝ來春よ、その時チームは如何なる陣容で來るか刮目に値する。

× × × ×

一高對三高野球戰を論ず

「讀賣新聞」記者　飛田穗洲

三高對一高の試合(ゲーム)は現今の野球界にあつて決して高級なる技術の爭とは思はれてゐない。明治三十七年早慶の擡頭から一高の黄金時代は全く過去のものとなつて、高級技術は早慶兩大學チームに移されたのである。單なる技倆或は頭腦の方面からのみ見るならば此の試合の如きは殆んど問題となるべき程のものではないかも知れぬ。しかも毎春一回行はるゝ此のゲームが湧くが如き人氣を以て陽春劈頭の野球戰を飾る所以のものは、兩チームに特別に生きる意味があるからであらう。

未(ま)だ日本の野球は米國のそれの如く技術本位とはなつてゐない、技術上には大きな米國化があるとしても日本の野球には精神的勝利を十分に信じられてゐる。觀兵式は拙なくとも實戰には負けぬぞと云ふ强氣が溢れてゐる。其處(そこ)に勝負を爭ふ上から米國式の野球とは大分の懸隔を認むる事が出來る。米人の野球の多くは技術の優劣を較ぶるに過ぎないが、日本式の野球は氣の戰を以て技術を壓倒せんとしてゐる。技倆に劣るところがあつても元氣で勝て死んでも負けるなと云ふのである、そして氣で戰ふと云ふ事は技術が總ての點に發達した今日猶異常に尊重され歡迎されて技倆は常に二の次にされてゐる。技倆を味ふと云ふ點から云ふならば遙かに四大學戰などに立派なプレーがあるのであるが比較的技術化した四大學のリーグ戰には一向觀球家が滿足しない、スコアが離れた試合には如何に掬すべきプレーの數々があつても、胸のすくやうな安打(ヒット)が連出しても減熱マッチとしてケナされて了まう、考ふれば玆に日本野球の生命が光つてゐるのである。

日本の野球が全く米國の如く技術本位となり、觀球家も技術上のマッチに依つて滿足する程度に進む時が來れば、我が野球界は必ず墮落せねばならない。若しそうした時代が展けて來た場合は速に、商賣人(プロヘッショナル)チームを編成し高尚なる觀覽物として提供する外に途はない、商賣人(プロヘッショナル)はこれによつて衣食するのであるから、技術そのものから云へば學生チームなどの比にあらざるく

きは云ふまでもない。しかし商賣人のチームによつて代表さるゝ時代が來れば野球の精神的方面は全然破壞されて行くであらうことを私は怖れる一人である。

私が野球を讃美する所以のものは、その競技方法の構成が尤も文明的であるからと云ふ樣な簡單なものではない。況んや鍛錬保健と云ふが如き末葉なる功能書に囚はれてゐるからではない。私は今私の考へてゐる野球と云ふものに就いて記述すべく許されてゐないから詳論する事を控ゆるけれども、私が平生野球に就いて深く心をいたしてゐるのは野球宗と云ふ事である。即ち野球を宗教とする事である。私は敢て奇矯の文字を避らぬるのではない、そう深く信じ、また此の宗教を宏く一般に布教せんとする堅き決心を有つてゐるのである。宗教は時代によつて新たなるべきものである、幾千年前の原始野蠻時代に製造されたる姑息な狹隘な教をそのまゝ幾千年後の今日猶隨喜の涙に咽んでゐる事は新時代の人間の墮落である。私はこれから新たなる野球宗を宣傳して碧空(あをぞら)の中にぽかつと浮んだ無心の球の清さに人々の魂を導びき强剛なる肉の誇りを謳ひたいと思ふ。かう云ふ私の宗教からは當然技術オンリーの野球は排斥されねばならぬ。技術は末であり精神は本である。私は單なる技術本位の野球戰を呪ふ。日本には日本式の野球がある、米國の野球とは大に趣きを異にしてゐる事は云ふまでもない。

一

一高三高戰は前にも述べたやうに技術本位から云ふならば餘りに幼稚であると云はれるかも知れない。しかし總てを綜合してのゲームの價値は決して第一流を下るものではないのである。殊に對校戰と云ふ意味を代表してゐる點については最高位を占むべきものであらう。彼等の戰は決して選手のみの戰ではない、全校を擧げての戰である、代表せる選手は僅かに九人に過ぎないけれども、この九人の選手は全校一千の魂を一球一打に打ち込んで戰ふのである。負くるものは勝つものは九人の少數にあらずして實に全校生である、と彼等は考へてゐる、否堅く信じてゐる、そこに淺薄なる技術でなく精神の大きな力である事が燎かになるであらう。

だから三高生も一高生も、春から春まで此の戰を夢寐(むび)に忘れない。戰前幾旬日から選手が運動場(グラウンド)に練習をすれば、應援團も之れを圍んで應援の練習をする、選手が泣けば應援團も泣く選手が歡べば應援團も歡ぶのである。恐ろしい意氣の結晶が積んで積もつて、選手の血走つた眼(まなこ)、應援團の血を絞(しぼ)る激勵の聲に春は日一日と花の蕾みに會戰日は近づいて來る。

玆年の試合は四月七日に二年連敗せる三高軍が彌生ケ丘に攻

め太鼓を打つて復讐戰を挑んだ。四月の運動曆は三高一高の對抗陸上競技から、各高等學校の優勝競漕と非常な人氣を呼んだけれども此の野球戰の如く期待されたものはない。それは十餘年に亘る試合(ゲーム)の歷史による興味の誘惑もあるが、一つは新聞紙の力にもよる事は否まれぬ事實である。近頃の新聞紙は運動競技を社會面の重要なる記事中に繰込んで、各社ともその報導に努力してゐる。前景氣は勿論選手の些々たる動靜に亙る迄細大漏らさず記載すると云ふ傾向になつて來た。當日の試合に東京日々新聞社が特にグラウンドに電話を設置して同社の運動課長たる弓館小鰐氏が自身其の衝にあたり、此の一ゲームに數人の記者を派して優良なる記事を得んとしたなどは如何に新聞紙が運動記事を重要して來たかを窺ふに足るであらう。かうした新聞紙の吹聽は益々試合の熱を昂め午後二時開始のゲームは正午に至らずしてグラウンドを人の海と化したのである、正確な數は知る由もないが三萬以上たりしは疑ふべくもない、花は蕾で景趣昨春の試合よりも淋しかつたが顏と顏とは宛も櫻花の美を競ふが如く何んとなく壯大な氣分を味はれた。人間の顏も遠見には割合に奇麗なものである。

一高一千三高五百の應援隊が數十の陣太鼓を打ち鳴らし、大旗小旗に包まれて秩序整然たる應援をなす、兩高の先輩校友は胸を躍らして試合を氣遣ふ樣、眞に大事件の光景である。試合は六アルフア對五と云ふ僅か一點の差で一高の敗となつた。詳しい批評は無益の事であらうと思ふが、その豫想から結果を概略述べて見やう。

一朝の榮華ではあつたが一高に再び黃金時代來を叫ばしめた巨人內村君が大學に送られてからの一高は昨春の强味を少なからず減殺された。それだけ此の試合は記錄上に多くの興味を起さした。昨春は全然勝味のなかつた三高も玆年は兎に角望みを以て迎へられることになつたのである。然るに試合前の十餘日なる三月廿一日に突然一高の投手たる島村君が引退する事に決定した。島村君は內村君に比すれば技術上に多くの差を豫想されながらも有力なる選手として一高方の超弩級であつた、その島村君が引退して中堅の笹川君を急に投手たらしめた一高の不幸は、急轉直下して三高の强味を叫ばしめたのである。野球選手の急造は最も至難な事である、而も投手に至つては全然望み得られないものとされてゐる。笹川君が如何に器用な人でも十餘日の練習では球のコントロールを得る事が出來まい、意氣と意氣との戰で技術上の關係は必ずしも重大ではないとしても、全く技術を沒却するわけには行かぬのはわかりきつてゐる。此の異動に禍されて一高或は敗戰にあらずやと同情の聲は自然と

湧いて來た。けれども人和を以て飽までも戰はんとする一高流の試合精神が齎す結果は、よし敗戰となるまでも同格のゲームまでは漕ぎつけるに相違ない、試合の變化によつては一高勝利の歌を高唱するかも知れぬ。

果せるかな試合は六對五と云ふ接迫せる記錄を示して、最初勝誇つた三高が後半盛んに追はれて危く抱いた玉を奪ひ還へされるところであつた。

三高は機先を制し順潮な得點を以て五回までに六點を擧げ、一高を顏色なからしめたが、後半一高の進擊頗る急にして五點を奪ひゲームは甚だしくエキサイトされた。その追込んで行つた凄まじい勢ではスコアの逆轉すら瞬間に閃めいたが、一高第九回の攻法を誤まつて惜しくも一點を殘したのである。

若し此のゲームが九回に於て同點となれば勝は可成り强く一高に豫想される。それは三高選手に動搖が見い出した事によつて、容易に判斷し得べきであらう。追はれたものと追付いたものとは氣持に於て多くの差を生ずる、殊に一高の投手笹川君の制球(コントロール)はかなり確かに整はれ、三高の山根君の肩は漸く自信を失つて迷ひ出してゐたやうであるからエキストラインニングに入れば一高は必ず氣勢を擧げたに相違ない。

策戰は兩軍とも充分研究した後で大きな誤りはなかつた。三高は新投手に對してヒツテングに出で、一高は山根君の制球に欠ける弱點を摑んでウヱイテングに出たのは明である。三高の攻法策戰は比較的成功もし、策戰としては少しも冒險的な場なかつたが、一高のウヱイテングは隨分大膽であつたやうに思はれる。そして此の大膽な策戰は半ば以上好果を收め得たがに終りを完ふする事が出來なかつた。それは時機を誤まつた憾がある。敵投手の亂球を見越してかゝる策戰をする事は決して珍らしくない、多くの場合成功するものであるが、それはよくく味方の技倆を確かめた上でなければならない。米國の商賣人(プロフェショナル)などのマネージヤーは新しき投手を敵とした場合隨分思切つたウヱイテングの戰法をとり回の後半は一齊に火蓋を切つて新投手を葬り去る策戰にまんまと成功するが、それは技倆と頭腦とが充分整頓してゐるからで、日本のチームなどには餘り望まれない事である。一高は確かにヒツテングに出づる時機を一二回誤まつてゐた、若しも三四回にヒツテングの策戰に變つてゐたならば山根君をも少し惱め得たらうと思はれる。それからウヱイテングの戰法も決して徹底したものではなかつた、大體待つことにしてゐゝ球が來たら打てと云ふ樣な生半熟のものではなかつたらうが、これは未熟の選手に授くる攻法としては大に考なくてはならない、打つと云ふ事よりも待つと云ふことは

事である、相當場數を踏んで膽の錬れた選手でも容易の業ではない。まして急拵の選手などに出來得べき事ではないのである。

それから一高はバンドの運用が拙なかつた。若しも一高にして三壘側のバンドの修錬が積んでゐたら、一再ならず機會を掴み得たらうと思ふ。一高は一體にバンドの研究が足らなかつた、それは山根君の球に速力があり、笹川君の球には速力が乏しかつたので三高のバンドは成功し、一高は失敗したのでもあらうが、山根君の球位ならば一高の打撃力でバンドに苦しむ筈はないのである。第九回近藤君の失敗などは諦められない。若しも近藤君がバンドに成功して池野君を三壘に送つてゐたら次には直ちにスクイズプレーの機會が來る、三高は尚更それに備ふるに違ひないから山根君の肩の亂れに乘じて頭腦(あたま)を使へば或は一死にして第一打手の兼重君を迎へてゐたかも知れぬのであつた。

失策は兩軍とも隨分感心の出來ぬものがあつて、それ丈けスコアを大きくしたのであるが、三高は一高に比してタイムリーのエラーが尠なかつたゝめ辛らくも勝運を逃さなかつたのであつた。

笹川新投手の出來は山根投手に比して數字上にも實際にも美事なものがあつた。雨のために僅か三日の練習をしたのみであると云ふがそれにしては感服の外はない。態度も立派であつたし、頗る冷靜にプレートにあつた、投手だけの技倆から云ふならばかの日の笹川君は島村君よりもよりよかつたかも知れない。

然し一高は試合前の異動に應援團までが氣落ちしてたかに見られた。選手も得點をあせつて走壘を誤まり機會を逸したのは、投手が新しいために此れに信頼する事が出來なかつたによるかも知れない。已れを信じ得られない事は總てに缺陷を釀成する。

餘りくど／＼しい專門的の試合評は本誌にとつては不必要であらうから此の邊でとめる事にしよう。

私は前にもくど／＼述べた通り、技倆上から此の試合を評價したくない。一高の敗因をなしたものは試合場にあらずして、試合前の三月廿一日にあつた事を附加したい。島村君の引退である、その眞相を語る事は愚であるが、少なくとも島村君の引退は選手としてその性情に同化性をもつてゐなかつたによる事は爭はれまい。技倆も優秀であり、人數も少ない一高が試合前十餘日にして此の大英斷を下した事はよく／＼の事があると思はねばならぬ。野球に一番大切な事は心も身體もそのチームのものとなると云ふ事である、卽ち同化することが第一の條件である、九人が九人個性を發揮すれば團體競技は破滅である、如何に技倆に秀れてゐても人和を缺くものはチームには禁物

る。

俗に云へば我儘勝手なものは選手たる資格がない。各學校のチームにはそれ〳〵チームとしての憲法がある。或は我儘を許されてゐるチームがあるかも知れないが、そんなチームは幾十年幾百年經つても强くはなり得ない。一高チームは特に此の點は嚴格であらう。また嚴格でなければならぬ筈である。日本野球史上に最古の歴史を有してゐる一高が曾つてなかつた事件を惹起したには已むに已まれぬ事情の伏在を窺はれる。

或者は島村君引退に就いて一高幹部の處决の誤りを傳へてゐる。現代的に云へば利口な遣口ではない、けれども曩に云つたやうに野球には精神がある、その精神を沒却してまでも試合に勝たんとすれば競技精神は墮落せねばならない、精神を失つて勝つても勝つた方がいゝと云ふならば一高チームも詰らぬものである。そんな下卑た根性が一高内に極く僅かでもあれば彼等のチームも全く凡下されたものである。が流石に一高はその精神を誤まらなかつた。そして三高軍の爲めに敗れたが一高の野球精神は炳として輝いてゐる、此れは大先輩中野武二君や新進の先輩内村祐三君その他によつて保たれたのであらう、私の野球宗はこれを喜ぶ、野球精神の尊嚴は飽までも護らねばならぬ。

個人としての島村君には同情を吝むものではない。惜しむべき技倆を有しながら大事な試合を目前に控へて引退せねばならぬ破目に陷つた同君の心事に對しては充分察しられるものがある。野球は善き性質の人のみに與へられる狹い範圍を越して、直ならざる心をも改善する程の力がなくてはならない。島村君に對して一高野球部は必ずそれを熟慮したに相違ない、しかも戰の前に個人を犧牲にする事を省みる遑がなかつたのであらう。團體競技をなし得ぬ性質は今日の世には不便である。然し島村君のためを思つて君の心の復活を希望する。戰をなすものは强きがよい、飽までも强きがよい、島村君は强い人であらう强いだけそれ丈け調和味がなかつた。德望に薄かつたのではあるまいか、それが惜まれる。

野球は今や多くの人に理解されて殆んど社會的になつて來た、あらゆる階級にその趣味は浸潤して行つた。喜ぶべき現象ではあるが野球を眞に愛するものは此の際大に注意せねばならぬ、野球を單なる球投げとしてはいけない。物は大きく擴げられると淀みが出來る、腐敗する部分が出來る。耶蘇敎も佛敎も世界的となつて墮落した、野球宗も廣く流布されて墮落してはいけない。それには各大學專門學校の野球部が中堅となり羅針盤となつて益々よきものとせねばならないのである。

時論

法學博士 吉野作造

加藤總裁の演說を讀む

四月廿日大阪に開かれた憲政會近畿大會に於ける加藤總裁の演說は、現下內外の研究問題に對する最大野黨の態度を明白に宣明したものであることは云ふ迄もない。憲政會が野黨として政府の政策を自由に批判攻擊し得る立場と、加藤總裁其人が原首相と異り、本來相當に理屈つぽい人であることゝは、一個の議論として槪して總裁の演說をして敵黨宰相のそれに比し著しく勝れたものたらしめて居ることも云ふを俟たない。予輩は第三者として飽くまで公平の見を持せんとするも、些か彼に酷にして此に寬なるの觀あるは之が爲めである。けれども總裁の議論に對しても予輩には又服し能はざる點も尠くない。何れにしても憲政會全體の態度を明にする爲めに順序を追うて總裁の演說に短評を加へて見よう。

加藤總裁は「議會の不當なる解散」「普通選擧に對する政府の固陋なる見解」「西伯利政策の行詰り」「經濟政策の失敗」の四點に全力を集中して政府の失政を攻擊して居る。其中の議會の解散については明白に「普通選擧問題に藉口」して內閣壽命の延長策を計つたものに外ならない。卽ち「內治外交の失敗の爲め貴衆兩院の痛擊を受け、進退共據を失ひたる窮餘の策に出で」たものと斷定して居る。如何にも大膽な斷定ではあるけれども、之れ正しく一般國民の實際的確信を飾る所なく表明したものと云つてゐゝ。不幸にして今日まで原首相を初め其政友の幾多の辯明も、又政府當局として爲す所の實際に觀ても、何等此確信を動かすに足る有力な反證を擧げてゐないのは我々の寧ろ政府並びに政友會の爲めに惜む所である。

第二の普通選擧論については之に關する政府の陋見を痛擊し、更に進んで卽時施行の急務を說いて居る。之によつて政友會と憲政會との本問題に關する對照は甚だ鮮明となつた。只加藤總裁が憲政會を代表して說く所の普通選擧論の根據に至つては

遺憾ながら其淺薄低劣なるを惜まざるを得ない。總裁は云ふ、「成るべく多數の國民をして國家に對する義務を負はしむると同時に、國政に對する權利を與へ權利と義務と相俟つて初めて多數の國民をして渾然たる政治上の人格を有」せしめたいと云ふ迄は先づ〳〵無難としても、「今や國民は廣く兵役の義務を有し、又納税の義務を有し、義務心の訓練已に年を經たり、然らば何ぞ之に向つて長く選擧權を拒否するの理由あらんや」と云ふに至つては予輩些か總裁の頭腦の健全を疑はざるを得ない。斯くの如き權利と義務との對立から何處を叩いても普通選擧を主張すべき理論は出て來ない。

加藤總裁は更に進んで普通選擧を今日に實行するのは啻に適當なるのみならず又必要に迫られて居る、而かも之を實行して何等の弊害を見ないと說いて居る。何が故に適當と云ふかは聞かなくとも分つて居るが、之を今日に行つて弊害なしと觀る所以については、世間は恐らく相當の說明なしには受取るまい。我輩は多年弊害なしと云ふ說を主張して居るから本誌の讀者は或は之を怪まずに納得せらるゝかも知れないが、選擧權が擴張さるればさるゝ程弊害も亦正比例的に增加すると云ふのが今尙世間多數の迷信ではないか。此迷信を破ることが普通選擧論の本質を明かにし、併せて國民の政治的見解並びに道德を開發する上に極めて必要であると思ふのに、此點を無雜作に取扱はれたのは我々の甚だ物足らず感ずる所である。單純な研究的興味から云つても加藤總裁が何の根據に立つて無弊害を主張するかは我々の大いに與り聽かんと欲する所である。只普通選擧の施行を今日急迫の必要事なりとする所以に至つては、總裁は稍ゝ詳細の說明を與へて居るが之とても一般國民は全體として未だ十分に發達はしてゐないが一部少數のものゝ間に突飛に發達したものがあり、之が選擧權を熱求するから、自暴自棄の結果他を煽動して不穩の行動に出でぬやう早きに及んで廣く之を與へた方がいゝと云ふやうな消極的な豫防的な見地が唯一の理由だと云ふなら之れ亦餘りに淺薄な考と云はざるを得ない。普通選擧の卽時施行は右述べた事の外に更に積極的な道德的な乃至文化的な效果はないものだらうか。此點についても總裁の立場は極めて薄弱なものと云はざるを得ない。

要するに普選論者の一人として予輩は加藤總裁及び其黨派が同じく普通選擧の實現の爲めに努力せらるゝ事を大いに多とはする。けれども一度其立つ所の根據を理論的に檢覈するに及んで予輩は其餘りに心細い味方たるに失望せんとする。憲政會の普通選擧案が重要なる資格の一として「獨立の生計を營むもの」の一項を擧げ、而かも此愚劣極まる條項を頑强に固執して三派

提携の實を擧げ得なかつたのも畢竟之が爲めであつたらう。下らない味方は時として敵よりも厄介な事がある。

第三の西伯利問題に關する政府糺彈の論法は流石に剴切を極めて居る。此點は全然同感を表するに躊躇しない。總裁は第一に聯合國が昨秋兵力を以てする直接援助を罷め、兵器軍需及び軍費の供給を以て間接に反過激派政府を助くることに改めたのに、獨り我國が秩序維持の名の下に三萬に近き兵員を駐めたばかりか、時々自ら進んで積極的に過激派討伐の無謀なる方針を繼續せることを責めて居る。更に進んで無謀なる空想の夢は破れて、多大の希望を繋けたオムクス政府が殪れた。之を期として米國が撤兵したのに、獨り我國は米國の諒解を得たりと稱して更に約半個師團を增兵し、何等明確なる理由あるにあらずして我忠良なる兵卒を西伯利の氷雪に曝らし、徒らに列國の疑惑と露國民の反感を招くに止るの愚擧を攻擊して居る。而して結論として總裁は軍隊の即時撤兵を主張し、居留民についても一時權宜の策として財產を纏め我勢力圈內に引揚げ、以て他日の好機會を俟つべきを勸めて居る。何れにしても西伯利問題は現在の國民にとつて一個の難關であり、又將來の國家にとつて一個の禍根である。世人多くは之を軍閥の專擅に歸して其橫暴を抑ふるの急を認むるやつであるけれども、政府が自ら之を抑へ得ざるは事情諒とすべきものありとはいへ、又其責任を分たざるを得ない。加藤總裁が獨り政府を窮追するに餘力を殘さざるは的を違へて力瘤を入れ過ぎたの感なきにあらざるも、所論の筋其物に至つては國民の等しく同感を表する所である。

第四に經濟政策の失敗として物價問題、通貨問題より最近の財界の不安に言及し、盛んに政府を攻擊して居るが、此點については專門外の自分としては何等的確の批評を爲し得ないけれども、只自分の感じを一言述ぶることを許すならば一部は當つて居り、一部は當つてゐないと云はざるを得ない。西伯利問題について加藤總裁の見解に我々が全然安心し得る程度に、經濟問題に關する氏の政策に全然安心し得るや否やは多少の疑がある。尙之と關聯して思想問題に言及して居るが、然し我々の立場としては思想問題は尙之とは獨立の問題として取扱つて貰ひたかつた。思想問題に對する政府昨今の方針を如何に觀るかは我々の最も總裁に聽かんと欲する所である。其他支那問題、朝鮮問題、對米問題より日英同盟繼續の問題等に亘つて我々の知り聞かんと欲する點がまだ頗る多いのに、此等が總て省略に附せられたのは些か物足りない。總裁は只上揭四つの問題を擧げて

政府更迭要求の理由として居るが、國民の關心する現下の重要問題は、只此四つに限らないことを一言して置きたい。

緩衝地帶設置の說について

日本軍の浦鹽占領は何の爲めになされたか。軍事當局の說明を通り一遍の申譯に過ぎないと考へるやうに慣らされて居る國民は、今度の此事件についても本當の理由は他に潛んで居るのだらうと疑つて居るやうだ。疑ふ者も惡いが、又かく疑はしめた軍事當局の從來の遣り方にも責むべきものが多い。何れにしても浦鹽一市の秩序紊亂を名として初められた武裝解除の斷行が疾風迅雷の勢を以て廣く沿海州の全部に亙らんとするのを見て、已に諸外國人の如きはさらでも昂ぶつて居る神經を益々過敏ならしめて猜疑の眼を睜つて居る際に、又我國一部の論壇から緩衝地帶設置の說が流布さるゝに及んで彼等は愈々疑の眼を睜つて居るやうだ。

諸外國が疑はうが疑ふまいが、其事自身は我々にとつて大した事ではない。我國の對外關係がなだらかに進行する爲には無用の疑を蒙らないに越した事はないけれども、只疑を蒙らざらんと云ふ事に專念するの餘り、我々の所信を枉ぐる必要は更にない。從て例へば緩衝地帶を設置するにしても、之が我國の利[illegible]であり且つ又東洋全體の利益になるなら何の憚る所なく之が斷行に猛進して差支ない。又冷靜に考へて見ても一種の中立的緩衝地帶を設置すると云ふ事は必ずしも諸外國から疑はれる程利己的計畫と云ふ事は出來ない。我日本の國情と過激派の治[illegible]にある西歐露西亞の國情と著しく異る所から、兩者の直接の交涉が双方に何等かの不便を齎すであらうと考へらるゝ以上、其間に緩衝地帶を設定して或は起るとあるべき無用の衝突を未然に防がんとするのは其事自身の利害得失の論は別問題として兎に角必ずしも不當な考へと云ふべからざるは申す迄もない。然るに緩衝地帶設置の流說について、それが好いとか惡いとか、東亞の平和の爲になるとかならぬとか、さう云ふ議論を以て立[illegible]るのなら我々は之に對して同じく議論を戰はすの責任を感ずる以外に、何等の痛痒をも感じないけれども、若し更に一歩を進めて、緩衝地帶設置の說と、日本の禍心とを連結して兎や角非難する者がありとすれば我々は之を甚だ心外に思はざるを得ない。

けれども又一歩退いて省みるに、諸外國がかゝる不當の疑を我々に向けるについても一應の理由はある。何故なれば彼等の間には日本が何時でも此手で他國侵略の野望を逞ぐるのだと云ふ風な迷信があるからである。今其一例を云はんか。大正五年

の春、支那が第三革命の紛亂に困憊して居つた際、蒙古のトルハト王が粛親王の子を戴いて滿蒙を根據として清朝の恢復を圖つた事がある。爲めに一時あの地方にいろ〳〵六釜しい事件の起つた事は已に讀者の知らるゝ所であらう。而して當時多數の外國人の間には此運動の陰には有力なる日本人が潜んで居る。日本は即ち此運動の成功によつて滿蒙獨立國の保護者たらんとするのだと云ふ風に觀た。換言すれば日本は其保護權の下に所謂中立地帶を設定し、名を獨立に藉りて實は侵略の野望を遂げんとするものだと云ふ風に觀たのである。斯く觀たのは固より全然誤解に相違なからうけれども、誤解されても仕方ない程度に一部の心なき同胞が不謹愼の行動を諸外國人環視の下に敢てした事は蔽ふ事を得ぬ。日本官憲も亦當事此誤解を一掃するが爲めには、例の官僚的な形式的辯明の外、何等實質的の辯明を敢てしなかつたので、今日尚十分に疑を解かないものが多い。誤解するものも惡いと云へぬ事もないが、誤解される丈の事をして十分辯明の實を擧げないと云ふのも亦甚だよろしくない。されば外國人の頭腦には日本に對する此の種の疑がまだ生々しく殘つて居るに、今度復た浦鹽に於て同じやうな事件が突發し、甚だ類似の進行を見つゝあるので、今度も亦例の慣用手段を弄するのではないかと云ふ風に疑ふのであらう。

予輩は日本國民の一人として敢て多數の國民の良心を代表して斷言する。我々は決して東部西伯利に何等の野望を逞しうせんとするものではない。若し野心を疑はるゝやうな行動を彼地に於て爲すものがあらば、それは決して國民の良心を代表するものではないと。斯くは云ふものの、予輩は又他の一方に於て一部軍閥の走狗が「國家を爲め」を履き違へて、飛んでもない烏滸な企てを外國でやつて居るものがあることを知つて居る。先に支那に於て、我國が諸外國の疑を深つたのも實は此等の不謹愼なる行動の結果であつた。我々は此等の人の行動を非難し、又之に闘して忠良なる國民を警戒する爲めにどれ丈け骨折つたか分らない。けれども此等の連中の活動は今日尚止まない、のみならず更に最近は西伯利の方にまで蔓つて、帝國進運の前途に幾多の障礙を與へつゝある事は、實に讀者諸君と共に慨嘆して措かざる所である。緩衝地帶設置の説の如きも、若し此輩の計畫を意味するものであるならば、我々と雖も固より之に斷然反對の意を表せざるを得ない。

緩衝地帶設置の企夫れ自身は、必ずしも深く是非の論を爭ふべき問題ではないけれども、之が如何なる動機によつて計畫せられ、又如何なる人によつて支持せらるゝかが重大な問題である。日本の將來にとつて西伯利はいろ〳〵の意味に於て重

關係がある。夫れ丈け我々は西利伯問題の所置を一日も早く所謂軍閥者流の手から救ひ出したい。其上でなければ何をやつても、兎もすると諸國の疑を招ぐ。否、諸外國の疑を招ぐばかりではない、我々國民自身が帝國の前途の爲めに甚だ不安に感ぜざるを得ないのである。

言論の取締に關する當局の無謀

四月十八日發行の「大阪毎日新聞」は布施特派員の莫斯科發電報が禍をなして發賣禁止の命を受けた。内容は勞農政府下の露國の政情を其觀るがまゝに描寫したに過ぎないと云ふ事である。かゝる一片の記實が發賣禁止の制裁に値するや否やは姑く別問題とするも、我々の到底默過し難いのは、此事に關し、新聞社側の質問に對する責任ある内務當局の答辯である。四月廿日の同紙記する所によれば、内務當局は「此種の記事は從來の外電にあつたやうな短かいものでも今後は之を差止める筈である、過激派政府確立、過激派政府勢力增進と云ふが如きは一切不可である。尤も過激派批難的の記事なれば差支ない」と。まさかこんな事は云はれる筈はないと思ふけれども、其後別に政府の

の辯駁もないから姑く此記事を事實として置かう。よしんば此

事實に多少の行違があつたとしても之に基いて當局の無謀を論

ずることは、最近頻々として起る同種の出來事から云つても決

して不當ではない。

天主教會では久しい間地球を宇宙の眞中にあると考へてゐ

た。太陽を初め諸ろ〳〵の星は地球の廻りへ動くものと信じて居つた。而して此信仰に基いて一種の神學を組織立てゝ居つた。然るにガリレオ一度出でて地動説を説くや教會の古老先覺は愕然として色を失つた。從來の考が根本的に間違つて居ると云ふ事に氣附いて驚いたのではなくして、斯くして教理と教權とに對する疑惑、從つて又教會の秩序の動搖を怖れたのである。彼等は教會の公安にとつてはこよなき忠義ものであつた。だから遂にガリレオを殺したのである。

神が己れの姿に似せて人間を作つたと云ふ事も古い信仰である。人間が萬物の靈長たる所以は一にこゝにある。然るに進化論と云ふ者が唱へられて人間も亦他の下等動物と其根元を異にする者ではないと云ふ事が論證された。人が神の作物であるならば萬物も亦神の作物である。人間のみが神の特別の創造に屬

すると自惚れるのは大いなる誤りだとされた。事實はどうだらうが教會の信條と傳說とは傷くることは出來ない。そこでバチカンの當局者はダルウインを初め所謂進化論に關する一切の著者の名前を禁書目の中に入れた。禁書目とは敎徒に向つて讀んではならぬと命じた書目の謂で、いはゞ教會の發賣禁止表である。

天主教會と及び一部の新敎々會に基督再臨の信仰がある。一旦磔に遭つて三日にして蘇生つた基督は何時までも昇天したまゝではゐない。世の終りに於て再び現世に姿をあらはして一切人類の功罪を裁判する、其時には死んだものも皆蘇生つて基督の膝下に賞罰を受けねばならぬのだから我々は其時の用意の爲めに死んでも骸を傷けてはならない。斯くして彼等は火葬に反對する。彼等が如何に火葬の制度を忌み嫌ふかの激しさは、西洋に行つて限の當り之を視たものでも一寸諒解はつくまい。最近衞生に關する學問の進步につれて火葬說が段々唱へらるゝやうになつても、最近まで西洋諸國の大多數は火葬を法律を以て嚴禁して居つた。やりたくない人はやらないまでの事、やりたいと思ふものにはやらしてもいゝではないか、せめて大都會に公費を以て火葬場を作ると云ふ位の事はやつてもいゝではないか、と云ふやうな說を唱ふるものがあると、教會は異端邪說として之に宗敎上の極刑を科するのである。ガリレオの時代なら無

論磔になつて居つたらう。而して教會の當局は爪の垢ほども自分の態度をわるいとは思つてゐない。本當の頑迷者流は多くの場合に於て誠意誠心である。

日本の政府は少くとも言論の取締については天主教會と何の選ぶ所がない。若しありとすれば頑迷の程度を同じうして而かも誠意に多少缺くる所ある點のみである。彼等は一旦言ひ出した事は是が非でも押し通さうとする。之が國利民福を傷けようが或は無辜の民を罪する結果にならうが、官憲の威信には代へ難いとする。若し夫れ事實の闡明が彼等の取つた立場を裏切つて來ると、秘密の黒幕を下ろして國民の耳目を掩はうとする。文明の風の煽りでとても掩ひ切れなくなると、遂に事實を有りのまゝに云ふものを危險思想の呪ひを浴せて秦の始皇の故智に倣ふ。それでも抑へ切れるならまだいゝ。抑へ切れないからいろ／＼ボロが出る。而して其ボロの最も悲慘なものは、事實の正確なる認識に基かざる從來の過つた政策の、事實の到底掩ふべからず又欺くべからざる破目になつて周章狼狽することである。我國最近の對外政策の失敗は殆んど例外なく源を此點に發して居る。殊に西伯利乃至露西亞に對する政策に於て甚しい。

内政外政の何れを問はず、言論の取締に關する政府の態度は内務當局から來るものも、司法官憲から來るものも、軍事方面から來るものも、悉く皆根本的に間違つて居る。彼等にも無論相當の言ひ分はあらう。あらば堂々と爭つたらいゝではないか。プロパガンダの爲めには相當に多額の機密費を費つて居ると云ふ噂は一片の流說に過ぎないとしても、言論の問題はもう少し言論で戰つて貰ひたい。之に臨むに徹頭徹尾權力を以てするはガリレオを殺した教會の横暴に比すべく、而して多くの場合矢張り同じく國を思ふの誠意に出づる丈け、我々は一面に於て限りなく憐愍の情を覺えざるを得ない。

小題小言十則

◉選擧に關聯する當局の背任　昨今財界の不景氣につれて、倒産したものも多い中に、予の一友人が居る。彼は故あつて其又友人の未亡人の財産數萬を保管して居るが、若し一時之を利用すれば破産の厄を免れ得たのに、遂に責任を重んじて之には一指をも觸れず、甘んじて、裸一貫の昔に還つた。名も無き田舍の百姓に過ぎないのに、當世には珍らしい。之に比べると當今は實に安心して物事を托することの出來ない、刑法に所謂背任者の多い世の中となつたものだ。而して背任の…も大なるものに政權の濫用がある。直接刑法の制裁を蒙らな…丈けに、我々は此等の道德的背任罪を憎む。而して此種の政權濫用の適例は昨今選擧に關聯して、頻々として我等の耳朶を打つのは今に始めぬ事ながら苦々しき限りである。選擧は或意味に於て生命懸けの戰爭にも比すべきであり、從つて極力狂奔するのは其事自身に於て何等怪むべきではない。大臣が如く職を曠うして應援に出張するも、樞要の地位にある官吏が續々現職のまゝ立候補するも先づ大目に見て置かう。けれども彼等が此政戰に公權を濫用するの一事に至つては斷じて之を許すことが出來ない。心あるものは百姓町人ですら如何に苦しくとも權限を超えて他人の依托に背かない。況んや局に天下の公に當るものは最も重大なる責任を托されて居るのに、之を自家の利益の爲めに濫用するのは考へて見れば匹夫野人にも劣る道德的大罪である。かゝる大罪を現に犯して居るや否やは表面に明かでないけれども、噂は噂を生んで殆んど世間に之を疑ふものはない。國民的良心の健全なる進步の爲めに、又憲政の誤られざる發達の爲めに、司法官憲の活動と有識者の監視警戒を希望する。

◉家長選擧權說について　普通選擧はいゝ、但し…

本邦古來の美風を維持する爲めに家長にのみ選擧權を享有せしめよと云ふ説は案外多くの人から最らしく受取られて居る。所謂家族制度なるものが文字通り本邦古來の美風なり否やの根本論は姑く別論とし、之が所謂美風に相違ないとしても家長のみに選擧權を行はしむべしとする必要は何處にあろか。惟ふに此説の根據は一家内に於て意見の分立を觀るは所謂家族的平和に害ありとするにあるのだらう。併しながら天下の公事について意見を異にすればとて家族と云ふ私的生活に於てまで反目せねばならぬ、又反目すべき筈と考ふるのは公私混同の甚しきものである。若し事實斯くの如き弊害があるならば、そは一家内の誰彼に洽ねく選擧權を與へた爲めではなくして公私混淆すべからざるの理を辨へぬ結果である。故に禍の源は彼にあらずして此にある。此根本の道理がよく明かになつてゐなければ家長のみに選擧權を與へた所が一家内の平和は必ずしも保たれない。何故なれば選擧權のない家族でも政爭に奔走するの自由は禁ぜられてゐないからである。加之所謂平和の重んずべきは獨り家族に限らない。町村自治體亦然り。家族の平和の爲めに選擧權を家長の特權とすべくんば、町村自治體の平和の爲めには選擧權を町村長の特權とせねばなるまい。斯くして歸する所は一般に選擧權は與へない方がいゝと云ふ事に歸着せざるを得ない。こゝまで推し詰めれば所謂家長選擧權説の謬妄は明白であらう。故に若し折角家庭の平和と云ふ事に氣がついて家長選擧權説を唱へるまでに頭腦を働かしたのなら、こゝに一轉して根本の誤りが公私を混同する點に在りと云ふ事に見識を立て直して貰ひたい。公事は公事、私事は私事、天下の問題で視る所を異にしても爭は即ち堂々たる君子の爭、退いては家族として又隣人として敬愛互尊の義を結ぶに何の蟠りもないならば、家族の誰彼に選擧權をやつても、よしんば妻君が主人と獨立して選擧權を行使することにしても何の弊害をも見ない筈ではないか。予輩は寧ろ此點に國民を啓發し嚮導することを今日の急務と信ずる。政爭の爲めに町村自治體が二派に分れて仇敵視し、甚しきは一旦結んだ嫁舅の縁をさへ絶つに至るものあるは誠に苦々しきの至りではないか。家長選擧權説は或は他の根據から之を主張するに相當の理由あるかも知れない。けれども前述ぶるが如き根據より主張さるゝのなら、我々は斷じて之に反對するのみならず、更に進んで之を好機として公私混同の積弊に一撃を與へざるを得ない。

●小選擧區制の利害

今度の選擧に關聯して小選擧區制の非を說くものがある。在野黨殊に憲政會などには、それ見た事かと本制の弊害が已に早や證據立てられて居る

云ふものもある。結論に到達するにはまだ早いが言論戰の萎靡振はない事、所謂人才の勝利の見込が遙かに少くなつた事、買收請托が前よりも一層濃厚になつた事などの事實は疑ないやうだ。併し之は一つには選擧權が今尙著しく制限されて居るが爲め、又一つには現行法の選擧區の分け方が政友會の都合のいゝやうに變なものになつて居る結果であつて、小選擧區制其物に固有する弊害ではないと思ふ。一體選擧の本來の精神から云へば選擧民と候補者との人格的信賴の關係が極めて親密なる事が望ましい。此點に於て輸入候補の如きは特別な例外を除いては決て好ましいものではない。選擧民が此人をこそ是非共出したいと熱望し、其熱望が選擧の結果に具體的にあらはれてこそ選擧の趣意が通る。此點から云つて一區一人の所謂小選擧區制が最も理想的なものである。大選擧區でなければ大人物が出て來ないなどゝ云ふのは飛んでもない愚論で、選擧民と代議士との關係を眞實の人格的のものたらしむるには小選擧區に限るのである。外國では他に特殊の理由があつて比例代表主義を採らねばならぬ所から大選擧區制を採つて居る所もあるけれども、同じ特殊の必要を有つてゐない我國では、必ずしも西洋昨今の例に據るの必要はない。比例代表主義が選擧法上の一般的新傾向であると盲信して居るものもあるが、之は斷じて誤りである。要するに今度の選擧戰に於て多少思はしくない現象を見るからと云つて、直ちに小選擧區制の弊害を斷定してはいけない。寧ろ之によつて益々普通選擧實行の急務を悟るべきである。予輩の狹い經驗によつても某區に若い者が寄り合つて今度は何某を擧げようと相當の人に白羽の箭を立てた。彼等は人物本位で[illegible]な人選をしたのに、後で聽いて見ると目星を附けられた本人は全然何等の具體的の交渉を受けなかつたと云ふ。之れ何人を擧ぐべきかの具體的の決定は區會議員とか町村會議員とか云つたやうな所謂中流階級の有志者の掌裡に在り、而して此等の連中は從來の關係から、夫れ〳〵の黨派と深い因緣を有つて居るし、彼等自身亦此等の黨派と從來遣り來りの條件で、從來遣り來りの運動をすることによつてのみ目的を達し得るものと考へて居る。故に人物本位などゝ云ふ事は全然念頭に無い。だから表面に立てらるゝ候補者は何時も同じ顏の政治屋の外に出でない。此等の連中の掌裡より候補者選定の實權を奪ふでなければ我等の理想するやうな政戰は容易に見られない。而して此事をあらしむる爲めには普通選擧の實行によつて、今まで政治屋から疎されなかつた純良無垢の人に發言權を有せしむるの外にないではないか。

●普選問題に關する或高官の話

先頃政府

の要路にある一高官と話した。彼曰く、普通選擧のいゝと云ふ事は知らぬではないが今の日本でそんなものは通るものか、少しく政界の情僞に通ずるものはこんな馬鹿な空論を弄ぶ筈がない。一體政府が去年選擧資格を三圓に下げたのでさへ官僚軍閥(と云ふ文字を彼は遣はなかつたが)の先輩の御機嫌を著しく損じて居る。此間を巧みに縫つて行くには人に知られぬ氣骨の折れること夥しい。大勢順應の必要は固より百も承知だが、普通選擧に反對だと表明して居る所に原首相のエライ手腕が潜んで居るのだ。之でなければ一日も政府が保てるものか。犬養だつて加藤だつて此位の事は分つて居る筈だのに、今更ら普選論などを説き廻るのは、正に親の心子知らずと云ふべきであると。成程普通選擧は共和國の事と考へて居る連中を對手とする政治家に此言あるは怪むに足らない。原首相が階級打破論を以て普通選擧を危險呼ばはりするのも、此等の連中の安心と信用を買ふ爲めと思へば尤もと首肯かれる。けれども記せよ、日本の政治が專ら此等の連中の思惑を顧慮して行つて行かねばならぬとすれば、そは世界の潮流から孤立し全然國民の利害と沒交渉であることを。政治は徒らに高祿を貪る頑迷者流の一時的滿足を買ふ爲めにするのではない。

●國民は果して政治に冷淡か

今度の政戰に於て國民が何時になく冷淡だと云ふが、此事實は予輩も認める。が之を證據として國民の政治的智識が相當に進んだと思つたのが誤りであつたと斷ずるものならば予輩は之に服し得ない。予輩は寧ろ今日の國民は公けの問題に對して非常な興味を有つて居る。政治上の一波一動が自分達の生活と非常に深い關係のあることを熟知して來た。彼等は如何に此等公けの問題について其眞相を知り、又公平なる批判を聽きたがつて居るかは演説會の繁昌、政論雜誌の賣行等に觀ても明かだ。政治問題に對する正確なる智識の獲得は今や日に〳〵増進しつゝある國民の熱求と云つていゝ。然るに現今の政界は言論に於ても又實際の施設に於ても之に滿足を與へてゐない。今日の政治家の爲す所云ふ所は、殆んど國民の生活と關係なき閑問題に齷齪して居るの觀がある。それもその筈だ。前項一高官の云ふが如く彼等の所謂政治は我々の云ふ政治と丸で方角が違つて居るから、どうすれば官僚が收まるか、どうすれば軍閥が收まるかと云ふやうな事が政治家にとつての大問題だとすれば、此等の問題を中心とする政戰に國民の興味を感ぜざるは云ふを俟たない。政治家の主として關心する所は、如何にして自家の勢力を維持せんかである。國民の專ら關心する所はいはゞ一般の國利民福である。彼等は此等の現實の問題に多大の興味を有して居るから、そし

け空な政戰に卷き込まれる程輕佻浮薄ではない。政治に興味なきが如く見ゆるのは所謂政治家の言説に何等聽くべきものがないと見極めをつけたからである。政友會領袖其憲政會幹部某の説なんど云ふものは近頃の有力な政論雜誌から跡を絶つた。演説會をやつても此種の顔觸れでは聽衆が無い。之を以て國民の冷淡を斷ずるのは井蛙の見に過ぎない。國民は今や非常な興味を公事に感じて居る。而して政治家の所謂政治は彼等の關心する公事と何等の交渉が無いと云ふ風に考へしむるのは果して幸福かどうか。所謂政治にして恃むべからずんば、人は遂に公事の解決を直接行動に訴へんとするに至るだらう。果して然らば危險思想の釀成は此等蒙昧の政治家の罪と云はなければならない。

●「元々社」と「日の會」　新聞の傳ふる所によれば建部博士を戴いて「元々社」が生れ、上杉博士を中心として「日の會」なるものが生れたと云ふ。有力なる二人の先輩によつて有力なる思想團體の發生せるは予輩の誠に慶賀に勝へざる所である。只二博士の爲めに惜む所は、此等團體創設の目的について世間に誤解のある事である。新聞の傳ふるがまゝを眞とすれば、此等の團體はデモクラシイ其他の所謂外來思潮の鎭壓を目的とするものだと云ふ。併しこんな馬鹿な事は出來るものではない。尤も當今の日本にとつて全然無用とも思はない。と云ふ意味は當今のやうに世間が餘りに新奇を好んで突飛に進み過ぐる時には多少反動的思想を以て之を牽制するの必要があるからである。前に進む筈の電車にもブレーキの設備が要る。併しブレーキの作用位の事なら建部博士や上杉博士を煩はすまでもなく世間には好んで此任に當るものが相當に多い。惟ふに兩博士の此新團體は世界の新局面に於ける帝國々運の興隆に對して我々とは違つた一面を分擔すると云ふ趣意のものであらう。世間の下らない誤解を一掃して溌剌たる活動を始められんことを希望する。

●何が危險人物乎　最近英吉利で非常に廣く讀まれて居る小説に「ソニア」と云ふのがある。ソニアは女主人公の名だ。之が對手となる一青年は少年時代手も着けられないひどい者で、先生も學友も持て餘して居つたが、只一つ變つた特色は何時でも餓鬼大將となつて同輩を攫んで居る事である。けれども教師の云ふ事は聽かず、世間のしきたりには從はず、末恐ろしき不良少年と見られて居つた。日本の言葉でいへば正に立派な危險人物である。所が、今度の戰爭になつて社會の狀態が一變すると、此青年が大いに活動し初めた。否無くてならぬ人物となつて非常な大事業をなしたと云ふのである。尙外にいろ

〳〵非常に面白い事があるが、要するに舊い窮屈な社會で不良少年と觀たものが新らしい社會に於ては非常な英才なので、詰り從來の社會狀態が本當の英才に驥足を伸ばすことを得ざらしめたのである。今や世界の大戰を經て天下の形勢は一變した。從つて社會の人才に要求する資格も大いに變つたのに、年老つたものは動もすると舊慣故習に囚へられて此邊の關係を見損ふ。時勢の變轉に敏感な青年はどん〳〵新時代の要求に應じて自己の人格を作り上げつゝあるのに、父兄の方は依然として十年前の舊い夢に醉うて居る。斯くして青年と老年との間の思想上の距離は著しく廣くならざるを得ない。老人は已に在るもの、現に在るものを正しいとして之に適合するものを善とするのに、青年は已に在るもの、現に在るもの夫れ自身の根據を疑ひ初めた、否少くとも批判的態度を以て之に對する。當今我國で危險人物視せらるゝものに此種の人が多い。年老つたものが一概に青年の思想を危險視するのも又此邊の事情に基くことと多からうと思ふ。斯う云ふ意味の危險人物と斯う云ふ意味の危險思想が、大いに盛んに起つて老輩を面喰はすにあらずんば、世界に於ける新日本の勃興は期せられない。

●**東京市の惡路と自働車**　自働車を引合に出すまでもなく東京の道路は甚だわるい。殊に自働車の爲めに一層わるくなる。普通の道路ならまだしも、立派に石で敷き詰めた電車道でさへ、自働車の爲めに今や見る影もなくデコボコになつて居る。一面石で敷き詰めたのだから之なら何が來ても大丈夫だと思はれた電車道でさへ、文明の利器に會つては斯うまで脆いのかとつく〳〵考へさせられる。併し文明の利器は自働車に限らない。今にタンクのやうな怪物も曳き廻されるかも知れない。どうせ金をかけて道路を作るなら何が來ても大丈夫なものを欲しいものだ。法律や訓示や青年團や在鄕軍人會や乃至內務省御用の民力涵養講演やによつて大丈夫青年の思想は動かないと考へて居る連中の作る道路だから、文明の新利器の殺到に吃驚するも止むを得ないが、自分の作つたものゝお粗末な事を棚に上げて、自働車やタンクを危險呼ばりするのは片腹痛い。日本には足駄と云ふ特殊の履物があるから之を永久に保存するが爲めに道路は今のまゝにして置いた方がいゝと云ふものあるに至つては沙汰の限りである。

●**西伯利出兵論者の妄**　內々兵隊を出して居ると觀られて居る軍事當局でさへ表向き撤兵は當然だと宣言した程の世の中だから、臆面もなく出兵論を主張するものゝなくなつた事は怪むに足らないが、感情的に無暗と兵隊を出したがる連中は此頃こんな事を云ふ。出兵乃至駐兵の利害得失は姑く

題として、我忠勇なる陛下の赤子が、異域に在つて名狀すべからざる辛苦を嘗め、又我々の同胞が外人の堪へ難き侮辱と虐待とを受けて居るのを帝國の面目として默視する譯には行くまい。今は撤兵駐兵の利害を論ずべき場合ではない。此目前の事實をどうするかと云ふせつぱ詰つた場合だと。こんな意味で最近一種のプロパガンダも起つて居るやうだが、併し多數の國民は一體理由なしに出兵したのが間違だ。此上無理に横車を押すのは尚一層わるいと考へて居るのだから、右の論法では國民多數の撤兵論に水を指すことは出來ない。子供が喧嘩して居る、自分の悴が擲られさうだから兎も角も早く驅けつけて對手の小兒を擲り倒せ、どつちがわるいかは今論ずべき場合でないと云ふものあらば、誰か此親の言ひ分を最もと考ふるものがあらうか。故に西伯利出兵問題について今日愼重に考へねばならぬ問題がありとすれば、それは只撤兵が可能なりや否やと云ふ點丈けでなければならない。撤兵せんとしても後をつけねらはれると云ふなら一寸實行が六つかしいかも知れない。併し此方で誠意を示して撤兵すると云ふのに對手方はどこまでも追窮して來るだらうかどうか。此點になれば一體露西亞の國民、殊に過激派の連中は此種の問題についてどう云ふ態度を執るだらうかを研究することが必要である。處が露國民殊に過激派に關する眞相は當局で報道を禁止して居るから國民には丸で見當がつかない事になる。有ることを無いと云ひ、無い事を有ると云ふのを取締るならまだしも、事實を有りのまゝに報道する事を許さないやうでは、日本當面の難關たる西伯利問題は少くとも國民の十分なる諒解の下に解決することは非常に困難であらう。

●日米交驩　日米の親善を圖る目的を以て先般渡來した若い米國の一友人が都合のつかない時間を無理に都合して予と會談した際に次のやうな事を云つた。自分は日本の風物をも見たいとは思つたが、それよりも主として、年若い新思想家と緩談するの機會を得たかつた。其積りで來たのに、横濱に着く早々、官紳の餘りに手厚きもてなしを受け、剰へ今日は帝劇、明日は都踊、又其次は某大官、某富豪の午餐會と動きのとれないプログラムが極めてあつて、折角來ても不得要領に騒いで歸て了ふことになる。有難迷惑が甚しいと。翻つて日本側の歡迎委員に聞くと、彼等は帝劇を觀て日本の藝術を嘆賞したとか都踊を觀てこれ丈けでも再遊三遊するの價値があると云つたとか、兎に角非常な滿足で歸つたと云ふ。而して結局幾度同じ事を繰り返しても本當の日米親善の實の更に擧つてゐない事は蔽ふべくもない。帝劇や都踊の折角の歡迎も、日本の識者の考の餘りに淺果敢なと云ふ事が看破されずに濟めば誠に結構だ。

思潮

中澤臨川

技術家の覺醒

この非常な時代に於て、各別の職業の者が、政治家は政治家として、教育者は教育者として、科學者は科學者として、藝術家は藝術家として、記者は記者として、めい／＼が一切に自己の探りつゝある業務の意義と責任とを新しい心を以て考へ始め、又は考へ直すやうになつたといふことは、當然の現象である。

技術家としてもまた其例に洩れるものでない。私は自分が一個の技師であるところから、工業が人類社會の進歩と幸福とに對してどういふ位置に立つてゐるか、之に携はる者の責任はどうかといふやうな事を、人一倍痛切に考へさせられるのである。

わたくし自身の經驗からえた觀察を玆に告白的に述べるならば、今日の技術家は餘りに自個の職業とする專門に狹くそして堅苦しく沒頭し過ぎる結果は、知らず識らず「人間」としての又「市民」としての當然の責務を忘却してゐるかに思はれる。勿論これはどの職業に就ても言はれうべき事で、近代社會の過當な分業尊重主義は、凡ての人間を驅つてその專門の奴隷とならしめ、偏狹な機械的發達のもとに心意の不具的分裂を來たさしめた。政治家は政治を手段視し、教育家は教育を機械視し、科學者は科學を萬能視する。その爲めにめい／＼の人間は孤立して頑迷になり、傲慢になり、自利的になり、社會の各成員間を結び附けるところの有機的ソリダリテは失はれた。

此の如く、現代の人間は、凡ての職業の者がその職業の狹い天地に囚はれて、人間及市民としての意義及責務を閑却してゐるのであるが、とりわけそれは技術者の仲間に就てより多く言はるべき事柄である。その理由は、今日の教育制度が技術の養成にのみ專念であつて、殆んど全く人間としての修養を怠つてゐるといふことがその一、技術者は常に產業と接觸してゐるために、知らず識らず今日の資本家氣質に感染して利慾にのみ狂奔するやうになることがその二、技術の土臺たる自然科學が理智及物質の萬能を教えるところから、技術者が期せずして精神の侮蔑

に陥ることがその三である。かやうな不具的傾向の爲に、現代の技術家社會に於ては、錬達な技術と粗野な本能とが一人の技術者の生活に並存するといふことは殆んど普通であつて、世間も亦之をあやしまうとはしない。技術上では非常な自信と之に關する傲慢とを有してゐる人間が、處世の上では猫のやうな追隨を得意とする二重人格者さへ敢て珍らしくない。

併し時代は急變した。今日は凡ての職業の者が、政治家は政治家として、教育者は教育者として、學者は學者として、藝術家は藝術家として、而して技術者は技術者として、めい〳〵が各自の採りつゝある業務の意義と責任とを、新しい心を以て考へ、新しい眼を以て觀なければならない必要に迫られつゝある。政治家が最早その日暮しの政策と黨派本位の爭ひにのみ沒頭してゐられないやうに、教育家が古い囚はれた教育方針を根本から改めなければならないやうに、技術者も亦自己の職責と位置とを三思して、權力と資本との頤使に甘んじた在來の習慣から脫却する決心を持たなければならない時期が來た。換言すれば、我々技術者は單なる「技術者」としての生活を離脫して、もつと根本的に「人間」であり「市民」であるべく心懸けるとともに、さうした高い立場から自分達の職業を考へなければならない。

工業即ち技術の進歩が產業の發達にどれだけ大きな關係を有してゐるかといふことは玆に說くまでもない。人間が他の動物と異るところは我々が工具を發明し且つ使用する點にあるといはれるほど、機械と人間生活との交渉は密接なものである。Industry といふ字が廣い意味での產業をさすと共に、工業の意にも通ずるところから見ても、兩者の關係はわかる。況して近代になつてからは、驚くべき產業の發達と革命とが、一として工業の力に據らないものはない有樣で、產業即ち工業と言つて可いほどである。然るに獨逸の軍國主義を增長せしめたのも、資本をして今日の暴戾な位置に立たしめたのも、矢張その原因の大部分は工業の發達にある。世界の人間をして生かしめ、住はしめ、着せしめる重要な使命を有してゐるところの工業に携はつてゐる技術者が、今日までなぜ單に一の「技術」といふ機械たることに甘んじて、權力と資本との命ずるまゝに使はれて來たかは、考へれば考へるほど不思議である。我々技術家が今少しフューマンでそして自利に淡白であつたと想像せよ。我々の仲間が同胞を傷害する機械や藥品を製造することを拒むか、又はそれを嫌つたと想像せよ。我々の仲間がその苦心になつた有效な發明を餘りに易々と資本家の利益の爲めに提供しなんだと想像せよ。さうしたならば、恐らく獨逸の軍國主義も起らなんだであらうし、世界大戰の慘禍も見ずに濟むことが能きたであらう

し、今日の如き資本と勞働とののつぴきならない敵時も自然に防ぎ得たであらう。

かう考へるときに、技術者の社會に對する任務は極めて重大である。で、彼等がこの重大な任務を完全に果たす爲めには、彼等はいかにして錬達な技術者とならうかと苦心すると同時に―否それに先んじて――いかにして「人間」であり「市民」でありうるかと苦心せねばならない。之は言ひ古された當然の事のやうではあるが、その實この自覺に於て生きてゐる技術者は先づ尠ないと言つてよい。世間的利慾から離れ、自然を研究することに自己の全生涯を捧げてゐるかの如く見ゆる純粹の科學者の間にさへ、「人間」としての立場を忘却した爲めに、酒客が酒を樂む如くほんの自己滿足から學問の快樂に醉つてゐる者がある。況んや世間的名利との關係の深い技術者としては「人間」の眞自覺に就くといふことは或は難事中の難事である。併し幸ひに今の時代は凡ての人に覺醒を强ゆる。この非常な時代を前にして動搖を感じない一つの良心でもありやう筈はない。今は實に人類にとつての最困難な時代であると共に、彼等に對する天佑の時期であり、同時にあらゆる職業の者に課せられた "Self-denial week" である。

一たびフューマンな立場から、技術者が自己の職業を顧みるときに、彼等の眼界は一變するであらう。社會の幸福といふことを目的として立つ彼等は、必ずしも今までのやうに「最大生産」の聲に欺かれることはないであらう。富と自利とが彼等の眼ざす終局ではなくなるであらう。殺人器を發明することのみを彼等の愛國心の發揮とは思はぬであらう。彼等は最早權力と資本との前にさほど從順ではないであらう。彼等は生産の實際のマネーヂャーとしての、また資本と勞働との實際の仲介者としての自己の位置に猛省するであらう。玆に卑近な一例をとるならば、戰後の世界は所謂燃料饑饉（コールフェミン）に苦みつゝある。然かもそれは一時的の出來事ではなくして、近き未來の世界を脅かしつつある一大問題である。石炭の壽命は今後五六十年を出でないとさへ言はれてゐる。かやうな時期に當つて、有爲な技術家が燃料節約の發明に沒頭することは、まことに人類にとつて何んだけ重要な意義を有するか計り知れないほどの貴い事業である。で、その成績は既に實際に上りつゝあつて、例へば米國のエヂソンが今迄の機械油に代るべき減摩劑（ルブリカント）としてのグラファイトを發見し、英國のスチルが非常に能率の高いエンヂンを發明した如き、着々として光明は見えかけてゐる。併し我等はたゞ單に是等の技術上の發明に隨喜してばかりゐてはならない。我等はもう一歩突き込んで、是等の發明の福音を人類の多數者に、

ぼすには、技術家はいかなる態度に出づべきかと考へなければならない。もしそれがアチェソン會社の配當を增し、またはスチルに多大の特許料を儲けさせ、或はその發明權を應用する資本家の二三の懐を肥すに止るならば、是等の發明は人類全體の幸福とは緣遠いものに終りはしまいか。我々今後の技術者は少くともそこまでは蹈み込んで考へるだけの義務があるであらう。

　クロポトキンの書いたもので、『青年に與ふ』といふ小冊子があるが、その中で彼は若き一技師に次のやうな忠告を與へてゐる。悲しき迷からさめよ、お前は欺かれてゐるのである。お前は若き努力と知識とを捧げて、斷崖のほとりに鐵道を布き、巨大な山を堀つて隧道を造るは可いが、併しその結果を考へて看よ。その爲めに何れだけの人間が傷害され、そして僅かに得るところは資本家の貪婪を滿たすに止まりはしないか。又若きお前は夜の眼も寢ずに多大の努力を拂ひ、漸く價値ある一發明を爲し遂げたとする。然るに之が世間へ擴がつて實用に供せられる場合には、お前の期待は全然裏切られて、却て十萬廿萬の勞働者がその爲めに職を失ひ、そして三人、四人、或は十人の資本家の運命のみが拓かれ、彼等をして三鞭酒の杯を擧げさせるのが落ちではないかと。

　クロポトキンの言ふところは技術の否定でも侮蔑でもない。彼は今日の社會組織のもとに於ては、いかに有用な新しい發明も、多數者の幸福をば增進しないばかりか、却てその奴隷的負擔を重からしめることを歎くものである。で、彼は技術者が機械の發明に專念する其獨立の精神を以て、同時に社會問題を觀ることを奬めるのである。資本と權力との驅使に甘んじ、併せて自己の利益にのみ汲々たる技術者に對して彼は曰ふ。お前の技術を、犬に與へよ、それは一個のぺてんであり、一個の詐僞であると。

　要するに、技術家が彼等の重要な責務の自覺に入る第一歩は彼等が先づ第一に「人間」であり「市民」であることである。「我等が一人の著者を見るべく豫期し乍ら、一人の人間を發見した時ほど心持の好いことはない」とはパスカルの詞であるが、何れの事業に於ても人間としての活動が根柢をなすべきであつて、我等は一人の技術家を見る前に先づ一人の人間を見なければならない。その莖から剪られた花の早く萎む如く、其根柢を人間に置かない技術に生命のあらう筈はない。

　新聞紙の報するところによれば、都下の工業學生から或る一團體が新たに成つて、其目的は主として自己の修養を圖り、且つ技術者の社會的位置を高めるにあるといふ。私はこの擧が覺醒の氣運に向ひつゝある技術者社會を代表する先驅と見て、そ

の團體の誕生を祝福するものである。

獨逸の教育

私は前號本紙に於て我國の教育者に寄する一文を發表したがその中で軍國主義的教育の非を鳴らし、世界の各國民は獨逸を批難する前に先づ自らを知る必要のあることを述べた。この世界が眞に平和を樂む時期に達する爲には、我等の教育方針は根本から建て直されねばならず、從て今まで用ゐられた教科書と修身書との大半は遠慮なく改訂されねばならぬといふのが私の意見であつた。その後『ツーキュンフト』を見ると、マックス・ハルデンの『戰前に於ける獨逸の教育』と題する興味ある一文が載つてゐる。之は革命後の獨逸にとつては或は過去の記録であるかも知れないが、とにかく非常に面白い物であると信ずるので、讀者の參考の爲めにその一部を次に譯載する。

幼なきウィリイ・クラウゼの愛してゐた玩具は兵隊であつた。彼が最初に持つてゐたのは木製の品で、それが至て醜惡な物だつたので、彼はそれに厭きて了つた。併し幼ないウィリイが彼の姉の人形を喜ぶやうになつて、肉附のよい、金髮の、赤い頬と青い眼とを持つた女人形に衣物を着せたり脱がせたりしてゐるのを見た彼の父はかう言つた、「それは男の兒には似合はない」。そこで次のクリスマスには、ウィリイは鉛の兵隊を二箱買つて貰つた。その後彼の鉛の兵隊はどし〳〵ふえた、好い出來の――青い騎兵、赤い輕騎兵、白い甲騎兵、歩兵、砲兵、本物のやうな大砲、水雷艇の附いた灰色の軍艦、一大隊の水兵までが。これ等の物は實際すてきだつた。幼ないウィリイは直きにどんな軍服でも、制帽でも、肩章でも、勳章でも見分けることが能きるやうになつた。彼はヘルメット型の帽と軍服と騎兵靴とに身をかため、鞘を拂つた長いサアベルを持つて濶歩した。稍や生長したとき、彼はリボンの上に「陛下の軍艦ウォルス」と書かれた水兵帽を被つた。字が讀めるやうになると、早速彼は戰爭と軍人とを褒めてある書物を獵つた。これ等の書物には戰爭の光耀が稱えてあるばかりで、その殘忍な事や悲慘な事は少しも書いてなかつた。

學校の放課後に多勢の子供が「泥棒と兵隊」ごつこをして遊んだときに、彼はいつでも泥棒となるのを嫌つた。で、兵隊の役に廻つて正義と秩序の爲めに戰ふのが好きだつた。言ふまでもなく彼は、兵隊とは正義と秩序の爲めよりほかには戰ふものでないと信じきつてゐたのである。學校で

體操と兵術の上手な屈竟な生徒が、希臘語や數學の達者な眼鏡を懸けた弱々しい生徒より、教師にも仲間にも持て囃されるのを見てとつたウィリイは、直ぐにから獨斷したのである、肉體の頑强は凡ての名譽の源であると。

そこには共學の制度がなかつた。それで若い男と女とがお互の性格や技能を知り合ふ機會がなかつた。……で、小供は他の性の者や又は普通の人民を尊敬することを知らなんだ……彼は下女と話をすることさへ禁じられた、なぜならそれは家庭の訓練に反してゐるから。……彼の兩親も、親戚も、教師も一致して彼を强い、勇敢な、人の先に立つて金を儲け、そして高い位置をうる人間に仕立てようとした。

勿論それは宗教に關して學校の教えた事とは合致しなんだ。そこでは謙和、素朴、神の光榮などに就て一通り形式的な教訓が與へられた。それから英雄主義、戰爭的成功、地上の榮達などの虛榮である事に就ても教えられないわけではなかつた。併しウィリイはから考へた、この教は他の世界か、少くとも日曜と祭日だけに限つて當てはまるものである。我等が基督に從はなければならないのは是等の日だけだと。それが證據には、働くべき日に平和を愛したり同情的であつたりして、金をつくる事に專心になれない人間、同胞を愛して貧しい者に自分の物を頒ち與へるやうな人間に限つて、決して成功しない。宗教と他の學課とは並び立たない。で、學校教育の詮りの結果は、古い獨逸の神々がまだ天から支配してゐるのだといふ印象を生徒に與へることになる。

歷史——ともかく歷史と名のつく學問——が廣い範圍を占めてゐた。ウィリイは海綿が水を吸ふやうに愛國心を以て飽滿された。彼の祖國はいつも神聖に正しく、いつも他國よりは偉大な事を爲した。彼は多數の年月と王侯の名とを覺えねばならなんだ。歷史とはもろ〱の王と將軍と兵隊と戰爭との記錄であつた。で、かやうな歷史を課せられたのは男生徒ばかりではなかつた。女學校に上つてゐた彼の姉のベンタはその初年級で、プルシヤの將軍ブューロオが一八一三年にネー將軍を破つたデネウィッツの、戰がどう開展したかといふ戰略的地圖を書かされた。若しもカッチエからセダンまでの主要戰爭の名を知らないやうな男生があつたら、彼の不幸よ!。凡ての教育は獨逸中心主義を以でなんだ。それで一年中の國民的二祭日であるところの天長節とセダン日とには、いつも型の如く次のやうな意味の演說があつた。「我等獨逸人は人類中で一番勤勉で一番能力ある國民である故に憎まれる。幾世紀間狡猾なる我等の隣

邦は國民的一致に到達しようとする我等の無邪氣で善良な企を妨げた。我等民族のうちの最勇敢なる一邦はこの理想の爲めに劍を以て戰はねばならなんだ。然るに今や獨逸はその權力の頂上に達した、そしてより多く憎まれてゐる。いつの日かは我等が劍を拔くべく餘義なくされる時が來るであらう。その劍は我等の神聖なる所有を防護するに充分銳くなければならぬ。それ故に鬪爭の精神は我等の天性の中核でなければならぬ。國民普遍の任務、名譽の至高なる感情、强大なる帝國、嚴正なる訓錬、絕對的服從──たゞ是等の制度と性格とに依てのみ我等國民の未來は保ちうるであらう。若し我等の優越を抑積しようとするならば我等は次の如き詩人の詞に眞理を認めねばならぬ。

最後にこの世界は獨逸に則つて完全に達するであらう。」

……………………

これが戰前に於ける獨逸の教育の活畫である。併し之はそれと同時に世界に於ける他の諸强國の教育の活畫でもなかつたか。私が、各國民は獨逸を批難する前に先づ自らを省る必要のあることを說いたのは、この事である。かやうな教育方針の導く終局が大仕懸に血を流す國と國との間の戰爭でなかつたらば寧ろ不思議とせられるであらう。一片の國際聯盟規約を以て平和の曙光の如く謳歌する政治家の迂愚を笑ひ、或はその狡猾を憎め。

併し革命後一年有半の獨逸は、政治に教育に多大の變革を齎した。先づ男女及階級の差別を撤廢した自由共學の制度が初等教育の組織を根本から改め、有能者の爲めに向上の道筋が開かれ、學生の父兄には教師及教育當局者と相談の機會が與へられ、中學校以上の學生には或程度まで自治が許され、社會奉仕の觀念を養生する爲めの講座が至る處に設られ、勞働者の精神教育の爲めに特に野外學校が設けられるといふ有樣である。猶ほ特記すべきことは在來の强制的教育が殆んど一掃されようとしつゝある事で、第一には不自然な宗教教育が廢され、それから歷史教育の精神が根本から改革された。學校の軍隊化は急にその勢力を失墜し、之に代るに自由、人道、國際の精神が新教育を支配しかけた。階級に對する新しい觀念、國民と國民との關係に對する新しい觀念、義務やソリダリテの新しい觀念が、今更のやうに當局者をも學生をも動かしつゝある。「眞の教育は單に國家の爲めのみの教育でなく、人類全體の爲めの教育でなければならぬ」といふ有力な聲が聞かれる。

革命後一年有半の獨逸、それは最早昔の面影の薄くぼけて、

新しい形相の判然と映出した國家である。私は玆に特に世の中の怠惰なる想像家たちに警告したい、卿等の夢想する舊獨逸は、いかなる天變地異をふるも、決して〳〵再び歸らないといふことを。私は獨逸の未來に自信深き希望を懸けつゝ、玆にすぎ去つた過去の記錄として前掲のハルデンの文章を鑑讀する者である。



來る五月十日開講の通信大學

文化生活研究

■新時代が我國で今日求め得る、新進の最高權威二十七大家を通して與ふる絶好機會

「文化生活研究」を必讀すべき人は

一 舊い囚はれた生活を改善して新時代に適應する文化生活を樂まんとする進步的な一般の紳士、淑女。
一 所謂嫁入準備時代中にある高等女學校卒業程度の若き婦人。
一 健全にして樂しき家庭を作り現代の主婦たる大任を全うせんと努むる婦人
一 研究心に富みながら種々の事情の爲規則正しき高等の學校敎育を受けることの出來ざる篤志家。

主幹 ドクトル(經濟學) 法學博士 森本厚吉・顧問 法學博士 吉野作造 有島武郎

□學科目及擔當講師□

學科目	肩書	講師
家庭生活と宗敎	帝大教授 文學博士	姉崎正治
生活と文學		有島武郎
家庭と美術		有島生馬
家庭細菌	帝大教授 農學博士	半澤洵
家庭園藝	帝大教授 農學博士	星野勇三
婚姻問題	帝大教授 法學博士	穗積重遠
育兒法	女子大學 家政部長	井上秀子
社會病理		賀川豐彥
家庭生活と財政問題	帝大教授 法學博士	神戸正雄
家庭制度	帝大教授 法學博士	河田嗣郎
中產階級者生活問題	帝大教授 經濟學博士	河津暹
家庭敎育	早大教授	木村久一
家庭生物	帝大教授 農學博士	松村松年
國民生活改善問題	文學博士	三宅雄二郎
消費經濟論、生活の標準	帝大教授 法學博士	森本厚吉
家庭經營		森本靜子
食物榮養論、家庭衛生	帝大教授 醫學博士	永井潛
食物經濟論	榮養研究所 醫學博士	佐伯矩
住宅論	帝大教授 工學博士	佐野利器
小兒衛生	帝大教授 醫學博士	佐藤彰
生計費統計論	法學博士	高野岩三郎
家庭と音樂	理學士	田邊尚雄
家庭料理	女子大學 教授	手塚かね子
都市生活論	帝大教授 法學博士	渡邊鐵藏
婦人の自修自學		與謝野晶子

體裁
四六判約三百頁
紙質裝幀善美
五號總振かな

會費
一ケ年分拾五圓六拾錢
六ケ月分 八圓五拾錢
一ケ月分 壹圓五拾錢

入會金即時申込者に限り金五十錢

研究要覽 無代進呈

□會員募集□

東京京橋尾張町 警醒社書店内
振替西壹五五壹番

文化生活研究會

本號より 五拾錢 郵稅一錢五厘

婦人公論

◇五月號出來◎やゝもすればば時代の外に逸せられんとする婦人にとつて無くてならぬものは毎月本誌の一本也◇

今年の卒業生を送つて

◆◆◆◆◆◆湯原女高師校長麻生女子大校長を始め府立第一第二第三第四高女校長等都下公私十八女學校長が今年の卒業生を送つての感想を集錄す。是れ一面現代社會生活の影響が何處まで學窓を叩いて少女の胸を驚かせたかを見、他面都下女學校長の教育方針並に其面目躍如たるものを見るべし。父兄並に女學生の爲に特に提供す

■溝を埋めて……有島武郎
若い男女わけても本誌讀者の爲に寄られた此一文をお勸します

■「女は男に劣らない」證明……醫學博士 榊保三郎
日本には勿論外國にも例のない實驗心理學大研究の結果發表

■性教育論（卒業から結婚迄の豫備教育）……府立第一高女校長 市川源三

■化物屋敷物語 黑い蛙……田中貢太郎

■葛城小僧の改心……山川險

■解散 臨時總選擧議會……木村久一

■社交と接待 日米家庭生活の比較研究（森本靜子）……自由論壇

■大阪の女教師殺し……澤田撫松

■高等女學校の修身教科書を批評して其改善を促す……本間久雄

■殉教少女物語……山中峯太郎
往昔國禁を犯して宗教の爲に殉死した千代女のけなげな涙物語

■意地惡根性と愛の生活……寺田精一
意地惡るを心理學的に研究して戀愛との關係を説明した好讀物

■子供の國（繁殖肯定者の見たる子供）……島村民藏

（小說）

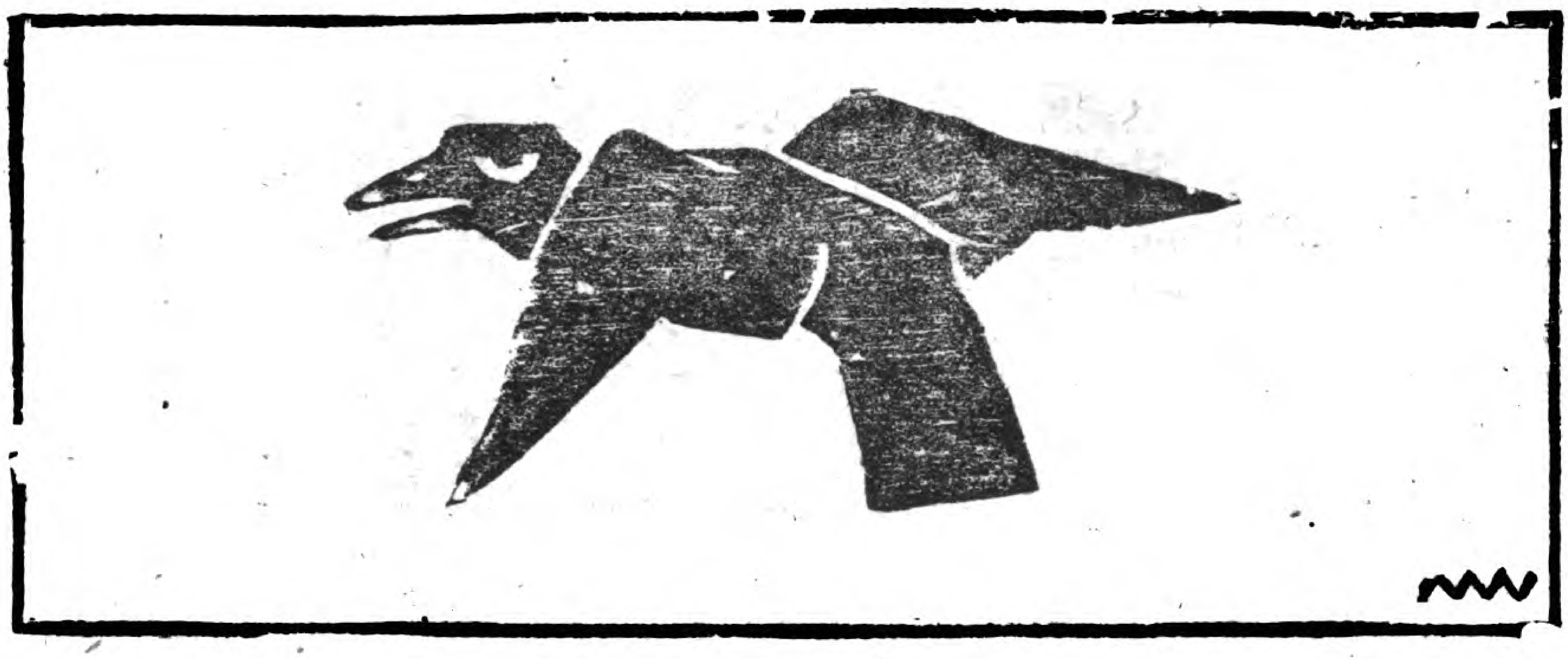
■或る時……吉田絃二郎

■空華……久米正雄

■海神の宮へ……秋田雨雀

■小坂部姬……岡本綺堂

東京市本郷區西片町十番地
中央公論社
振替東京三十四番



手をさしのべる男

小川未明

私は古い獨逸の美術雜誌にあつた、繪を思ひ出した。其の畫は誰が描いたのか分らない。たしか下の處に書いてあつたのだらうけれど、其の名は今記憶に殘つてゐない。思ふに、あまり世間には有名になつてゐる人ではないかも知れない。

畫はたゞ一人の男が、ある男だか女だか分らないが、患つて臥てゐる床の傍で、眼をいつぱいに見開いて、思ひきり力を入れて手を虛空に差しのべてゐる姿であつた。

其の繪を見たのは、ずつと以前のことだ。其れだのに、いまだに其の男の眼をいつぱい見開いて、手をさしのべてゐる姿を忘れることが出來ない。

いつたい何年位經つたであらう。而して、其の畫はいつ頃描かれたものであらう。

たしか、あの姉妹が丘の家に住んでゐた時であつた。私は、二人をたづねやうと思つて宿を出かけて行つた。ちやうど秋風の吹く時分で、枯れた、黑ずんだ木の葉や、赤くなつた葉などが毬を轉がすやうに空にくる〳〵と廻つて飛び、あたりに張り渡つてゐる電線の間をくゞつて町の家根に吹き付け、また行手の路の上に渦を卷

いてゐた。

かうした秋の夕暮方には、よく力の弱々しい太陽が沈み際に雲の色を黄色く染ることがあるものだ。其れは、この白然が熱病にかゝつてゐるやうに、一種悩ましい感じをさせるのである。

彼方の丘の上には、立派な宏壯な建物があつた。其の中には、高い二階家の硝子窓が西北の方を向いてゐるのもあつて、一時に其れ等の窓々が波打つ如く、黄色の炎を浴びて燃えて見えた。坂の下に一軒の古本屋があつて、店頭に表紙のとれた古本や、また紙の色の褪せて黄色くなつたやうな書物や、また何といふことなしにいろ〳〵な雜誌が積み重ねられてゐた。

私の手に取つたのは、其の中から撰り出した一冊の雜誌であつたが、表紙が半分裂けてゐて、たゞ美術雜誌であるといふ以外には分らなかつた。其れでも、ある時は、新刊として、伯林の街の各書店の軒下に積まれたことがあつたのだ。其の時分は今とは違つた風俗の女や、男が町を歩いてゐたであらう。日本もさうであつた。私は、もう決して歸つて來ない中古時代の建物や、風俗を何んといふことなしに、なつかしむのであるが、其時、眼にこの畫とは格別關係のない、いろ〳〵のことまでを空想したのであつた。

私は、たゞ其の繪に引き付けられたばかりに、古本屋の爺さんに錢を拂つて、其の雜誌を握つて店から出た。思ふに、其の爺さんはもう死んで、この世にゐなからう。

姉妹をたづねてから、私は、其の雜誌を開いて、この畫を二人に見せた。妹はいつも机に向つてばかりゐる沈んだ性質の女であつた。姉は、ちやうど勝手許で働いてゐたが手を拭き〳〵其處に來て坐つて、やはり其の畫に見入つた。

「なんだか氣味の惡い畫ですね。」と、妹は下を向きながら言つた。

「誰か死んだところなんでせうか？」と、妹よりはずつと快活で、且つ健康な姉が言つた。

私は、深く考へることもなしに、直ちに姉の言葉に同意した。

「さうですね」と、私は答へた。

其の實、私は床の上に横はつてゐる人間のことなどは眼の中に入らなかつたのだ。たゞ、手をさしのべて、眼をいつぱいに見開いてゐる男の顔にすつかり心を奪はれてしまつて、其のどうしても忘られない印象に魘されるやうな氣持でゐたのである。

しばらく、默つて繪を見詰てゐた妹は、急に、

「死んでしまつたんでないわ。まだ死なゝいのでせう」と、彼女は言つた。

さう言はれてから、更に心を入れて見ると、妹の言葉の方がほんたうらしかつた。死んでしまつたら、男は首垂れて、死骸に掩ひかゝつて靜かに泣いてゐる筈だ。しかし男は叫んでゐる。實際は叫んでゐなかつたのかも知れないが眼が叫んでゐる。永久に叫んでゐる。

雨の降り出しさうな暗い晩であつた。私は上野停車場に向つて俥を走らした。

「とても、あんた電車になんか乘れませんや」と、車夫は裏通りの道幅の狹い路次を出やうとして行手に過ぎ行く電車を指して言つた。電車には人間が黒く集つて、ちやうど蟻の付いたやうであつた。其れが明るい處をぎい／＼音を立てながら過ぎて行つた。

「これから花時には、もつと混雜しますぜ」と、車夫は言つた。

「もう十日も經つたら滿開だらうね」と、私は、言ひながら山の上を仰いだ。其方には、青白い燈火が樹木の間に瞬、

てゐた。

旅に出る私の心には、何となく不安と愁しみが去來してゐた。其れは意識する程、はつきりとした形のあるものでなかつた。車の上の私の眼は、兩側の商店の奇麗に色彩的に飾られた品物を眺めることによつてまぎらされてゐた。

次の瞬間に、私は波の如くプラツトホームに向つてなだれ込まふとしてゐる人間の裡で揉まれてゐた。頭の上には濁つた光りが皆んなの動いて、しばらくも止まない頭を照らしてゐた。彼方の線路の上では、眞白の湯氣が休息してゐる汽罐車から急しげな息の如く吹き出してゐた。私は、かうしてゐる間にも、天氣模様を知らうと思つて、こごんでプラツトホームの長い簷の下から夜の空を見やうとしたが、其處には、闇の裡に默つて横はつてゐる貨車や、空つぽな客車などの死骸のために遮ぎられて見ることが出來なかつた。

ちやうど其時、私の下げてゐる書物や、鉛筆や、齒磨きなどの入れてある小さな籠が、ぎつしり詰め合つた人達の股や、膝などの間に堅くはさまつてしまつて、いくら力を出して、拔かうと思つても適はなかつたので、後方から順序に押して來たもの丶やうに、出來るものか、出來ないもつか分らないが前に黒壁の如く立塞つた群集へ押しか丶つた。

「押すな、押すな」

「體が潰れちまふぢやないか」

俄かにどよめいた黒い波の中から、口々に叫んだ。直ぐ私の前にゐた、四十格好の洒臭い息のする男は、ぢつと私の顔を見て、故意に私が押したのか、其れとも自然に押して來たのか見分けやうとしてゐる樣子であつたが、其れは、見當が付かなかつたであらう。何となら、後からも、後からも、少しでも前へ押し出やうとしてゐるので、直ぐ私の背へのしか丶つて來たからだ。けれど、この動揺によつて、うまく籠を引き拔くことが出來た。しかし私は、籠のやり場に困

つた。皆んなが荷物を肩に擔いでゐるので、自分も其れを眞似たのであつた。

切符を切りはぢめると、今迄の押合や、どよめきが何んでもなかつたことが分つた。今度は、各自に皆なより早く出て、汽車の腰掛を占領しやうとする目的のために、殆んど盲目的に、命がけに何うすることも出來ない人混の中を押し切らうとしたり、また衝動的にずん／＼押して來た。

私も、出口に向つて先を爭つてゐる一人であつたが、可なり其處までは距離が遠かつた。たゞ人を押し退けるのと、一寸でも先へ出ることより何も考へてゐなかつたが、忽ち、私の耳に火の付くやうな赤ん坊の泣聲が入つた。而して、眼の前にこの有樣を見た刹那、私の心は恥ぢた。なぜもつと早く知らなかつたらう。いつから、こんな風に赤ん坊は苦しめられてゐたのか？

赤ん坊は、紅い頭巾を被つてゐた。其の幼兒を負つてゐる母親はまだ若かつた。束髮は壞れかゝつてゐた。而して、俯向いて氣を揉んでゐるせいか兩方の耳朶が眞紅になつてゐたが、其の顏は見えなかつた。傍には夫が立つてゐた。夫は黑のマントを被てゐて、手をのばしてマントの袖で妻の背に負はれてゐる子供を怖しい群集の押して來るのから護らうとしてゐた。けれど、殆んど其れは無效であつたらしい。

私は、黑のマントを被た男が、眼をいつぱい見張つて、顏を眞赤にして此方を絕望的に見詰てゐるのを見た時に、其の鋭い眼の光が胸を貫くやうな氣がした。而して、其の眼の光りや、顏全體に現はされた眞劍さは、覺えず、私をして、「押すな、押すな、赤ん坊が押し潰されるぞ！」と、後方を向いて叫ばしめた。

私が、かう叫ぶと、つゞいて、すぐ赤ん坊の泣いてゐる傍から、

「赤ん坊を先に出してやれ！　赤ん坊を先に出してやれ！」と、つゞけて叫ぶ聲を聞いた。

私は、其後、どう押されてプラットホームに出て、アスファルトの上を走つて、客車を目かけて突進したか知らなかつた。けれど其の間、たゞ一つ事を考へ、また心の眼に見えてゐたのである。いかに人間が眞劍になつた時の怖しさ！ 其の物凄さ！ 私は、黒いマントを着た男のいつぱいに見開いた眼の光りと、手をさしのばして黒いマントの袖で赤ん坊を護つてゐた姿を頭から取り除けることが出來なかつた。

「この印象を、いつか自分の藝術を作る時に取り入れてやらう」とさへ私は思つた。

私は、自分の腰掛ける場處を占領して、氣持が落付いてから、過去を顧みて、自分の憶えのある藝術の中で、かうした Scene を取扱つたものがあらうかと考へた時に、思ひ出すやうな機會がなく忘れてゐた、あの獨逸の雜誌にあつた畫を思ひ出したのであつた。其れにつれて、あの姉妹のことまで考へられたのである。

二人の消息については、私は、もう長い間聞かない。二人は此地にゐないから。

かうした人間の刹那に現はれた靈魂の力といふものに、焦點を置いて、藝術を作つたらばと思つた時に、もう其様な試は、既に幾多の天才ある藝術家によつて企てられてゐることを知つた。而して、私は客車の片隅で潜かに溜息を洩らした。

汽車は動き出した。輝かしげな燈火が消えて、暗い空を濕つぽい風が窓から入つた。もう一つ浮んだ畫は、出稼人の繪であつた。海を渡つて、遠く、果しなく行く若い夫婦連れが、英國のある畫家によつて描かれた。今を限りに、離れ行く祖國の海岸を見詰てゐる筋骨逞しい男の眼の言ひ現はし難き感情に燃えた光りを、私は、幾年前かに色摺になつてゐたネーションス、ピクチュウアで見た。心は其の頁の上に徘徊するのであつた。青い波の色、赤い女のパラソル、而して、日に焼けた男の顏、鋭い其の眼付き！

ふと私は、現在の自分に返ると、先刻、プラツトホームの夫婦連のことが思ひ出された。赤ん坊は、無事に母親の背中にあつたに相違ない。而して、あの夫婦連は、何れかの客車に收つたに相違ない。この客車ではなからうかと、私は思つたので、わざ／＼立上つて室内の人々の上を見廻したけれど、此處には彼等の姿を見出すことが出來なかつた。

客は車室の中にいつぱいであつた。腰かける場處がなくてぎつしり立つてゐた。

「俺達二人は赤羽で降りるぞ」と、私の前に腰をかけてゐた、若者が言つた。其れは會社か工場につとめてゐる勞働者らしく、一人は印半纏を被てゐた。其の聲は、誰に向つて呼ばれたともないが、傍に立つてゐる旅客は、眼を光らして二人の若者を見た。人間を見たのでなく、其の場處を睨んだ。私は、直にこの二人は、私と並んで腰をかけてゐる同じ年頃の青年を見送つて來たのだと知つた。私の傍に並んで腰をかけてゐる青年は何となく沈んで見えた。

「今晩は降りだぜ、赤羽へ降りてから踏つちまふな」と、印半纏を被た、窓に近い方のが暗い外を見ながら言つた。

雨がぽつり／＼降つて來たらしい。濕つぽい空氣の裡に、美しい幻のやうに浮き出て見える大都會の點火は、次第に霞んで行つて、一方には限りない、寂寞とした音もしない平野が連つてゐた。

「雨が降つたら、安宿に泊るめえか」と、他の一人が言つた。

印半纏ば、窓から顏を出して、空模樣やら、地平の曇つた夜を彩る、都會の燈火やらを默つて、其れに答へないで眺めてゐたが、やがて顏を引込めると、前に腰をかけてゐる送られる仲間の方を見やつて

「オイ、何處へ落付いても、手紙をくれろよ」と、何となく涙聲になつて言つた

「あゝ」と、心持顏の色の青ざめてゐる痩形の青年は答へて、頻りに袂を探つたり、頭の上の網棚に載つてゐる自分の荷物などを氣にしてゐた。

「何時にあちらへ着くだか」

「ちやうど三時頃だ」と、青ざめた顔の若者は答へた。

「夜中だのう」と、印半纒を被た青年が言つた。

「長野は、お前始めてか？」と、また他の一人がたづねた。

「はちめてだ。けれど、迎ひに出てくれる筈だ」と、送られる若者は、あまり其のことには心配してゐない様子であつた。

三人は、其れからひそ〳〵と何かうち輪話をしはぢめた。

やがて汽車の進行がゆるやかになつて、

「赤羽、赤羽」と、驛夫が窓の外で呼ぶと、二人の若者は、急に立ち上つて、

「あばよ。」

「ぢや、達者でゐろよ」

二人は、口々にかう言つて、これから遠く行く仲間を振り向きながら名殘惜しさうに、人を分けて出て行つてしまつた。其の二人の腰かけてゐた跡を素早く、二人の女が占領した。

二人とも男連であつて、其の中でも年をとつてゐる三十五六の女は、すれつからしに見受けられた。其れより若い三十前後のは、やはり蓮葉な性質らしいが、年とつたのに較べれば、まだ幾分か女らしいところがあると言へるのであらう。二人は、べちやくちやとしやべつてゐた。而して、若いのが窓に近く腰をかけて隣りに年をとつたのが掛けたのであつた。

此時、汽車は、また動き始めた。

二人の友達に、別れ際に聲をかけられても默つてゐた、送られて來た青ざめた顔の若者は、この時ぢつと窓硝子を透して外の方を見詰てゐた。もとより、二人の降りた友達の姿は分らなかつたが、レールにつゞいて、幾つも構内に點けられた電燈の光りが、闇の裡に、赤い酸漿を並べたやうに彩つてゐて、其れが可なり廣い大きな驛だけに長くつゞいた。其の間、若者は、一つゞつ闇の裡に點る電燈を數へでもするやうに、顔を外の方に向けて瞬きもしなかつた。其の點火も盡きてしまふと、また暗い野原へと汽車はさしかゝる。其時、はぢめて若者は、顔を上げて正面を向いたが、眼は涙にうるんで光つてゐた。彼は、袂を探つて、キヤラメルの箱を出して、しやぶりながら、窓に凭りかゝつて眠らうとした。けれど、眠れさうにもないと見えて、また體を起した。

汽車が驛に着く毎に乘客は增すばかりだつた。ある商人風の男が、年上の方の肥つた女の體に人混みに押されるまゝに凭りかゝつてゐた。女は其れを最初のうちは苦にしないやうに、きやつきやつと笑つて若いのと話をしてゐたが、不意に、

「ほんたうに、いけすかない。あんた變つておくれよ」と、立ち上つて、若いのと腰かけ場を換へたのである。年上の女はだらしなく、窓際に腰をかけた。着物の前は、はだけて下から紅色の下着が露み出して、まる〳〵とした膝頭は丸曲な線で描かれてゐたが、大體にうす暗い燈火の光りは白甍の如く、鮮かには其れを見せずに、却つて幽暗の裡に、捻鉢な女をなまめかしく見せたのである。場を換へると、女は急に默つてしまつて、窓から、外の雨雲で空を塞いだ闇を眺めてゐたが、次の瞬間には眼を閉いで、窓際に片腕をかけて、其れに頭を就けて眠りにかゝつた。其の女の白い皮膚の色を燈火の光りは、軟かに、匂やかに浮き出してゐた。

「オイ、一杯飲らう、罎を出しねえ」と、立つてゐる人を分けて、二人の男が、若い女に近づきながら言つた。

紫色がゝつた羽織を着て、銀杏返しに結つてゐる若い方の女は、笑ひながら足許の包みの中からブランデイの黒い色の罎を取り出した。この二人の男等は、女を連れて何處へか旅をするのであつた。思ふに、石工か、大工か、何かそんな風の職業者であそやうにも思はれた。而して、若い方の女が、もう一人の方を姐さんと言つてゐるのから見ると、都會にゐる時分から可なり親しい間柄であらう。

男の方も、一方は四十格好であり、一方は三十格好であつた。四十格好のは、背が低く黒い色の外套を被てゐた、骨格の逞ましい、其れで何處か人の好さうな男であつた。三十格好のは、やゝ痩形で、背が高くて、何か絹物の羽織を着てゐた。

「抜くものがない」と、女は言つて、罎を黒い外套を被た四十格好の男に渡した。

「手で抜けねえかな」と、男は言ひながら罎の口を卷いた鉛を剝ぎ取つたけれど、キルクは深く罎の口と平らに埋つてゐた。

「これや抜けねえな」と、四十格好は笑つた。

「其れや、駄目だ」と、三十格好の男は、あきらめたやうに言つた。

「折角持つて來て、飲まんでは、つまらねえないか。どうかして抜けねえもんか」と、四十格好は、相談するやうに三十格好の男の顔を見守つた。

三十格好は默つて、立つたまゝ罎を見詰めてゐた。其時、紫色の羽織を着た若い方の女は、「つゝいて、下へ落せばいゝわ」と、言つた。

「うん、さうすればいゝや」と、四十格好は頷いた。

彼は、太い指頭で、片手に黒い罎を握つたまゝキルクを上から押したが、手應ひがなかつた。其れを見てゐた女は、腰掛けから身をずり落して自分は下にしやがんで、罎を置く場處を明けてやつた。

男は、腰掛の上に罎を乘せて、黒い外套の袖をまくつて、顏を赤くして、指頭でキルクを押したが、やはり何のかひもなかつた。

「どれ、簪を借せろ」と、男は言つた。

女は頭髮にさした銀の簪を拔いて、默つて渡した。こんなもので拔けるかと思つたらしく、其ればかりでなく、曲るからいやだとは言へないといふ樣子であつた。

男は、無暗に、簪の先でキルクを碎いて、穴を抉りはぢめた。女の眼と、三十格好の男の眼とは、ぢつと罎の口に注がれて離れなかつた。男はぐつと深く簪をキルクに突き立て一氣にこぢり開けやうとした時、ぐにやりと簪は曲つてしまつた。

「こんなものぢや到底駄目だ」と、男は、いま〱しさうに言つて、簪を投げ出した。

若い男と、女は、聲を揃へて笑つた。たゞ四十格好の男は、顏を眞赤にして舌打ちをしてゐた。

「あゝ、煙管で突いたらいゝかも知れない」と、三十格好の男は腰から煙草入を取り出して、煙管を拔いた。而して、自分で、罎の口に立て突き始めた。女は、簪を取り上げて、怨めしさうに眺めてゐたが、やがて手で其の曲を撓めて直してゐた。

「どれ、俺に借しねえ」と、四十格好は、若い男の手から二たびブランディの罎と煙管とを奪ひ取つた。彼は、指

も、簪でも失敗した餘憤を晴すつもりで、一氣に煙管を握つて罎の口に詰つてゐるキルクを突いた。不意に、スポン！と音を立てゝ、キルクは内に拔けると、罎の口から、香氣の強い酒の飛沫が散つて男の手と顏にかゝつた。

「やつと、拔けやがつた！」と、四十格好は、嬉しさうに言つて、始めて笑つた。

「あゝ、拔けた」と、女も言つた。

三十格好は、早速煙管の吸口を見てゐたが、女のぼんやりとして握つてゐる手から簪を取つて、吸口を塞いだキルクの屑を掻き出した。其れは、直にうまくいつて、煙管を吹いても今迄のやうに息が通つたので、安心して腰に挾み、簪を女に返すと、彼女は、其れを頭に差した。

其等の事件を知らずに、年上の女は、窓際に頭を付けたまゝ、いぎたなく眠つてゐた。其の他にも、前後には、眠つてゐる人々があつた。

「おめえ、これを町のちよつとした料理屋へ行つて飲んで見ねえ、一杯いくらといふんだ」と、四十格好は、連れの男に言つた。

「なんていふ酒なんかね」と、若い女は聞いた。

「これは、ウエスキといふんだ」

二人の男は、舌打ちをしながら、頻りにかはる〴〵に飲んでゐた。

「眠れねえ時に、ちつとこれを飲むと、頭がすき〴〵として藥になるんだ。一杯やつて見ねえ」と、四十格好は、鉛の蓋(ふた)をコップの代りにしたのを女の前に差し出した。

「そんなら、ちつとばかりおくんなさい」と、女は受取つて、注いでくれた酒を唇に持つて行つた。

「あゝ、辛い」と、女は眉を顰めたが、其れでも止めずに遂に一杯飲み干してしまつて、男に返した。

二人の男は、大分好い氣持になつたらしかつた。

「この汽車は、明石行きだの」と、若い男が四十格好の男に聞いた。

「あゝ、明石行きだ」と、黑い外套を被つてゐる背の低い男は、顏を眞赤にして、燈火に輝かしながら言つた。

「明石つて、遠い處かい」

「うん、遠い」と、四十格好は頷いて見せた。

「直江津の先きかい」と、若い男が聞いた。

四十格好は、かう問はれて、暫らく考へ顏をしてゐたが、

「うん、直江津の先きだ」と、また頷いて見せた。

「直江津の先きにも、なんにも、あんなこと言つてゐやがらあ」と、私の傍に眠として、今迄身動き一つせず、眠つてゐたと思はれた。先刻友達を送つて來てもらつた若者が小聲で言つた。

私は、微笑まさるを得なかつた。

動搖によつて、眼醒された時に、私は、前後、左右に正體なく、眠つてゐる人々を見た。すぐ前の腰掛には、年上の女に凭りかゝつて若い女が眠つてゐた。其れにもたれかゝつて狹い場處にかけて、若い方の男が眠つてゐた。彼等は目白押しに眠つてゐたのだ。旅客で、床の上に腰を下して、荷物に凭りかゝつて眠つてゐるのもあつた。もう午前一時を過ぎてゐる。

今、何處を汽車が通つてゐるのかと思つた。私は、窓から外の方を覗つた。すると、暗澹とした物凄い空に、黑く〳〵の穗先きのやうに樹木の頂きが幽かに姿を浮べてゐる。其れは落葉松の林で、始めて輕井澤の高原に差しかゝつてゐるのを知つた。而して、先刻、眠りから搖り起された時の動搖と響きは、汽車が最終のトンネルから出た刹那であつたことが感じられた。

此時、起きてゐる者は、僅かしかなかつた。例の四十格好の黑の外套を被た男だけは依然として腰掛る場處がないので立ちつゞけてゐた。而して、片手にブランデイの壜を下げて、赤黑く熱つた頰をてら〳〵と燈火に照らしてゐた。

「こんな夜中にも乘る人があつたもんだ。だから混む譯だ。夜汽車などで來なければよかつた」と、四十格好は獨り言のやうに言つた。

「私は、桐生から立ちつゞけだ。こんなこともないもんだ」と、二三人置いて彼方に立つてゐる勞働者風の男は言つた。

其後、其の男は何にも言はなかつた。私は黑い外套を被た男の傍に、一人の陰氣な男が立つてゐる姿を見出した。其の男の姿は、何となく、私の注意を惹いた。何の譯からこの男が乘り込んだのか知らなかつた。多分、私が眠つてゐた間であつたらう。男の髮は蓬々として延びてゐた。彼方を向いてゐるので横顏しか僅かに分らなかつたが、水氣を含んだやうに腫れてゐた。身には紺ぽい、短かい着物を被てゐて、肩に小さな包みを手拭の先に結び付けてかけてゐた。

何處か人の好さうな四十格好は、ブランデイの壜を口に付けて喇叭飲みにやつつけてゐた。いつか鉛の盃なんか捨てゝしまつたらしい。而して、ホツト息を吐いて、うるんだ眼を傍に立つてゐる陰氣な男に向けると暫く默つて見てゐたが、やがて、

「お前さん、どつか惡いのかね」と、言つた。

無心に立つてゐた男は、かう呼びかけられたので、此方を向いて、自分よりは背が低いが體付きのがつしりとして健康さうな酒の醉ひが廻つて顏色の赤くなつた男の顏をまぢ〳〵とさも力なく眺めた。其の男の頰のあたりは腫んでゐて、眼は小さく窪んで、活々とした光りがなかつた。

「手が痛んで、仕事が出來ねえものだから、出稼ぎに行つたんだが歸らうと思つて」と、其男はぽつり〳〵と言つた。

成程、其の男は右の方の手を懷の中に入れてゐた。

「どんな風に痛むんだね」と、四十格好の男は聞いた。この言葉付では醉つてゐるらしくもなかつた。

病める男は、大儀さうに右手を懷から拔いて見せた。手頭から掌にかけて、指頭までが非常に腫れ上つてゐた。

「大變に腫れてゐるのう。其れでは痛むだらう」と、四十格好は言つた。

「づきんづきんと痛んで、其の痛みが體中に響き渡つて、水を浴るやうに寒氣がするだ」と、頭の髮の蓬々とした男は答へて、また、其の右手をそうつと懷の裡に隱した。

「さうだらうな。其れで醫者に見せたかい」と、四十格好は言つた。

「はあ見せたら、切れば癒るつちゆんで、切つてもらつたら、尙ほこんなに惡くなつてしまつた」と、病める男は、嘆息したやうに言つた。

黑い外套を被た男は、橫眼で、この哀れな男の顏をぢつと見るやうにして、

「其れは醫者の見たて違ひだぜの、俺の考へぢや、毒が入つてゐるのだ。これは丹毒ちゆうつてえもんだ。早く他の好い醫者に見てもらつたはうがいゝぜ」と、言つた。

頭髮の蓬々とした男は、丹毒といふ病名すらはぢめて聞くので、どんな病氣か全く知らぬらしく、

「さうかのう」と、たゞ言つたぎりであつた。

四十格好は、さも相手の無智を憐れむものゝやうに、

「手後れになると死ぬすかい、早く見てもらつたがいゝぜ。其の病氣は、注射をしてもらふと癒るんだ」と、其の男の言葉は、全く醉つてゐる人間の言葉とは思はれない程、しんみりとしてゐた。

仕事が出來ずに、村へ歸らうとする若者は、はからずも、怖しいやうな注意を受けて、急に行く先きが眞暗になつて分らないやうな不安を覺えたらしかつた。

「癒るか知らん」と、微かな聲で、顏はやはり彼方を向いたまゝで言つた。

四十格好は、また橫眼で、其者の顏を見るやうにして、

「俺は、たしかに醫者の見立ちがひだと思ふんだ。早く注射すれば癒るんだ。手後れになると命が危ないすかい」と、繰り返して、前と同じやうなことを言つた。

其れぎりで、二人の會話は杜絕れてしまつた。頭髮の蓬々とした若者は、いつまでも彼方の窓の方を見詰てゐた。四十格好は、かうして今は語つても、別れてしまへば永久にこの人間の運命を知ることがないのだと思つた如く、默つてゐた。しばらく經つてから、彼は、またブランデイを仰向いて飮んだ。

「どう、ちつとばかり休まふか」と、四十格好は、自分の穿いてゐる下駄を脫いで、其れを尻に敷いて床板の上にうづくまつた。

たゞ獨り、病んだ陰氣な男だけは、やはり彼方の窓の方を、ぼんやりと見詰て立つてゐた。

うと〳〵と彼は疲れて眠つた。其れは氣持の惡い、沼の中にでも引き入れられるやうな、見て直に忘れるやうな夢を

見つゞける眠りであつたが、やはり自然に瞼が喰付いて眠らずにはゐられなかつた。いつも今頃は、家の中で樂々と寢てゐる時分であらう。私は、旅の苦痛を感じた。半時間足らずも眠つて眼を開けた時は、すべて今迄と同じやうに旅客はいろ〳〵な形をして眠つてゐたが、かの病める男だけは、尙ほ獨り立ちつゞけて、ぼんやりと彼方の窓の方を見詰てゐた。小さな怖えたやうな瞳は、何を見るといふこともなく、硝子を透して、外は無限に闇が擴がる虛空に向つて開いてゐたにちがひない。

私は、其の男の何事をか、思ひ詰てゐる姿を見るのが怖しかつた。而して、もう見まいものと堅く意識して瞼を閉ぢた。すると、今度は、何うしても眠付くことが出來なかつた。

私が汽車を乘換へた前に、其の男は、何處かの驛で下りた。其れを私は氣付かなかつた。

昨夜のことを、私は、思ひ出してゐた。高い國境の山は、汽車の線路に迫つてゐた。而して、此方面の旅客は、割合に少ないと見えて、汽車の内は、あまり混雜しなかつた。樂々と腰をかけてゐることが出來た。私は、飽かずに、姿の變り行く山や、溪川の景色を眺めてゐた。まだ山には雪が深く、麓にも雪があつた。雜木林は、冬枯れの姿で、雪に倒されたまゝ、頭を垂れて、其の先きを雪に沒してゐる枝もあつた。また、裂けたまゝになつて、生々しい、其の裂目を鈍色のうす寒い空氣の中に晒してゐるのもあつた。また、ある處では、割られて、積み重ねられたまゝになつてゐる薪木もあつた。恐らく去年の秋、仕事の終へない間に、一夜に雪が積つたゝめ、其の儘となつてゐたのが、漸く雪が解け始めて、下から姿を現はしたのであらう。低地には、水氣が雪に浸んでゐて、鉛色に一帶沼の如く、たゞ白く光つてゐた。其の中に根を浸して、木立が寒さうに立つてゐるのもあつた。山の巓きには、たへず濁つた雲が去來してゐた。折

く、其の切目から、氣味惡い程、青い、青い、冴えた空の色が覗はれた。其れを見ると、何となく、學校へも行かずに驅け廻つて遊んでゐた頃、子供の時分には屢々空想に描いたことのあつたロマンチックな國を今は微かながらに頭の中に思ひ出させるのであつた。あまりのなつかしさに、私は覺えず涙ぐんだ。

「なぜ獨りこんな淋しい思ひをしてまでも、旅をしなければならぬのか」と、私は、自分の心に問うて見た。

　同じ車室の内には、越後地方から募集されて來て、岡谷や、諏訪地方の工場へやられる少女等が十五六人も乘つてゐた。いづれも十一、二から、十四五までの子供であつた。而して、この一群を引き連て行くのは、三十四五の二人のあまり人相のよくない男と、二十前後の蓮葉な三人の女等であつた。顔にあばたのある、日に燒けて色の黑い男は、すぐに私の前に腰をかけてゐた。彼は黑の絹足袋を穿いてゐた。而して、白のメリヤスのズボン下を穿いてゐたが、よく發達し切つた脹脛のところで綻びてゐた。此男は、折々振向いて女等を見た。三人の女の中で、一番蓮葉に見えて、色の白い、唇の赤くて薄い、鼻の低い、束髮に結つて、金歯のある女は、ちよつと男好きがしさうな器量であつたが、この男とは、淺からぬ親しみがあるやうに、男の向くたびに彼方でも、男の顔を見て、眼に物を言はせて笑つた。

「こゝへ來ねえ、空いてゐるから横になんねえ」と、男は言つた。

「行かうかね」と、女は答へた。

　汽車は、山間の小さな停車場に着いて止ると思ふと、間もなく發車した。けれど、何處でもあまり、客の乘つたり、降りたりするものがなかつた。而して、漸く梅が咲きかけてゐるのが見られた驛もあつた。日の光りは、あるかなしかに弱く、うす寒い、風が頻りに吹いてゐる。

　唇の赤い女は、子供等の肩頭を跨いで、男の傍にやつて來た。而して、手に下げて來た下駄を落して、男と並んで腰

をかけた。

「ちつと横になんねい」と、男は、顔に似ず、やさしい言葉を出して、女の顔を惚れ〴〵しく眺めた。

「だつて、そんなことしていゝかね」と、女は白い歯の間に金歯を見せて笑つた。髪のほつれ毛は、額にかゝつてゐた。女は其れを掻き上げやうともしなかつた。

「人が少ないのだもの、何したつて差支へないから、横になんねえ」と、男は、やはり女を見ながら言つた。

女は下駄を脱いで腰掛の上へ坐つた。其れから足を男の方へやつて、流石に両脚を縮めながら、體を小さくして横になつた。女の白足袋を穿いた二つの足頸は、男の腰のあたりに當つてゐた。女はかうして横になると、着物の前がはだけかゝつたのを手で押へて、膝の間にはさんだ。而して帶の間から、ニッケル製の容器を出して、其れを振つて掌の面に出た仁丹を口の中に入れた。

青葉しげれる櫻井の
里のわたりの夕まぐれ
……………

、旅へ出稼ぎにやられる、少女等の群が、この時、聲を揃へてうたひ始めた。汽車は勾配の高い山路を喘ぎつゝ上つてゐた。渓川の水音が、眼の下から手に取るやうに聞えたが、一時、歌の聲で掻き消された。

これ等の少女等の中には、うたはないで默つてゐるのもあつた。其の一人は小さな風呂敷包みを前にしてしつかりと抱いてゐた。其の包みの中には何が入つてゐるであらうか。家を出る時に、母親が當座入用な品々を入れてくれたにちがひない。この母親の顔も、家も、村も、遠くなつてしまつたので、其れを思ひ出してゐるのであらう。また一人は、涙

ぐんだ眼付をして、窓の方を向いて、生れてからはぢめて、此處に來て見る外の景色に何となく心細く感じてゐるらしいのもあつた。

少女等のうたつてゐる歌の聲が、ちやうど一先づ杜切れた時分であつた。不意に、みんなが立騷ぐ氣はひがした。

「何うしたんだ。何うしたんだ」と、言つてあばたでないもう一人の男が、自分の席から立つて、其方へ行つた。其の男は、特徴はないが、拔目のない顏付をしてゐた。尻はしよりをして、縞の羽織を被てゐた。

一人の少女が、腰掛の上に俯伏して、苦しんでゐた。其の少女は、先刻まで涙ぐんだ眼で、窓から外を眺めてゐた少女であつた。頭髮に小さな赤い造花をさしてゐたのが、私の眼に殘つてゐた。

「どうしたんだ。氣分が惡いか。もう少し我慢をしるだ」と、男は、少女の顏を覗き込んで言つてゐた。

この騷ぎで、横になつてゐる女は起き上つた。

「仁丹があるすかい、飮ませるならやらうか」と、女は言ひながら、子供等の腰をかけてゐる間を跨いで、其の方へ行つた。

誰も、苦しんでゐる子供に對して、深い思ひやりのある者が居なかつた。少なくも、この子供の母親が感ずるやうに、既に旅へ出ては慰はつてくれる者がなかつた。彼等は、募集して來た子供等を工場に渡して、其處から周旋料を受取つて、其の後で勝手に、面白をかしく何處かで騷ぐことのみを思つてゐたので、年のいかない子供が、今、どんな苦しみをしてゐるか、其れからこの後、どんなに子供等が働かされて苦しい月日を送らなければならぬかといふことなどは、全く思つてゐなかつた。

「汽車に乗るのが始めてなもんだから、酔つたんでさあ。何、たいしたことはないんです」と、言つた。

何でそんなことを言つたか？　私は、きつと其の男の殘忍な心を見るつもりで、答へないで顔を見返してやつた。

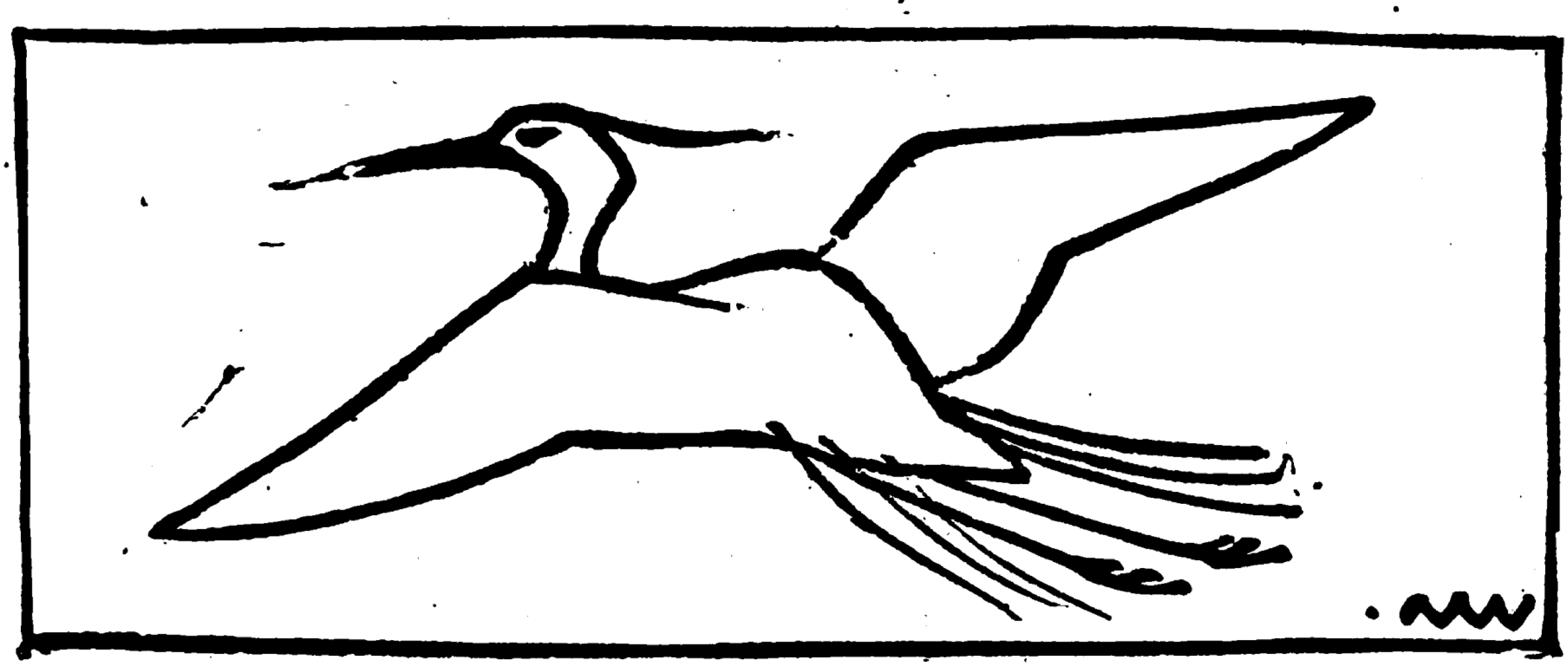
赤い造花を頭髪にさした子供は、腰掛の上に仰向に臥かされた。たゞ、其れぎりであつた。みんなは、其れでこの事件が濟んだやうに思つた。而して、もはや、誰も、この少女について考へたり、注意をしたりするものがなかつた。少女の顔色は、眞青であつた。而して、手を胸の上で組んで、兩方の眼を閉ぢてゐた。

カチユーシヤかあいや
別れのつらさ
せめて淡雪解けぬ間に

自分達が行末の身の上を知らない少女等は、また聲を揃へてうたひはじめた。今度は大きな女共まで、其れに加はつてうたつた。汽車は、日の光りの陰つた、山と山の間を遲々として走りつゞけてゐた。

山々は、雪に掩はれてゐて白かつたけれど、其處には深林があり、溪谷があつた。其れがさながら、地圖の如く、また魔物の如く、時に人間の姿の如く縐縮を見るやうに想像された。私は、今夜宿るべき溫泉場へ着いてからのことを想つたりした。また、眞白な雪の面を見詰てゐるうちに、何といふこともなく、一個の畫家として、自分の心を象徴するやうな淋しい男の姿を雪の上に、悲痛な形で描いた。

——一九二〇、四作——



伯夷叔齊

登二彼西山一兮。采二其薇一矣。以レ暴易レ暴兮。不レ知二其非一矣。神農虞夏。忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣。

田中貢太郎

叔齊は山をおりてゐた。まばらな腮髯の半ば白くなつた老人は、長い木の枝を杖にしてゐた。黄ろに染まりかけた林の樹木は、靜にしんとして立つてゐた。谷の下では、時折鳴く小鳥の聲が、澄んだ空氣を顫はして鋭く聞えた。

林が途切れて陽の一面に當つた岩山が來た。其所には大小の岩石が虎かなんかの蹲つてゐるやうに、其所此所に頭を出してゐた。草の中には、紫や黄ろの色の重たい小さな花が咲き交つて、蝶とも蜂ともつかない蟲が、その上をスイと飛んでゐた。叔齊は其所へ出ると、直ぐ路ぶちになつた岩を見付け、雲の來てかゝつたやうに、ふうわりと腰をかけて、雪靴のやうな襪を穿いた足を投げ出し、葛巾を被た頭を杖に凭せるやうにした。そして、何を考へるともなしにぼんやりと休んでゐて、やつと起つ拍子に、向ふの方に眼をやつた。東南に展けた裾野の遠い森の果に、嵩山らしい山の皺りが、うつすらと翠黛を引いて見えた。

午に近い陽の光が直射してゐたが、空氣は熱してゐなかつた。その熱の無い感激の無いやうな氣溫と、叔齊の心持とが何處となく合つてゐた。彼はさうした心の狀態の下に、通りかゝるなれば、世の中の人の顏を見て、その言葉を聞きたいと思つて、山をおりて行く所であつた。通らなければ、強いて接したいと云ふ慾望は持たずに。

草山が盡きて、又木葉の色づきかけた淺い林が來た。そして、その林を出ると、もう麓で、裾野の草原の茫々とした中に、所々赤土の肌を露はした一筋の路が見えて、それが麓に沿ふてゐた。すこしの傾斜になつた路で、右の方に下つて行くと、五里ばかりで民家の五六軒並んだ聚落があるが、叔齊は強いて人に逢はふとする欲望もないので、その路をぶらぶらしてゐやうと思つて、林の出口にある巨岩の腰を曲つた所で、其所に五六人の旅客の草を敷いて坐つてゐるのを見た。傍には荷物を載せた馬が二疋ゐて、俯向いて草を食つてゐた。

旅客は向き合つて食事をしてゐた。叔齊の足は浙々と動いて、その方へと寄つて行つた。彼は殆んど四箇月目に見以外の人に逢つたのであつた。此方を向いて坐つてゐた旅客の二人は、云ひ合せてやつたやうに顏をあげて、秋草の精のやうな瘦せた老人を見詰め、もぐ〳〵させてゐた口をやめた。その一人の指先には、食物の一摑があつた。旅客は六人ゐた。皆老人の近付いて來た事を知つて來た。前方を向いて坐つてゐた一人は、體を斜にして顧みた。

「お前さん達は何處から來た。」

叔齊は飄然と立つて云つた。

「雒邑から來たよ。」

はじめに老人を見付けた、指先に食物を摑んでゐる旅客が相手になつた。

「ああ、雒邑、雒邑はますます賑になつたらう、周の都となつたさうだから。」

『なつたとも、なつたとも、周公樣と云ふ聖人が、成王樣を輔けて、天下の賢人を集めてござらつしやるから、我ももと雒邑へやつて來て、それはもうえらい賑ひだよ。』

『さうだらう、さうだらう、わしも昔し雒邑に住んでゐた事があるが、その時でも可成り人が多かつた。』

叔齊の心に、その後の周の施設を聞かうとする好奇心が頭を擡げて來た。ひつ乾いてゐたやうな舌が滑になつて來た。彼はその言葉を自分の目的にまで持つて行かうとした。そして、旅客の前の草の上にその眼が行つた。餱糧を容れた笊の裏に並んで、炙肉にした豚か狗かの片股が竹器に盛られてゐたが、肉の厚い所は、大分むしり取られて、赤い裂口が旨さうに見えてゐた。叔齊の眼は、それに吸ひ寄せられた。

『昔と云ふと、何時の頃かね。』

叔齊は見られない物でも見たかのやうに、眼をそらして、相手になつてゐる旅客の額のあたりを見て、

『未だ殷の盛な時分だから、もう一昔しにもなるよ。』

と云つてゐる內に、その眼は肉の方へと行つた。叔齊はもう話に心を置いてゐなかつた。

『殷の時分なら、それや昔じや、わしなどは、成王樣になつてから、交易に行き出したから、ほんの近頃の事じや。』

相手の旅客は、指先に撮んでゐた物を口に入れた。あの炙肉の一とむしりであらう。叔齊の心象にその匂がほんのりとのぼつた。彼は周章てて俯向いた。

『交易と云ふと、何の交易だ。』

勤めて平氣でゐやうとして努力した。人の香と肉とを慕うて來たらしい蝱の羽音がした。彼はそれで何かをまぎらさうとでもするやうに、杖を持つた右の手先と、左の手先とに注意して、左の手を輕く振つた。

「山から掘つた鹽じや。」

相手の旅客の手は、前の炙肉の方へと延びた。叔齊の眼は又それに滑つた。

「ああ、鹽か。」

鹽の味と肉の味とが絡まつて、濃厚な美味となつた。彼は其所にゐるのが苦しいので、そのまゝ歩き出して、馬の背後を探々に通り、傾斜の路をあがるともなしにあがつて行つたが、心は美肉の誘惑で一杯になつてゐた。彼は、もうすこし、もうすこし、向ふの方へ行けば、何かなしに滿足を得られるやうな氣になつて歩いた。

孤竹城にゐた比の遠い遠い昔のことが思出された。黒胎族の公子として、何時も青い錦の衣裳を細そりした體に纏ふてゐた美しい母の傍にゐて、手巾に赭いむく毛の目立つた父王から可愛がれ、その父と母とが鼎を擁して食事する所で一所に食事をして、王父から取つて貰つて喫つた鼈と云つた肉の味は、お伽の國の御馳走のやうな氣がして、未だに彼の神經に殘つてゐた。

城外の大きな湖・際涯もなく水が廣がつて、僅に眞赤な夕陽の落ちる方に、淡墨の尖つた山の形の見えるその湖で、獲れると云ふ黄金の鱗をした魚を、度々美しい母と父王との傍で喫つた愉快さも、心の何處かに象(かたち)を見せてゐた。その魚の腹の中には、肉の潰したのや、青い木の實などが詰めてあつた。箸から漏れて卓の上にころころと落ちた木の實を、周章てて拾つて口に入れて、嚴い父王の頬に微笑を湛えさした。

何處で口にしたとも分らない、種々な肉の味が思はれる。兄の伯夷とはるばる周へ行つた日、途中の飢餓のせいもあつたらうが、その日、西伯(せいはく)の許から貰つた豚の炙肉の忘られない味なども思ひ出された。

月の光の柔らかな夜、彼は五六人の老人と草の上に坐つてゐた。兄の伯夷もその中にゐた。皆の前には、低い卓があ

つて、その上に鹿の片股が炙つて置いてあつた。それは周の軍民の狩つた獸であつた。酒も土器に溢れるほど盛つてあつた。老人達は西伯の徳をたゝへながら、その肉を腹いつぱいに食り喫つた。老人の中には、そのいつぱいになつた腹を輕く叩いて、調子をとりながら歌ふ者もあつた。

老人達は、風の麗かな日を見て、思々に郊外へと出た。水草の穰々とした所には、遊牧者が集まつてゐて、山羊、羊、牛、馬の類を牧してゐた。山羊の乳は、老人達の爲めにわざわざ絞られた。眼の黑い牧牛者の娘の生んだ嬰兒に、伯夷が祝福の手を觸れてやつたので、その夜、牧牛者は、牛の炙肉を兄弟の所へと持つて來た。炙肉は彼の手によつて、老人達の許へ分けられた。その炙肉の味もやがて思ひ出された。

枯れかゝつた秋草が轍に絡まつた。叔齊は足を取られて、前のめりにならうとした體を、やつと杖で支へた。そして、彼は落寞とした自分を見た。野は黑ずみ、踏んでゐる土に踏みこたへがないやうな氣がした。彼は淋しさうな眼をして、其所に立つてゐた。

馬の嘶く聲が遙かの後の方に聞えた。

(今の旅客のつれてゐた馬だらう。)

彼は後の方を見た。墳つた地の歛りの爲めに、見える物は黃ばんだ丈け高い草と、灌木ばかりで、馬も人も見えなかつた。彼は數町來るともなしに來てゐたのであつた。

(下劣な慾念に驅られて、うつかり來たものと見える。)

併し、彼の心は依然として淋しかつた。彼はもと來た方へと歸りかけた。そそりとした風が出て、草の葉が顫えてゐた。傾きかけた陽は首陽山の右の肩の方に寄つてゐた。

山の出口の巨岩が陽に光つて見えた。もう立つて行つたのか、馬も旅客も見えない。

(山の鹽を掘つて、雒邑へ交易に行つて、旨い肉も、旨い酒も、自由に、思ひのまゝに得る事が出來る。)

彼は旅客の自由が慕はしくもあれば、羨ましくもあつた。薄れて力弱くなりながら、未だ彼を支配してゐた情熱があされてしまつてゐた。

山の出口が近くなつた。彼は草の上を見廻はした。

(このあたりに坐つてゐたな。)

二疋の馬に踏みにじられた所からちよと離れて、草のしなへた場面があつた。彼はその傍へ寄つて行つた。炙肉に付いた物らしい小さな白い骨が二つ三つ散らかつてゐた。彼は立つたなりに、ぢつとそれを見てゐたが、やがて杖を差し出して、それを突ッついた。

伯夷は雲を見てゐた。彼は岩石に木の枝を差しかけて、それに草を葺いてしつらへた小屋の口に腰をかけてゐた。夕陽はもう山の向ふ側に落ちて、こつちの谷間は陰になつてゐるが、空には未だ陽光が漂うてゐて、それが頂近く斷々に浮んだ雲を薄赤く染めてゐた。その雲はいろいろの形をしてゐた。旌のやうに見える物もあれば、大きな鳥の形をした物もあり、龍か虬かのやうな奇怪な形の物もあつて、それが靜に東へ東へと流れてゐた。

伯夷の心には、何のこだわりもなかつた。彼は無心になつてゐた。薄赤く染まつた雲は、面白い姿を見せて、その眼の先を流れた。

(鍋の中は、好いかな。)

彼は山草を煮てゐる鍋の事を思ひ出して、やつとこさと腰をあげ、脊を屈めるやうにして中へ這入つた。石を寄せてこしらへた竈には、火がちろちろ燃えて、鍋の中はぶつぶつと煮立つてゐた。彼は箸を入れて、その中を掻き廻はした後に、その鍋を持つて出て、小屋の背後の方へと行つた。

それは小屋の背後の岩の間から出る清水で、茹でた山草を洗ふ爲めであつた。そして、やつと洗つて、小屋の横へ出てみると、叔齊が歸つて來た。叔齊は淋しさうな顏をしてゐた。

『おお、歸つたか。』

伯夷は何時も叔齊を子供のやうに思つてゐた。

『どうだ、人に逢つたのか。』

『維邑に交易に行く旅客に逢ひました。』

叔齊は伯夷の後から小屋の中へ這入つた。小屋の中はもう薄暗くなつてゐた。二人は竈の前に胡坐をして、消えかつてゐた火に枯枝を加へた。竈の先には冷たい岩の肌が壁のやうに火の光を反射して見えた。座には草を編んで敷いてあつた。

『交易に行く旅客に逢つたと云つたね、維邑の話を聞いたのか。』

『あまり聞きません。』

『周の話は。』

伯夷は叔齊をからかひ氣味に云つた。山へ這入つた當時の叔齊は、何よりも周の形勢を知りたがつて、度々山をおりて、旅客、遊牧者、土民の別なく、人を見ると話しかけて、その口から周の施設を聞き出して來た。周が功臣諸侯を封

じて、呂尙に營丘を與へ、周公旦に曲阜を與へ、召公奭に燕を與へたことも聞いて來た。紂の子の祿父を殷に封ずる爲めに、叔鮮を管に、叔度を蔡に封じて、祿父の相けとしたことも聞いて來た。神農の後を焦に、黃帝の後を祝に、堯の後を薊に、舜の後を陳に、禹の後を杞に封じたことも聞いて來た。又箕子の囚を釋して朝鮮に封じたことも聞いて來た。皆周の王業の基礎を鞏固にすることばかりを聞いて來てゐたが、その次に聞いて來たのは、武王が病氣の噂であつた。叔齊は周の王業の破綻が現はれたと云つて悅んだ。續いて、武王が沒して、成王が立ち、周公旦が輔相になると北に、管叔と蔡叔とが、周公を疑ふて、祿父を擁して叛した噂が聞えて來た。叔齊は今にも殷が再興するやうに云つた。

『たとへ、周がどうならうとも、殷の再興する望みはない、そんな事に氣を使ふのは、愚な事じや。』

と云つて、伯夷は笑つた事があつた。

『周公が四方の賢者を招いてゐると云ふことだけ、聞きました。』

叔齊は伯夷の顏を見なかつた。

『賢者を集めて、己が欲望の道具にする積りだらう。』

と、云つて伯夷は鍋の方を見て、

『食事をしながら話す事にしよう。』

二人は鍋に手をやつた。叔齊はその一撮みを口にしながら、ひとりで顏を赤くした。彼は周の師が殷の師を牧野に破つて、その社稷の滅んだのを見ると、

『周の粟は食はない。』

と云つて、兄と二人で此所に隱遁して、薇を采り、木の實を拾つて、殷の民としての節を全うしようとしてゐる者で

あつた。併し、それでも、山草の味は、ぱさぱさして、平生のやうに舌にそぐはなかつた。

『今日は夕方になつて雲を見てゐたが、何時見ても雲は面白いよ。』

伯夷は綺麗な雲の容を思ひ出した。

『靜に、ぢつと雲を見てゐると、自分の心と雲とが一つになつて、煩さい世の中の事は忘れてしまふよ。』

墨胎氏の父王は、二人の子供をさし置いて、三子の叔齊を後繼者にしようとした。父王が亡くなると、叔齊はその血族間に美とせられ出した禮讓の感激から、それを長兄の伯夷に讓つた。伯夷は無論受けなかつた。

『父の命だ。』

かう云つて伯夷は孤竹城を逃げた。叔齊も義として立つことが出來なかつた。これも兄の後を追うて城中を出た。國人がその仲兄を立てるに任かせて。そして、長い漂泊の旅に足を入れた二人は、西伯の文王が老者を扶養することを聞いて、周に行つた所で、新興の周の勢力と殷の勢力とが衝突した。武王の發は、その際亡くなつた文王の木主を戰車に載せて、盟津へ向つて出發しようとした。數千の軍民は、周の郊外に雲集してゐた。叔振鐸の奉陳した武王の常車には、周公旦が大鉞を把り、畢公が小鉞を把り、散宜生、太顛、閎夭が劒を執つて、武王に從うてゐた。二人はその常車に近み近付いて、左右から馬の轡を捕へた。

『父が亡くなつて、葬ることもしないで、戰をしようとするのは、孝の道でない。臣として君を弑しようとするのは仁でない。』

軍士は刀を拔いて、不吉な老人に迫つて來た。

『これは義人だ。』

武王は軍士を制して刄を加へさせなかつた。思ひあがつた二人は、間もなく、周が殷を滅したのを見て、慨然として山へ逍入つたが、伯夷のみは、かうした窮乏の中にあつても、泰然として雲を見てゐることが出來た。

『周公に雲の趣が分るかな。』と、伯夷は叔齊に云ふとも、自分の心に云ふとも、どつちともつかないやうに云つた。

『さア。』

叔齊は自分の腹の底を見が見透して、周公に托してゐるやうで耻かしかつた。管て自分達を圍んだ周圍の眼の色から亢奮が得られないやうになると共に、動搖をはじめた彼の心は、今日、はからず炙肉の誘惑を受けて、山草の味に變化を及ぼしてゐるではないか。

『わし達も、思ひあがつてゐる時には、雲の趣は分らなかつた。』

伯夷は旨さうに山草を撮んでゐた。

『…………』叔齊は小さく燃える篝の火の方に顔をやつて、ぱさぱさする山草の味を舌の上でころがした。

食事の後でも二人は一つ二つ話してゐたが、何時の間にか伯夷の鼾が聞え出したので。叔齊は淋しい自分の存在を確めるやうにして後に横になつた。

『お口にあふやうな物はありませんが、どうか召上つて下さい。』

又、何人が云ふともなしに恭しい聲で云つた。で、今度はどんな御馳走だらうと思つて、ふと見ると、前の卓には、大きな鉢に盛つた肴を並べてあつた。野猪の肉がある。大鹿の肉がある。狗の肉がある。豚の肉がある。鷄の肉がある。雁の肉がある。魚肉がある。皆包丁の腕を見せた物ばかりであつた。叔齊は肉刀を持つて、先づ大鹿の炙肉から切つて

喫ひはじめた。その肉は柔かくてとろ〳〵と舌の上で消えた。雁の丸煮の腹には、種々の旨い中實を詰めてあつた。鶏の炙肉も香ばしい味を持つてゐた。『どうか御酒も召上つて下さいますやうに。』

琥珀の色をした酒が盞に注いであつた。叔齊はそれも手にした。それは鬱鬯(うつちやう)を交へてある秬酒のやうな酒で、その強烈な香が腹の底に浸み徹るやうな氣がして、陶然たる氣持ちになつた。

『その鯉も立派な包丁の手にかゝつた物でございます。』

叔齊は鯉に肉刀をつけた。黄金色をした鱗のある大きな鯉で、その鱗は、ししびしほのやうになつてゐて、口に入れると、好い味を殘して溶けてしまつた。

『この熊掌は、西伯の所から送つて來たものだ。』

叔齊はその聲のした方へ顔をやつた。それは自分達と前後して周に來り投じた辛甲であつた。辛甲も熊掌の一臠を取つた。叔齊もその後から急いでその一臠を取つた。天下の珍味とせられてゐる熊掌の味は、仙饌とでも云ふやうな味であつた。

『西伯の德は天の如しだ。』と、掠れた聲で何人かが云つた。

『雉の肉も旨い。』

それは伯夷の聲であつた。伯夷は弟にその旨い肉を喫はさうとして致へた所であつた。叔齊はそれにも肉刀をやつた。彼は幾等喫つても喫つても、依然として口にする肉が旨かつた。

『この橘を召上れ。』

若い女が竹器に盛つた赤く色づいた橘を差し出した。叔齊はそれを受けやうとして、と、見ると、その女は妻瑛である

つた。美しい母の侍女は、澄んだ眼をしてゐた。叔齊は橘よりも姜瑛の手を握りたかつたが、氣がさすので、橘の一つを取つた。

『私がおむき申しませう。』

姜瑛は耻かしさうに俯向いて、白い指に赤い橘の皮を絡めて剝きはじめた。其所は片隅が石垣を高く積みあげた庭前になつてゐて、紗に包まれたやうな月が射し、その月の光に小さな綾をして、梨花がちらちらと散つてゐた。叔齊はとうとう姜瑛の手を取つた。と、姜瑛は耳を傾けて、ちよと物の音を聞くやうにして、

『あれ、女王の足音が聞えます。』

と云つて、叔齊から放れやうとした。

『母上なら構はない、私を可愛がつてくれる人ぢやないか。』

と、叔齊は放さない。

『でも見つかるとお叱りを蒙りますから。』

『なに、こんな所を見なさると、母上はお前を可愛がつてくれゝよ。』

『でも。』

二人は石垣に添うて立つてゐた。梨花が繪のやうに二人の頭に散りかゝつた。姜瑛の顔は、昔のまゝに若々しかつた。

『お前は、なぜ、そんなに若いのだ。』

叔齊が不審すると、姜瑛は默つて莞爾と笑つた。と、その顔は、黑い大きな眼をした女の顔となつた。女の右の手には、山羊の乳を盛つた盞があつた。

『この乳を召上つて下され、今しぼり立ての乳でございます。』

叔齊は云はれるまゝに飲んだ。ほてつた咽喉が冷々して好い氣持ちであつた。そして、

（俺は周の郊を歩いてゐるな。）

と思つた。彼は眼をあげて附近を見廻はした。數百の山羊が明るい陽の光の下に遊んでゐる。

『此所に牛乳がございます。』

髯の白い遊牧者の老人が、牛乳を盛つた盞を持つて近づいてゐた。

『これは有難い。』

叔齊は老人に敬意を表して、恭しくその盞を受けて飲んだ。

『この炙肉は如何でございます。』

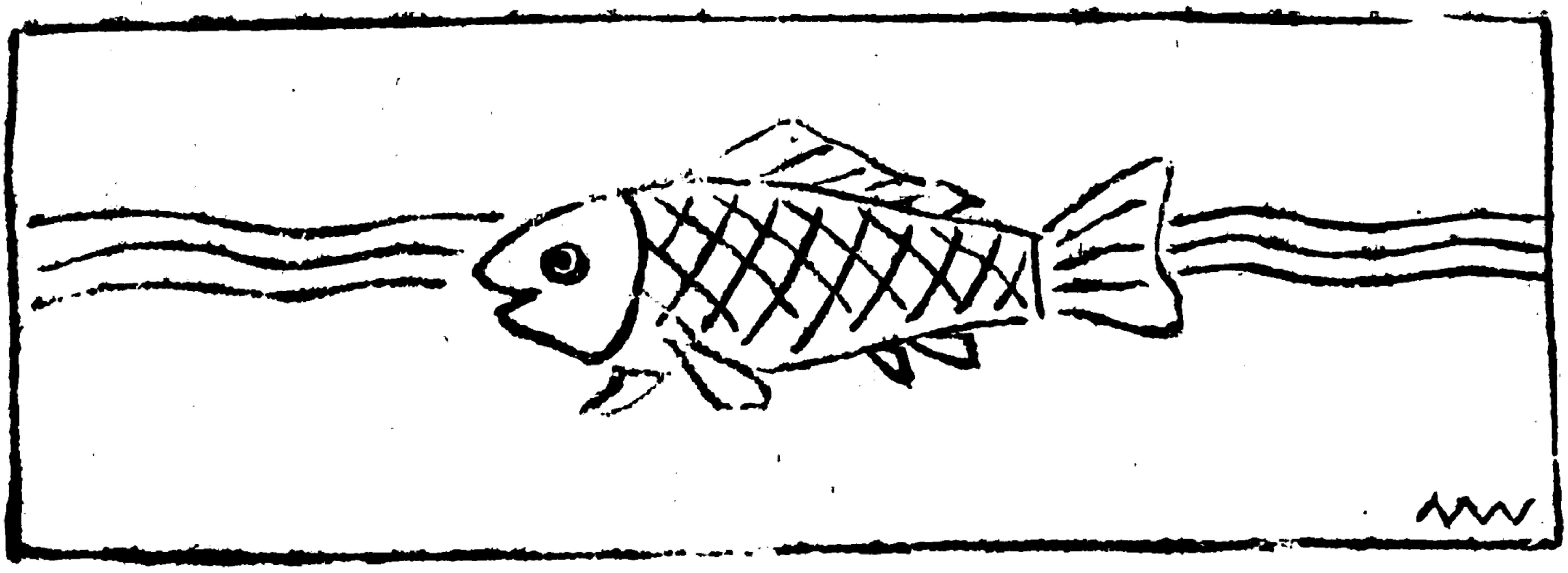
叔齊は又饗宴の室にゐた。卓の上には、なんの肉とも分らない大きな獸の片股が置いてあつた。彼は又それを切り切り片つ端から口に入れた。

『この肉も召上れ。』

叔齊はふと眼を覺した。もう夜が明けて、戸外は明くなつてゐた。

（兄は。）

と見ると、もう起きてゐる伯夷は、入口の所に戸外の方を向いて坐り、嵐氣に浸つて靜に神を煉つてゐた。と、彼は頭が重くて體に異狀の出來てゐるのを感じた。彼は起さうとした體をぐつたりとさして、眼をつむつた。



因縁事

宇野浩二

わたしの生れた在所だつか？　生れた在所の名前だつか？　その名前だけは勘忍しとくなはれ、いゝえ、わたしはもう別にかまふことおまへんけど、又誰に差障りがあるや知れまへん、（と斯う言ふのは、哀れな老女のお鳥が物語りである。）場所の見當だつか？　それは仲々この噺に深い因縁がおまんねさかい、言はん譯には行きまへんやろ、それは丁度大阪と、あの生駒はんの山つゞきなア、あそこの丁度まん中位になります、大阪の玉造から二里、天王寺から三里といふとこだすさかい、大概の見當は付きますやろ、國は河内だす。……

さあ、これから、えゝ事も惡いことも、人のことのつもりになつて話しまほ、そやないと、話にもなりまへんし、それに實が入りまへんさかいナ、聞きづらいことは、耳を閉いでとくなはれ。——

わたしの母親は、それやほんまに、自分のお母親のことを賞めるのは可笑しおまつけど、それやほんまに別嬪だした、そしてもうこんな梅干婆の癖にそんなこと言ふと何だつけど、人はんもさう言ひました、わたしはその母親に生き寫

しや言はれた程よう似てゐました、これで小さい時分はいちま（人形）見たいやつた、と人はんが言ひます、ホホホホホ。もつとも、父親の方に似ましても、そないに不縹緻やない筈だした。一體、わたし等の筋のもんには、男でも女子でも、顔のえゝもんが多い言ひまんのは、自慢する譯やおまへんけど、あれはほんまだす、そこへわたし等の村は特別に縹緻よしが多かつた言ふ話だんが、その中でもわたしの兩親は、若い時分は「お雛はんのめをと」ちふ評判をとつた位だした。それは、御承知だすやろが、わたし等の筋のもんは、あれはあんまり近い身内のもんばつかりで縁組するさかいやちふことだんなア、顔立のえゝ悪いは別としまして、みんな申し合はしたやうに、厭らしい、目が眞赤いけに爛れてまつけど、わたしの兩親はその中で珍らしい、當り前の目をしてました言ふだけでも、人目を引いたに違ひおまへん、もつとも、父親の方は、もうわたしが物心のついた時分には、三十を過ぎてからやさうだつけど、やつぱり隣近所の人等とおんなし様に、目を病ひ出しましたけど……

又自慢話になりまつけど、わたしは子供の時分から人並より賢い子や言はれたもんだすが、それだけに、物心がつくのも早うおましたし、人一倍氣苦勞も早うからしました譯だすが、自分が穢多——穢多とか、新平民とか言ふ言葉を、斯うして平氣で自分の口から言へるやうになりましたんは、やうやうこの二三年のことだつせ！——といふ卑しい生れのもんや言ふことを、隣近所の子より三年も五年も早う知つた譯だす、生意氣なことを言ふやうだつけど、賢いもんほど苦勞が多い言ふのはほんまだすなア。尋常小學校（尋常の方はわたし等の村におました）へ行くやうになり、だん〳〵大きなるにつれて、自分等の身分の事がはつきり分つて來ますやろ、さあ、それは何歳ぐらゐの時分からや今思ひ出せまへんが、寝ても醒めてもその事ばつかり考へて、あんまりおんなし事ばかつり考へるもんだすさかい、終ひには頭が痛うなりました位だす、考へて見ますと、わたしの頭痛持はその時分から始まつたんだんなア。人間といふもんは勝手

なもんで、自分の生れがそれや言ふこと忘れてしまうて、何がなしに穢多いふもんが無茶苦茶に憎たらしくなつて來て、済まん事やと思ひながらも、終には自分を生んでくれた兩親さへ嫌ひで堪らんやうになつて來ましたもんや。

わたしは生れつき大體が物言はずの方で、大人しうて、その代り學校の勉强は、いつでも一番だした位で、よう出來ました方だんが、たつた一つ、さあ、父親に似たんか、母親に似たんか、それとも人はんの言ふやうに、これがわたし等の筋のもんの持前の性質だんねやろか、をなごの子の癖に、それはそれは强情な子だした、わたしは何でも嬰兒の時から滅多に泣かん子やつたさうだんが、人はんの話にも、又わたし自身物心がついてからの覺えでも、わたしはどんな悲しい目に遭うたかて、どんな辛い目を見たかて、一遍も目から涙こぼしたことはおまへん、何言ひなはんね、わたしかておんなし人間だんが、辛い事かて悲しい事かて人はんとおんなしだけある筈だんが、さうだつけど、そんな目に遭うても、直ぐ何くそ！ 思ひまんねナ、よつ程悲しい時で、涙が出さうになつたら、一生懸命に唾を呑み込み呑み込みしたもんだす、そして、それが癖になりましたんやなア。…………

わたしは生れてから滅多に自分の村を出て他所へ行たことはおまへんが、時々人はんの話に聞いたり、又學校の本に書いたある話やみなから考へて見ても、それと自分たちの筋のもんと、自然比べて考へて見るやうになりましたが、まあ、何ちふ違ひだすやろ！ 又何でこない違ふんだすやろ？ ——

二里あまり西の大阪の町に、わたしは七八歳の時分だしたが、たつた一遍、父親に連れて行て貰うたことがおましたが、その時の有様を、今でもはつきり覺えてゐます位だす、その時分、家へ歸つてから何日もの間、毎晩つゞけて夢に見ましたことだす、自分等の村や、家や、人と比べて、そこの、大阪の町や、家や、人が、小さい小供の目に、どないに奇麗に、生々と映つたことだしたやらう！ たしか夏のことだした、だつけど、そこにはわたしの在所の村見たいに

真黒けの素つ裸になつて、裸足で往來を歩いてるやうな子供は一人もおまへんし、それどころか、町を歩いてる大人やろが子供やろが、男はんでも女子はんでも、子供のわたしの目には何から何までみんな繪見たいに見えました、そこにはわたしの在所の村見たいに、往來を歩いてゝ、表からすつかり裏まで見通せるやうな家は、見たうても一軒もあらしまへん、おんなし人間の着る着物やのに、穿く下駄やのに、歩く道やのに、住む家やのに、何ちふ『何處』と『此處』とは違ひやろ？……それから言ふもんは、明けても暮れても、わたしの心は「大阪へ行きたい、大阪へ行きたい」いふ思で一ぱいになるやうになりました。村はづれに出て、西の方を見渡しますと、丁度大きい牛か何その、毛だ物が寢ころんでるやうな恰好に、大阪の町が見えまんのや、その左のはづれのとこに、四天王寺の五重の塔が、ちよこなんと、手招きするやうに聳えてまんのや。………

と言うても、何と言うても、その時分はまだわたしも年も行かず、何にも知りまへなんだ。

そのうちに、わたしは優等の一番で尋常小學校を出ましたが、わたしは學校が好きだしてな、根が好きな上に、學校で聞いたり見たりすることと、家や村で見たり聞いたりすることとは、雪と墨と程、何から何まで途方むない違ひまんねもん、そして學校で見たり聞いたりすることは極樂見たいな氣がしましたもんだす、村の子はみんな、どういふ譯や學校を早う止めたがつて、長い間學校へ行けへんもんやさかい、みんながあないに厭らしなんねやろ、とわたしは子供心に思ひましたもんや、それでわたしは尋常小學校を出ますと、學校の先生もすゝめてくれはりましたしまんので、それから高等小學校に行きたい言うて、お父つあんに頼みました。すると、お父つあんは、それはそれは母親がきつい反對をしましたもんだつけど、到頭わたしの頼みを聞いてくれました、もつとも、それも、お父つあんかて、一通りのことで聞いてくれたんやおまへん、始の間は母親と共々、いろ〳〵務すやうに言ひましたり、なだめるやうに言ひまし

たりして、わたしの望を思ひ切らすやうにしたもんだしたが、仲々わたしが、をなごの子の癖に、小さい時分から、一旦言ひ出したことは雷が鳴つても後へ引けしまへん、思ひ切る樣子がなかつたもんだすかさい、到頭、男だけに、父親がさつぱりと男らしう心を決めた樣子で、それを許してくれたもんだすが、それに就いてこんな話がおましたんだす。

「お鳥！」とお父つあんが言ひました、「わしは何遍も言うた通り、ほんまにわれの考を何處までも止めたいんや、われはまだ何にも知らんのやが、われも阿呆な子やないねさかい、よう考へて見い、自分の可愛い娘のしたいと言ふ事を、それも何の悪い事をしようといふんやなうて、勉强したいいふ、（それに勉强にかけたら、われは人並よりずつとよう出來るちふ事もわしはよう知つてる、）それを、譯もなしに、止めよちふやうな、無慈悲な親が何處の世界にあるもんか？そこやデ、それを止めるちふ、その、わしの、親の心をわれもちつとは考へて見ないかん、子のために悪いやうに思ふ親があるもんかい？……

「お鳥！」とお父つあんの言葉がつゞくんだす、「今度の、高等學校は、われも知つてるやろ、今迄と違うて、この村の中にあるねやないで。この村の中にあるのんなら、わしは何にも言はずに、われが好きで行きたい言ふのんなら、何にも悪い事をしよう言ふんやないのやもん、二つ返事で遣つてやる、ところが、今度の學校は、他所の、他所の……外の人の村にあるんや、そして他所の、外の家の子が行くんや、そん中にわれはまじるんやで、乾度、意地の悪い子があつて、それでなうても女子ちふもんは意地の悪いもんや、われに面と向うて『穢多』ちふて相手にならいでも、そんな事は蔭で言はれても聞えて來るもんや、何の彼のと身を切るやうな、辛い、厭なことを言はれるに定つてる、その度にわれがどない恥かしい、辛い、情ない思をせんならんか、――われはまだ何ちうても年の行かん子供のことやさかい、何も

分る筈はないやろが、――それを思うて、親たるわしも止めるんや、お鳥！」

「そいでも……そいでも……わたいは、そいでも、どうしても行きたい……」とやつぱりわたしは、一寸も、まるで父親の言ふことを聞いてなんだか見たいに、挺でも動かせん言ふやうな、堅い決心を顏に現はして、そして斯う言ひ張りましたもんだす、「お父つあん！　わたいはどないに恥かしい目にあうても、どないに辛い目にあうても、屹度辛棒します、屹度、屹度、どないな事がおましたかて、みんな心の中に入れといて、情ない事や辛い事を、どないな事があつても、どないな事があつても、お父つあんやお母んの耳に入れしめへんさかい、死ぬより辛い事かて、屹度、屹度辛棒しますさかいに、どうぞ、どうぞ……お父つあん！……」

さういふ譯で、そして愈よ高等小學校に通ふやうになりましたわたしは、今思ふたら、よう辛棒が出來た思ふ程、人はんが見ても痛々しい程、よう辛棒し通しました。「穢多だけにどないしたかて泣きよつたことがあれへん、仕太い女子や！」なんて、辛棒したら辛棒するで、人は言ひまんね。わたしは毎日學校へ通ふのに、三つの他所の村を通らんなりまへなんだ、雨の日でも風の日でも、さうすると、行きにも歸りにも「穢多の娘、穢多の娘、」と指さしして、聞えるやうに人が相手になりまんね、今思ふと、さういふ穢多に相手になる、穢多より口の惡い人の中を、わたしは、親でなうても、心のある人か見たら、涙をこぼしてくれる程、ほんまによう辛棒しましたもんだす。そして、首尾よう、やつぱり優等の一番で高等小學校を卒業しまして、家へ歸つて、二枚の免狀を見せましたら、お父つあんは長い間だまつてそれを見て居ましたが、やつとしてから、「お鳥、よう辛棒したなア」言うて、赤い、爛れた目を拭いてはりました、男泣きに泣いてましたんだす、それでもわたしは泣きやしまへなんだ。

だけど、わたしだしたかて、おんなし人間だすもの、時々は思ひ詰めたやうな氣になつて、さういふ時は母親いふも

んは何の他依りにもならんもんだんな、父親をつかまへて、「お父つあん！」と言ひました。「お父つあん！　わたい等もどうぞして、もつと奇麗な村か、奇麗な町かに住めるやうになれまへんもんやろか？……」何をいふても、子供心は無邪氣なもんだす、わたしがさう言ふと、父親はいつでも、しばらアくの間俯向いたまゝで、默つてましたが、子供心に何でお父つあんはいつもこの事を言ふと、こんな不景氣な顔をするんやろ、と妙な氣がしますと一緒に、何とも言へん味氣ないやうな、うそ寂しいやうな氣がしたもんだす、すると、父親は情なさうに大きな溜息をついて、浮かぬ顔を上げて、ぽつりぽつりと吐き出すやうに言んのだす、その言葉をわたしは今でもようく覺えてます。――

「わし等はもうこないに年もとつてゐることやし、又生れてこの方この村に長い間厄介になつて住んで來たんや。今になつて見ると、色々な譯もあることやし、もうどうのかうの言うたかて、とてもこの『わし等の土地』を離れる譯には行かんわい。……しかしな、お鳥、わし等はもう老い先も短い身體やけど、それと違うてわれはまだ年も若いのやし、多少の勉強もしてあるこつちやし、それに顔かて姿かて人並に生れて來てゐるんや、わし等の野邊送りさへ濟ましてくれたら、その後はわれの甲斐性次第で、どないにでも又われの思ふやうにならん事もないわい、何でもわれの思ふ通りにやつて見い。だがナ、どうぞわし等の生きてる間だけは、何處へも行かずにおいとくれ、な、お父つあんの一生の頼みや、あの不孝な兄貴の庄太の極道見たいな目に、わし等をあはさんようにしとおくれ！」斯う口說くやうに言ふ父親の言葉は、子供心にも、何とも言へん程、可哀さうなやうな、情ないやうな調子だんね、あの不斷の、恐い、こくなお父つあんがどうして……？　と不審な氣がした位だす。

「そらさうだすやろが、」とわたしは、始は父親に賴むつもりで言ひ出しましたんやが、逆さまに斯う父親の方から賴まれたやうなことになつたもんだすさかい、そこでわたしの方から今度は少しかさに掛るやうな調子で、こんなことを言

うたやうに思ひます、「お父つあん、何でお父つあんやお母んと一緒に他所へ行けまへんね？　何でわたい一人で行かんなりまへんね？　甲斐性次第ちふのはどんな事だんね？」

「それは一寸一口には言へん、が、なア、今にわれにも自然に分つて來るこつちや、」と答へる父親の言葉は、又いつものお父つさんらしい口調に戻つて、そして言ふのんだす、「が、なア、お鳥！　今はわれもそんないぢらしいこと言うてるけど、今にその時になつたら、わし等が一緒に連れて行つて言うて頼んだかて、われの方で『厭や、』ちふやうになるんや、屹度われが『厭や、』ちふやうな時が來るんや、わし等に早う死んでほしい思ふやうな時が來るんや、又わし等が早う死んでくれてよかつた思ふやうな時が來るんや！　今はわしの言ふことがよう呑み込めんやろが、今にわしの言うたことが、お前の胸にぴんと響く時が來るぜ、お鳥！……」

一寸話の中途だつけど、今、兄の庄太の名前が出ましたついでに、ちよつと兄のことで忘れられん話をさしとくなはれ。又身内のもんの自慢するやうだつけど、わたしの兄は、それはそれは、わたし見たいに勉強をせんと、學校から歸つて來ると、遊んでばつかりゐたさうだすが、それでゐてよう出來たさうだす、あんまり出來過ぎたんで、極道もんになりましたんやでなア。わたしとは六歳違ひだした。たしかわたしが十歳位の時分の冬の晩のことだした、何でもその秋の末あたりから、母親はレウマチで寢てゐました、身體の自由が利かんさかいだすやろか、看病してゐるわたしに、母親は兄の愚痴ばかりこぼしたのを覺えてます、いふのは、母親がそんな風にどつかり床に就いてから、一ケ月程してからのことだしたと思ひまんが、兄が何處やへ行たまゝ戻つて來んやうになつたもんだす、それで母親の愚痴が尚ひどなりましたのを覺えてます、母親が獨言見たいにしていふことに、「あの庄太の極道め、あの庄太の……。今頃はどこをほつき歩いてやがんねやろ？」そしてわたしに「お鳥、お前はえゝ子や、賢い子や、お父つあんやお母んの言ふ事をよ

う聞くねで。賢いと言へば、お前の兄やんかて賢い子やつた、さうや、彼奴はあんまり賢すぎたんや、……お鳥、お前の兄やんは、お前と遊うて、學校へは一寸も行きよれへなんだ、いつでも荷物を持つて學校へ行くやうな顔をして、村の悪さの子供を呼び集めて、自分で餓鬼大將になりやがつて、他所の人の村の子供に喧嘩買ひに行きよつたもんや、終には二遍も三遍も向ふの村の大人に捉まへられて、動けん位叩かれて來やがつたこともあるのに、今度はその大人に喧嘩を賣りに行きよつたもんや、それでて學校はいつでも一番か二番に出來よつたもんや。お父つあんやお母んが泣いて叱つても、叱られてる時だけは默つて聞いとをるやうな振をしてやがつたが、それで一寸も後悔した樣子もなし、親の言ふことなど左の耳から右の耳へ逃がしてしまひよつたに違ひない。それちふのも、あいつのは他所の子見たいに、唯の悪さやない、あいつは賢こすぎて、終に悪賢こなりよつて ……」……………

そして今言うた或晩のことだす、兄が家出してから、かれこれ二週間もしてからのことだしたやろ、その時分は兄ももう十七八の年頃だしたさかい、悪さの仕樣も子供の時分とは違うて、始は錢を持逃げしてましたんが、親たちがそれを知つて錢を隱しましたんで、終にはなるべく錢になりさうな道具類やみなを持出したりしてました。もう朝晩は、口から白い息がほや／＼出る時分だしたと思ひます、その晩は特別に何でも寒い晩だした、母親は時々晝間でも寢るもんだすさかい、晩になると屹度目が冴える言うて、寢床の中で浮かぬ目を一ぱいに開いてますし、お父つあんは又その反對で、起きてるとくしや／＼するちふて、早うから寢てしまうたもんだす、で、いつもわたしだけ起きてゝ、火鉢の傍で、わたしは學校の本を讀むのが好きだしたさかい、勉強してましたが、その晩に限つて、妙に氣がそわ／＼して、何や家のまわりに恐い者でも來てるやうな氣がしてな、勉強が身につきまへんね、で、「もうえゝ加減に寢んか、」と母親に言はれると、早速寢床の中へはひつてしまひました。

さあ、それからどの位時間が經つたか覺えてまへんが、ふッと騷々しい物音と、何や眞赤い氣な明りとに、吃驚して目を醒ましますと、さあ！　家の中が火だらけだんね。母親が聲を枯らして喚いてますやら、父親が氣狂見たいに、彼方へ走り此方へ來いして火を消してる樣子だしたが、これは後で聞いた話だんが、家のもんが氣がついた時分には、もうそこら中に火がひろがつてゐましたんやさうだつし、それに火は何でも一所から出たんやなうて、一時に二所も三所もから燃え出したんやさうだしたんで、とてもお父つあんの力ではあきまへなんだんやさうだす。そのうちに村の人等が手傳に來てくれたさうだすが、(言ひ忘れましたが、わたしの家は村の端におました、)まあ、何は兎も角、病氣のお母んをちふので、お父つあんは燒け殘つた戶板を一枚外して來まして、その上に蒲團のまゝのお母んを乘せて、誰やらに片つ方を擔いでもらうて、その傍にわたしもついて、大急ぎで外へ出ました。お父つあんは母親を載せた戶板を半町ほど離れた畑の中に下ろしといて、わたしにそれを番してや言ひ殘して、又どん〳〵燃えてる家の方へ走つて行きました。わたしは子供のことだすし、女子のことだすしするので、足がぶる〳〵震へました、そして何や斯う氣が遠うなつたやうにぼんやりしてゐました。振り返ると我家は黑と赤との火ん中に包まれて、まるで幻燈の畫見たいだした、火事の上の天は、そこのとこだけ赤うなつて燒けてまつけど、向うの方の天はいつもとおんなしに、ちら〳〵星さんが光つてたのを、今でもよう覺えてます。

ところで、火事の方はえゝ鹽梅に廣がらずに濟みましたが、もつともわたしの家は物置の納屋だけが殘つたきりで、道具も一寸ぐらゐは出しましたやろが、大抵燒けてしまうたさうだす。

そのうちに、いつもとおんなしやうに、白白と東の天が明けて來ました、お父つあんは火が鎭まると一緒に村の人等に助けられて、取敢ずお母んを又戶板の上のまんまで、燒け殘つた納屋に擔いで行きました。母親は火事の最中に外に擔ぎ

出された時から、ずうつと、寢てるのんか目が醒めてるのんか、わたしが一遍か二遍何や言うた事がありましたが、それにも默つてました位で、まるで死んだやうにぢつとしてました。

燒け殘つた道具を運んだり、跡片附けをしたりしてるうちに、いつもとおんなしやうに、お日さんが遠慮なしに上つて來やはります、五六人の人だけ殘つて、外の人等はそれ〲家へ戻つてしまひました、さうすると、急にげつそりして寂しなつて、家が燒けてなうなつてしまうた言ふことが、はつきり氣がついて來たもんだす、そこへ、誰が言ふとなしに、昨夜の火事はつけ火や言ふ噂が立ちました、しかもそのつけ火したもんは、あそこの極道息子やいふ評判だんね。それがお父つあんの耳に入ると、お父つあんは恐い顏をして、「そんな事はない！」言うて、一生懸命に斷つてました、だけど、わたしも、子供心に、なる程、この頃は家にずつとゐへへんけど、ひよつとしたら、さうかも知れん、と何ちふ譯もなしに思ひました、お父つあんかて、だん〲静かになつて、手傳に來た人が傍にゐんとこで、納屋のお母んの寢てる傍で、思案に暮れたやうな顏をして蹲つてた時、獨言見たいに「いや、どうやら彼奴らしい、第一錢がなくなつてる……」言うて溜息してたんを、母親が聞きとがめて、「何だすと？　錢が……錢が……」言うて、大人の癖に泣き出したことをわたしは覺えてます、「いや、まだ探して見な分らん、」とお父つあんは言ひ返してましたが、わたしは默つて聞いてゐて、やつぱり、それは屹度兄やんが錢を盗みに來たんや、とさう思ひました。

暫くすると、お父つあんはわたしに向ひまして、さあ、時間になつたら學校へ行き、と言ひました、わたしは一寸困つた顏をして、「でも、本も何にもおまへん、」と言ひますと、お父つあんはやつぱり恐い顏をして、「こんな時にそんな事が言うてられるかい？　先生にさう言うたら、一日や二日は勘忍してくれはるわい！」けれども、その時、手傳に來てくれてた人が傍に來て、「何ぼ何でも昨夜の今朝や、何ぼ子供でも隨分びつくりしてるやろ、休ましてやりいな」言うてくれまし

が、お父つあんはいつもの强情で、「われ等がゐたかて何の手助にもなれへんのに、却つて邪魔や、さつさと學校へ行きちふたら！」と言ひますので、わたしはすご〳〵出て行きました、病氣の母親のヿも案じられますし、何や兄のヿ、兄のつけ火のことも子供の癖に妙に氣になつて仕様おまへんね。そして、學校へ行きましたら、まだ尋常の時だしたが、みんながわたしをつかまへて、火事のヿをいろ〳〵聞きまんねけど、あんまりよう話が出來まへなんだ、そのうちに鈴が鳴りました。

そして、第一時間目が濟んで、又運動場へ出ましたが、わたしはなるだけみんなに見付からんやうに、運動場の隅に隱れるやうにしてゐました、そして、ふッと、何の氣なしに目を上げますと、畑越しに、眞黒氣に壓し潰されたやうになつて、見る影もなう壞れ家が見えるやおまへんか？　それはわたし等の燒けた家だんね、まだ太い烟がどん〳〵空に上つてゐまんね、我家の燒けてる烟だんがな。

わたしはたゞもうぼんやりして、悲しいことも何にもおまへなんだ、そしてたゞ硝子玉の目に寫すやうに、見てましたもんだす。その烟の上つてる我家の手前の、ずつと左手の方に、鎭守の森がおまんね。すると、その森の中に、わたしはふッと妙なものを見付けましたんや。わたしは自分で自分の目を何遍も何遍も拭いて見ました、何遍拭いても、その森ん中に見付けたもんはそれはわたしの兄だしたんや、二週間ほど前に家出しました兄だしたんや！　兄はその森の蔭に隱つて何やらしてるやおまへんか？　わたしは我を忘れて、夢中で學校を飛び出しまして、一心不亂にその方へ走つて行きましたもんだす。ところが、兄はわたしが近づいたことも知らんと、何や知りまへんけど懷に入れて、村とは別の方へ行きかけました。

「兄やん！」とわたしはあるだけの聲で喚きました、すると、兄はびつくりして、一寸うしろを振り向きましたが、そのまゝ又平氣でどん〳〵向うへ走つて行きますやおまへんか。わたしは夢中で「兄やん！」と又喚きました。するちふと、

急に後戻りして來まして、それは恐い顔をして、わたしの前に立ちはだかりましたもんだす、だけけどわたしももう恐いことも何も忘れて、「兄やん！」と呼びかけしました。

「お鳥！」とさうすると兄が脅しつけるやうに言ひますねや、「お鳥、われ、こゝで俺に會うた事、どんな事があつても、誰れにも言うたら承知せへへんぞ！　どんな事があつてもやぞ、誰にもやぞ！」

「兄やん、そんな事言はんと、家へ戻つとくれえな」とわたしはきつぱりした口調で、恐い兄の顔をちやんと見返しながら言ひました、「お父つあんやお母んがどないに……」と言うて、しかし後は默つて、兄の顔を見てました。けれども兄はわたしの言ふことやなんて、一寸も耳に入れてまへなんだ様子で、

「お鳥、俺はもう一生こんな村へ戻らんつもりやが、われもこんな村を早う逃げ出して、町の大勢人のゐる中へ混つてしまへ、こんなとこにゐたら、一生頭が上れへんぞ、な、それだけ俺が言うといたるわ。……それから俺がさつき言うた事忘れるな、誰にも言ふないふ事を、若し聞かんと殺しに來るぞ！」さう言うて、兄はどん〱走つて行てしまひました。

「兄やん！」とわたしが又後から喚きましたが、一寸振り向いた時の兄の恐い顔いふたら、未だに忘れられまへん。で、わたしはあきらめて、もう何にも言はんと、俯向きながら學校へ戻つて來ましたら、丁度二時間目の鈴が鳴つてるとこだした。……そのまゝ、わたしはもう兄に會はず終ひだす、もつとも、その時のことは、父にも母にも言ひはしまへんだした。兄は屹度、それから、自分でも言うてたやうに、大勢の人のゐる町の中へまぎれ込んでしまうたんだすやろ、そして盗人でもしてまんねやろ、あんな村にゐるよりは、盗人してでも町の人になりたかつたんやろ、と後になつてわたしにも分りました。………

そのうちにわたしも十六になりました。

その春のことだす、今でゝはつきり覺えてゐます、わたしの在所の村はづれにある、二三本の彼岸櫻に花が咲いた時分のことだす、村はづれから野の方を見渡しますと、彼方(あちら)にも此方(こちら)にも、萌黄色の野に、大阪あたりから野遊びに來た人等の、奇麗な春着の袂がうらうらしたお日さんの光を浴びましてなア、ゆら／＼するのが、わたしだしたかて年頃(としごろ)の娘だすもの、堪らんやうに見えるのだす。

「お母(か)んー　あの人等はあそこで何をしてんねやろ？」と折からその村はづれの小川で、母親と一緒に洗濯に行てましたわたしは、それを見て、指差ししながら、斯う母親に尋ねましたら、

「あれは大阪から町の人等が草摘みに來てんのや、」と母親は洗濯の手も休めんと、別に顔も上げんと、斯う言ひますのや。

大人も子供も一緒になつて、あゝ言ふ綺麗な着物を着て、その草摘みたら言ふもんをしたら、どないに面白いもんやろとわたしは考へたもんだす、何ぼ賢こい言はれましても、その草摘みいふ言葉は、いはれて見ますと學校の本か何ぞで聞いたことがあるやうな氣がしますが、わたしはほんまには一遍もそんな事したことおまへん上に、傍に行て見たこともおまへんねさかい、一體どんな面白いことをすんねやろ思うて、夢でも見るやうにその方を見てたもんだす。

「お母ん！」とそして、長い間ぼんやり野の方を見てましたわたしは、突然、どうやら顔を一寸赤うして、母親に尋ねました、「お母んー　わたい等も一寸草摘みたら言ふもんをして見よやおまへんか？」

「何(なに)を言ふね、この子は？……」と母親は目を丸うして、娘のわたしの顔を穴の開く程見ながら言ひましたもんや、「おいれは氣でも狂うたんやないか？　わし等見たいなものがそんな事してどうすんね？」

そこで、わたしは默つてしまひました、母親も默つて洗濯を進めましたが、わたしはまだ長い間、まるで狐にでもつままれたん見たいに、小川のふちに立つてゐましたもんだした。その日から、その日からだす、わたしは、どうぞして大阪

へ行きたい、又どうぞして屹度行かう言ふ心が、はつきり定りました、と言うても、それは何にも、その草摘みの人等の、派手な着物に心をとられたちふだけやおまへん、子供心に、村のはづれから、西の方、大阪の天王寺の塔を見るにつけ、そこに寝ころんだやうに見える、化物見たい大きな町、あそこへ行きさへしたら、極道もんの兄の言葉やないが、あの化物の中に混つてさへしまうたら、屹度何ぞえゝことがあるに違ひない、と思ひ詰めたんに違ひおまへん。それからちふもんは、自分でも自分で腹が立つ程、何でもない事に氣が苛つきましたもんだす、母親にも當り散らしたり、父親にも口答へしたり、さうか思うと、いち日口をきかんとおいたり……一つは血の加減もおましたんやろが、自分でも困つた位だす、しかし、どんな時でも、大阪の話や、どうやらすると大阪へ行く話などが出ることがおましたが、さうすると急に又無茶苦茶に嬉しなるのだした。

その時分の事だした。わたしの父親が、不斷商賣の用事から出入する、大阪の今宮の皮革の卸屋の番頭はんが、或日四十位の、何の商賣をする人やら一寸見當の付かん一人の男はんと一緒に、わたしんとこへ來やはつたことがおました。御承知だすやろが、わたし等の筋のもんは、此方から出かけて行たかて、他所はんの家ではほんの店の端に腰をかけさしてもらふのが關の山で、とてもお家へ上げてもらふことなんて出來まへん、お茶を汲んで出す器でも、わたし等の筋のもんのんだけは別にしたある言ふ位だす、そんな程だすさかい、隨分長い間商賣上の取引で顔こそ合はしてまつけど、向うから此方へ尋ねて來やはるやうなことは一遍もおまへん、それが來やはんたんだすさかい、相手はんの氣を汲み汲み、屹度腋の下に冷たい汗を流してましたことだすやろ、わたしの父親が「どうぞ、お上りなはつとくなはれ、」と聞えんやうな聲で言ひましたら、先方はんは思の外しやん／＼と上つてくれはりましたんで、父親は、傍から見てゝも分る程、夢中になつて、嬉しさうなやら、吃驚したやうなやら、何とも言へん様子をしてました。父親さへそんな風だしたさかい、母親

は言ふまでもないこと、わたし迄も、村の人の外はお客さん言ふもんは來るもんやない思うてましたので、不思議いふより何や氣味が惡う思うた位だした。それでも、お客さんの方ではほんまに心安さうに、そのうちに、これも恐々、母親に言ひ付けられて、わたしが汲んで出しましたお茶も、遠慮なしに飲んでくれはりましたんだすがな。

不思議はそれだけやおまへなんだ、お父つあんの話に、これまで一遍も白い齒を見せたことがないその草屋の番頭はんが、この人はいつでも庭までだつけど、これ迄にも三四遍も來やはつたんをわたしも覺えてゐますが、本當にいつでもむつとした顔ばつかりしてはりました、それがその日に限つて、妙に優しい口のきゝ方をしやはりまんので、わたしの父親は尙のこと吃驚したそうだす。

「この人はわたしの極く懇意な友達だす……」とその番頭はんは座に着くと、連れのお方をわたしの父親に引合はしはりまして、そして言葉をつゞけて、「今日は商賣の用事で來たんやないね、わしも一日主人から暇をもらうて、この人んとこへ遊びに行つたんやが、二人で急に風流氣を起して散歩としやれましたんや、で、この邊まで來たもんやさかい、ふつと用事思ひついてお寄りしたんやがなア……」

だすが、さう言うただけで、番頭はんは餘にその用事言ふのに話を持つて行かはらんと、連れの人と一緒になつて、この邊は景色がえゝとか、空氣がえゝので氣が晴々するとか、町で見るんとは違うて、大和との國境の山の形が違うて見えるとか、そんな取止まりのない四方山の話ばつかりしてはりました。それでも主人役のわたしの父親は、嬉しいのと氣味が惡いとので、唯ぴよこ／＼頭を下げるだけで、夢中見たいだした。そのうちに、又何やらの用でわたしがお客さんの席に出ました時に、番頭はんが連の人に向うて、何氣ない樣子で、

「どうだす、こゝの娘はん別嬪だすやろ？……へゝゝゝ、」と言やはりました。

流石にわたしもまだ年も行きまへんしましたので、赤うなつてその場を下りました。

「惜いもんだんな」と連の人が言やはりました。

それから又お二人で二言三言わたしを賞める話が出まして、そして恐縮さうにお客さんに話を合はしてました父親に向うて、番頭はんは改まつたやうな、改まらんやうな調子で、

「どうだす、庄兵衛はん、」と言やはりまんね。「お鳥さんを大阪へ奉公に出す氣はおまへんか？……」

それから、番頭はんの言やはりまんのを聞いてますと、そのお連はんの極く懇意にしてはる家に、難波新地におやま屋（女郎屋）がある、おやま屋言ふと一寸悪いやうやけど、女子が、斯う言ふたら失禮やけど、此方のやうな筋の人の女子が、運を開くのんに、これ程都合のえゝ所はない、もつとも當り前の家と違うて、外に朋輩のおやま達もたんと居ることやし、殊には客商賣のことやさかいに、一段と氣骨も折れるやろが、何にしても此方のやうな筋の女子が身分を隠すのんに、こんな工合のえゝ所はない、それに、お前はんも、いつかの火事の時からこつちへ、あんまり手元も樂やないやろが、さうなつたら一時に多少纒つた錢も手に入ることやし、又どんなえゝ拍子で、數の多いお客さんのこつちや、お鳥さんのあの縹緻やさかい、身分のえゝ、えゝ衆に身受けされんもんやない、それにしても斯ういふ村から唯無暗に出て行たかて、恥かしい目を見るばつかりやさかい、若しさういふ望なら、世話になり序に、この人の家からこの人の娘いふ名儀にしてもらうて、そして萬事この人に世話して貰うたらえゝ、――斯ういふ話だんね。

後で思ふと、番頭はんが、始に「用事」言やはつたんはこの話に違ひおまへんねやが、番頭はんの話があんまり上手だしたさかいに、その時はそれと氣が付きまへなんだんやが、番頭はんに話を合はして、連の人も面白可笑しいに合槌を打つてはりました、そして又いつの間にやら話を四方山のことに戻して、それからは四方山話の中にもちよい／＼先の話

を混ぜはりましたが、結局何ちふ事なしに、あんまり無理に勸めるやうな顔をせんと、二人は歸つて行きはりました。おさまらんのはわたしだす、わたしは始めのうちこそ、恥かしいて、顔を赤うして、部屋の隅に引込んでましたが、そのうちにもどき／＼言ふ胸を抑え抑え、お客さん二人の話を一言も洩らさんやうにと、一生懸命に聞いてました、そしてお客さん等が歸つて行きはる時は、又恥かしなつて、わざつと送つて行きまへなんだけど、心では村はづれ迄も、出來ることならそのまゝ從いて大阪へ迄も、行きたい思ひました。

さあ、その日から言ふもんは、いつか村はづれで草摘みを見た時どころやおまへん、わたしは父親とも母親ともまるで口もきかずに、その癖心の中では今にも父親がその話をしてくれることか思うて、待つてましたんやが、何にも言へしまへんので、尙のことくしや／＼して、いち日言ひ付けられた用事も手に附かず、溜息ばつかりついて考へ込んでました、わたしは、何というても年の行かん娘心で、あれこれと色々思案に暮れましたもんだす、──今このまゝ思ひ切つて大阪へ行てしまうたら、兄やんとおんなしやうに、このまゝ父親とも母親とも一生別れてしまうて、もう二度と會ふ時がないかも知れへん、それは何ちふても親子だすもん、情ないと思ひました、言うて、又別の方から考へると、今この折を外してしまうたら、いつ又わたしは長い間心の中で望んでゐた「町の人間らしい人間」になる時に廻り合はすか、もう廻り合はさんかも知れへん、乾度これを逃がしてしまうたら、又ともうこんな折は一生來えへんやろ、と思ひました、ずつと前父がわたしに「甲斐性次第」ちふて、それは何の事だすと尋ねたことがある、さうや、甲斐性次第で、どないなえゝ運が向くかも知れへん……あれこれと色々思案した末、わたしは到頭どうしてもこの折を逃がさんと、大阪へ行かうと決心しましたもんだす。

或晩、わたしは思ひ切つて、到頭その決心の次第を兩親に話しました、さうすると、父親も母親も、わたしも多少は氣

にしてはゐましたが、それでも吃驚しました位で、二人とも氣絶してしまへへんか思う程吃驚した樣子で、殊に母親の方は始めから泣き出しました。

「何ちふ事を言ふんや！」と父親はこれ迄に似ず、聲を震はして、言ひました、今にもわたしは叩かれることやと、肩をすぼめてましたんが、始の勢はどこへやら、父親の聲は次第に調子が弱つて行きました、その聲はもう四十年も昔のことだすけど、今でもわたしの耳にはつきり殘つてゐます。

「お鳥！」と父親の震へる聲が言ふのんだす、「お前も亦、あの極道もんの兄の庄太の奴見たいに、この年とつた親をほつといて行かう言ふのんか？　この親を、この年とつた親を……」斯う言うたまゝ、暫く父親は次の言葉がつゞけられん風で、一寸の間むつつりと默つてましたが、やがて又口を開いて、つゞけて言ひまんのに、「われはおやま屋言ふもんはどんなもんや知つてるか？　おやま屋どころ、大阪いふところはどんなとこやか知つてるか？　大阪いふとこはな、在所の、殊にわし等見たな世間を狹う渡らんならぬ身の上のもんには、目の玉の飛び出る程恐いとこやぞ、在所の高等學校へ通うたやうな譯には行かんぞ！……われはまだ何にも知れへんやろが、殊にそんなとこのおやま屋ちふやうなとこは、口喧ましい、意地の惡いおやま等が仰山ゐよつて、泣くに泣けんやうな苛め方をしよるもんや。……斯言うたかて、われには仲々分らんやろが、兎に角、われはこゝを一旦踏み出したらな、もうわし等には會はれへんぞこゝでは思ひも付かんやうな苦勞が向うでは口を開いて待つてるんやぞ。お鳥！　斯う言ふても、それでもまだわれには『此處』より『彼處』の方がえゝか？　大阪へ出て、散々な目に會うて歸つて來る、その時分はもうわし等は土の中にゐて、『可哀さうに！』言うて迎へてやる譯には行かん、その時はもうこゝでも誰も相手にしてくれるもんはない、そないな事になつたら、お鳥、われはどうするつもりや？　首でも縊つて死ぬ外はないぞ！……しかし、なア、無理もな

いわい……」不斷あないに恐い思うた父親が、ふッと見ると、泣きながら斯う言うてまんねが、先にも言ひました通り、お母んの方はずつと泣きづめだした、父親はそして言葉をつゞけましたもんだす。「無理もないわい！　わしもなア、お鳥、お父つあんも若い時、今のわれとおんなし心で、どないにこの身の上を出ようとして苦んだか知れへん、そして一遍はこの村を出たこともあるんや。われにはあの庄太の外にもう一人兄貴があつたんや。そいつはわれも庄太も生れん先のこつちやが、わしはさん〱血を吐くやうな苦勞をした擧句の果に、その子まで殺されて、――まあ、殺されたやうなもんや――そして追出されて、（この時お母んはおう〱聲を上げて泣いてました、）死ぬより辛い思をして此處へ戻つて來たもんや！」（わたしの父親の昔の話は、そら仲々面白おまつけど、あんまりお噺めいてしまひますさかい、それにあんまり又長うなりますよつてに、又の時にお話しましよ、）そして、父親の言葉はつゞきまんね、「お鳥！どうしたかて、麥は畑のもん、稻は田のもんや、やつぱりそれ〲元の所へ戻つて來るんやで！……と言うてなア、人間いふもんは、何ぼ言うて聞かされたかて、情ないことに、自分でやつて見な分らんさかいな、見す見すえらい目にあふ事でもなア……」言うて、父親は深い溜息をつきましたもんだす、けれども、一圖に自分のことばつかり思ひ詰めてるわたしには、この可哀さうな、又不思議な父親の話がまるで耳に入りまへんねや。

「これはみんな運の廻り合せ言ふもんや、お鳥！」とその時まで泣きつゞけてました母親が、涙の中から斯う言ひまんねや、「わし等見たいな卑しい身分に生れ合はしたかて、今日を不足なしに暮して行つたら、それに越したことはないのや、どないにえゝ衆に生れたかて、大金持に生れたかて、これでえゝいふ事を知らなんだら、それが、仕合せ言ふもんやで、お鳥、身にかなはん望を起したらいかん、え、お鳥！」

「お鳥！」とその時又父親が言ひまんのや、「わしはもうくどい事は言へへん、わし等二人の、お父つあんとお母はんの親

みや、どうぞもう少し待つてくれ、わし等の目の玉の黒いうちだけは、わし等と一緒にゐて、たゞ親二人子一人の家で男の子はあつても、あの庄太の極道め、何處へ行つたやら、行方知れずになつてしまやがつたし、そこへ今又たつた一人のすれに行かれたら、年寄つたわし等二人はどうなると思ふね？　くどい事は言へへん、それ迄家にゐて！」

それでもわたしはやつぱり默つてましたもんだす、それでも、思ひ詰めたわたしは、父親の言ふことを聞きまへなんだ。流石に父は男のことだす、言ふことだけ言うてから、暫くぢつとわたしを睥んでましたが、もう何にも言ひまへなんだ、もう泣いてもゐまへなんだ、けど時々溜息だけついてました、母親も何にも言はずに、涙をふきふき、やつぱり溜息をついてました。

そしてわたしは到頭大阪へ行くことになりましたんだす、もつとも、さう話がちやんと定るまでには、この前革屋の番頭はんに連れられて遊びに來やはつた人が、二三度もわたしの家にそれからは一人で來て、物馴れた調子でわたしの心を愈よしつかり煽てゝしまひましたやうな譯だす。わたしの父親は、しかし何と言うても、長年の苦勞で、片意地なまでに頑固になつてゐましたさかい、仲々その人の言ふ事ぐらゐで頭を縦に振るやうなんはおまへなんだやろが、肝腎のわたしが心を決めてしまうてゐますもんやよつてに、話はずんずん進んでしまひました。この人は大阪の桂庵だしたんや。

そして、或日その桂庵が迎ひに來てくれましただす、丁度もう葉櫻の時分で、村はづれの、この前にわたしがそこに立つて草摘みに來てる大阪の人に見惚れた、あの小川に架つてゐる石橋のとこまで、可哀さうなわたしの兩親が目送つて來てくれました。

「さあ、もう此處で別れとしよう、何處まで送つて行たかておんなしこつちや……」と父親が男らしい決心した様子で、その石橋に來ました時に、しかし沈んだ聲で言ひました。

「お島、お島！からだを大事にしいや……」言うたまゝ、母親は泣いてしまうて、言葉がつゞけられまへんのだした。

商賣柄、長年何度となしにさういふ場に馴れてゐます口入屋さへ、流石にわたし等親子の心の中を察したんだすやろ、何にも言はずに目を反らしてました、御承知の通り、わたし見たいな筋の娘でさへなかつたら、たとへ身を賣りましたかて、親も稀には會ひに來てくれられますやろし、又娘にしましても、年季を濟ましますなり、お客さんに引かされますなりしたら、又親の家へ戻られまつけど、わたしのこの時は、親と子の一生の生き別れだんねもの。何でもこの口入屋は金儲け言ふことから思ひついて、わたし等のやうな筋のもんの娘の世話を始めた、わたしが一番始やつたさうだすが、そこでわたしたちの筋のもんに一番關係のある革屋の番頭はんとぐるになつて、その餌玉にわたしが上つた譯だしたんだす。

それは兎に角、さうして、わたしたち親子と口入屋と、四人は隨分長いこと默つたまゝで、その石橋の上で人形見たいに立つてましたもんだす、わたしは俯向いて、ちろ／＼流れる小川の水を見てました、お日さんの光がちら／＼光つてました。

「さあ、行きまよ、……」とやつとしてから、口入屋はきつぱりした調子で、言ひ立てました。

「お島、お島！……」と母親は氣狂見たいに、夢中になつてわたしの傍に寄つて來て、きゆつとわたしの手を、もう離さん言ふやうに握りまんね。

「お島！」とその時父親が、さすが涙だけは隱して、男親らしう壓し付けるやうに言ひました、「お島！もう斷りなつたら、わしは叱れへん、わじは止めへん……」さう言うて、その癖大きな溜息をついて、それで溢れさうになる涙を止めたもんだすやろか、一寸言葉を切つてから、又つゞけて言ひまんのに、「お島！わしは叱るどこか、止めるどこか、

われの心の中を察して、今ゃさかいはつきり言ふが、無理ないと思うてるのや。……無理ない！ 穢多に生れた言ふだけで、まだ年も行かんのに、當り前の人の一生にする十倍も二十倍も、われもどないに辛い思や、恥かしい思をせんならんねやろ！ これからも、在所にゐたら在所にゐたで、町へ出たら町へ出たで、町へ出たら今迄の又十倍も百倍も、色々な苦勞をするやろ、それでも、出來ることなら、眞人間になりたい言ふ思で、胸が一ぱいやろ。

「さあ、行け、お鳥！ わしは思ひ切つた。わしは別れともない、けど、わし等は今日念にお前が死んだもんと思うて、あきらめよ。お鳥、わしは生きてるうちは、朝晩お天道はんに、死んだら佛はんになつて、祈つたるぞ、行け！ われだけの決心があるのやさかい、屹度われの思が遂げられるやろ。そやさかいナ、この石橋を向うへ渡つたら、もうお父つあんやお母んのことはさつぱりと忘れてしまへナ、自分の生れた在所のことも何もさつぱり忘れてしまへ、そして、どないな事があつたかて、屹度自分の身分を明かしたらあかんぞ、一遍自分の身分を明かしたが最後、その時は今までの苦勞が、斯うしてこんな辛い思をして別れた苦勞も何も彼も、すつかり水の泡になるんや言ふことを忘れんな！ そして先方へ行たら、みなの言ふことをよう聞いて、どんなお客にでも叮嚀にするんやぞ、そしてその中でもこの人と思ふ人を見付けてナ、その人を一生懸命に大事にせえよ、どの人がどういふ人や、どういふ人が他依りになる人や言ふことは、わしが今くどく言はいでも、段々馴れて來たら分るわい、そして、『この人』思ふ人が見付かつたら、その人に頼んで見受けしてもらへ、なるべくなら妾になるな、嫁にしてもらへ……

「今晩はこの人の家に泊めてもらふんや、その道で今宮の革屋の旦那んとこへ寄るやろさかい、旦那はんにもよろしい申しとけ、そこへ連れて行てもらうたら、よう覺えておけ、あの旦那が今日から表向きお前のお父つあん言ふことになつて貰ふんやさかいな、そやよつてに、その家がお前の家いふ事になるんや、若し、人はんに聞かれて、どうしても

んならん時にはさう言ふんやで、分つたか、分つたか、お鳥！………

「何ぼわれが不孝や言うても、親ちふもんは阿呆なもんや、親ちふもんは子供に殺されても可愛うてならん位のもんや、われの不孝する心根を思うて、それが又いぢらしい氣がするんや。そやさかい、決してわし等はわれの爲に惡いようと祈りやへん。お鳥、今言うた事をよう覺えといて、出世してくれ。だがな、情ないことには、自分の出世を親に見せることも出來へんし、また親も子の出世を見る譯に行かんのやわい。と言うたかて、何にも彼にも因縁事や。さあ、お鳥、これで別れや！……」

斯う言うて終うと、父親はいつの間にやら出て來た涙をふきふき、

「さあ、去なう。」と泣きしやくつてたお母んをわたしの手から引離すやうにして、「どうぞ宜しうお願ひ申します。」と口入屋に挨拶して、そして家の方へ戻つて行きましたもんだした。

わたしは父親の始終の言葉を、默つて、ちろ〳〵お日さんの光る川の水を見ながら、俯向いて聞いてました、それでも、わたしは一しづくも涙をこぼせしまへなんだ。そしてわたしはそれで一生兩親に別れてしまひましたんだす。

それから二年の月日が經ちました、その二年の間のことは、いろ〳〵話したいのだつけど、くどなりますさかい止しますわ。おやまになつたわたしが十八の年の秋のことだす、到頭わたしの日頃の思のとゞく時が來ましたんだす、と言ふのは、その年の夏の始頃からわたしんとこへ通ひ始めたお客がおましてん、その人がわたしを引かしてくれはることになりましたんや。年は三十前後で、色の淺黑い、厭味のない、おかしな事を言ひまつけど　そらえゝ男だしたで、その服裝や遊びやうから察しても、仲々えゝ衆の息子はんに違ひおまへん、妙なことを言ひまつけど、わたしもほんまに惚れましたもんだす。

もつとも、お客さんだけやおまへん、家でもわたしの素情を知つてるもんは一人もおまへなんだ、わたしの口から言ふのも何だつけど、わたしは難波新地中でも、五本の指に折られる程の、評判者になりました、それに、おやまなんちふもんは、大抵讀書が出來もんと相場が定つてる中に、わたしはそれも多少出來るもんだすさかい、尙のこと評判をとりましたもんだす、唯一つ、持つて生れた氣ちふもんはどうも仕様のないもんだすな、一生懸命になつて心得ましたけども、どうしても愛嬌がないのんが疵や言はれました。

ところで、夏の始からわたしに通ひ始めたいふ、そのえゝ男のお客さんは、外のさういふやうなお客さんと違うて、無茶な流連をしたり、だら〳〵に始終來る言ふやうなことはおまへなんだ、何でも大和の國のゑらいえゝ衆の息子はんで、始は見物に大阪へ來やはりましたんやさうだすが、元よりえゝ衆のことだすさかい、わたしとお馴染になつてからは、わたしの爲に大阪へ來てくれはりましたんやさうだす、大阪に親類でもおまんのん？　言うて尋ねたら、いゝや、玉造の旅籠屋にゐる、言うてはりました。

そして、そのお客さんに、通ひ始めはつてから三ケ月と經たん秋の中頃に、前にも言うたやうに引かされることになりましたんだす、まあ、わたしにしたら、何ちふ仕合せだすやろ！　前へにも申しました通り、わたしは廓中で隨分人氣もんになりました代り、朋輩の嫉妬もそれだけひどうおまして、どうぞしてわたしの評判を落したろ思うて、何ぞあらがないかと附け覗はれてましたことだすやろさかい、それがわたしに一番恐らおました、言ふのは、外のおやまはん等と違うて、わたしは家へ來てから一遍も親から手紙を貰うたことはおまへんし、親がおんなし大阪の、而も難波とは隣同志の今宮にゐる言ふのに、まだ一遍も尋ねて來てくれたことがないことだす、わたしはいつも、自分は始終手紙を出してるんやが、親は無筆もんで、不性もんだすさかい返事をくれへんのやとか、この近年、親が商賣の上でゑらい失敗

をしたんで、わたしがこゝへ來るやうになつたのもその爲で、わたしに會はす顔がない言うて、それで來まへんのだすが、そんな事かまへへんさかい、一遍來るように言うてやつたよつてに、今に來ますやろ、など言うてごまかしてました、あれで、わたしがあの時引かされんと、もう三ケ月も長う勤めてましたら、どんな事でわたしの身分が知れたかも知れしまへん、それを思ふと、わたしはもう相手を選んでる暇さへない思うた位だした、自分の素情がこゝで見付けられる程なら、いつそ今迄の自分の苦勞がすつかり水の泡になつてしまうてもかまへへん、自分とおんなし筋の男にでもかまへへん、一刻も早う引かしてほしいと迄思うた位だした、それが、今言うたやうに、えゝ衆の、えゝ男の、而もまだ獨身で、引かした上は、わたしを國に連れて歸つて、お妾はんやなうてお上さんにしてくれる言ふんだすもの、それにしてもほんまに、もう一寸の事であぶないとこだした。

さうして、わたしは大枚の錢をその人に出してもらうて、立派に引祝をして、その人には義理の親はありまつけど、ほんまの親はない、自由なからだや言ふときましたが、そして到頭その人に連れられて、大和の國のその人のとこへ行くことになりましてん。

まだ今日(こんにち)見たいに、汽車の便利のない時分だしたが、わたしは夫になる人の定宿になつて居る玉造の旅籠屋に三日ほど泊つて、その間に夫に連れられて、いろ〳〵土産物を買うたり、旁々大阪見物をざつとしまして、或朝早うに宿を立ちました、そして、河内の國を通りまして、大和との國境の、十三峠に掛つたのは丁度お晝頃だしたやろ、山の中はもうすつかり秋になつてました、どの山もこの山もみんな黄色う痩せてしまうて、路に落ちてる葉が足の下でかさ〳〵鳴りまんね、しかし旅をするのんにはほんまにえゝ時候だした、殊にわたし等二人にとつては、これ程嬉しい旅はない筈だした、わたしにしたら、これが長い間の思を遂げる旅の門出だすものなア、又旦那はんにしたところが、わたしが言ふの

も何だすけど、なあ大阪の難波新地で五本の指に數へられた女子を、自分の嫁はんに貰うて、それを連れて國へ歸る道中だんねもの。

そやのに、何ちふことやら、二人は妙にその二三日の浮々した調子に變つて、濕り勝に、とぼ〳〵歩きましたもんだす、妙に、あんまり物も言はんと、それどころか、申し合はしたやうにそつと溜息が出るんだす、わたしにしても、何のことやら、自分でもよう分りまへんね、晴れた日で、風はおまへんし、山の中の道は死んだやうに靜かだした、その時ふと、丁度峠の中程に來た時分だしたが、わたしの旦那は急に立止まつて、何やら思ひ定めたやうに、わたしの手を握りはりました、そして、小さい、けど、力のこもつた聲で、

「お鳥！」と言ひました。

わたしは何ちふとなしにはツとしまして、何や怪體な事でも起る前觸見たいな氣がして、吃驚して立止まりました、そして、取られたまゝの手を放さずに、ぢつと窺くやうに旦那の顏を見上げました。

「まあ」と一寸なだめるやうに言うて、旦那は唾を呑み込むやうな風で、「歩きながら話をしよう、」そして靜かに落葉を踏みながら、又ゆつくり歩き出して、言葉をつゞけはりました。「お鳥！……」さう言うて又長い間言葉が切れたかと思ひますと、「お鳥！　お前は不思議な緣で斯うして俺と夫婦になつたけれど……お鳥！　お前はほんまにこの先長う節かんで俺と連れ添うてくれるか？」

「まあ、どんな事か思うたら、」とわたしはそれでも一寸安心の息をついて、「勿體ない！　何でわたしが不足を言ひますもんかいな？　數多い人の中から、『この人』と思うて旦那はんにしたあんだんもの、わたしはあんたとなら、この先どないな苦勞でもするつもりだす、あんたこそ、どうぞいつ迄もわたしに厭氣がさゝんといとくなはるように、くれぐれも

お願ひ申します。」

何を言ひ出されることや思うて、胸をどき〳〵さしましたわたしは、この旦那の言葉を聞きまして、ほツと胸を撫で下ろして、斯う言ひましたんだした。

すると、旦那はんは、又斯う言やはりまんね、「それならな、お鳥、たとへどんな事があつたかて、屹度俺に愛想をつかせへんなア？」と駄目を押すやうに言やはりまんね。

わたしは一寸妙な氣がしましたが、「屹度、何で嘘を言ひますもんか？」と言ひました。

「俺が、そんなら盗人でもか？」

「へえ、もうこの上は、旦那はんと定めたあんただすもの、盗人でも何でもかまへしまへん、仕様がおまへん！」斯うわたしは返事しましたもの〻、何や急にその旦那はんが恐い身分の人見たいな氣がして、着物の上まで胸の動悸が響くやうな氣がした位だす。

ところが、旦那はんはどうやら、さういふ恐い身分の人らしい様子がおまへん、といふ證據に、何とも言へん悲しさうな顔をして、

「お鳥、そんなら言ふけどな、お鳥！……」と言ひにくさうに暫く口ごもつてゐやはりましたが、「お鳥！　お前……お前、吃驚したらいかんで。俺の家は金持や、それは嘘やない、これからそこへ行くんやもん、行つたら分ることつちや。又盗人でもあれへん、それも嘘やない。けどな、貧乏人よりも、盗人よりも、もつと、もつと悪いもんや。……お鳥、俺はな……俺はな、お鳥、俺は新平民や！……」

漸うのことで、胸の中に積もつてたもんを吹き拂うた言ふやうに、さう言うて旦那は又いつの間にやら立止まつてま

した、わたしもそれと一緒に手を取られたまゝだしたさかい、立止まつてましたが、その時、わたしの心の中は何を考へることもおまへん、何を、ほんまに空つぽだした、その癖、胸の邊が妙になつて來まして、わたしは生れて始めてそんな氣がしました、今考へてゝもはつきり分りまへん、頭が急にガアンとしたか思ふと、いきなり旦那の胸に顔を當てました、目が熱うなつて來ました、目からたら／＼涙が出ましてん、そして、咽喉の奥が怪體に痒いなつたやうな氣がしましたが、おう／＼言うて聲が出まんね。そして、泣きながら、その時、わたしは二年前に別れてから、忘れるともなしに忘れてました、在所の父親と母親のことをいきなりはつきり思ひ出しました。すると、次から次と、子供の時分、自分の村から天王寺の塔を眺め眺めした事やら、母親と洗濯してた時大阪から草摘に來てた人に見惚れた事や、始めてあの今宮の革屋の番頭はんが口入屋のお父つあんを連れて家へ來た時のことやら、それからあの父母と村はづれの石橋の上で別れた時の有様など、――それからそれと、よう言ふ事だすが、廻り燈籠の畫見たいに、色々の事が浮んで來ましたもんだす、そして、長い長い間、旦那はんの胸に顔を當てて、わたしはさめ／＼泣きつゞけました、旦那はんも旦那はんで、まるで力言ふもんが身體中から抜けてしまうて、なうなつてしまうたやうに、默つてぼんやり立つてはりまんねや、その癖、わたしは泣きながら、頭の上で百舌が鳴いてゐたのを今でも覺えてます。

「お鳥！」とやつとしてから、旦那はんは漸う力を取戻したやうに、元氣を出して、「何でお前はそないに泣くね！お前は子供の時から、どない悲しい目にあうても泣いたことがない言ふこつちやないか？　それをそないに泣くとこを見ると、やつぱり俺が厭になつたんか？　俺見たいな、こんな卑しい身分のもんと緣を結んだんが情ないのんか？　お鳥、默つて泣いてばつかりゐても分れへん、それをはつきり言うてんか？　俺も男や。お前がそれ程厭やんなら、すつぱりあきらめて、このまゝ淸う別れたかてえゝ！」

その時、始めてわたしは旦那はんの胸から離れて、けどやつぱり泣きつゞけながら、顔に袂を當てたまゝで、斯う言ひましたんや。

「わたしはあんたの言やはるやうな、そんな事が悲しいのやおまへん。……今やよつてにわたしも申し上げます、わたしの家は今宮でも何でもおまへん、實は大阪から二里も離れた在所におまんね。……」

そしてわたしは涙の目を上げて、遠うの目の下にある河内の國の、自分の生れた村、生れた村が見えまんね、それを指差ししまして、泣きじやくりながら言ひました、「聞いとくなはれ！……この世の中に親ほど有難いものはおまへん、親はわたしは今から二年前に、どうぞ自分たちの息のある間は家にゐてくれと泣いて頼んだ、他依りのない兩親を振り捨てて、家を出たんだすが……

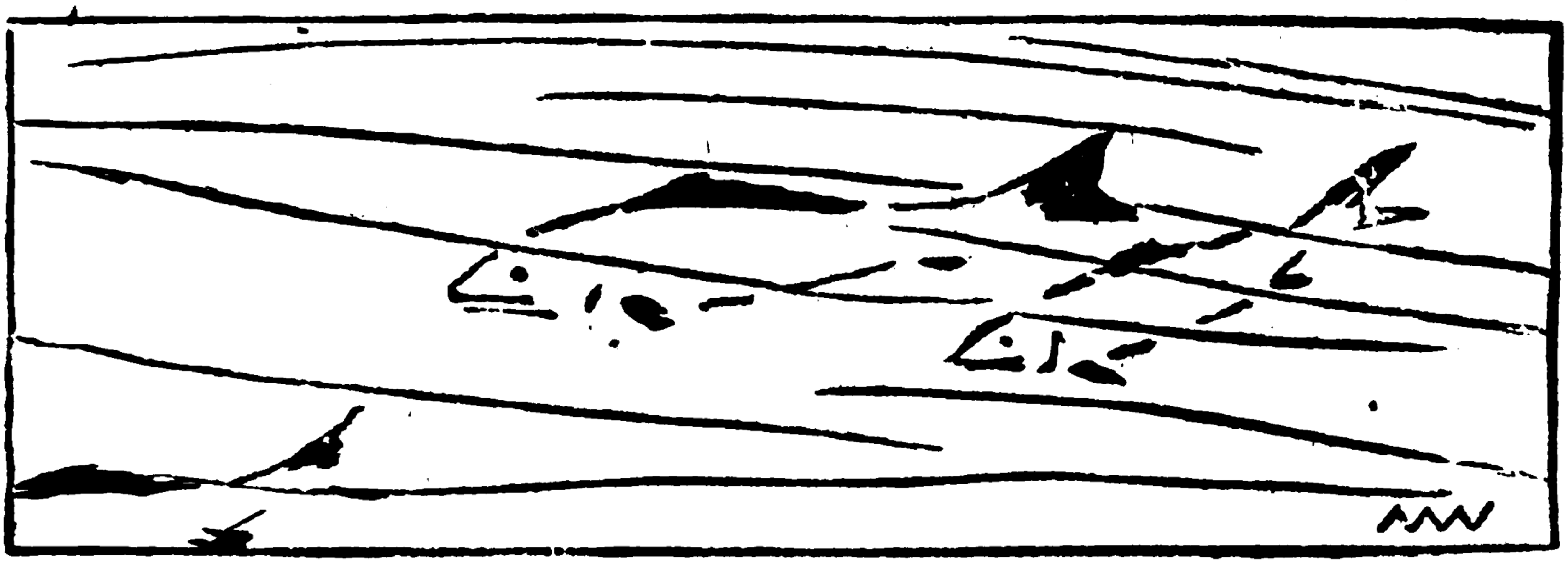
「聞いとくなはれ！……わたし見たいな極道な娘をも、親は村はづれ迄送つて來てくれまして、『お前の不孝をする心根を思うて、それが又いぢらしい氣がするんや、そやさかい、決してわし等はお前の爲に惡いようにと祈りやへん、どうぞ出世してくれ、蔭ながら祈つてやる、』言うて、けど、その代り一旦自分の家を出た上は、どないな事があつても村を明すな、と言ひ渡されましたんだす。さうだつけど、わたしは今、この情の深いお父つあんの戒めを破らんなりまへん、これも因縁事だす、あんた！ わたしも……わたしも……實はそのおんなし穢多だんね！

「わたしが始めて大阪へ行きたい言ひました時、お母んは年寄りの目に涙を流しまして、『身にかなはん望を起すもんやない、』言うて止めました、『わし等二人の目の玉の黒いうちだけは、どうぞ頼むさかいに、わし等と一緒にゐて、』言うてお父つあんは自分の子のわたしに頭を下げて言ひました。年寄つた親たちに、そないに迄悲しい思をさして、わたしは唯一心不亂に當り前の人間にならう思うたんだす、そして親は又その極道な子の願の叶ふように、と蔭で祈つてくれま

したやろに……あんた！　これも皆、お母んの言うたやうに因縁事だす、仕様おまへん、これも皆、先の世からの約束事だすやろ……お父つあん！　お母ん！……」

さう言うて、わたしは生れて始めての涙を流しながら、その峠一つ越えたらもう見られしまへん、河内の國の自分の生れてそして育つた在所の方を眺め眺め、さめ〴〵と泣きましたら、わたしの旦那はんの、大和の金持の穢多の息子はんも、何にも言はずにさめ〴〵と泣きました。

……そして、わたしは、どうだす？　そこでその旦那はんと別れてしまひましたんだつせ、そのまゝだす、そして、わたしは父親とも母親とも別れたまゝだす、さあ、又一つ氣直しに、唄でもうたひまよか？



鮫人

谷崎潤一郎

第三編　林眞珠（つゞき）

第三章

二人の會話がちやうど途絶えた時に「やあ」と云ふ一種豪快な音響を伴つた元氣のいゝ聲がして、ボトムに扮した痩せて背の高い梧桐の體軀がのつそりと這入つて來た。彼はその獨特の掛け聲たる「やあ」を發すると同時に、輕く頭を下げると云ふよりは寧ろ反り返らせて二人の者に會釋を與へた。思はず居ずまひを直してお行儀のいゝ生徒のやうなお辭儀をしてしまつた南は、何だか馬鹿にされたやうで、普通の樂屋ゴロツキと一緒に見られたのが不愉快でもあり、迷惑千萬でもあり、極まりが惡くもあつたが、服部は彼の名譽の爲めに直ぐにも紹介の勞を取らうとはせず、懷ろ手をして知らん顏をして居る。梧桐の方も其のぎろりとした一と癖ありげな大ツきな眼玉の中に、南の姿などてんで映らないらしく平然として居る。一體此の部屋にはえたいの知れな

い有象無象がいつも二三人はごろごろして居るのだから、見知らない男が一人ぐらゐ隅の方に轉がつて居ても別に不思議ではなかつたのであらう。それに何かに付けて英雄の襟度を示したがる梧桐は、「はゝあ誰か居るな」と思ふと、わざと氣が附かない風を装つて、端の者に用もない小言を云つたりえらさうな氣焔を吐いたりして見せる癖があつた。で、彼は這入つて來るといきなり衣裳と鬘を脱ぎ捨てゝ、ぱつと威勢よく素ツ裸になつて、壁にかゝつて居る浴衣を取つて引つかけて、それから鏡臺の抽き出しをガチガチやらせて飾つてある支那人形を二つ三つ引つくり覆しながら、石鹼と、手拭と、ギレットの安全剃刀とを引つたくるやうに手早く摑んで、――凡べてそれらの事を眼にも留まらない敏速さでテキパキと運びながら、一方では又服部を摑まへて、例の北國のアクセントを帶びた奇妙な發音で駄辯を弄した。

「おい君、一體先は何處へ行つてたんだい？」

「先ツていつさ」

「先、――先何處で飲んで居たんだ？　僕は金公に手紙を持たしてやつたんだが、あれを受け取らなかつたんだね。」

「受け取りやしないさ、今夜はいつもと違ふ所で飲んだんだから。」

「違ふ所で飲んでたつて？　君やあそれだからいかんよ。いつ用があつて呼びにやるかも知れないんだから、飲みに行くなら行く先をちやんと極めて貰ひ給へ。いゝかい、さうしなきやあ駄目だぜ。」

「あゝ分つたよ、今度からさうするよ。」

服部はそんな命令を受ける覺えはないのだけれども、梧桐の空威張りの癖が始まると、其處は馴れたもので、キヨトンとした馬鹿のやうな面つきをしながら交ぜつ返したり茶化したりするのだつた。

「此れから象潟亭へ行くやうにし給へ。彼處なら勘定は僕の方へ附けときさへすりやあ構はないから。――さうでもしなけりや、いざと云ふ時に用が足りないで困つちまふぜ。君が來たらいくらでも飲ましてやつてくれろツて、帳場へ話しといてやるから。」

「そいつは有り難いな。だが象潟亭だけぢや心細いな、もう一軒ぐらゐお聲がゝりの所が欲しいもんだな。」

「もう一軒？」

梧桐は茶化されて居るのに氣が付いたらしく、眼をぱちくりやらせて服部の横着さうな顏を「此奴何をぬかすか」と云ひたげに睨みつけたが、一向手答へがないので矢張り仕方なく威張り散らした。

「よし、ぢやもう一軒きめてやらう。象潟亭にチャプリン・バアとして置かう」

「チャプリン・バアは御免だよ。彼處は酒がまづいんだもの。」

「ぢや、何處にするんだ」

「さうだね、寶來軒がいゝね、彼處ならまあ我慢するね。」

「寶來軒か――成るほど」

と云つたきり、梧桐はどうしたのかケロリとして、いゝとも惡いとも云はずに默つてしまつた。

いつ紹介して貰へるのやら當分あてが附かなくなつた南は、此の下らない對話をぼんやりして聞いて居なければならなかつた。多分服部の事だから、「何も改まつて紹介なんかしないだつて、しやべりたけりや兩方で勝手な時分にしやべり出すだらう。」と、呑氣に考へて居るのかも知れない。それに今も云ふ通り梧桐はそんな風にべらべら云ひながら、始終せはしなく立つたり据わつたりして居るので、ちよつと紹介する隙がないことも事實だつた。南は先、せゝツこまし

い此の部屋の空氣をひどく落ち着かないものゝやうに感じたが、成る程梧桐の如く性急に動いて居れば、此れで差支へはない譯である。南がこんな所に住んで居たら、一日暇があつても一ペエヂも本を讀むことが出來ないと同じく、梧桐は此處に住んで居なかつたら、とても活潑な仕事なんか出來ないのであらう。實際此の部屋が落ち着かない以上に此處の主人公は落ち着かない人間であつて、彼が這入つて來るや否や、狹苦しい室内にある凡べての物、――低い天井や、蒸し蒸しする人いきれや南無妙法蓮華經の掛軸や、細々した支那人形や、ケバケバしいメリンス友禪の座蒲團や、凡べてそれらの甚だ落ち着かない感じを與へたところの物が、俄かに主人公のガラガラした音聲や、目まぐるしい擧動や、掏摸の親分じみたキヨロキヨロした眼つきと極めて適當な調和を保つて、「此の部屋にして此の男あり」とでも云ひたいくらゐ不思議にシツクりとあて篏まつて居る。おまけに彼は非常な汗搔きと見えて、お白粉を塗つた額の地肌から玉のやうに滲み出る汗を、ぽたぽたと額から鼻の頭から唇の周りにまでも滴らしながら、時々うるささうに掌で拭き取つては序でに長い髮の毛を逆にばらばらと撫で上げる、その爲種が一層彼を性急に見せて居ることは云ふ迄もない。何しろ彼一人が居る爲めに、此の小さな樂屋が今や亂軍の巷の如き活況を呈しつゝあるのである。

以上の描寫で、讀者は大凡そ此の劇壇の怪物たる梧桐寛治の風采を想像されたことであらうが、しかし出來るだけ其の人相や骨格の工合を明瞭に記載して置く必要があるし、ちやうど幸ひにも手持ち不沙汰で控へて居る南が、それとなく彼の容貌に觀察の眼を注ぎつゝある折柄であるから、暫く南と共に研究を進めて見よう。――研究と云ふと大袈裟のやうだけれども、梧桐の顏は單に顏だけとしても研究に値するほど頗る珍なものなのである。で、それを說明する爲めには、先づ彼の體を一箇の建築物と見做して、全體の構造から說いてかゝらなければならない。前にも述べたやうに、彼の體軀は瘦せた背の高いものであつて、ぬつと衝ツ立つたところを見ると、巍然たる建物ではなかつたが、極めて峻峭

な突兀とした火の見櫓の如き感じを與へた。既に火の見櫓であるから、その建物の最も重要な部分は頂邊の櫓にあるので、その他の部分は櫓を支へて居る足場に過ぎない。つまり、梧桐の首から下は、彼の偉大なる容貌を普通の人間の肩よりは一尺も高く持ち上げて居る足場なので、而もその骨組みは餘り頑丈に出來ては居なかつた。火の見櫓でも少し氣の利いた奴なら鐵筋で組み上げられて居る筈だのに、梧桐のは細い木か竹で出來て居るぐらぐらした安普請で、それが恐ろしく高いのだから、風が吹くと中途から眞つ二つに折ツぺしよれてしまひさうだつた。痩せた人間にもいろいろ型があるもので、たとへば此處に居る南なども「鐵の如く痩せてコチコチした」胸廓を持つた、同じやうに背の高い男であることを讀者は記憶せられるであらう。だが二人の痩せ方は恰も彼等の性質が違ふやうに違つて居るのである。南の場合には其の特徴が彼の人柄を上品に見せ淋しく見せて居るのだけれども、梧桐の場合には其れが全然反對の効果を擧げて居る。即ち後者は痩せて居る爲めに精悍で、豪宕で、粗野で、磊落で、いくらか狡猾なやうにも見える。此の相違の生ずる所以は、兩者の體つきを詳細に比べて見ると頷かれるのであつて、前者は色が黒く肉が引き締まつて、古武士のやうにガツシリした太い骨組みを持つて居る割りに、なだらかな肩の線が何となく女性的な印象を與へるのみでなく、顔立ちがいかにもきやしやで溫和さうであり、殊に冴えた小さな瞳と、五分刈りにしたサツパリした頭の鉢とが、其の體格を實質よりは消極的に見せて居るのだが、後者はあらゆる點でそれと裏表になつて居る。第一に梧桐の骨格は今も云ふ通りの安普請で、氣の毒なほど肉づきが貧弱であつた。「己は此れでも學生時代にテニスとボートのチャンピオンだつたんだぞ」さう云つて彼が屢々自慢するところの體つきは、決して健康なものでなかつた。若し彼と南とを裸にして體格検査を行ふとしたら、南の方が數等勝れて居たことであらう。それは一つには彼等の境遇にも由るのだと云へる、なぜなら、南のやうに良心に疚しいところのない、物靜かな、規則正しい日を送つて居る者にこそ人間の眞の健康は得

られるので、不攝生な生活に陷りがちな俳優の體に、丈夫な肺臟と强い心臟とを求めることは無理かも知れない。彼等の多くは、若い時代にはいくら健康さうに見えても、知らず識らずの間に、精神と肉體との何處かに長生きの出來ない暗い傷ましい手瑕を負ひ易いものである。梧桐も若い頃には可なり達者だつたし、今でも彼を取り卷いて居る淺草の俳優たちは大概二十前後の血氣盛んな者ばかりであるから、自分〻負けない氣でガムシヤラを通しては居るもの〻、あと二三年で四十歲になる彼の體は、彼自身が知らないうちに餘程の打擊を受けて來て居るのだつた。彼はよく素ツ裸になつて胸を叩きながら威張つたものだが、實はそんなに威張れた譯ではないのである。背中を見れば肩胛骨が二枚の板のやうに飛び出て居るし、肩の所では鎖骨の隙間が茶飲み茶碗ほどに深く凹んで居るし、その他一枚一枚透いて見える肋骨、左右の拇指と中指とで輪を作れば其の中へ這入つてしまひさうな胴周り、僅かな筋でやつと繫ぎ合はされて居る上膊骨と下膊骨、片手でも抱へられさうな細い腰、もう少しで外れさうにグリグリと動く膝の關節、棒抗のやうな脛、骨ばかりの指、さうしてそれらを蔽うて居る皮膚の色は寧ろ白い方だつたので、南の體格を鐵とすれば彼のは弱々しい竹細工であつた。たゞその竹細工の結び目と結び目との距離が非常に長いと云ふこと、つまり身の丈が高いと云ふこと、それだけが取り柄であつて、若しもう二三寸も背が低かつたら、彼の俳優としての値打ちの半分は減殺されたであらう。

ところで、そんな脆さうな體質の彼が、なぜ皆からそれほど恐がられて居たのであるか? 何故に彼は「雷寛治」であつたか?——此の疑問に答へるものは即ち作者が研究に値すると稱するところの——梧桐自身が常に「容貌魁偉」と己惚れつゝあるところの——頸から上の部分なのである。成る程それはよく云へば容貌魁偉には違ひないのだが、しかしそれだけではとても形容し切れないさまざまな怪異が其處にあつた。なぜなら其の顏は正直、奸惡、寬大、殘忍、朴訥、

僞善、豪膽、臆病、卑屈、傲慢、神性、獸性、愚鈍、神經質等、凡そ此れらの矛盾する性情の特徴を、そのトゲトゲしく骨張つた馬面のうちに悉く具備して居たのであるから！ 勿論人は多少矛盾した要素を其の表情に持つて居るのが普通ではあるが、梧桐の如く甚しいものはめつたに例がないのである。或る皮肉屋は彼の容貌を評して「剝製の大蝙蝠」と云つた、また口の惡い女優は彼を罵つて「河馬」と云つた、これらの警句は幾分か實物を髣髴せしめるには足りるけれども、要するに一面の觀察たるに過ぎない。で、讀者が若し此の不思議な面魂に就いてもつと精しく知りたいと思ふならば、所謂火の見櫓の頂邊にあるひよろ長い形をした物、――二等邊三角形の頂點を下にした輪廓を持ち、眼窩や、蟀谷や、頰骨の下や、顎骨の左右やに數箇所の陷落を有し、それの中にそれ自身の複雜な影を作つて居るところの、一箇の人間の顏を先づ想像して見るがいい。さうして其の顏の上に、石川五右衛門のそれに似た、漆の如き眞黑な分厚な頭髮の層があり、且その層に屬する髮の毛ははりねずみの毛の如く强いもので、ミツシリと一面に密生しながら一本一本眞つ直ぐに逆立つて居ることを考へて貰ひたい。此の頭髮は彼の肉體が持つて居る唯一の美であつて、公園の藝者や銘酒屋の女どもが梧桐にお世辭を使ふ時には、いつも其れを褒めたものだつた。――「ねえ先生、あたし先生の持つてらつしやるものでほんとに羨ましいものがあるわ、少し分けて頂きたいわね、」と、口のうまい女はさも感に堪へたやうに云ふ。「はゝあ、何かね、何が欲しいね、」さう云つて梧桐が悠然と脂下る。「あたし先生の其のおぐしが欲しいのよ！ そんなに澤山あるんだからちつと分けて頂きたいわ、癖がなくつて、眞黑で、つやつやして居て、まあどうでせう！ 男には勿體ないわ、」など云つたやうな工合である。――勿論此の讚嘆の言葉には掛け値があり、その頭髮は立派であればあるだけ却て物凄い感じがしたが、しかしそれの濃い黑さの爲めに顏の肌は實際よりも白く見え、且上せ性らしく紅潮を呈して居て、櫻色に燃え上つて居た。で、肉づきの貧弱な彼が活氣縱橫に見えたのは、長い軀幹の外に此の頭髮と櫻色の

皮膚と、グロテスクな太い眉毛とキョロキョロした眼玉とが重な原因であつた。若し西洋人が梧桐の顏を見たあとで文樂座の人形芝居を見たとしたら、彼等はあの人形が持つて居る不氣味な眉毛と眼玉とを甚だ自然に感ずるであらう、さやうに梧桐の顏にあるそれらは極めて非凡だつたのである。幸ひにして彼の額は可なり廣かつたからいゝけれども、それがもう少し狹かつたら、どうかすると眉毛が有り餘る髮の毛の支脈のやうに見え、頭の領域が岬の如く其處へはみ出して來たものと見えたかも知れない。（讀者はこゝで、彼が青森縣の生れであることを思ひ出して欲しい。つまり彼の斯くの如き毛深さはアイヌの血が交つて居ることを推量させるに充分であつた）さてそのいやが上にも吊るし上つた、ブラシのやうにこんもりとした八の字の茂みの下にある二個の眼玉、――「剝製の大蝙蝠」の眼玉であり、「河馬」の眼玉であり、「掏摸の親分のやうな」眼玉である偉大なその二つの光りに就いては、既に度び度び引き合ひに出したことであるからくだくだしい敍述は省くとして、たゞそれらが刻々に推移する彼の氣分につれて變幻極まりない表情を浮べること、彼をして新劇壇の團十郎たらしめて居るものは實にそれらであることを擧げて置かう。次ぎに、眼の下には馬面に相應して長いところの鼻があるのだが、見逃してならぬことは其の鼻筋がだんだん下へ來るに從つて、微かに右の方へ拗れて居たのである。此の爲めに彼の顏は、右の半分と左の半分とが多少面積や形狀を異にして居る譯であつた。たゞ聊か慰むるに足りるのは、此の缺點が面と向つただけでは容易に人の注意を惹かなかつた。全くほんの些細な不均齊、極く僅かな、物差で測れば恐らく一分の何分の幾つかに過ぎなかつたであらうほどの狂ひであつた。けれども人間の顏にある斯う云ふちよつとした歪みは、鏡へ映して見ると非常に顯著に分るもので、梧桐の場合にもさうだつたのである。それ故彼は自分で鏡を見ることは好きだつたが、人に覗き込まれると、――殊に、あまりつくづくと視詰められたりすると、時時イヤな顏をした。――「あらおかしい！先生の顏は鏡で見ると鼻がこんなに曲つてるわ。」或る時眞珠がそんなことを

云つた。すると梧桐は相手が彼女では怒る譯に行かず、あくびを嚙み殺すやうな工合にムーツと鼻の孔をひろげて、唇を踏ん張つて、「ナニ曲つてやしないんだよ。鏡と云ふものは右と左があべこべに映るもんだから、曲つてないでも曲つてるやうに見えるのさ。から云ふのを心理學で錯覺と云ふんだ。いゝかね、よく覺えて置き給へ。」さう云つて眞面目臭つて居た。(實際彼自身が錯覺と思つて居たのかどうか、殘念ながら其の點は明瞭でない。)しかし錯覺でない證據は、彼の二つの鼻の孔を比べて見ると誰にでも直きに分つたであらう、と云ふのは、左の孔の方が大きく開いて居るのに反して、右の方のは妙に平べツたく壓し潰されて居た。それはつまり、彼の鼻梁が倒れかゝつた家の屋根のやうに、それだけ右の方へ傾いて居たと云ふことになる。さうして其の鼻筋の線を延長すると、普通の人のなら垂直に臍へ屆く筈であるのに、彼のは右の脇腹へ屆いた。故に此の斜ツかけの柱の兩側に造作が附いて居るところの彼の顏全體は、屋臺骨の曲つた建築のやうなものであつた。若し人が彼の髮の毛や眼玉にばかり氣を取られずに、少し注意して右半面と左半面とを觀察したら、敢て鏡に訴へる迄もなく其の不揃ひを指摘し得たに違ひない。たとへば小鼻の左右にある皺にしても、左の方のは淺く長い代りに右の方のは深く短いことを見出だすであらうし、從つて其の二つの皺の先にある唇に於いても、左端は右端より下つて居ることを知るであらう。此の皺と唇との關係は遂に何處までも餘波を及ぼして居る譯で、唇が水平でない結果顋が不整形であり、顋が不整形であるからして、左の頬は廣く餘裕があり右の頬はやゝ窮屈にちゞこまつて居る。要するに均齊を保つて居る部分は眼から上だけに過ぎなかつた。斯くの如きびつこの目鼻立ちを持つた彼は、こゝで繰り返して云ふが實に幸ひにして馬面だつたのである。なぜなら其の顏の寸が今少し詰まつて居たら、歪んだ形がどれほど目立つたかも知れないのであるから。その點で彼を造つてくれた神樣は慈悲深かつたとも云へようし、或ひは反對に意地の惡い神樣で、あまり顏が長過ぎるから、ちよいといたづらに鼻の先を曲げて見たのだとも云へ

るであらう。

作者は敢て告白するが、一人の人間の容貌を説くのも一國の地勢を述べるのと同じ勞力が入るものであつて、現に此れほど紙數を費しても梧桐の顏に就いてはまだ云ひ足りないところが多いやうに思はれる。が、餘り煩瑣に亙らないことにして、最後に彼の多趣多様なる表情のことを書いて置かう。彼が或る時は善人に見え、或る時は惡人に見え、或ひは痴鈍に、或ひは狡猾に見えたりするのはなぜであるか？　そのさまざまな矛盾した表情は何處から生ずるのであるか？　さう問はれた時に、「それは顏の造作の不揃ひから起るのだ」と作者は答へる。即ち複雜に喰ひ違つた表情は、複雜に喰ひ違つた目鼻立ちから生ずるのである。彼の左の頬つぺたが晝だとすれば右の頬つぺたは夜であり、唇の左端が笑ひながら右端が咀ひ、左の鼻の孔が怒つて居る時に右の鼻の孔は泣いて居る、斯くの如き容貌が、或る入り組んだごたごたした感じを與へるのは當然ではないか。どんな場合にも一と癖ありげに見えるのは尤もではないか。彼が一箇の怪物たる所以、——世間から誤解されたり、買ひ被られたり、悚毛をふるはれたり、信頼されたり、敵視されたり、可愛がられたりする所以は、皆そこにあつた。さうして結局、彼はその歪んだ顏の爲めに損よりも得をして居た。「梧桐は天才だ、彼奴には一種の閃めきがある、今にきつと何かやり出す。」——彼自身がさう信じて居たのは云ふまでもないが、彼を知つて居る俳優や文士仲間にもそんな噂をする者が少くなかつた、一體歪んだ顏と云ふものは、不具者か、精神病者か、でなければ天才を連想させるものであるから。

さて、其の晩圖らずも其の樂屋へ落ち合つた南と梧桐とは、單純と複雜、透明と混濁との美事な對照を成した二人であつた。前者は後者から閑却されつゝある間に、どれほど彼を觀察し得たかは分らないけれども、しかし人は多くの場合、全く自分の對蹠地にある性格に接すると、反感を抱くよりは快感を覺えるものである。殊に此の二人のやうに、彼

等の間に共通な利害關係がない時は尚さうである。そんな譯で、南が梧桐から受けたところの第一印象は大體に於いて悪くなかつたと云へよう。最初に其の姿がぬつと現れて、調子外れの度強い聲が耳元でガンガン鳴り亘つた時には、多少の壓迫を感じはしたもの丶、やがて駄辯を弄し始めて服部に茶化されて居るのを眺めつ丶ある間に、梧桐と云ふ人物の中にある滑稽な愛すべき方面が、だんだんと南に分つて來るやうな工合だつた。手持ち不沙汰で困つて居た彼は、此の奇怪な男の顏面の運動を見て居るうちに次第に安心をし、退屈でなくなり、しまひには面白くもなつて來た。「馬鹿なのか偉いのかハッキリしないが何しろ變つた人物だ。こんな人は曾つて話をするよりも見て居る方がい丶のかも知れない。」

南はちよつとそんな風に思つた。と、今しがた平然として相手を煙に卷いて居た服部は、何と思つたか其の時急に改まつた口調で、

「梧桐君、君に此の人を紹介しよう、——」

さう云つて開き直つた。

「は丶あ」

と云つて、鼻を仰向けて「あー」の聲の方を長く引つ張りながら、梧桐は安全剃刀と手拭をぶら下げて風呂へ行かうとしたところを出口で立ち止まつたま丶、眼下に見下すやうな顏つきをした。

「これは僕の友達で南と云ふんだよ、——」

「はあさうかね、」

「——君は南博士を知つてるだらう? 上海で君の芝居を見たことのある、——あの人の息子なんだよ。」

「南章一さんの？　はあ成る程、あゝさうでしたか、僕が梧桐寛治です。」

さう云つて居るうちに其の様子は驚くほど早く變つて、口元には薄氣味の惡いへらへら笑ひが浮かび、眼玉は耀やかしく晴れやかになり、聲は猫撫で聲になり、凡べての動作が頗る御機嫌のよいオツチョコチョイになつた。

「ぢや、あなたも上海に入らしつたんですか？　お父さんと御一緒に？　や、それはどうも、――」

そこで二三度追從的にピョコピョコ頭を下げて、ドギマギしながら額からぽたぽた汗を滴らして、

「すると歡迎會にも御出席になつたんですね、いやあの時はどうも、甚だどうも詰まらんものを御覧に入れまして、ハナハダ恐縮。……さうですか、服部君とは以前から友達なんですか、なあんだそんな譯なんですか、しかしようこそお出でで、どうか御ゆつくりなすつて下さい、僕はちよつと風呂へ這入つて來ますから、……ねえ服部君、今夜は一つ三人で一杯飲まうぢやないか。久し振りで支那の話でもしようぢやありませんか。まあいゝですいゝです、直ぐに來ますからどうか御ゆつくり。」

南はろくに口も利けないで茫然とした。

――（此の章終り）――



スワン石鹸
春を彩る滿開の
櫻花に人は醉ひ—
水に浮く
スワン石鹸に
人氣は集中す。
製造元
日本リーバー、ブラザース株式會社
神戸

山中峯太郎著

この身のまゝを

獄を出で　未決囚　手記

この書の中の、『獄を出て』（百十ページ）『未決囚』（八十八ページ）の二篇が、「中央公論」に載せられましてより、千二百四十通の御音信を、私は方々よりいたゞきました。『破廉恥極まる醜悪無比のものを敢て公表せし者』との御叱責を蒙りました。また『現代化せる、人間の一聖典』とのお褒めをも受けました。何も知りませぬ私は、事と心の有りしがまゝに、たゞ書きました。今般「文華會社」より出版のお勸めを受けまして、以上の二篇に、獄中の『手記』（三百四十九ページ）を加へ、『この身のまゝを』なる一冊に纏めました。この書を敢て面を縛して世にさゝげます。たゞ讀むでいたゞきたく思ひます。（山中峯太郎）

四六版布装箱入
五百五十頁
定價貳圓八拾錢
送料拾貳錢

戀を賭くる女

大泉黒石著
近刊

東京牛込筑土八幡
（南北社改稱）
大日本文華株式會社出版部
振替口座東京一九四

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同 神田區裏神保町	上田屋
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價 金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共、		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり

一郵券代用 は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替 小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正九年四月三十日印刷納本
大正九年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木西三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 中央公論社
電話（長小石川一四四 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.